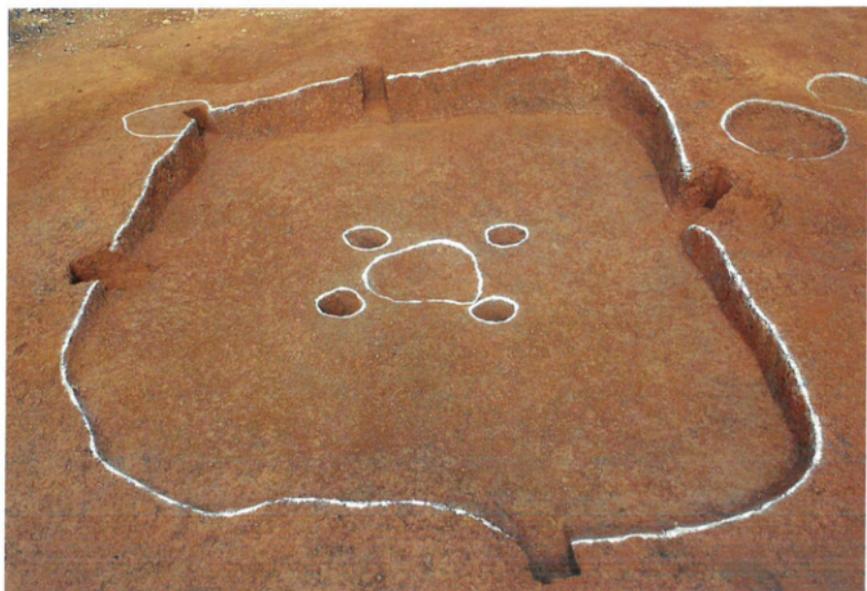
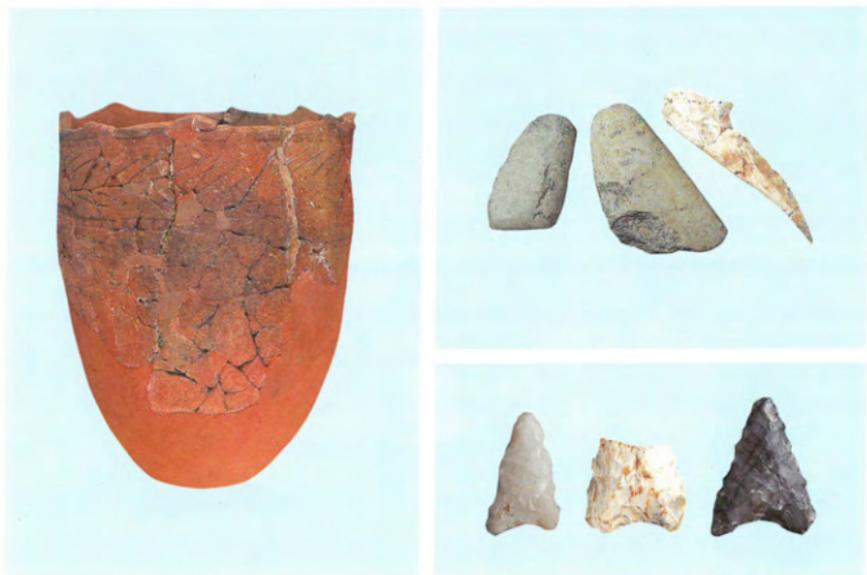


喜友名貝塚・喜友名グスク

— 宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う
緊急発掘調査報告書（Ⅰ） —

1999年（平成11年）3月

沖縄県教育委員会



卷首图版1 上：土器・石器・骨製品・石鏃 下：I地区 竪穴式住居址



巻首図版2 上：Ⅱ地区 本土産磁器集中部 下：Ⅲ地区 サーターヤ（砂糖小屋）跡



巻首図版3 上：本土産磁器・中国産磁器・陶質土器 下：Ⅲ地区 想定プラン

目 次

序	
例 言	
報告書抄録	
第 I 章 調査に至る経緯	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査体制	1
第 II 章 位置と環境	3
第 III 章 調査経過	6
第 IV 章 層序と遺構	8
第 1 節 I 地区	8
(1) 層 序	8
(2) 遺 構	13
第 2 節 II 地区	22
(1) 層 序	22
(2) 遺 構	24
第 3 節 III 地区	36
(1) 層 序	36
(2) 遺 構	36
第 V 章 出土遺物	45
第 1 節 青 磁	45
第 2 節 白 磁	58
第 3 節 染 付	66
第 4 節 褐釉陶器	73
第 5 節 青白磁	79
第 6 節 中国産無釉陶器	79
第 7 節 黒釉陶器	80
第 8 節 三 彩	81
第 9 節 色 絵	82
第 10 節 瑠璃釉	82
第 11 節 鉄釉染付	82
第 12 節 白釉陶器	82
第 13 節 タイ産半練	82
第 14 節 鉄 絵	83
第 15 節 備 前	84
第 16 節 本土産陶磁器	86
第 17 節 南島須恵器	93
第 18 節 沖縄産施釉陶器	95
第 19 節 沖縄産無釉陶器	106
第 20 節 土 器	116
第 21 節 陶質土器	131
第 22 節 瓦質土器	138
第 23 節 石 器	139
第 24 節 石 鏃	145
第 25 節 滑 石	146
第 26 節 硯	146
第 27 節 骨製品	147
第 28 節 円盤状製品	148
第 29 節 煙 管	149
第 30 節 金属製品	150
第 31 節 銭 貨	154
第 32 節 ガラス製品	156
第 33 節 玉	157
第 34 節 貝製品	158
第 35 節 貝類依存体	159
第 36 節 骨 類	165
第 VI 章 結 語	179

目 次

第1図	沖縄本島及び宜野湾市の位置	4	第39図	本土産陶磁器 4	92
第2図	喜友名貝塚・グスクと周辺遺跡分布	5	第40図	南島須恵器	94
第3図	調査範囲とグリッド設定	7	第41図	沖縄産施軸陶器 1	103
第4図	I地区 遺構分布状況	9	第42図	沖縄産施軸陶器 2	104
第5図	I地区 a区 平面・断面	11	第43図	沖縄産施軸陶器 3	105
第6図	I地区 b区 平面・断面	15	第44図	口縁部断面形態模式図	106
第7図	I地区 c・d区 遺構	17	第45図	沖縄産無軸陶器 1	113
第8図	I地区 d区 竪穴式住居	19	第46図	沖縄産無軸陶器 2	114
第9図	II地区 層序 (1)	22	第47図	沖縄産無軸陶器 3	115
第10図	II地区 層序 (2)	23	第48図	土器 1	125
第11図	II地区 畑跡	26	第49図	土器 2	126
第12図	II地区 遺構全体	27	第50図	土器 3	127
第13図	II地区 石列及び石溜り	29	第51図	土器 4	128
第14図	II地区 溝状遺構 Na.1	30	第52図	土器 5	129
第15図	II地区 本土産磁器集中部	31	第53図	土器 6	130
第16図	II地区 ウツフル(豚小屋)跡	33	第54図	陶質土器 1	135
第17図	II地区 溝状遺構 Na.2 (完掘前)	34	第55図	陶質土器 2	136
第18図	II地区 溝状遺構 Na.2 (完掘後)	35	第56図	陶質土器 3	137
第19図	III地区 牛骨検出土壌	38	第57図	瓦質土器	138
第20図	III地区 層序・遺構全体・サーターヤー(砂糖小屋)跡・排水溝状石列	39	第58図	石器 1	142
第21図	III地区 平面プラン	41	第59図	石器 2	143
第22図	青磁 1	54	第60図	石器 3	144
第23図	青磁 2	55	第61図	石鏃	145
第24図	青磁 3	56	第62図	滑石	146
第25図	青磁 4	57	第63図	硯	146
第26図	白磁 1	64	第64図	骨製品	147
第27図	白磁 2	65	第65図	円盤状製品	148
第28図	染付 1	71	第66図	煙管	150
第29図	染付 2	72	第67図	鉄釘	151
第30図	褐軸陶器 1	77	第68図	金属製品	153
第31図	褐軸陶器 2	78	第69図	銭貨拓影	155
第32図	青白磁	79	第70図	ガラス製品	156
第33図	中国産無軸陶器	79	第71図	玉	157
第34図	黒軸陶器・三彩・色絵	84	第72図	貝製品	158
第35図	瑠璃軸・鉄軸染付・白軸陶器 タイ産半練・鉄絵・備前	85	第73図	マガキガイ殻径Bグループ	159
第36図	本土産陶磁器 1	89	第74図	マガキガイ殻径(完形)Bグループ	159
第37図	本土産陶磁器 2	90	第75図	マガキガイ殻径(殻頂)Bグループ	159
第38図	本土産陶磁器 3	91	第76図	壺の中のブタ(1)	169
			第77図	壺の中のブタ(2)	170
			第78図	切痕	171

図 版 目 次

<p>巻首図版 1 上：土器・石器・骨製品・石鏃 下：I地区 竪穴式住居</p> <p>巻首図版 2 上：II地区 本土産磁器集中部 下：III地区 サーターヤー(砂糖小屋)跡</p> <p>巻首図版 3 上：本土産磁器・中国産磁器・陶質土器 下：III地区 想定プラン</p>	
図版 1 喜友名貝塚・グスクの航空写真 ……183	図版35 沖縄産無軸陶器 3 ……215
図版 2 I地区 遺構検出状況・完掘状況 ……184	図版36 土器 1 ……216
図版 3 I地区 完掘状況・竪穴式住居 ……185	図版37 土器 2 ……217
図版 4 I地区 遺構検出状況 ……186	図版38 土器 3 ……218
図版 5 II地区 遺構全景・層序 ……187	図版39 土器 4 ……219
図版 6 II地区 遺構検出状況 ……188	図版40 土器 5 ……220
図版 7 II地区 遺構検出状況 ……189	図版41 土器 6 ……221
図版 8 III地区 上：完掘状況 下：想定プラン ……190	図版42 陶質土器 1 ……222
図版 9 III地区 想定プラン近景 ……191	図版43 陶質土器 2 ……223
図版10 III地区 遺構検出状況 ……192	図版44 上：陶質土器 3 下：瓦質土器 ……224
図版11 青磁 1 ……193	図版45 石器 1 ……225
図版12 青磁 2 ……194	図版46 石器 2 ……226
図版13 青磁 3 ……195	図版47 石器 3 ……227
図版14 青磁 4・ベトナム青磁 ……196	図版48 石器 4 ……228
図版15 白磁 1 ……197	図版49 上左：石鏃 上右：滑石製品・硯 下：骨製品 ……229
図版16 白磁 2 ……198	図版50 上：円盤状製品 下：煙管 ……230
図版17 染付 1 ……199	図版51 金属製品 ……231
図版18 染付 2 ……200	図版52 上：銭貨 下：その他の金属製品 ……232
図版19 褐軸陶器 1 ……201	図版53 上左：ガラス製品 上右：玉 下：貝製品 ……233
図版20 褐軸陶器 2 ……202	図版54 巻貝 1 ……234
図版21 青白磁 ……79	図版55 巻貝 2 ……235
図版22 中国産無軸陶器 ……79	図版56 二枚貝 ……236
図版23 黒軸陶器 ……203	図版57 上：魚類 下：ウミガメ・ニワトリ・ネズミ・ジュゴン ……237
図版24 三彩・色絵・瑠璃釉・鉄釉染付 白軸陶器・タイ産半練 ……204	図版58 上：ウマ 下：ヤギ ……238
図版25 上：鉄絵 下：備前・本土産陶磁器 1 ……205	図版59 上：ウシ 下：ウシ ……239
図版26 本土産陶磁器 2 ……206	図版60 ウシ ……240
図版27 本土産陶磁器 3 ……207	図版61 イノシシ ……241
図版28 本土産陶磁器 4 ……208	図版62 UTA ……242
図版29 南島須恵器 ……209	図版63 上：UTA 下左：UTA 壺の中 (1) 下右：骨の入っていた壺 ……243
図版30 沖縄産施軸陶器 1 ……210	図版64 UTA 壺の中 (2) ……244
図版31 沖縄産施軸陶器 2 ……211	図版65 UTA 壺の中 (3) ……245
図版32 沖縄産施軸陶器 3 ……212	
図版33 沖縄産無軸陶器 1 ……213	
図版34 沖縄産無軸陶器 2 ……214	

表 目 次

第1表	I地区 ヒット群 法量・出土遺物一覽	20	第32表	有孔貝製品觀察一覽	158
第2表	II地区 本土産磁器集中部觀察一覽	32	第33表	巻貝出土状況一覽 (I地区)	160
第3表	III地区 ヒット群 法量・出土遺物一覽	42	第34表	巻貝出土状況一覽 (II地区)	161
第4表	青磁出土状況一覽	48	第35表	巻貝出土状況一覽 (III地区)	161
第5表	青磁觀察一覽	49	第36表	巻貝出土状況一覽 (地区不明)	161
第6表	白磁出土状況一覽	60	第37表	二枚貝出土状況一覽 (I地区)	163
第7表	白磁觀察一覽	61	第38表	二枚貝出土状況一覽 (II地区)	163
第8表	染付出土状況一覽	68	第39表	二枚貝出土状況一覽 (III地区)	163
第9表	染付觀察一覽	69	第40表	二枚貝出土状況一覽 (地区不明)	161
第10表	褐釉陶器觀察一覽	75	第41表	サメ出土状況一覽	172
第11表	褐釉陶器出土状況一覽	76	第42表	魚骨出土状況一覽	173
第12表	本土産陶磁器出土状況一覽	87	第43表	リクガメ出土状況一覽	172
第13表	本土産陶磁器觀察一覽	88	第44表	ウミガメ出土状況一覽	172
第14表	沖繩産施釉陶器出土状況一覽	99	第45表	トリ出土状況一覽	172
第15表	沖繩産施釉陶器觀察一覽	99	第46表	カラス出土状況一覽	172
第16表	沖繩産無釉陶器出土状況一覽	110	第47表	ニワトリ出土状況一覽	172
第17表	沖繩産無釉陶器觀察一覽	110	第48表	ヒト出土状況一覽	172
第18表	土器出土状況一覽	120	第49表	ネズミ出土状況一覽	172
第19表	土器觀察一覽	120	第50表	イヌ出土状況一覽	172
第20表	陶質土器出土状況一覽	133	第51表	ネコ出土状況一覽	173
第21表	陶質土器觀察一覽	133	第52表	ジュゴン出土状況一覽	172
第22表	石器觀察一覽	140	第53表	イノシシ歯出土状況一覽	175
第23表	円盤状製品觀察一覽	148	第54表	イノシシ出土状況一覽	175
第24表	煙管出土状況一覽	149	第55表	ブタ歯出土状況一覽	175
第25表	煙管・雁首觀察一覽	149	第56表	ブタ出土状況一覽	177
第26表	煙管・吸口觀察一覽	149	第57表	壺内ブタ出土状況一覽	173
第27表	鉄釘觀察一覽	151	第58表	ウシ出土状況一覽	174
第28表	簪觀察一覽	153	第59表	ヤギ出土状況一覽	175
第29表	錢貨觀察一覽	154	第60表	ウマ出土状況一覽	173
第30表	錢貨出土状況一覽	154	第61表	ウシ・ウマ出土状況一覽	175
第31表	玉觀察一覽	157	第62表	不明出土状況一覽	172

序

本報告書は、県道路建設課からの分任を受けて実施している宜野湾北中城線道路改築事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

宜野湾北中城線道路改築事業は国道58号の伊佐から国道329号の渡口を結ぶ路線、伊佐―普天間―石平―渡口の区間で計画されている事業であります。県道路建設課からの分任により進めている緊急発掘調査は、伊佐―普天間の間において確認されている喜友名貝塚、喜友名グスク、喜友名ガー石畳道、喜友名山川原丘陵古墓群、伊佐前原古墓群、伊佐前原第1遺跡の6遺跡が対象となっています。

発掘調査は普天間側にある喜友名貝塚から開始し、順次国道58号側の方へ進め、現在5遺跡の発掘調査が終了しており、最後の伊佐前原第1遺跡の発掘調査を進めているところで、平成11年度には伊佐前原第1遺跡の発掘調査を終了する予定になっています。

今回、本報告書にまとめたのは既に発掘調査が終了し、出土品の整理・分析の終了した喜友名貝塚と喜友名グスクの成果であります。

南北約16m、東西方向に250mの広い範囲が発掘調査の対象となったようであり、その結果、3500年～2500年前頃の土器や石器、集積遺構、堅穴遺構などが検出され、また14・15世紀頃の青磁・褐釉陶器などの輸入陶磁器やその時期の柱穴などが多数確認されたほか、近現代の豚小屋跡や砂糖小屋跡、畑跡などそれぞれの時期の様子を窺わせるような多くの成果があったと聞いております。

このような多くの成果をまとめた本報告書が多くの県民の文化財に対する認識と理解を深めるとともに、文化財保護思想の普及に活用されることはもとより、地域の歴史研究などの学術研究の一助として多方面にご活用願えれば幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査の実施に際し多大な協力をいただきました宜野湾市教育委員会、喜友名区自治会、残暑のなか発掘調査現場で協力いただきました皆様、また資料整理作業に従事し本報告書刊行に協力していただきました皆様、さらに、発掘調査および資料整理において多大なるご指導・ご協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成11年3月

沖縄県教育委員会
教育長 安 室 肇

例 言

1. 本報告書は1996(平成8)年度から1997(平成9)年度に実施した「喜友名貝塚・喜友名グスク」緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は「宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築事業」に伴うもので、県土木建築部からの分任事業として県文化課が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、宜野湾市教育委員会の協力を得た。
4. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行1/2,500を使用し、グリッド設定図は道路改築工事設計図に加筆した。
5. 発掘調査及び資料整理にあたり、下記の方々の指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。

池田 榮史氏・大城 逸朗氏・大橋 康二氏・金子 浩昌氏・金武 正紀氏・久保 弘文氏・高梨 修氏

6. 発掘調査で出土した各資料の同定並びに分析については下記の方々による。記して謝意を表します。

石 質 大城 逸朗氏(沖縄県立教育センター 主任研究主事)

陶磁器類 大橋 康二氏(佐賀県文化財課 副課長)

獣・魚骨 金子 浩昌氏(早稲田大学 講師)

貝 類 久保 弘文氏(沖縄県栽培漁業センター)

なお、獣・魚骨については金子浩昌氏より玉稿を賜った。記して御礼申し上げます。

7. 各章の執筆は下記のように分担した。

島袋 洋(第Ⅰ章、第Ⅴ章第17・23～26節、第Ⅵ章)

比嘉 聡(第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章第2節、第Ⅴ章第16節)

當銘 由嗣(第Ⅳ章第1節、第Ⅴ章第18～21節)

城間 肇(第Ⅳ章第3節、第Ⅴ章第1～15節)

島袋 春美(第Ⅴ章第27節)

上原 清乃(第Ⅴ章第29・33～35節)

藤崎 京(第Ⅴ章第28・32節)

金城 亀信(第Ⅴ章第22節)

古屋 聡洋(第Ⅴ章第30・31節)

金子 浩昌(第Ⅴ章第36節)

8. 本書の編集は城間肇・又吉純子の協力を得て、比嘉聡が行った。

また、編集にあたっては金城亀信・島袋春美両氏より、指導・助言及び多大な協力を頂いた。記してお礼申し上げます。

9. 位置図・グリッド設定図等のトレースは、比嘉聡との調整を行ったうえで、金城亀信が行った。

10. 本書に掲載された現場の写真は當銘由嗣・城間肇が、出土遺物の撮影及び現像・焼付は長田剛・城間肇による。

11. 発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真などの記録は、すべて沖縄県教育庁文化課資料室に保管してある。

報 告 書 抄 録

ふりがな	きゆなかいづか・きゆなぐすく						
書名	喜友名貝塚・喜友名グスク						
副書名	宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(I)						
巻次	-						
シリーズ名	沖縄県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第134集						
編著者名	鳥袋洋・比嘉聡・當銘由嗣・城間肇・金子浩昌・鳥袋春美・上原清乃・藤崎京・金城亀信 古屋聡洋						
編集機関	沖縄県教育委員会 文化課						
所在地	〒900-8570 沖縄県那覇市泉崎1丁目2-2 TEL098-866-2731～2733						
発行年月日	1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調 査 原 因
喜友名貝塚 喜友名グスク	沖 縄 県 宜 野 湾 市 喜 友 名	47205	26° 16' 58"	127° 45' 47"	1996.11.8 ? 1997.12.22	4,604	宜野湾北中城線 道路改築事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
喜友名貝塚 喜友名グスク	貝塚・ グスク	縄文 グスク 近世 近代 現代	竪穴式住居 集石遺構 集石土坑 溝状遺構 本土産磁器集中部 ウワーフール(豚小屋)跡 ビット群 牛骨検出土坑 サーターヤヤー(砂糖小屋)跡 他		青磁 白磁 染付 褐釉陶器 色絵と三彩 瑠璃釉 黒釉陶器 東南アジア陶器 本土産陶磁器 南島須恵器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 土器 陶質土器 瓦質土器 石器 石鏃 骨製品 円盤状製品 金属製品 銭貨 玉 他		

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯

近年、県内における道路網の整備は活発化の傾向にある。特に、幹線道路のバイパス計画や現道路の拡幅計画などが目白押しの状況にあり、各地で計画路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議・調整が行なわれ、緊急発掘調査を実施する例が多く見受けられる。

今回の緊急発掘調査の契機も同様である。つまり、宜野湾市伊佐から普天間、石平を通り、北中城村の渡口までの現道路を拡幅するというもので、伊佐～普天間間に所在する喜友名貝塚、喜友名グスク、喜友名ガー石畳道、喜友名山川原丘陵古墓群、伊佐前原古墓群、伊佐前原第 1 遺跡の 6 遺跡が計画路線内にあることが判明しており、その取り扱いについて平成 5 年から県道路建設課（中部土木事務所）と県文化課で協議・調整を行ってきた。事前の発掘調査を実施することで両者が合意し、平成 6 年には緊急発掘調査に係る費用の見積もりも行なったが実際に調査するまでは至らなかった。

その間、工事は埋蔵文化財のない場所から着手され、平成 8 年 2 月には喜友名貝塚の手前まで工事が進んできた。そのような状況の中、再度中部土木事務所からぜひ埋蔵文化財の調査を行ってほしい旨の要請があり、それを受けた県文化課が調査員の確保ができた平成 8 年度に緊急発掘調査を実施することになり、それにかかる費用は道路建設課が捻出することになった。

工事は東側（普天間）から順次西側（伊佐）の国道 58 号側へ進めていきたいという要望があり、調整の結果、発掘調査は東側にある喜友名貝塚から西側の伊佐前原第 1 遺跡の方へ順次進めていき、道路改築事業がその後を追う形で工事を行っていくというスケジュールになり、平成 8 年 11 月から喜友名貝塚の緊急発掘調査に着手した。

第 2 節 調査体制

発掘調査（平成 8 年度）から資料整理および報告書の刊行（平成 10 年度）まで、下記の体制で実施した。

調査主体……………沖縄県教育委員会

教育長……………仲里 長和（平成 8 年度）

◇ ………………安室 肇（平成 9 年度～）

文化課課長……………大城 将保（平成 8 年度～）

文化課副参事兼課長補佐・稲嶺 靖子（平成 10 年度）

文化課課長補佐……………稲嶺 靖子（平成 8 年度～平成 9 年度）

◇ ◇ ………………日越 国昭（◇ ◇ ◇）

◇ ◇ ………………當眞 嗣一（平成 10 年度）

調査事務

管理係主幹兼係長……………比屋根 正治（平成 8 年度）

◇ ◇ ………………大浜 節（平成 9 年度～）

◇ 主査……………村山 佐代（平成 8 年度～）

◇ ◇ ………………砂川 邦子（平成 9 年度～）

◇ 副主査……………新垣 敏子（平成 8 年度）

◇ ◇ ………………當間 清美（平成 10 年度）

◇ 主事……………上原 直樹（平成 8 年度～平成 9 年度）

調査総括

埋蔵文化財係長……………大城 慧（平成 8 年度～平成 9 年度）

◇ ………………島袋 洋（平成 10 年度）

- 発掘調査員……………岸本 義彦（文化課主任専門員）
 ♪ ……………島袋 洋（文化課主任・現埋蔵文化財係長）
 ♪ ……………金城 亀信（ ♪ ）
 ♪ ……………長嶺 均（ ♪ ）
 ♪ ……………金城 透（ ♪ ・現那覇高校教諭）
 ♪ ……………比嘉 聡（充指導主事）
 ♪ ……………上地 博（文化課専門員）
 ♪ ……………仲座 久宜（ ♪ ）
- 発掘調査補助員……………當銘 由嗣（文化課調査囑託員）
 ♪ ……………城間 肇（ ♪ ）
 ♪ ……………仲與根ゆかり（ ♪ ）
 ♪ ……………島袋 春美（ ♪ ）
 ♪ ……………玉寄 智恵子（ ♪ ）
 ♪ ……………赤嶺 雅子（ ♪ ）
 ♪ ……………又吉 純子（ ♪ ）
 ♪ ……………上原 清乃（ ♪ ）
- 発掘調査協力……………池田 榮史（琉球大学・教授）
 ♪ ……………高梨 修（名瀬市立奄美博物館・学芸員）
 ♪ ……………大城 逸朗（県立北谷高等学校・教頭 現県立教育センター主任研究主事）
- 発掘調査作業員

安里真利子、新垣 良子、上間 清美、上間 チエ、浦崎 直和、大宜見より子、大城かおる、太田 吉光、嘉味田千枝子、金城 京子、幸地 ヨシ子、小橋川 恵子、小橋川幸子、小波津夏子、小浜 信子、呉屋 正一、呉屋 光子、島袋 智之、城間 絹子、新里 準子、瑞慶覧 長祐、高江洲朝三、田場 喜久子、知念 和子、桃原 隆信、當間 トミ、中原 ミツ子、名嘉真朝紀、真志喜千代子、宮城 澄子、山畑 キミ

資料整理作業員及び協力者

赤嶺 雅子、新垣千恵子、新垣利津代、池原 直美、伊波 小百合、上原 園子、上原美穂子、上良 早美、遠藤千恵子、大城 勝江、大城 直美、大城 美和子、大田 徳子、岡村 綾子、萩堂 美香、折田 衣代、金城 恵子、金城 京子、金城美也子、国吉 縁、源河 秀子、崎原美智子、謝名元かずみ、志良堂美智代、新城さゆり、瑞慶覧尚美、平良 貴子、田中ゆきの、玉城 勝子、玉寄 智恵子、知念 純子、手嶋 永子、照屋 利子、天願 睦美、長田 剛、比嘉 孝子、比嘉登美子、宮城 利香、宮里 朝野、村山 理代、柳田 晴子、吉田 昌子、渡邊 尚子、赤嶺 陽子、石橋 朝子、請盛 智秋、嘉数 禮子、国吉 春美、高良三千代、玉城恵美利、中村 智子、仲村 良枝、仲宗根三枝子、比嘉 優子、備瀬枝美子、外間 瞳、牧志加代子

第二章 位置と環境

宜野湾市は、沖縄本島中部に所在し、北は北谷町・北東は北中城村・東は中城村・東南は西原町・南は浦添市の1市2町2村に接しており、西は東シナ海に面している。

市の総面積は、19.37km²で、東西6.1km・南北5.2kmのやや長方形である。市域の33.3% (約6.4km²)は、米軍基地に占められている。基地は、市の北西側にキャンプズケラン・中央部に普天間飛行場が所在している。市街地は、普天間基地を取り囲むように発展している。市域には、東側に国道330号線・西側に国道58号線の主要幹線が南北に走り、それを結ぶ道路として、県道宜野湾北中城線・県道34号線が東西に走っている。また、高速道路のインターチェンジにも近く沖縄本島北部と中南部を結ぶ交通の要所となっている。

市域の地形は、海岸沿いの沖積低地・標高10～30m台の低位段丘・標高50～80mの中位段丘・標高100m内外の高位段丘と、ひな壇状の四つの段丘面から形成されている。海岸沿いは緩やかな曲線をなし、海岸から沖に向かってはイノーと呼ばれる平坦な礁原が広がっているが、近年の開発により埋立地が広がり姿容を見せている。内陸側の三つの段丘面の大部分は、石灰岩層で占められているが、中城村と接する東側はクチャと呼ばれる島尻層群がみられる。石灰岩層の発達している段丘縁辺には、洞窟・湧泉が多く見られる。とくに西海岸一帯には、水量が豊富な数多くの湧水があり、それを利用した田芋の生産などが行われている。河川は、浦添市・西原町の境界を流れる比屋良川、北谷町・北中城村・中城村の境界を流れる普天間川がある。かつて、市内には宜野湾松並や豊かな緑地が存在したが、震災や戦後の宅地開発によって失われ、現在の緑地は市面積の僅か4%にしか過ぎない。

宜野湾市の前身、「宜野湾間切」は1671(寛文11年)に浦添間切から我如古・宜野湾・神山・嘉敷・大山・大謝名・宇地泊・喜友名・新城・伊佐の10村、中城間切から野高・普天間、北谷間切から安仁屋をそれぞれ割いて、新たに真志喜を設け14村で新設された。その後、多少の名称の変遷は見られるが14村のまま推移し、1908(明治41年)の「沖縄県及島嶼町村制」の施行により従来の間切が町または村に、村が字に改められ宜野湾村が誕生した。1939(昭和14年)には、志真志・長田・愛知・中原・上原・真栄原・赤道の屋敷集落が字として設置された。さらに1943(昭和18年)には、真栄原から佐真下が分離した。去る沖縄戦においては本市も多大な被害を被り、戦後は米軍基地に土地を収用された字も多く移動を余儀なくされた。1962(昭和37年)には市制が施行され、市界格後は人口の流入も著しく、現在は自治会も増加し23自治会20行政区に編成され、人口も8万4千人余に達し県内4番目の都市として発展をつづけている。

喜友名貝塚・喜友名グスクの所在する喜友名集落は、市の北側に位置する。文献にみる喜友名の名称は1649(慶安2年)の「絵図郷村帳」に始まり、以後呼称の変遷もなく現在に至っている。戦前まで集落には、琉球王府時代の地割制度の名残とみられる箇所が一部残っていた。また集落の入口の要所には、災厄除けとして石造りのシーサー(獅子)が4位置かれているが、戦前は6体あり置場所も現在とは変わっていたようである。戦後は1947(昭和22年)年に集落への居住が許可され、住宅建設が再開し翌年の10月には移動祝賀会が開催されている。本遺跡は集落の北はずれ標高47～55mの中位段丘に立地しており、戦前はこの地より北谷村桑江から伊佐・大山に広がる田圃を見おろせる風光明媚な場所で、遺跡の北西側斜面一帯はカヤモ(茅毛)と呼ばれる原野が広がり、村有数の真茅の生産地であった。本遺跡の調査は1900(明治33年)、加藤三吾氏が「喜友名城近傍」において石斧の破片の採集したことにはじまり(註1)、1954(昭和29年)の多和田真澄氏の本格的調査へと受け継がれた(註2)。その後、この地は米軍基地に収用され、永く追調査が実施できなかったが1981(昭和56年)、宜野湾市教育委員会の実施した基地内文化財分布調査において(註3)、その存在が再確認されて今日に至っている。

周辺の遺跡としては、喜友名山川原丘陵古墓群・喜友名山川原遺跡・喜友名山川原第三遺跡や集落の重要な水源であったチュンナー(喜友名)ガー及び石畳道など段丘縁辺には、多くの遺跡や湧水がある。

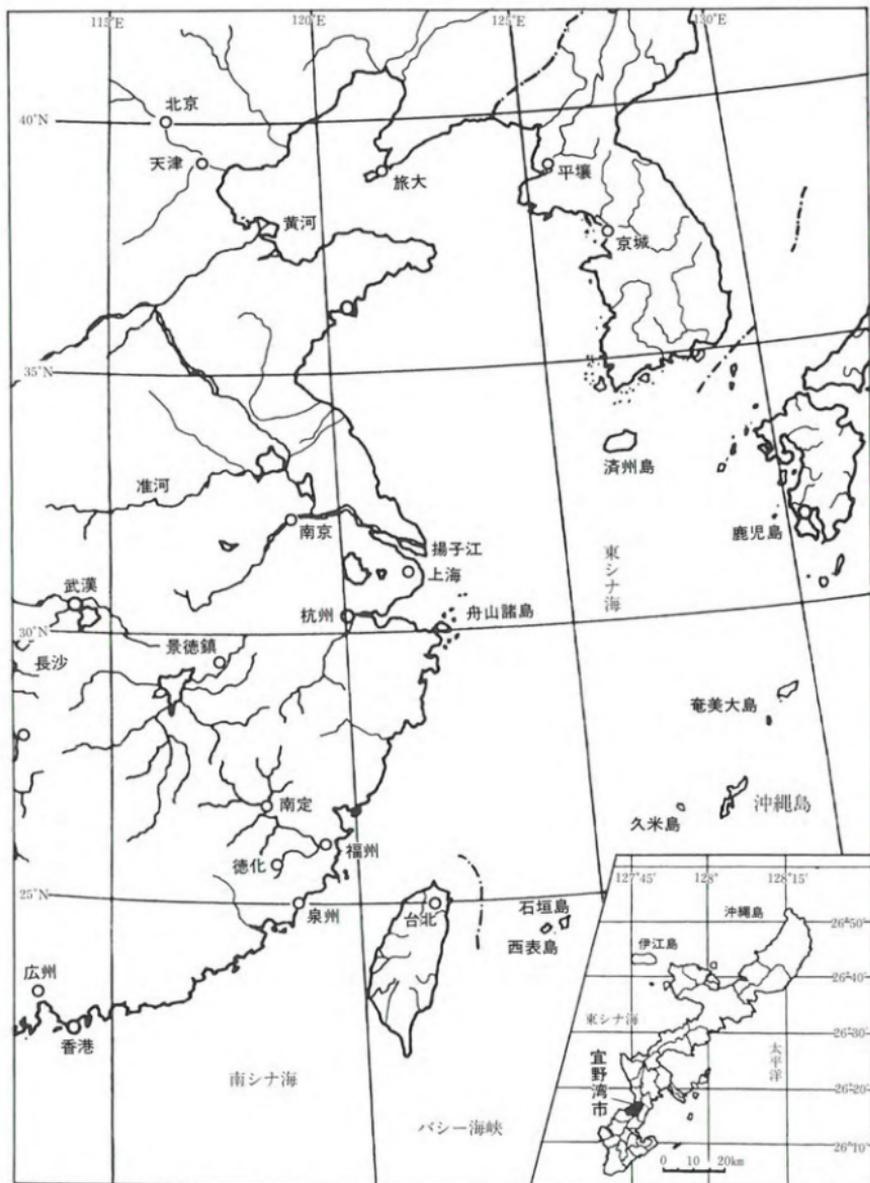
註

註1・2、呉屋義勝 『土に埋もれた宜野湾』 宜野湾市教育委員会 1989年

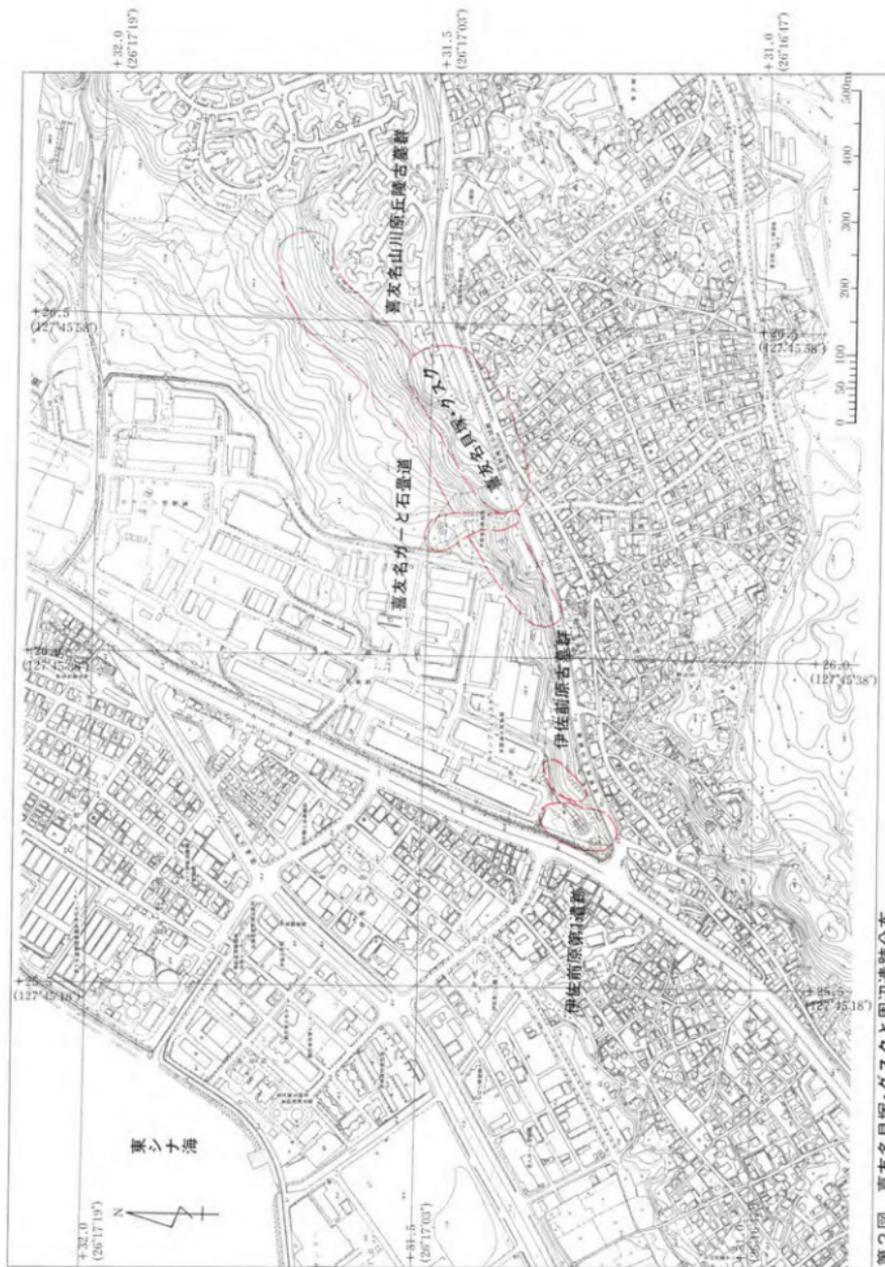
註3、『キャンプ・ズケラン基地の文化財』 宜野湾市教育委員会 1981年

参考文献及び引用文献

- ・『宜野湾市史』 第4巻 資料編3 宜野湾関係資料Ⅰ 1985年
- ・『宜野湾市史』 第5巻 資料編4 民俗 1985年
- ・呉屋義勝 『土に埋もれた宜野湾』 宜野湾市教育委員会 1989年
- ・『宜野湾市市勢要覧 '96年版』 宜野湾市 1996年



第1図 沖繩本島及び宜野湾市の位置



第2図 喜友名貝塚・グスクと周辺遺跡分布

第三章 調査経過

本調査は、1996(平成8)年11月8日から1997(平成9)年12月22日までの約1年2ヶ月に亘り実施した。調査対象地域は宜野湾北中城線(伊佐～普天間)の道路改築工事に伴い、米軍より返還された用地で、チュンナー(喜友名)ガートの入口から東側(普天間方面)へ250m、横幅16mという細長い区域の調査であった(第3図)。

調査は道路改築工事が東側(普天間方面)より施工されるという工事スケジュールから、東側(普天間方面)より実施することにした。発掘調査に先立って、中部土木事務所によるフェンスの撤去・移設工事が実施され、調査対象地域は基地の外圍になり、通常の発掘調査スケジュールで実施できる状況となった。

調査は、バックホーによる表土攪乱部の除去から開始した。東側(普天間方面)から西側(伊佐方面)へ順次進め、表土剥ぎの終了した地区からグリッド設定を行っていった。グリッド設定は、道路改築工事のために20m間隔で設置されていた工事杭(No37)を基準点として設けた。調査区とはほぼ平行している道路に沿うように東西の基準ラインを設け、このラインに直交するように南北のラインを設定し、調査区一帯に4m×4mを単位とする方眼枠を組んだ。道路に平行する東西を算用数字(6～61)、南北をアルファベット(E～H)で表した。グリッドの呼称は、北東側の杭を示準しH-6・H-7・H-8・H-9などとした。また調査に当たっては、調査範囲が広いこともあり小区分したほうが遺跡を理解する上で有効と判断し、現在の地形的な特徴からⅢ地区に分けた。喜友名グスクの位置していた東側(普天間方面)の小高い丘陵地域をⅠ地区、その西側の一段低くなった場所で、現在は排水溝として利用されている南北方向の溝までをⅡ地区、さらにその西側の一段高くなった場所をⅢ地区とした。設定したグリッドで表すと、6～36ラインまでがⅠ地区・37～50ラインまでがⅡ地区・51～61ラインまでがⅢ地区となる。

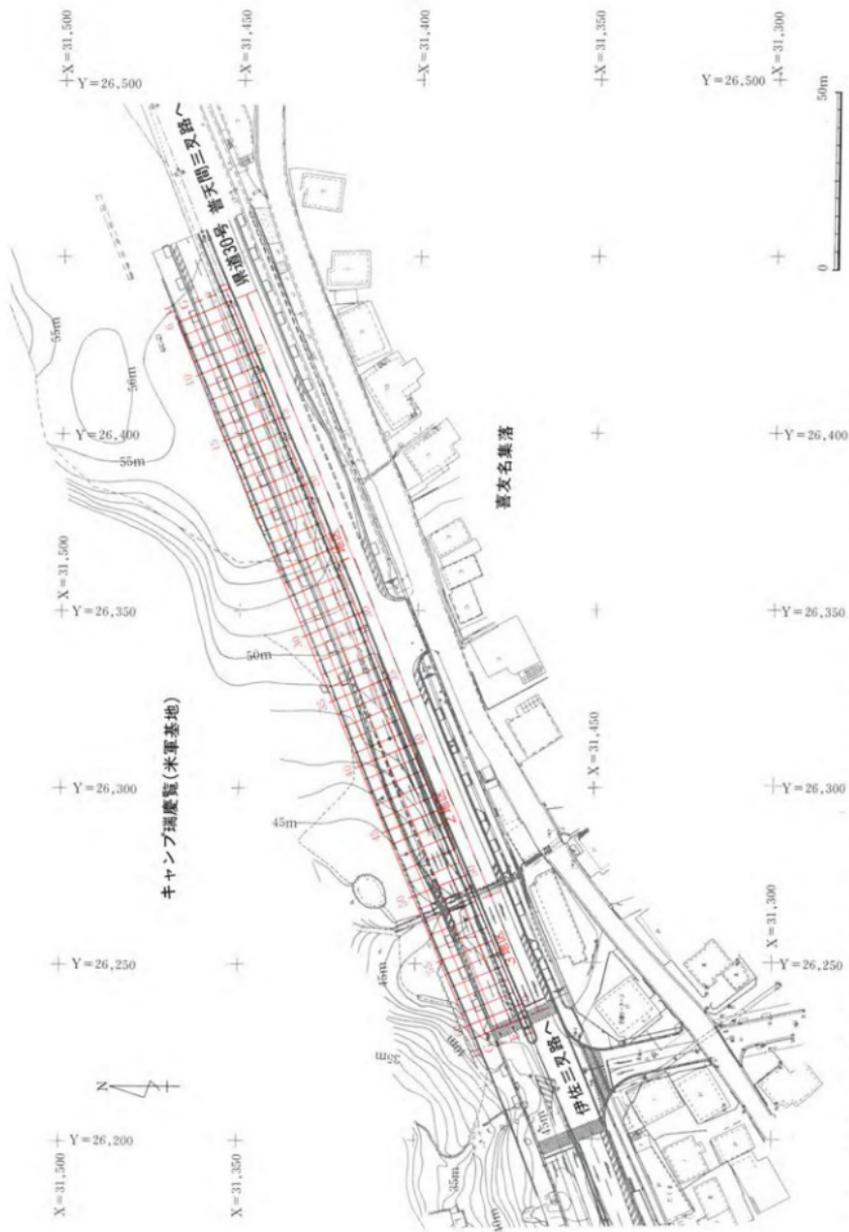
Ⅰ地区は、返還前は普天間ハウジングエリア内で住宅が建っていたため、遺物包含層の直上まで削られている箇所や住宅関連のケーブル溝跡・岩盤が削られている場所も見受けられた。表土剥ぎの終了したⅠ地区の調査を進める傍ら、12月1日よりⅡ地区の表土剥ぎを開始した。Ⅱ地区は、Ⅰ地区よりも標高で6～7m程低い位置にあるため、客土の量もⅠ地区よりかなり多く12月20日に終了した。12月24日よりⅠ地区と平行してⅡ地区の調査を開始した。1月7日よりⅢ地区の表土剥ぎを開始し、1月10日には全地区の表土剥ぎを終了した。1月14日より、作業員を分散しⅢ地区の調査も開始した。また、20ラインより31ライン(E-28は除く)までは、住宅建設のために破壊されたのであろうか、すでに岩盤が露出している状態であったので調査対象から除外した。

1996(平成8)年度の調査は、Ⅰ地区の遺構面露出及びⅡ・Ⅲ地区の遺物包含層の掘り下げを行っている段階で年度末となり、ブルーシートで遺構の上面や遺物包含層などを覆う簡易的な措置を施し、3月21日で調査を終了し次年度に持ち越すことになった。

1997(平成9)年度の調査は、さほど期間を置かず4月8日より再開した。前年度の終了時に遺構の上面や遺物包含層などを覆っていたブルーシートを取り除き、その面の確認を行った。その後、発掘調査の進行に伴い、Ⅰ地区においてはピット群・集石遺構・壑穴式住居、Ⅱ地区では溝状遺構・ウーフール(豚小屋)跡・本土産磁器集中部、Ⅲ地区ではピット群(1グリッド50個前後)・牛骨検出土壙・サーターヤヤー(砂糖小屋)跡など縄文時代後期(沖縄前Ⅳ期)から近・現代までの様子を窺わせるなど、いずれの地区においても当初の予想を大きく上回るさまざまな遺構が検出された。

出土した遺物も各時期のものがあり、土器をはじめ輸入陶磁器類・本土産陶磁器・沖縄産陶器・石器・滑石・石鏃・古銭・獣骨など多種多様な遺物が得られている。

夏場以降は、相次ぐ台風の襲来により作業の後退を余儀なくされると同時に、次々顔を出ささまざまな遺構の実測に手間取り、悪戦苦闘する日々が続いた。11月に入ると道路工事も始まり、調査を終了したⅠ地区より順次明け渡していったが、11月下旬より12月初旬にかけては予想もしない天候不順に左右された。そのため調査が遅々として進まず、道路工事を行う中部土木事務所との厳しい日程調整が続いたが、12月22日に実測作業及び完掘状況写真の撮影を終了し、平成9年度分の宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築工事予定地の発掘調査業務を完了した。



第3図 調査範囲とグリッド設定 (沖縄県土木建築部中部土木事務所作成の図面に調査範囲とグリッド設定図をアロッドした)

第Ⅳ章 層序と遺構

グリッド設定では、県道30号線に平行するラインにアルファベットの名称、県道に対して垂直となるラインには算用数字の名称を付した。アルファベット・ラインと算用数字ラインが交差することにより生じる各グリッドの一边の長さは全て4mに統一し、各グリッドの名称はそのグリッドの北側角で交差するアルファベット・ラインと算用数字ラインの名称を並立するものとした。たとえば、北側角でEラインと12ラインの交差するグリッドの名称は、「E-12グリッド」となる（※便宜上、グリッド名を「E12」というように略記する場合もある）。今回の調査地域内で使用したアルファベット・ラインの名称はE・F・G・Hの4つのラインで、算用数字ラインは7～61ラインまでである。

尚、今回調査の対象となった地域は、県道に沿う北東から南西にかけて長く、北西から南東にかけての幅は12～13m程で短い。そのため、便宜上、調査地域内の特定の場所を示す時に、グリッド名からアルファベットを除いた算用数字のみを使用することがある。例としては、文章中に14グリッドとだけ記す場合、北側角に14ラインが交差する、今回調査の行われたグリッドのすべてを指すこととする。この場合、14グリッドとは、E-14・F-14・G-14・H-14の4つのグリッドを指す。

今回の調査地域を、便宜的に3地区に分け、以下で各地区ごとの層序及び遺構について述べる。7～36グリッドまでをⅠ地区、37～50グリッドまでをⅡ地区、52～61グリッドまでをⅢ地区とする（※51グリッド付近は、生活排水の流れる小川である）。

第1節 Ⅰ地区

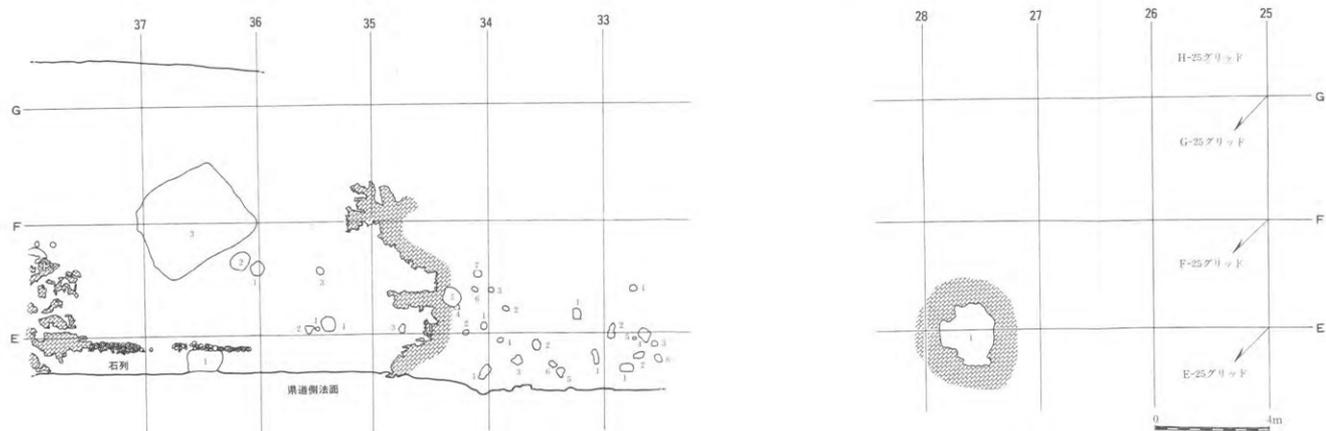
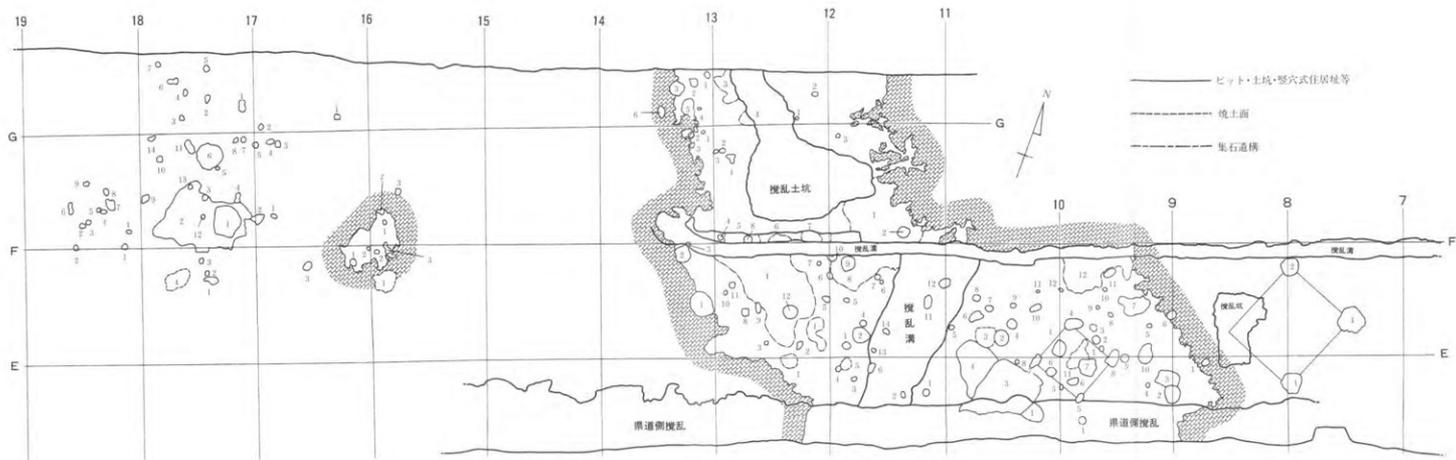
7～36グリッドまでをⅠ地区とする。さらに、検出された層序・遺構の状況から、7～13グリッドをa区、15～18グリッドまでをb区、27～34グリッドまでをc区、35～36グリッドまでをd区とし、Ⅰ地区の層序及び遺構について各々a～d区の順に述べていく。また、各区で検出した遺構群には、各グリッドごとに各々通し番号を付した（第4図）。数グリッドにわたって広がる遺構については、いずれか一つのグリッドに帰属させた。以下、文章中で特定の遺構を示す場合、[グリッド名；通し番号]と表記する。たとえば、F-10グリッドの通し番号7の遺構を示す場合は、[F10；7]とする。

(1) 層序

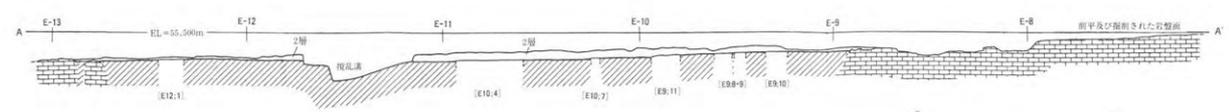
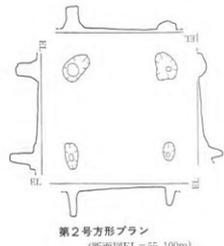
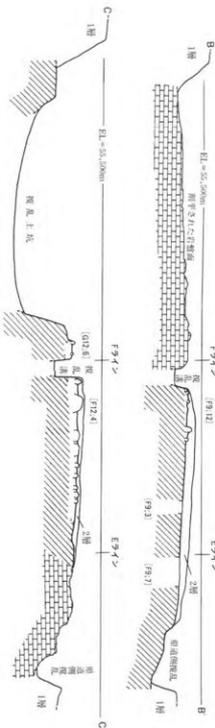
Ⅰ地区では、現代遺物を多量に含む表土（1層）を除去した結果、県道工事及び基地内の外人住宅建設のために、大部分が基盤となる琉球石灰岩の岩盤部分まで削平され、原地形が著しく改変されていることが判明した。ただ、部分的には、遺物包含層及び遺構の残存が認められ、それらをa～dの4区に区分した。

層序は、まず、クチャ等の客土が混在する1層が、Ⅰ地区全体を覆っていた。1層の除去後、基盤層が烏尻マージとなる場所を中心としたa区と岩盤が基盤となるb区に、遺物包含層となる黒色土層（2層）が部分的に残存していることが確認できた。a・b区の2層である黒色土層は両区間で連続してはいないが、出土遺物が高宮暫定編年前Ⅳ・Ⅴ期（縄文時代後・晩期相当）の土器を主体とする傾向は同じで、高宮暫定編年前期の文化層になるものと思われる。ただ、2層下の基盤層上面で検出されたいくつかの遺構内からは、青磁・白磁等のグスク時代に相当する時期の遺物が出土していることから、かつては2層上にグスク時代の文化層が存在したものと思われる。また、2層中からもグスク時代の遺物が若干出土しているが、おそらく本来は2層を掘り込んだグスク時代の遺構に伴うものではないかと思われる。

c・d区では、後述するⅡ地区と同様、1層下に石灰岩小礫を多く含む茶褐色土層の広がりがみられ、これが2層となる。この茶褐色混礫土層は、Ⅰ地区のc・d区からⅡ地区全体に分布しており、近・現代の遺物を含んでいる。2層（茶褐色混礫土層）下は、c区で岩盤、d区では烏尻マージとなる基盤層であったが、その基盤層上面にピット・堅穴式住居址等の遺構が検出できた。



第4図 I地区 遺構分布状況



青線→集石遺構の境及びピット
[F10.2], [F11.9]内底面の敷石
赤線→境土面



第5図 I地区a区 平面・断面

(2) 遺構

・ a区 (7-13グリッド) (第5図)

a区の基盤層上面で検出された遺構群には、高宮暫定編年前期(以下、「前期」と略す)とグスク時代の両時期のものが混在している。2層を掘り下げている発掘途中の段階では、その層を掘り込んでいる遺構を認知し、その正確な輪郭を明確に識別することが、著しく困難であった。そのため、遺構内からの出土遺物と遺構の検出状況、形態の類似性等から、時期的な分別を試みた。

前期の遺構と思われるものには、いくつかの焼土面と集石遺構とがある。検出された焼土面は、[E9; 11]、[F9; 3]、[F10; 3]、[E11; 5]、[E12; 1]である。集石遺構としては、[F9; 12]、[F11; 8]、[G11; 1]、[F12; 4・6]、[G12; 5-7]、[H12; 3・4]がある。焼土面は基盤層直上で検出されており、2層を掘り込んで構築したような状況はみられなかった。まわりに石を並べるようなこともなく、ただ単に鳥尻マージの地山面に焼土の広がりや確認できただけである。屋外での短期間の炉として使用したものであろうか。集石遺構としては、浅い凹地か平坦な地山面に赤色または灰白色に変色した石灰岩礫が、a区内に部分的に集中してみられた。変色した石灰岩礫は、5-20cm大のものが主体で、指で触ると表面がポロポロと崩れるものが多かった。集石遺構内には、付近では産しない暗茶褐色の第三紀細粒砂岩(通称:ニービ)の塊もいくつか混在していた。礫の集中は、集石遺構上部の2層中にはみられず、地山上面にのみ検出された。また、a区内の遺構としては比較的範囲が広いにもかかわらず、集石遺構内からグスク時代の遺物が出土しないことから、前期の所産であると思われる。H・G-11・12・13グリッド付近は、現代の造成により削平され、2層が消失し、地山もいくらか削りとられているのだが、小規模な礫の集積がいくつか残存していた。このことから、かつてはH・G-11・12・13グリッド付近の比較的広い範囲に礫の集積が存在した可能性が考えられる。集石遺構の性格は不明であるが、[F12; 4]内の礫を取り除いた地山面に4基の焼土面が確認されており、前述した焼土面も含めて機能的な関連が考えられる。その他、[E10; 4]は浅い凹みで、内側に礫の集積はなかったが、地山となる床面に焼土面が1基検出できた。

グスク時代の遺構としては、いくつかのピットと土坑1基が検出できた。[E7; 1]、[F7; 1・2]は、岩盤を掘り込んだ坑で、a区の遺構群の殆どは地山が鳥尻マージとなる部分に分布しており、岩盤を人為的に加工したと思われる遺構はa区ではこの3基と、[E8; 1]、[F9; 6]、[H13; 6]の計6基であった。[E7; 1]、[F7; 1・2]は、およそ2.8m×3m程の規模の4本の掘立柱をもつ建物跡(第1号方形プラン)(第5図)と思われるが、4基の柱穴の内1基は、それがあつたと思われる場所が現代の造成で掘削を受けており消滅している。3基の柱穴の内一つである[F7; 1]内には、焼土面が検出され、その上面から暗灰色に変色したカンギク貝等の自然遺物や炭化した植物遺存体が出土しており、建物の柱穴として使用した後、炉にしたものかと思われる。土坑[E10; 3]は、県道側の破壊で部分的にしか残存していないが、残存部分の形状からその上面観が方形ではなかったかと思われる。残存する一辺の長さは、約1.9mである。土坑の床面は上面より幅が幾分狭く、その断面形は逆台形状となる。土坑内には、青磁等のグスク時代の遺物と共に5-10cm大の石灰岩礫が数多くみられたが、前期の集石遺構の礫とは異なり変色してはいなかった。その他、ピット[F10; 2]では青磁胴部細片1点、ピット[F12; 6]では青磁胴部細片1点・グスク土器胴部細片1点が出土している。

柱穴と思われるピットの多くは、所属する時期が不明である。ただ、これまでの調査結果から、前IV・V期にみられる平地での住居は堅穴式のもの为主体であり、柱穴のみが残存する建築物の形態があまり一般的なものとは考えられないことから、柱穴となるピットの多くがグスク時代のものである可能性が考えられる。前述した[E7; 1]、[F7; 1・2]の他に、掘立柱の建物跡である可能性をもつものとして、[E9; 5・8]、[E10; 7]、[F9; 4]を四隅とする正方形のものがある(第2号方形プラン)。およそ1.8m×2m程の規模をもつが、プランの南側が攪乱を受けていることから、これが建物跡であればさらに南側にのびる長方形のものであつたことも考えられる。難点としては、それぞれのピットの深さにやや統一性が欠けていることである。断面形が漏斗状となる[F9; 4]では、礫をピット内壁の輪郭に沿って円形に配しており、柱を固定するためのものとされた。

その他、掘立柱建物跡のプランとしては認知することができなかったが、柱穴と思われるピットのいくつかには、その内部に特徴的な構造をもつものがあった。[E9; 2]、[F10; 2]、[E11; 6]、[F11; 9・10]、[F12; 12]、[F13; 2]内には5-20cm大を主体とする礫が充填され、その掘り込まれた形状が円柱状を呈する(ただし、[E11; 6]と[F11; 10]は、攪乱のため部分的にのみ残存)。[F10; 2]と[F11; 9]は、

床面に5~10cm大の礫をおよそ20~30個ほど敷いており、おそらく柱が沈み込むことがないようにするためのと思われる。[F11; 10]と[F12; 12]には、その床面中央に円形の凹みが認められ、柱が沈み込んだために生じたものと考えられた。

・b区(15~18グリッド)(第6図)

基盤は、殆どが岩盤となる。岩盤上には、2層土を遺構内覆土とする、いくつかのピットが確認できた。ピット内からは遺物の出土も若干あったが、付近一帯が現代の造成で岩盤まで削平及び掘削されていたこともあって、これらのピットすべてが人為的な目的をもって加工されたものであるのかは判然とせず、また掘立柱建物跡となりそうなプランも確認できなかった。岩盤上に、火を受けたために生じたと思われる赤く変色した部分があったが([F15; 1]及び[F17; 4])、その直上の堆積土は1層であり、これが人為的なものであったとしても前期またはグスク時代の所産となるか不明である。[G17; 2]は、浅い凹みで、その床面は平坦であった。石列ではないかと思われる石の並びが内側に確認できたが、あまり定形性をもっていない。部分的な残存であろうか。また、岩盤となる床面には、赤く変色した部分が確認できた。

・c区(27~34グリッド)

基盤は、岩盤となる。岩盤直上は殆どが1層で、33・34グリッド付近では僅かに2層(茶褐色混礫土層)が確認できる部分もあった。

[E27; 1](第7図)は2.3m×2.0m程の規模をもち、深さ約1mの岩盤を掘削した坑で、19グリッドから31グリッドにかけて検出された遺構はこの1基のみであった。坑内からは、焼土面が検出されている。遺構内の出土遺物から、グスク時代以降に属する遺構であると思われる。遺構内の層序は、3枚に分けることができる。1層は灰層かと思われる暗灰色土層で、橙褐色の焼土粒が混入し、黄褐色の土粒が層中に斑点状にみられた。土質はフカフカした質感で、粒が細かい。2層は焼土面で、5~10cm大の焼土塊が石灰岩礫と混在してみられた。3層は黒色土層で、1層と同じく、土質がフカフカした質感で、粒が細かい。炭を細かい粉にしたような感じを受ける堆積土であった。

32~34グリッド付近では、岩盤上に黒色混礫土を遺構内覆土とするピット群が検出され、ピット内からは遺物も若干出土している。ただ、岩盤上面は現代の造成である程度削平されており、地形の改変が行われたと思われるため、これらのピット群がどの程度人為的な目的性をもつものなのか全く不明である。また、掘立柱建物跡となりそうなプランも確認できなかった。尚、[F34; 5]は現代の掘削によるもので、その床面には機械による掘削痕が明瞭に残っていた。

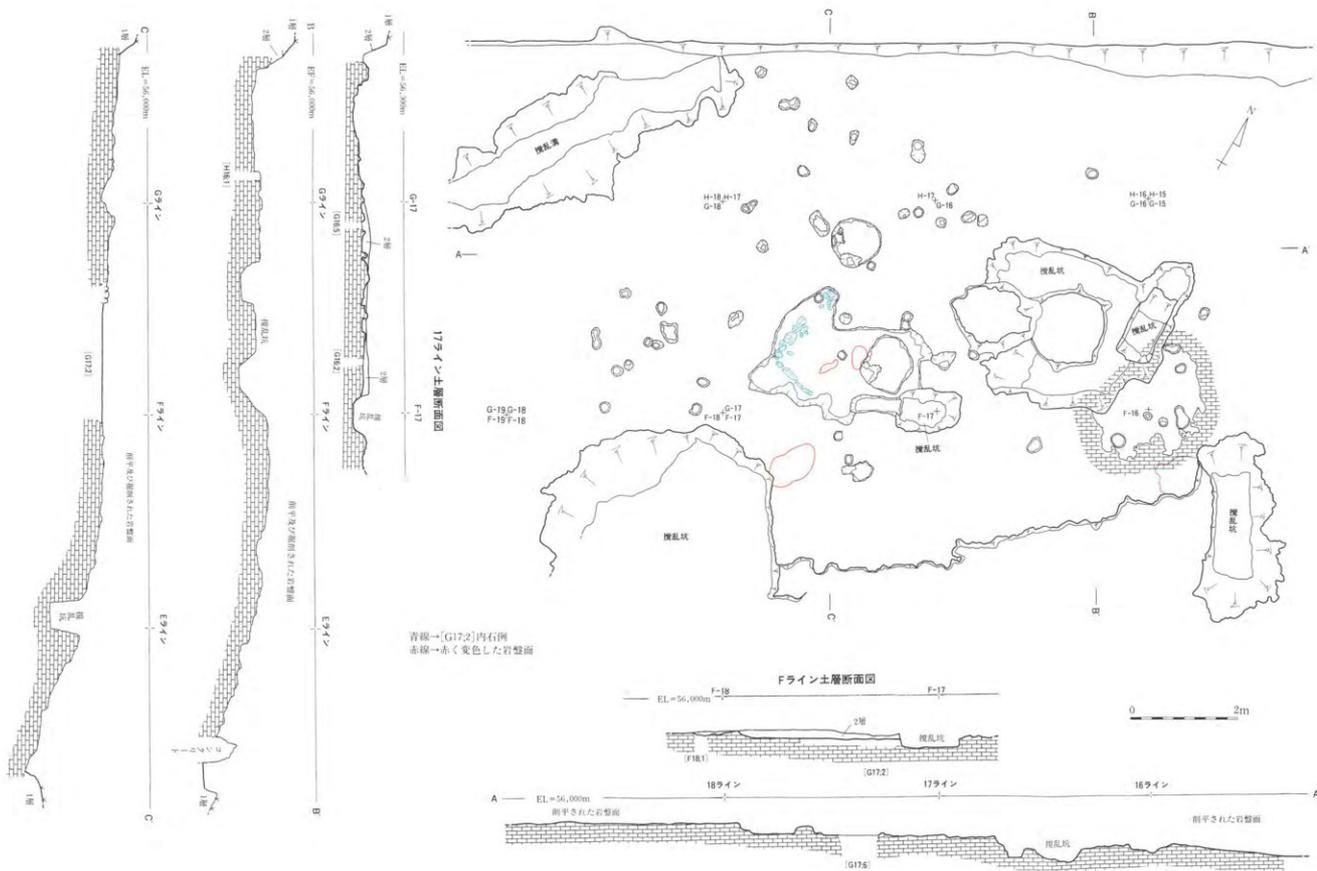
・d区(35~36グリッド)

基盤は、鳥尻マージである。2層(茶褐色混礫土層)下が基盤層で、その基盤層上面にいくつかのピット・堅穴式住居(1基)・石列(1基)・集石土坑(1基)が検出された。

d区で検出されたピット群は数が少なく、その深さも浅いものが主体であった。ピット[F36; 2]内からは、伊波・萩堂式系統の土器片及び石斧等が出土しており、隣接する堅穴式住居に関連するものかと思われる。

堅穴式住居[F36; 3](第8図)は、3.1m×3.7m程の規模で、床面積は約9.7平方mである。平面形は、やや形の崩れた隅丸方形である。d区付近は緩やかな傾斜面になっており、北東側が高く、南西側で低くなっている。そのため、住居地の床面は概ね水平な平坦面であるから、住居内の土層面は北東側が高く、南西側ではかなり低い。本遺構が住居として機能していた時点から、このような形態であったのかは不明である。ただ、d区の基盤層上に前期の遺物包含層が存在しないことから考えて、過去にある程度の地形的变化があったことを窺わせる。あるいは、近・現代の人為的造成によるものかもしれない。住居内から、炉跡は検出されていない。床面中央には、柱穴と思われるピット4基が70cm×80cm程の方形に配置され、各々は鳥尻マージ下の岩盤に到達するまで掘り込まれていた。さらに、柱穴4基の方形配置の中央部分に黒色土の落ち込みが確認され、当初は炉跡であることが予想された。しかし、その内部に焼土面または石列等の構築物は検出されず、単に浅い凹みでしかなかった。何らかの機能的な痕跡を示すものであろうか。類例の増加を待ちたい。

住居内からの出土土器は、概ね伊波式の範疇に属するもので、明らかに萩堂式となるような土器資料は得られていない。その他の出土遺物として、石斧(第58図1, 6)・磨石(第59図20)・骨錐(第64図2)等があり、チャートの細片も僅かではあるが検出された。第48図1に示した土器資料は、住居の床面に接した状態で、大きく3つに分かれて出土した。第64図2の骨錐も、床面直上から出土している。この2点の出土資料は、住居が放置され廃屋となった段階で、共に廃棄されたものであることが考えられる。また、住居内の土壁面に沿った床面

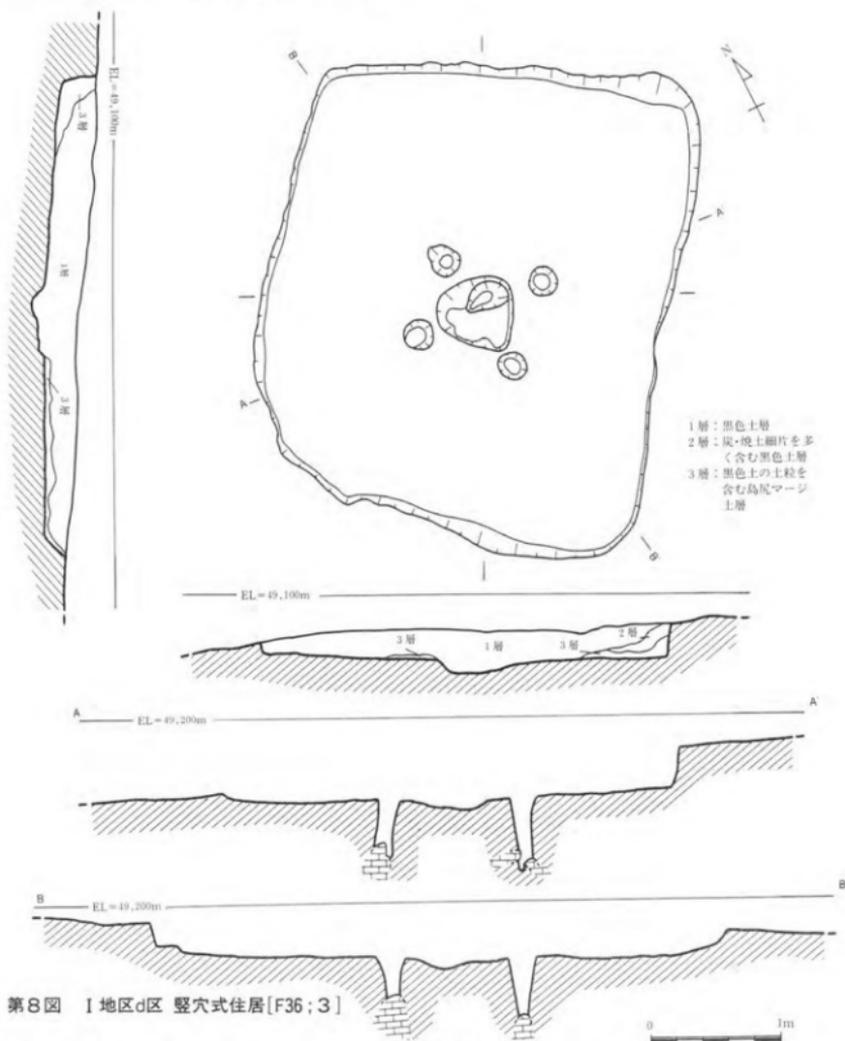


第6図 I地区b区 平面・断面

上から、暗茶褐色の第三紀細粒砂岩の塊（10～20cm大）が、数個検出されている。何らかの使用目的をもつものであろうか。

E-36・37グリッドの2層中から検出された石列（第7図）は、後述するⅡ地区のF-39～41グリッドで検出された石列に繋がる一連の構築物であると思われる。未加工と思われる10～20cm大の礫をほぼ1段で並べただけの単純なつくりである。

石列に隣接して、集石土坑〔E36；1〕が検出された（第7図）。地山を掘り込んで、5～15cm大を主体とする礫を充填している。石列に隣接した集石土坑は、Ⅱ地区のE-39・40グリッド付近でも検出されており、石列と土坑の両者が機能的関連をもつ可能性がある。



第1表 a I地区ピット群 法量・出土遺物一覧

No	区	FNo	遺構 番号	法量(m)	出土遺物	備 考		
							長	幅
1	I区	E7	1	74 53 44	黒色磁器、土器、瓦	第1号方形プラン・ピット。		
2			1 50 35 34	白磁、土器	第1号方形プラン・ピット。遺構内中位で、焼土層抽出。			
3			2 62 53 24		第1号方形プラン・ピット。			
4		E8	F7	1	20 22 6			
5				2 20 22 6	土器	埋戻しにより、一部破壊。		
6				2 62 52 22	土器	法量は、約略。		
7				3 76 55 24				
8				4 10 14 3				
9				5 20 20 20				
10				6 20 24 22	土器	第2号方形プラン・ピット。		
11		E9	F9	7	65 54 東側:22 西側:4	土器		
12				8 53 37 11	土器			
13				9 20 28 12				
14				10 71 50 24	土器			
15	11 118 50			土器				
16	1 20 22 6			土器				
17	2 20 22 6			土器				
18	3 20 22 6							
19	4 64 23 44			土器				
20	5 20 22 6			土器				
21	6 20 22 6			土器				
22	7 114 58 5							
23	8 20 16 12							
24	9 14 12 18							
25	10 20 16 12							
26	11 44 26 34	土器	法量は、約略。					
27	12 22 22 4	土器	焼石遺構。					
28	E10	F10	1	75 47 23	土器、石鏡			
29			2 75 47 23	土器				
30			3 210 118 42	青磁、白磁、黒磁、土器、石鏡	遺構を崩り下げる段階で、[E10:1]と同一の遺構であることが判明したため、欠番とした。			
31			4 150 118 14	土器、石鏡	法量は焼土層(1基)あり。			
32			5 20 12 10					
33			6 20 12 10	土器				
34			7 54 26 52	土器				
35			8 18 14 14					
36			F10	F10	1	30 44 40	土器	
37					2 30 44 40	土器、土器、円筒状製品	法量は、敷石あり。	
38	3 70 70	土器、石鏡			焼土層。			
39	4 144 34 10							
40	5 20 18 8							
41	6 40 18 8							
42	7 20 22 10							
43	8 20 22 8							
44	9 20 18 16							
45	10 40 18 16	土器						
46	E11	F11	11	12 12 10 10				
47			12 14 10 40					
48			1 24 24 12	土器				
49			2 24 24 8					
50			3 18 11 8					
51			4 22 18 8					
52			5 44 32					
53			6 40 32 24	土器	焼土層。			
54			7 20 24 4		埋戻しにより、一部のみ残存。			
55			F11	F11	2	62 52 24	土器	
56	3	— — —				1層の残土であったため、欠番。		
57	4 22 20 10							
58	5 18 14 8							
59	6 14 12 14							
60	7 20 20 10							
61	8 24 20 20	土器			焼石遺構。			
62	9 16 40 22	土器			法量は敷石あり。			
63	10 20 20 44				埋戻しにより、法量、法面中央に、直径約10cmの円形の跡のみあり。			
64	11 40 28 10				埋戻しにより、一部のみ残存。			
65	12 40 32 10	土器	埋戻しにより、一部のみ残存。					
66	13 24 24 24		埋戻しにより、一部のみ残存。					
67	14 24 10 10		埋戻しにより、一部のみ残存。					
68	G11	F12	1	103 125 10	土器、骨製品	焼石遺構。		
69			2 40 30 14					
70			3 14 14 11					
71			1 62 48 11		焼土層。			
72			F12	F12	1	114 10 7	土器	焼石遺構。
73					2 24 20 18			
74					3 16 4 3			
75					4 144 26 7	土器、石鏡、骨製品	焼石遺構。法面に焼土層(4基)あり。	
76					5 10 16 22	土器		
77					6 20 10 13	土器		
78	7 14 14 8							
79	8 10 24 10							
80	9 18 10 10	土器						
81	10 20 20 15	土器						
82	G12	F13	11	12 20 20 15	土器			
83			12 51 50 18	土器	法面中央に、直径約10cmの円形の跡のみあり。			
84			1 40 10 10					
85			2 20 10 10					
86			3 20 10 10					
87			4 18 18 3					
88			5 123 37 8	土器				
89			6 10 10 10					
90			7 24 40 8	土器	焼石遺構。			
91			8 28 28 13	土器	焼石遺構。			
92	H11	F14	1	15 14 4	土器			
93			2 20 20 20					
94			3 118 30 6					
95			4 118 30 6					
96			5 118 30 6	土器	焼石遺構。			

第1表b I地区ピット群 法量・出土遺物一覧

坑区	F#	遺物 番号	深さ (cm)	出土遺物	備 考	
a区	H11	1	13	土器	黒石遺物。	
		2	13	土器	赤土は、粘質。	
		3	14	土器	赤土は、粘質。	
	G11	1	13	土器	遺物により、一部のみ残存。	
		2	13	土器	赤土は、粘質。	
		3	13	土器	赤土は、粘質。	
	H13	1	14	土器		
		2	14	土器	赤土は、粘質。	
		3	14	土器	赤土は、粘質。	
		4	14	土器	赤土は、粘質。	
		5	14	土器	赤土は、粘質。	
		6	14	土器	赤土は、粘質。	
	b区	F11	1	13	土器	赤く変色した粘質土。
			2	13	土器	
			3	13	土器	赤土は、粘質。
G11		1	13	土器	赤土は、粘質。	
		2	13	土器		
		3	13	土器		
F14		1	13	土器	赤土は、粘質。	
		2	13	土器		
		3	13	土器		
G16		1	13	土器		
		2	14	土器		
		3	13	土器		
		4	13	土器		
		5	13	土器		
H14		1	13	土器		
	2	14	土器			
	3	13	土器			
	4	13	土器			
	5	13	土器			
F17	1	13	土器、石器、石鏡			
	2	13	土器			
	3	13	土器			
	4	13	土器	赤く変色した粘質土。		
G17	1	14	土器、白磁、土器			
	2	14	土器、黒磁、土器	赤土上で、石鏡及び赤く変色した粘質土を出土。		
	3	14	土器			
	4	14	土器			
	5	14	土器			
	6	14	土器、石器			
	7	14	土器			
	8	14	土器			
	9	14	土器			
	10	14	土器			
	11	14	土器			
	12	14	土器			
	13	14	土器			
	14	14	土器			
H17	1	14	土器			
	2	14	土器			
	3	14	土器			
	4	14	土器			
	5	14	土器			
	6	14	土器			
	7	14	土器			
	8	14	土器			
	9	14	土器			
	10	14	土器			
	11	14	土器			
F18	1	14	土器			
	2	14	土器			
	3	14	土器			
	4	14	土器			
	5	14	土器			
	6	14	土器			
	7	14	土器			
	8	14	土器			
	9	14	土器			
c区	E11	1	14	土器、黒磁、土器、石器、土製品	赤か?	
		2	14	土器		
		3	14	土器		
		4	14	土器		
		5	14	土器		
		6	14	土器		
	F11	1	14	土器		
		2	14	土器		
		3	14	土器		
		4	14	土器		
		5	14	土器		
		6	14	土器		
	E13	1	14	土器		
		2	14	土器		
		3	14	土器		
4		14	土器			
5		14	土器			
6		14	土器			
F13	1	14	土器			
	2	14	土器			
	3	14	土器			
E14	1	14	土器			
	2	14	土器			
	3	14	土器			
	4	14	土器			
	5	14	土器			
	6	14	土器			
F14	1	14	土器			
	2	14	土器			
	3	14	土器			
	4	14	土器			
	5	14	土器			
	6	14	土器			
	7	14	土器			
F14	1	14	土器			
	2	14	土器			
	3	14	土器			
	4	14	土器			
	5	14	土器			
	6	14	土器			
	7	14	土器			
F14	1	14	土器			
	2	14	土器			
	3	14	土器			
	4	14	土器			
	5	14	土器			
	6	14	土器			
	7	14	土器			
d区	F14	1	14	土器		
		2	14	土器		
		3	14	土器		
		4	14	土器		
	F14	1	14	土器、土鏡、陶器土器	黒石土器。	
		2	14	土器		
		3	14	土器		
F14	1	14	土器、石器、土製品	黒石土器。		
	2	14	土器			
	3	14	土器			

第2節 II地区

本地区は調査区域の中央部にあたり、37～50ラインを指す(第3図)。現泉道の道路工事の際の残土などが2m近くも堆積しており、その下層には地山の赤土(マージ)層を含め、ほぼ水平に堆積している層が7枚確認できた。2層以外は、いずれの土層も本地区の全体に広がっているわけではなく、部分的に堆積している状況であった。検出された遺構をみると、三つの溝状遺構・畑跡?・本土産磁器集中部・ウワーフル(豚小屋)跡|以下フルと略す|などであり、概ねグスク時代から近・現代に相当する時期のものかと考えられる。以下、本地区で確認された層序・遺構について概略を記す。

(1) 層序

残土である1層を重機で剥ぎ取ったところ、本地区東側37～39ライン付近では赤土(マージ)や岩盤が露出し、東側(37グリッド)から西側(50グリッド)へ緩やかに傾斜しながら茶褐色混礫土層が検出された。本地区では、基盤の赤土(マージ)を含め8枚が確認された(第9図・第10図)。以下、確認した層について略述する。

1層-残土。泉道の道路工事の時に盛られた土と思われ、110cm～190cmの厚みを有し空缶・プラスチック等とともに沖縄産陶器や輸入陶磁器・本土産磁器等を含む層である。

2層-茶褐色混礫土層。旧表土と考えられ、石灰質の砂粒や小礫を多く含む。40～48ラインにわたって確認できる。41ラインでは4cm前後と薄いが、フルの石積み前では約70cmと厚く堆積しているフル西側では、8～18cmの厚さである。この層の上面で畑跡・石列・フルの遺構が、下面で溝(No1)・本土産磁器集中部が確認できた。出土遺物は、沖縄産陶器・輸入陶磁器やグスク土器が主であるが、近代以降の本土産磁器もふくまれている。僅かながら南島須恵器も確認できた。

3層-茶褐色土層。石灰質の砂粒を余り含まない。本層は、道路側法面において10cm前後の厚さで確認できた層であり、本調査区の全体に広がっているわけではなく、南側に僅かにみられた層である。出土遺物は、法面削りの際に少量ではあるが、沖縄産陶器・青磁・白磁・褐釉陶器等が得られている。

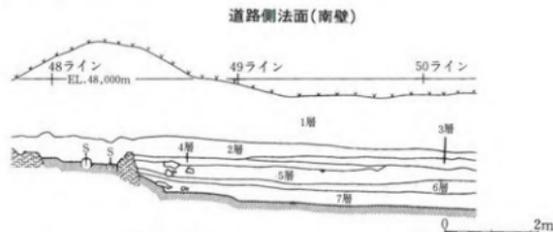
4層-黒色土層a。本層は第3層と同様に、道路側法面において10cm前後の厚さで確認できた層であり、本調査区の全体に広がっているわけではなく、南側に僅かにみられた層である。

5層-黒色土層b。橙褐色の細粒(マージか?)を多く含む。本層は48ライン以西に広がっており、10cm前後の厚さで確認できた層であり、この層の上面で溝(No2)の遺構を確認した。出土遺物は、グスク土器が主で僅かに輸入陶磁器が確認できた。

6層-黒色土層c。炭片・焼土片を含む。E・F-48とG-49以西に広がっており、10～20cm前後の厚さで確認できた層である。出土遺物は、グスク土器が主で僅かに青磁・白磁が確認できた。

7層-暗茶褐色マージ土層。E・F-48以西とG-49以西に広がっており、30cm前後の厚さで確認できた層である。出土遺物は上部で、僅かにグスク土器・青磁が確認でき、下層へ行くほど遺物は減少する。地山への移行層とみられる。

8層-本調査区一帯の基盤層である石灰岩風化土の赤土(マージ)層。東から西へ傾斜を示し、40～47ラインでは、2層掘り下げ後に確認できた。



第9図 II地区 層序(1)

(2) 遺構

本地区では、グスク時代から近・現代にかけての遺構が検出されている。検出した遺構としては、畑跡?(第11図)・石列及び石溜まり(第13図)・ウーフル(豚小屋)跡以下、フルと略す。|(第16図)・本土産磁器集中部(第15図)・溝状遺構No1(第14図)・溝状遺構No2(第17図・第18図)等である。以下、遺構の検出状況について略述する。

1. 畑跡?(第11図) ※本文中の観察表等に示されているF・G-41・42の畑土、畑上、畑溝は、畑跡を示す。

F・G-41・42グリッドで検出された。それ程広い範囲ではないが、ほぼグリッドと平行に約6mの長さで3本、3m前後の長さが2本、1mの長さが1本で、No3と4は東側で繋がっているのが確認できた。幅は25~60cm程で、深さも2~4cmと浅かった。この遺構は1層除去後の2層上面で確認されており、輸入陶磁器や沖繩産陶器に混じってガラス片等の現代遺物も多く含まれるので、比較的新しい時代のもと考えられる。この遺構の西側には、後述するフルがあり、これと関連して屋敷の後側に設けられる小さな畑(アタイ)とも考えられる。

参考文献

・『宜野湾市史』第5巻 資料編4 民俗 1985年

2. 石列及び石溜まり(第13図) ※本文中の観察表等に示されているE-3 9遺構6、F-4 0遺構5・6は石溜りを示す。

E・F-39・40・41グリッドにわたり確認できた遺構で、ほぼグリッドと平行に東西方向に検出された。長さ10m程で10~30cm大の石を使用している。E-39付近の岩盤に石を据え付け、1段の石列が続くが、40ライン手前から西側は10~20cm大の石が2段みられ、サンゴ石で終了している。サンゴ石の西側にも不規則な石灰岩礫群が確認できたが、一連のものかどうか不明である。この石列は、2層の上に積まれていることから、近代の頃の時期と考えられるが、絞り込むまでには至らなかった。前述の畑跡?又は後述の溝状遺構No1の土留めの石列ということも考えられる。また石列の南側、道路側方面の下場には5~15cm程の石灰岩礫が集中する、3基の不定形な小礫群が確認できた。青磁・染付・沖繩産陶器等が出土しているが、遺構の性格については不明である。

3. 溝状遺構No1(第14図) ※本文中の観察表等に示されているF-40.41・G-41.42.43・H-42.43の遺構1は溝状遺構No1を示す。

F-40.41・G-41.42.43・H-42.43で検出したもので、地山上面で確認されている。東西方向へ約17m程の埋土であるが、本遺構は調査区外にも延びており全長は不明である。幅は1m50cm~2m程で、深さ40cm~70cm程で東側のF-40から西側のH-43の方へ傾斜している。底面は鍋底状で、G-42・H-43では丸味が強くなる。本遺構の埋土である黒色土層からは、グスク土器と伴に輸入陶磁器や沖繩産陶器が得られ、この層を掘り下げるとビット群が検出された。ビットは全部で47個検出され、ほとんどは平面形が円形及び楕円形状である。長軸は11cm~55cm、深さは6cm~36cmで比較的ばらつきがみられる。検出されたビットの内、約半数からグスク土器片や焼土片が出土している。このビット群が、溝とどのように関係するのかが判然としない。ビット群が掘り込まれていた茶褐色土層からの出土遺物は、グスク土器片や焼土片等が得られた。この遺構が単なる溝なのか、別の性格を持つものなのか詳細は不明である。また、G-41からの小溝(第12図)は、本遺構への流れ込みと考えられる。

4. 本土産磁器集中部(第15図) ※本文中の観察表等に示されているF・G-43遺構6は本土産磁器集中部を示す。

F・G-43で検出されている。明治以降の本土産磁器の碗31個・小碗23個・小杯41個・皿22個と中国の染付皿1個の計118個が得られた。土圧によって、割れているものも24点あったが殆ど完形品であった。磁器は裏返しに重ねられ、左(南側)・右(北側)に分かれるように検出された。出土状況を見ると、図の左側(南側)に34個、右側(北側)で84個を確認し、左側(南側)では碗が右側(北側)では小碗が多く得られた。小杯は全て右(北側)より得られており、小碗を取り上げた下部より検出された。また磁器集中部の東側に近接して、30cm×40cmのほぼ長方形に炭(木製品が腐食?)が多く混じった5cm弱の厚みを有する茶褐色土を検出した。その約80cm離れた北側では炭片及び赤色の樹脂粒(漆片?)を検出したが、層としては確認できなかった。北西側約40cmの場所に検出された荒焼壺の中からは、切断された豚骨を検出した。『宜野湾市史』によると「骨を切断して壺に保管されたものは製糖期の汁物のだしに使う」とあるが(註1)、実際に出土した豚骨が該当するかどうかは判らない。この遺構は出土状況からして、戦時中の避難時に家財道具を埋めて行ったのではないかと考えられるが、発掘調査時の掘り方などが不明瞭であり、詳細については判然としない。この磁器の取り上げにあたっては、図面左側をS・図面右側を

Nとして、左右それぞれの遺物に算用数字を付し、重なっている遺物にはアルファベットを付した。(例S-1-A・S-1-B)(第2表)

註

註1.『宜野湾市史』第5巻 資料編4 民俗 1985年

5. ウーフール(豚小屋)跡(第16図) ※本文中の観察表等に示されているF-43.44・G-43.44遺構W内、W里、Wシリー内はウーフール跡をF-42.43・G-42.43・H-43遺構2、F-G-43遺構3、F-43遺構5はウーフール造成を示す。

F-43.44・G-43.44で検出されている。規模は長さ約5m・幅約2.6mを測り、石灰岩の切石を2段積んで構築されている。切石の継ぎ目や床面は、セメント(砂を多く含む脆い)で補強しており、前面の石壁にはトゥーシヌミー(人が用を足す箇所)が確認できた。トーニ(豚の飼料入れ)は、1箇所でのみ残っており荒焼の水鉢がセメントで固めて置かれていた。前面石壁の下には、尿尿を流す細い溝がありシーリ(肥溜め)へと繋がっている。シーリ(肥溜め)は、長さ約160cm・幅約90cm・深さ約90cmを測り、セメントによって全面的に補強されていた。シーリへと繋がった溝の上には、シャコ貝が裏向きで殻頂を北方向にして置かれており、これがどのような意図なのか興味深い。フール内からは、瓦の出土が全体の65%を占める、これは屋根部分に瓦を載せていた(註1)可能性を示していると考えられる。古老からの聞き取りによると、このフールは戦前ウィーザトヤー(上里家か?)の所有であり、Ⅲ地区のサーターヤー(砂糖小屋)跡の鉄鍋を操業開始にあたる冬至の日まで預かる役割も果たしていたようである。フールの前面には、南東～北西方向へ積まれた石積み(長さ約10m)が検出された。この石積みは、積まれている石の大きさや段数が、部分的に異なっている。南東側の4m程までは10～20cm大の石を5～8段積んでおり、それより北西側の3m程は30～70cm大の石の2～3段積みとなり、さらに北西側の部分は約20cm大の石を1～5段積んで終了する。石積みを下方の土層を観察すると、①層は小礫混じりの茶褐色土で、②層は5～10cmの小礫混じりの茶褐色土、③層は石灰質砂粒、④層は砂粒を多く含む茶褐色礫色土、⑤層はマージ土粒を多く含む茶褐色土と区別した、出土遺物は①～⑤までは輸入陶磁器や沖縄産陶器を主に陶質土器等を確認しており、それほどの時期差は認められないようである。⑥層では輸入陶磁器や沖縄産陶器の他に褐陶陶器・グスク土器・須恵器等が得られており、やがやい様相を示している。⑥層はフールの下にも延びているが、時間の都合上フールの下層に延びた本層の発掘は断念せざるを得なかった。その向かひには、本石積みとはほぼ平行するようにより、約50cm程離れた東側に積まれた長さ9m弱の石列が検出された。10～40cm大の石を並べており、所々で2段積みも見られる。この石列と石積みの間は、小溝状になっており、この石列を溝の縁に据え付け土砂の流入を防ぐ役目を果たしたのではないだろうか。フール・石積み・石列の関係をみると、石積みの5～8段積んでいる部分と小溝及び石列は、フールよりも古い時期に構築され、2～3段の石積みとフールと同じ時期か少し前に構築されたとき期差を想定してもよいのではないかと考えられる。

註

註1.『宜野湾市史』第5巻 資料編4 民俗 1985年

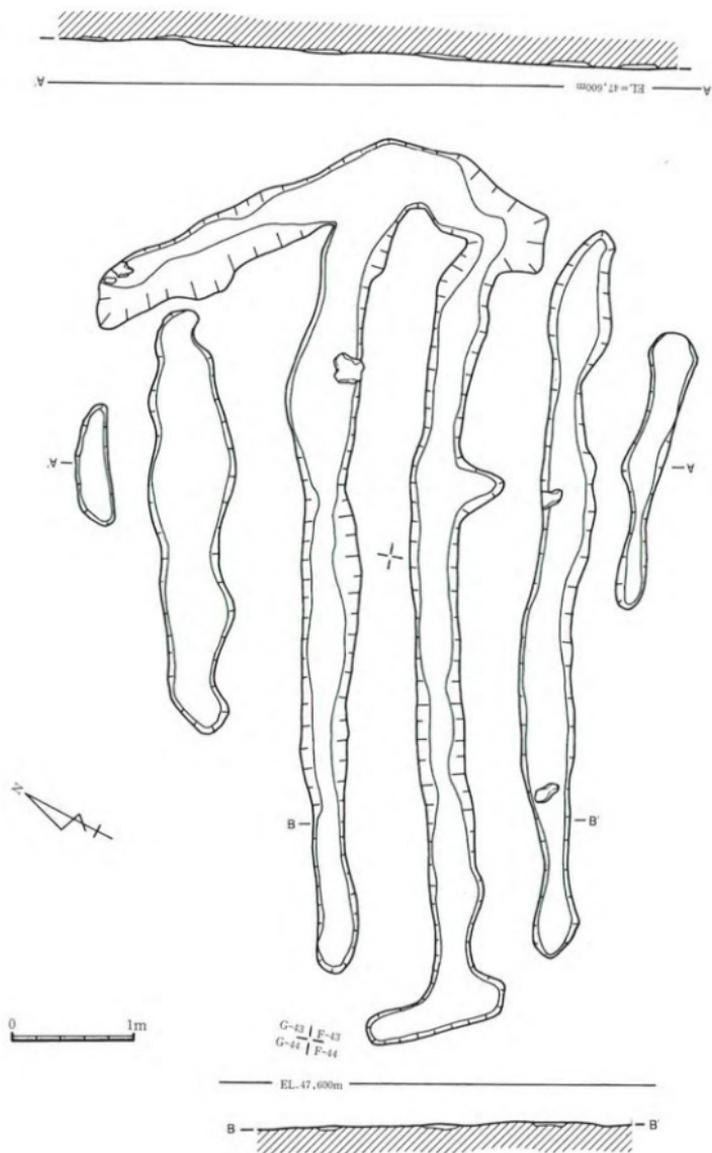
参考文献

・『宜野湾市史』第5巻 資料編4 民俗 1985年

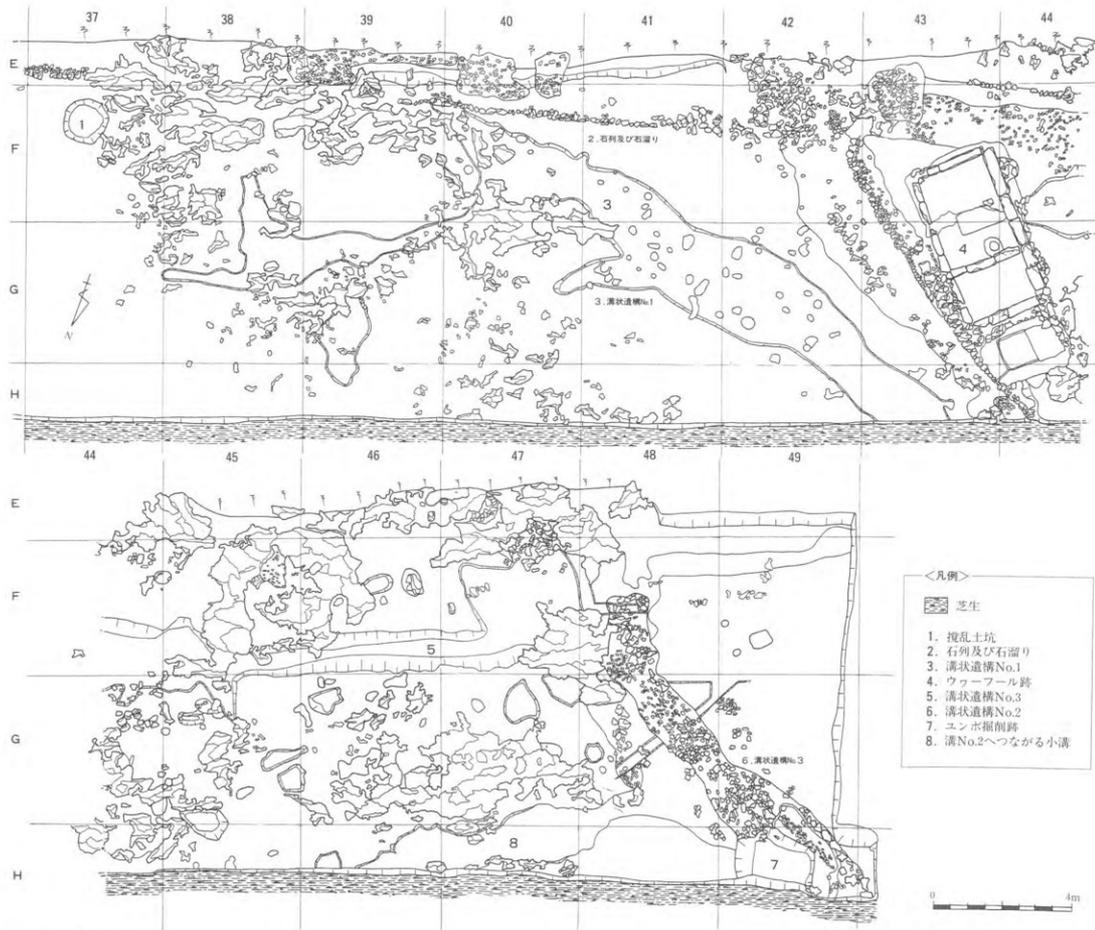
6. 溝状遺構No.2(第17・18図) ※本文中の観察表等に示されているF-48・G-48.49・H-49遺構1・H-49遺構2.3は溝状遺構No.2を示す。

F-48・G-48.49・H-49にかけて検出されている。南東～北西方向に走り、長さ7m程でH-49部分は重機による掘り込みで破壊されているため、全長は不明である。溝幅1m～2m程で、溝の上層にあたる礫混じりの暗茶褐色土層の上面に5～10cm大の石灰岩がまばらに敷かれている感じで、深さは20cm程である。出土遺物は、青磁・沖縄産陶器・陶質土器等に混じってガラス片も得られていることから、F-49やF-44・H-46(第12図)からの土砂の流れ込みで堆積した可能性も考えられる。上層を除去し、G-49より発掘を進め遺構の外枠を確認したところ(第18図)、幅3m～4m、深さも1m前後とかなり大きな溝状遺構となった。下層は小礫を多く含む黒茶褐色土層で、出土遺物は青磁や褐陶陶器と共にグスク土器も得られ、僅少ではあるが須恵器も確認できた。H-49では20cm～40cm大の石灰岩が並べられており、溝の縁部の補強に使用されたものと考えられる。この溝状遺構は、調査範囲外に延びており、全体的な様子は判然としない。

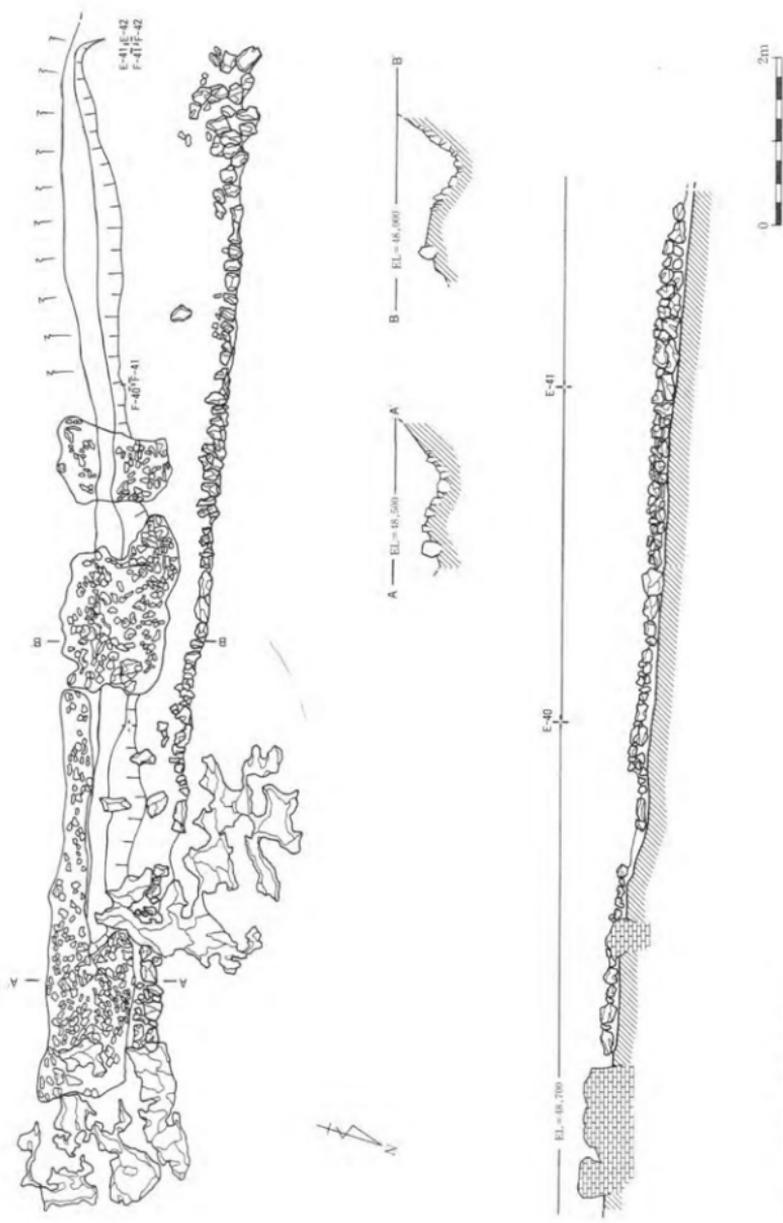
※最後に、本文中の観察表等に示されているF-G-44.45・F-46.47遺構1.1-a.1-bは溝No3を示す。その他の本文中の観察表等に示されている遺構番号については、ピット及び土坑を示す。



第11图 II地区 烟跡



第12図 II地区 遺構全体



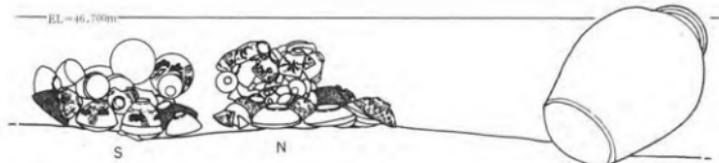
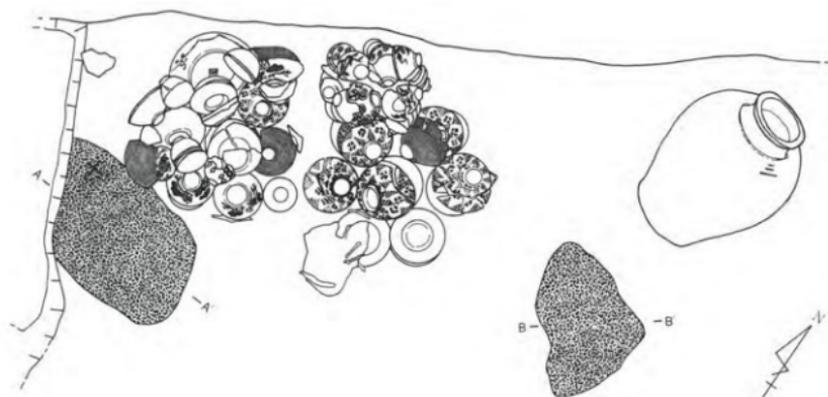
第13図 I地区 石列及び石溜り



第14図 II地区 溝状遺構No. 1

II地区ピット群法量・出土遺物一覧

No	グリッド	遺構番号	法量 (cm)			形状	出土遺物	No	グリッド	遺構番号	法量 (cm)			形状	出土遺物
			長径	短径	深さ						長径	短径	深さ		
1	F40	5	26	16	6	円形		23	G41	12	36	31	28	円形	
2		6	42	20	11	楕円形		24		13	51	24	14	楕円形	土器
3		7	38	36	36	楕円形		25		14	55	23	10	不定形	土器
4		8	16	12	6	円形		26		15	27	26	24	円形	
5		9	22	20	19	円形		27		16	32	16	10	楕円形	
6		10	22	20	16	円形		28		10	34	32	15	楕円形	
7	F41	4	17	16	9	円形		29	G42	11	21	20	8	円形	
8		5	11	10	8	円形		30		12	31	24	10	楕円形	
9		6	20	17	10	円形	土器	31		13	30	22	15	楕円形	
10		7	27	22	12	円形		32		14	16	14	10	円形	土器
11		8	22	18	12	円形		33		15	18	12	5	楕円形	
12	9	36	18	18	楕円形	土器	34	16	25	22	16	円形			
13	G41	2	30	20	22	円形	青磁、染付、褐釉、冲無、瓦貫、瓦	35	17	27	26	24	円形	土器	
14		3	20	18	18	円形		36	18	26	25	20	円形		
15		4	40	32	18	楕円形	土器	37	19	22	20	6	円形		
16		5	19	14	16	円形		38	20	28	26	23	円形		
17		6	30	26	24	円形		39	21	46	42	30	円形		
18		7	26	25	13	円形	土器	40	22	22	18	26	楕円形		
19		8	32	31	18	円形		41	23	28	24	13	円形		
20		9	20	19	7	円形		42	24	34	12	12	不定形		
21		10	31	17	11	楕円形		43	26	32	27	19	円形		
22		11	21	20	12	円形		44	H43	6	52	30	45	楕円形	
								45		7	32	24	70	円形	



※上記のNo1-118は、第2表に対応する。また、NのNo35-48を上部、上部取り上げ後のNo49-91を下部とした。



<凡例>

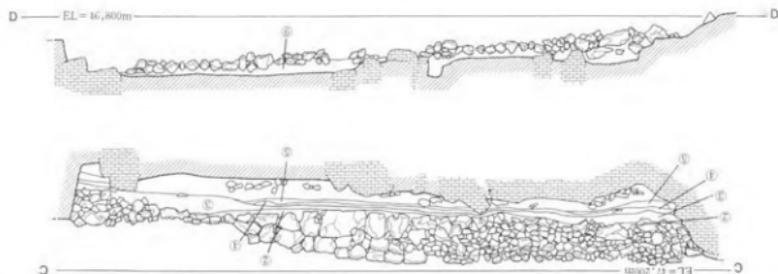
 炭片を含む茶褐色土



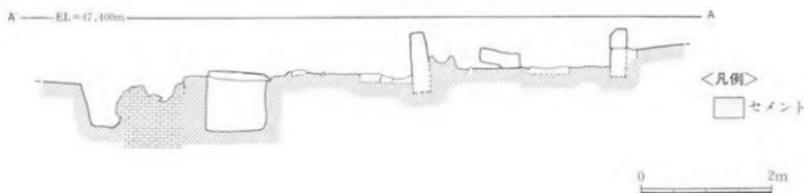
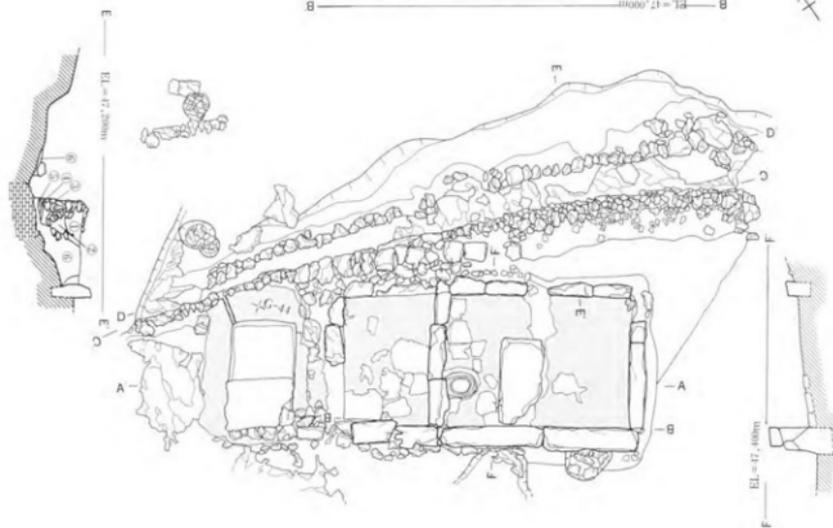
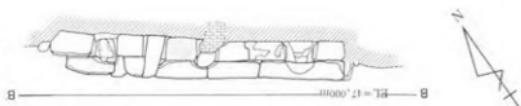
第15図 I地区 本土産磁器集中部

第2表 II地区 本土産磁器集中部観察一覧

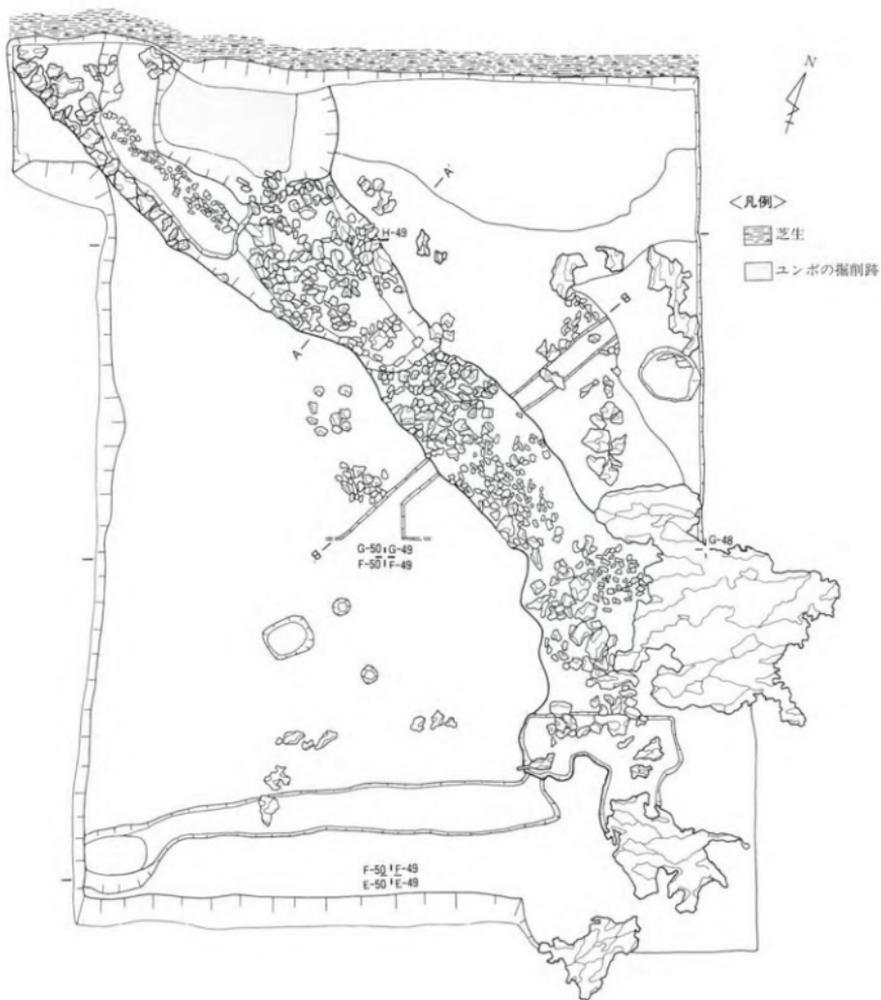
No.	器形	法量 (cm)	取り上げ 口徑器高底径	No.	備考	No.	器形	法量 (cm)	取り上げ 口徑器高底径	No.	備考		
1	碗	11.2	5.0	3.7	S-1-A	2本線 第37図10・図版26	60	小杯	6.0	2.8	2.0	N-7-B	№.66と類似タイプ
2	碗	11.6	5.4	3.8	S-2-A	吹き給 №28と同じタイプ	61	小杯	5.5	3.1	2.3	N-7-C	第39図4・図版28
3	碗	11.4	5.5	4.1	S-2-B	濃緑 №29と同じタイプ	62	小杯	6.3	2.6	2.5	N-7-D	№.51と同じタイプ
4	小碗	8.3	4.7	3.6	S-3-A	銅版 №.36と類似タイプで竹・鳥を配する。	63	小杯	6.2	2.6	2.8	N-7-E	№.51と同じタイプ
5	碗	11.2	6.1	4.0	S-4-A	2本線 №.1と同一タイプ 高台内に「桃1075」	64	小碗	8.1	4.5	3.2	N-7-F	2本線 №.9と同じタイプの直口碗
6	皿	18.9	7.5	10.5	S-5-A	染付皿 第36図4・図版25	65	小碗	8.1	4.6	3.2	N-7-G	2本線 №.9と同じタイプの直口碗
7	小碗	8.2	4.7	3.5	S-6-A	銅版 №.36と同じタイプ	66	小杯	5.8	2.7	2.0	N-8-A	第39図1・図版28
8	小碗	8.0	4.6	3.2	S-7-A	2本線 №.9と同じタイプの直口碗	67	小杯	5.9	3.0	2.2	N-8-B	色が剥げ落ち、文様不明。
9	小碗	8.4	4.7	3.2	S-8-A	2本線 第37図16・図版26	68	小杯	5.6	3.1	2.3	N-8-C	第39図7・図版28
10	皿	11.2	2.6	6.0	S-9-A	銅版 №.14と同じタイプ	69	小杯	6.2	2.8	2.3	N-8-D	№.66と類似タイプ
11	皿	11.4	2.6	6.1	S-9-B	銅版 №.14と同じタイプ	70	小杯	6.6	2.8	2.6	N-8-E	№.51と同じタイプ
12	皿	11.6	2.4	6.5	S-9-C	銅版 銀子を配する皿	71	小杯	6.2	2.9	2.8	N-8-F	№.51と同じタイプ
13	皿	11.3	2.4	6.0	S-9-D	銅版 №.14と同じタイプ	72	小杯	6.0	2.4	2.6	N-9-A	№.51より小ぶりタイプ
14	皿	11.2	2.5	6.1	S-9-E	銅版 第38図6・図版27	73	小杯	6.0	2.6	2.5	N-10-A	№.51より小ぶりタイプ
15	小碗	8.2	4.8	3.0	S-10-A	ゴム版 藍花文を配する小碗	74	小杯	5.1	2.8	1.9	N-10-B	内面に藍・松の文様を施す。
16	碗	11.6	5.5	4.0	S-11-A	濃緑 №.29と同じタイプ	75	小杯	5.8	2.5	2.4	N-10-C	№.51より小ぶりタイプ
17	小碗	8.2	4.7	3.0	S-12-A	ゴム青磁 第37図14・図版26	76	小杯	6.0	2.5	2.5	N-10-D	№.51より小ぶりタイプ
18	皿	13.2	2.6	7.2	S-13-A	銅版 花文皿	77	小杯	6.4	2.8	2.6	N-11-A	№.51と同じタイプ
19	皿	13.0	2.6	7.3	S-13-B	銅版 №.18と同じタイプ	78	小杯	6.2	2.6	2.6	N-12-A	№.51と同じタイプ
20	皿	11.1	6.0	3.9	S-13-C	2本線 №.1と同じタイプ 高台内に「桃1075」	79	小杯	6.4	2.9	2.8	N-12-B	№.51と同じタイプ
21	皿	11.5	6.1	4.0	S-13-D	2本線 №.1と同じタイプ 高台内に「桃1075」	80	小杯	6.3	2.7	2.0	N-12-C	№.66と類似タイプ
22	皿	11.4	6.0	3.7	S-13-E	2本線 №.1と同じタイプ 高台内に「桃424」	81	小杯	6.1	2.7	1.9	N-12-D	№.66と類似タイプ
23	碗	11.4	5.1	4.0	S-13-F	2本線 №.1と同じタイプ 高台内に「桃1075」	82	小杯	6.4	2.8	2.6	N-13-A	№.51と同じタイプ
24	皿	13.0	5.8	4.7	S-14-A	型紙 №.94と同じタイプ	83	小杯	5.8	2.9	2.4	N-13-B	第39図5・図版28
25	皿	11.5	5.4	3.8	S-15-A	吹き給 №.28と同じタイプ	84	小杯	6.2	2.8	2.0	N-13-C	№.66と類似タイプ
26	碗	11.9	5.7	4.1	S-15-B	濃緑 №.29と同じタイプ	85	小杯	5.8	2.7	1.9	N-14-A	№.66と類似タイプ
27	碗	11.6	5.2	3.8	S-16-A	吹き給 №.28と同じタイプ	86	小杯	6.2	3.0	2.6	N-14-B	色が剥げ落ち、文様不明、薄青色の釉施す。
28	碗	11.6	6.3	3.8	S-16-B	吹き給 第37図8・図版26	87	小杯	6.3	2.6	2.6	N-15-A	№.51と同じタイプ
29	碗	11.2	5.2	4.1	S-16-C	濃緑 第37図9・図版26	88	小杯	6.0	2.6	2.6	N-15-B	№.51より小ぶりタイプ
30	碗	11.4	5.5	4.0	S-17-A	濃緑 №.29と同じタイプ	89	小杯	5.9	2.4	2.5	N-16-A	№.51より小ぶりタイプ
31	碗	11.4	5.4	3.8	S-17-B	吹き給 №.28と同じタイプ	90	小杯	5.7	2.6	2.3	N-17-A	№.66と類似タイプ
32	小碗	8.1	4.6	3.2	S-18-A	2本線 №.9と同じタイプの直口碗	91	小杯	5.4	2.8	2.0	N-17-B	第39図9・図版28
33	碗	11.6	6.2	4.0	S-19-A	2本線 №.1と同じタイプ 高台内に「桃1075」	92	碗	11.5	5.5	4.0	N-18-A	濃緑 №.29と同じタイプ
34	碗	11.4	6.0	4.0	S-19-B	2本線 №.1と同じタイプ 高台内に「桃1075」	93	碗	11.4	5.7	4.0	N-18-B	濃緑 №.29と同じタイプ
35	小碗	8.1	4.9	3.7	N-1-A	銅版 №.45と類似タイプで花文を配する。	94	碗	13.3	5.6	4.6	N-18-C	型紙 第37図1・図版26
36	小碗	7.8	4.7	3.6	N-1-B	銅版 第37図12・図版26	95	碗	12.6	6.0	4.6	N-18-D	型紙 №.94と同じタイプ
37	小碗	8.5	4.6	3.2	N-1-C	銅版 №.45と類似タイプで花文を配する。	96	碗	12.7	5.7	4.8	N-19-A	型紙 №.94と同じタイプ
38	小碗	8.1	4.5	2.9	N-1-D	銅版 №.45と類似タイプで花文を配する。	97	碗	13.0	5.7	5.1	N-19-B	型紙 第37図4・図版26
39	小碗	8.1	4.6	3.5	N-1-E	吹き給 鳥文を配する小碗	98	皿	12.9	2.6	7.3	N-19-C	銅版 №.107と同じタイプ
40	小碗	8.0	4.7	3.6	N-2-A	銅版 №.36と類似タイプで竹・雀・鳥を配する。	99	皿	13.2	2.7	7.4	N-19-D	銅版 №.18と同じタイプ
41	小碗	8.3	4.8	3.0	N-2-B	ゴム版 第37図15・図版26	100	碗	13.4	5.8	4.4	N-20-A	型紙 №.94と同じタイプ
42	小碗	7.8	4.7	3.7	N-2-C	銅版 第37図13・図版26	101	碗	13.5	5.7	4.6	N-20-B	型紙 №.106と同じタイプ
43	小碗	7.9	4.7	3.6	N-3-A	銅版 №.36と類似タイプで花文を配する。	102	皿	13.1	2.6	7.3	N-20-C	銅版 №.107と同じタイプ
44	小碗	8.4	4.6	3.2	N-3-B	銅版 №.36と類似タイプで花文を配する。	103	皿	13.2	2.7	7.4	N-20-D	銅版 №.18と同じタイプ
45	小碗	7.8	4.7	3.5	N-3-C	銅版 第37図11・図版26	104	皿	11.2	2.3	6.6	N-20-E	銅版 花文と巴文を配する皿
46	小碗	8.4	4.8	3.1	N-4-A	ゴム版 №.41と同じタイプ	105	碗	13.1	5.8	4.6	N-21-A	型紙 №.94と同じタイプ
47	小碗	8.5	4.7	3.2	N-4-B	銅版 №.45と類似タイプで花文を配する。	106	碗	12.8	5.4	4.6	N-21-B	型紙 第37図5・図版26
48	小碗	8.2	4.7	3.0	N-4-C	ゴム版 亀甲文と鶴・松を配する小碗	107	皿	12.8	2.5	7.3	N-21-C	銅版 第38図4・図版27
49	小杯	5.9	2.5	2.4	N-5-A	№.51より小ぶりタイプ	108	皿	13.2	2.6	7.4	N-21-D	銅版 第38図5・図版27
50	小杯	6.1	2.6	2.5	N-5-B	№.51と同じタイプ	109	皿	13.2	2.7	7.2	N-21-E	銅版 №.107と同じタイプ
51	小杯	8.4	2.7	2.8	N-5-C	第39図2・図版28	110	碗	12.9	5.4	4.4	N-22-A	型紙 №.94と同じタイプ
52	小杯	6.0	2.7	2.1	N-5-D	№.66と同じタイプ	111	碗	13.4	5.3	4.6	N-22-B	型紙 №.106と同じタイプ
53	小杯	5.8	2.7	2.3	N-5-E	高台は菱形、口縁に緑・桃色の釉あり。	112	皿	13.1	2.6	7.3	N-23-A	銅版 №.107と同じタイプ
54	小杯	5.8	2.4	2.4	N-5-F	№.51より小ぶりタイプ	113	皿	13.2	2.5	7.4	N-23-B	銅版 №.18と同じタイプ
55	小杯	6.1	2.6	2.3	N-5-G	第39図6・図版28	114	皿	13.2	2.4	7.3	N-23-C	銅版 №.18と同じタイプ
56	小杯	5.5	3.0	2.2	N-5-H	第39図3・図版28	115	皿	11.4	2.5	6.0	N-23-D	銅版 №.14と同じタイプ
57	小杯	6.8	2.8	2.7	N-6-A	№.51と同じタイプ	116	皿	13.2	2.7	7.3	N-24-A	銅版 №.107と同じタイプ
58	小杯	6.0	2.6	2.6	N-6-B	№.51より小ぶりタイプ	117	皿	13.1	2.5	7.2	N-24-B	銅版 №.107と同じタイプ
59	小杯	5.9	2.6	1.9	N-7-A	№.66と類似タイプ	118	皿	13.0	2.5	7.3	N-24-C	銅版 №.107と同じタイプ



- ①:1層. 茶褐色土層
- ②:2層. 小礫混じりの茶褐色土層
- ③:3層. 石灰質砂粒層
- ④:4層. 砂粒を含む茶褐色泥礫土層
- ⑤:5層. マージ土粒混じりの茶褐色土層

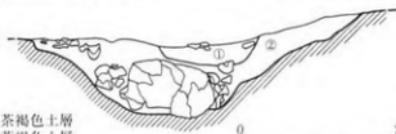


第16図 II地区 ウワーフル(豚小屋)跡



A—EL=46,000m—A

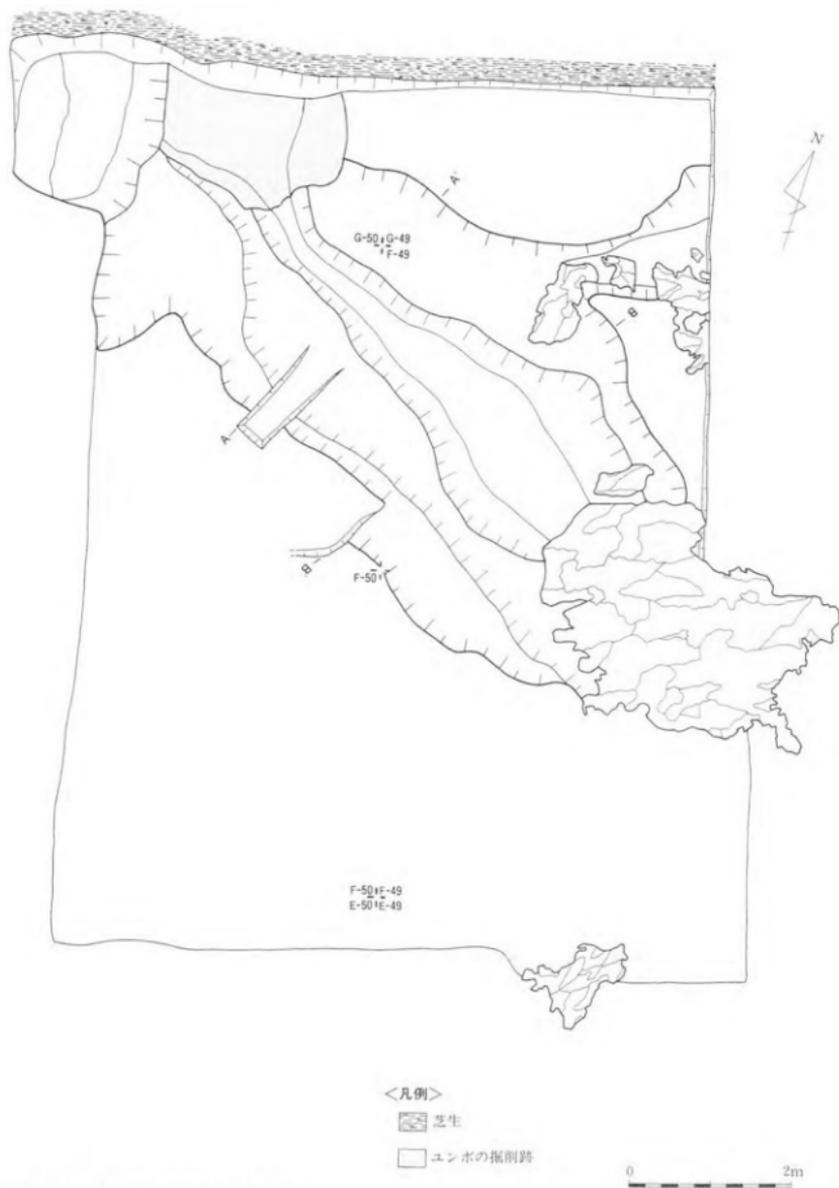
B—EL=46,000m—B



①:1層, 暗茶褐色土層
 ②:2層, 黒茶褐色土層

0 2m

第17図 II 地区 溝状遺構No.2(完掘前)



第18図 II 地区 溝状遺構No.2(完掘後)

第3節 Ⅲ地区

本地区は調査対象地域の西側、喜友名グスクのある丘陵から展開する傾斜の端所付近に位置し、ほぼ平坦地を形成している。土層の堆積はGラインを境に南北では異なる状況を呈していた。キャンプ瑞慶覧基地内の外人住宅建設や宜野湾・北中城線（県道30号線）道路工事の際の造成層を除去後、北側（キャンプ瑞慶覧側）には岩盤が露出し、南側（県道30号線側）には茶褐色混砂土層、黒色土層、暗茶褐色土層がほぼ水平に堆積している状況であった。本地区の遺構としては、暗茶褐色土層上面において無数のピット群や不定形な大きな落ち込みが検出され、E・F-59グリッド内からは牛骨検出土層が検出された。岩盤露出部においてはサターヤー（砂糖小屋）跡が検出されており、これらはおおむねグスク時代～近・現代に相当する複合遺跡であることが判明している。またH-52・53グリッド内には排水溝状石列を伴う岩盤落ち込み部やG・H-59・60グリッド内にも岩盤落ち込み部が確認されたが、堆積層がガラス片やプラスチック片、ビニール等の現代遺物を多く含む土砂・礫等の流れこみであることから戦後に堆積した層であると考えられるため、一括して攪乱層として取り扱い、前者を攪乱A、後者を攪乱Bとした。以下、本地区の層序と検出された遺構についての概略を記す。

(1) 層序

今回の発掘調査により、基本的には地山も含めて5枚の層序が確認できた。1層である造成層を重機で除去したところ、Gラインを境に北側（キャンプ瑞慶覧側）には岩盤が露出し、南側（県道30号線側）には旧表土と考えられる茶褐色混砂土層が検出された。その下層には黒色土層の遺物包含層の存在が確認され、さらにその下層には移行層である暗茶褐色土層の広がりが確認された。以下、本地区で確認された層序について略述することにする（第20図）。

- 1層-造成層。キャンプ瑞慶覧基地内の外人住宅建設や宜野湾・北中城線（県道30号線）道路工事の際の造成土と見られ、本地区の全面に認められる。ガラス片、プラスチック片等の現代遺物を含む土砂や礫が3層にわたり造成されており、僅少ではあるが、輸入陶磁器や沖縄産陶器、グスク土器等も得られている。
- 2層-茶褐色混砂土で、僅かではあるが礫も含む。外人住宅及び道路建設以前の旧表土と考えられ、Gライン以南のほぼ全面に確認することができるが、外人住宅建設や道路建設の際に上部が削り取られており本来の層厚は不明である。遺物は近世以降の遺物と共に、グスク土器や輸入陶磁器等のグスク時代の遺物が主体であるが、僅かながら現代遺物も出土している。Ⅱ地区2層の延長と思われる。
- 3層-黒色土の遺物包含層。本地区Gライン以南の全面に確認でき、最も厚い所で約30cmを測る。ほぼ水平に堆積しており、さらに南側の県道30号線下へ延びている。57ラインから西側へ薄くなり、60ライン以西では見られない。遺物はグスク土器や輸入陶磁器等が主体を成すが、僅かながら古手の沖縄産陶器、南島須恵器や滑石片も得られている。Ⅱ地区Vb層の延長と思われる。
- 4層-暗茶褐色土層で、地山への移行層。52～57ラインにかけて広がっており、57ライン以西には見られない。本層の上面には、無数の柱穴状のピット群や不定形な大きな落ち込みも検出された。遺物はグスク土器が僅かに検出されている。
- 5層-琉球石灰岩風化土壌の赤土で本地区の基盤層。57ライン以西においては3層除去後に検出され、僅かではあるがピットや落ち込み等が確認された。

本地区は全体的には4層上面で検出されているピット群や落ち込み等を完掘して発掘調査を終了した。下層の状況については確認のため2箇所の試掘を行なったところ、約15cmで5層である地山もしくは岩盤に達した。

(2) 遺構

今回の調査により、ピット群や不定形な落ち込み、牛骨検出土層やサターヤー（砂糖小屋）跡、排水溝状石列などグスク時代～近・現代に相当する遺構が検出されている。特に地山への移行層である4層上面において検出されたピット群の中で、3つのプランが確認できた。以下、検出された遺構について略述する。

1. ビット群 (第20図・第21図)

3層除去後に4層及び5層上面において443基のビット群が検出されている(第20図、第3表)。この4・5層はさらに南側へ延びており、調査区外の県道30号線下以南にもこれらの遺構が広がっている可能性は十分に予測される。検出されたビットは、円形・楕円形・不定形等の平面形を呈するものが見られるが、その大部分が円形・楕円形である。またE・F-52・53グリッド内には長軸54~136cm、短軸52~122cm、深さ29~50cmの大きさの円形・楕円形・隅丸方形を呈する大型の落ち込みが集中的に検出されているが、それらの性格等は判然としない。またF-55グリッドを中心に、深さ約40~90cmのビットが集中的に検出されており、その中には標石を含むものも確認された。このような検出状況から数回にわたり建物の立て替えが行われたことが推察され、建物の平面的なプランを想定したところ、次に述べる三棟のプランが確認できた。いずれも長方形もしくは正方形をなす四本柱の建物であると考えられ、これらは柱穴の様相や配置状況から、後兼久原遺跡(註1)にて確認された高床式倉庫と同様の性格を持つ建物である可能性も考慮されるものと思われる。

なお第3表や本文中の観察表等に示されている遺構番号については特に凡例等がない限り、ビット及び土坑を示すものとする。

建物プラン 1

F・G-53・54グリッド内にて大きさが長軸約2.3m、短軸約1.4mで長方形を呈するプランが確認された。

4本柱の建物であると考えられる(第3表No.5・6・81・177)。柱穴の長径は60~80cm、短径は60~70cm、深さは76~94cmを有する。柱穴の埋土からは青磁・白磁・土器・焼土が検出されている。

建物プラン 2

F・G-54・55グリッド内にて検出されている。大きさが長軸約2.2m、短軸約1.8mで長形状に延びており、プラン1同様に4本柱の建物であると考えられる(第3表No.176・178・247・309)。柱穴の長径は38~70cm、短径は30~68cmである。深さは48~76cmとばらつきがある。柱穴内埋土からは青磁・土器・焼土が検出された。

建物プラン 3

F・G-55・56グリッド内にて確認されたプランである。長軸約2.2m、短軸約2.2mの正方形を呈する。これもプラン1・2同様に4本柱の建物であると考えられる(第3表No.219・256・376・384)。柱穴の長径は34~60cm、短径は26~40cm、深さは38~94cmと、深さにはばらつきが見られる。遺物は青磁・白磁・土器が検出された。

2. 牛骨検出土壌 (第19図)

本地区の西側、E・F-59グリッド内において、牛骨1体分相当が検出された土壌が確認されている。土壌は5層上面において検出され、楕円形状を呈しており、長軸約140cm、短軸約100cm、深さは最大で18cmと比較的浅い。検出された牛骨は、頭部を北東に、手足は南東に位置していた。また土壌内からは、僅かではあるが土器片や青磁片も検出されており、これらの状況から、検出された牛骨は埋葬されたものと考えられる。

3. サーターヤヤー(砂糖小屋)跡 (第20図)

喜友名区には、戦前まで7箇所サーターヤヤーがあり(註2)、毎年冬至の日に製糖小屋の屋根を吹き、製糖業を開始したようである(註3)。今回Ⅲ地区F・G-57・58グリッド内の岩盤露出部において検出されたサーターヤヤー跡はその内の1つと見られ、搾汁を煮詰める際のいわゆる製糖窯が確認できている。それに伴う鉄鍋や圧搾機(サーターグルマ)等は検出されていない。この製糖窯は岩盤を掘り込んで造られており、焚き口部から排煙口にかけて南北約5.6m、約10度の勾配のついた登り窯となっている。また一番鍋から三番鍋の鉄鍋を配置したことが聞き取り調査により確認(註4)されている。窯内部は一部崩落しているものの、二番鍋の位置から排煙口にかけて焼成の際に赤く焼けた部分が認められるとともに、焚き口部からは多量の炭片や灰が検出され、焚き口部へと下りる階段状の段差も確認されている。また窯の東側には、人工的な平場及び壁面が認められ、作業を行なう際の空間を成していたものと考えられる。

4. 排水溝状石列（第20図）

本地区の北東、H-53 グリッド内において排水溝状の石列が検出された他、それに伴うものと考えられるコーラル数や岩盤を溝状に發った部分も確認された。岩盤が落ち込んだ部分を最大で1 m 造成してフラット面を成形した後にコーラルを敷き、石灰岩の切石を配置してU字溝状の排水溝としている。また切石による溝ラインの延長上には岩盤をし字状に發った部分（最大で深さ20cm、幅30cm、長さ90cm）が認められたことから、排水溝状石列に付随するものと考えられる。確認できたコーラル数は最大で長さが2.6m、幅24~53cmを有する。切石は5個残存しており、1個が長さ40cm、高さ25cm、厚さ18cmを有する。溝内幅は約24cmであった。前述したように、戦後に堆積したと考えられる土中より検出されたことや造成土中から遺物が検出されていないことから、これらの排水溝状石列及びそれに伴うコーラル数などが機能していた時期や性格等は不明である。

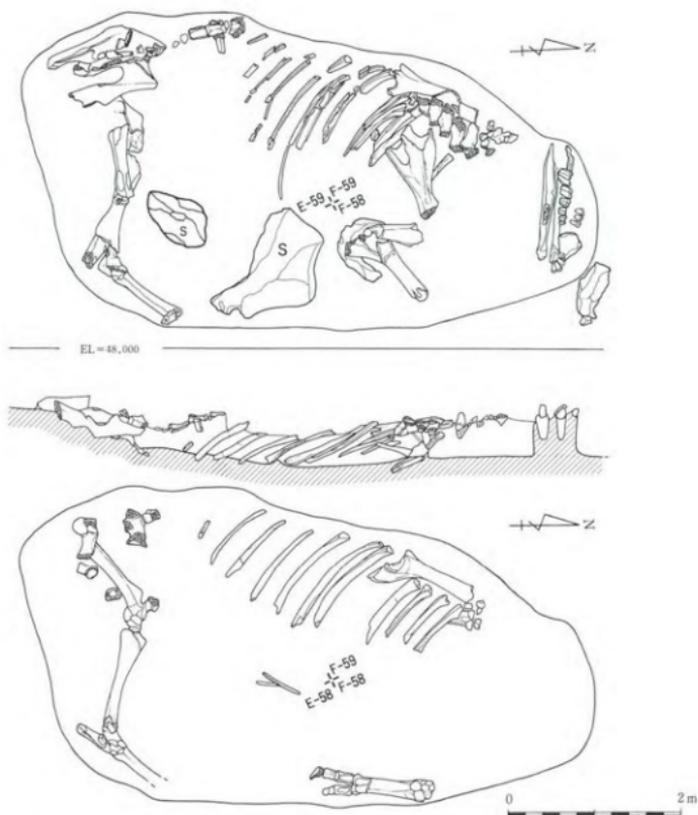
註

註1.【後兼久原遺跡展】北谷町教育委員会 1997年

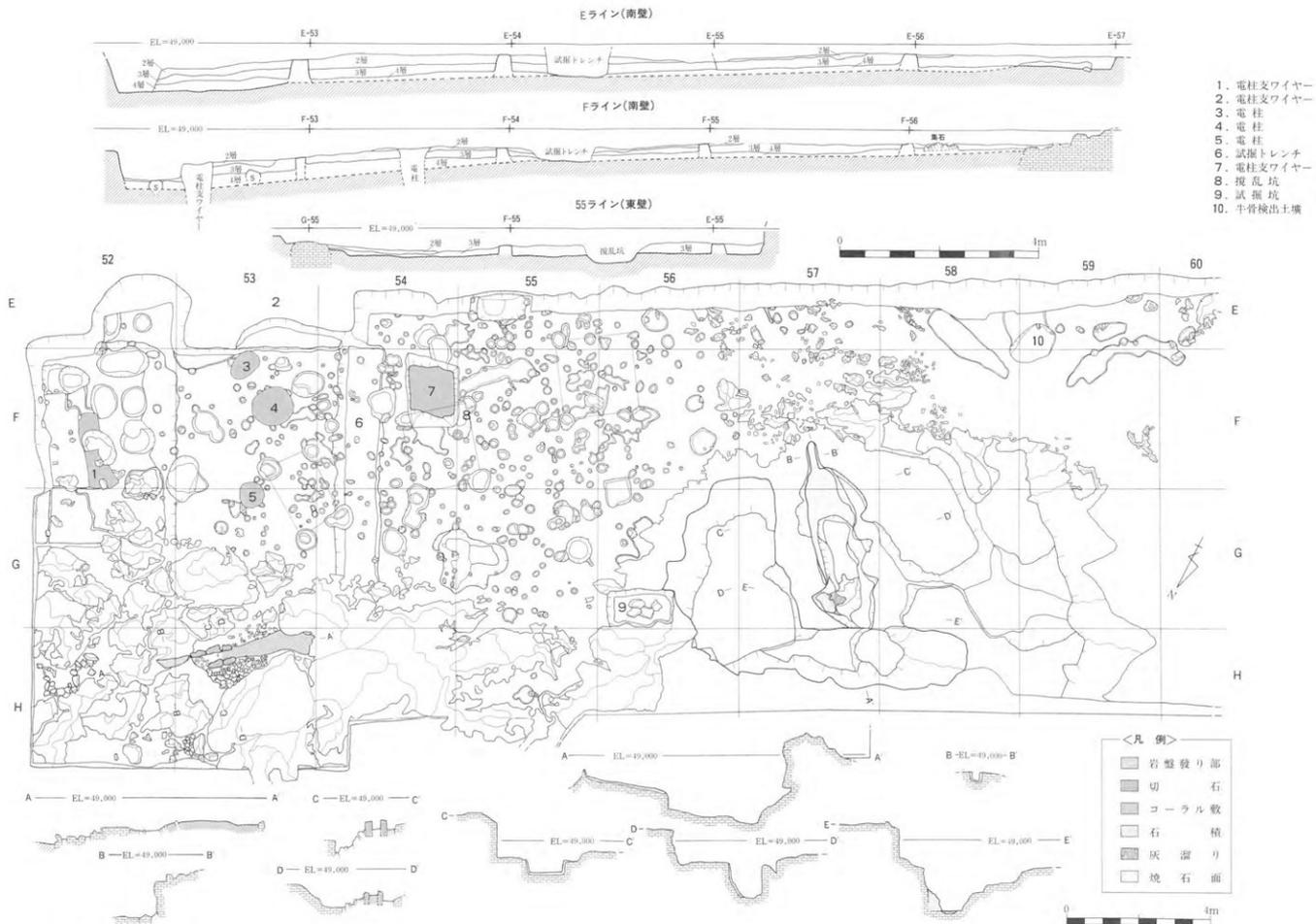
註2.【宜野湾市史第5巻 資料編4 民俗】1985年

註3. 1997年1月29日 喜友名区自治会長(当時) 当山新太郎氏に現地にてサーターヤ(砂糖小屋)跡を見学して頂いた。記して感謝申し上げます。

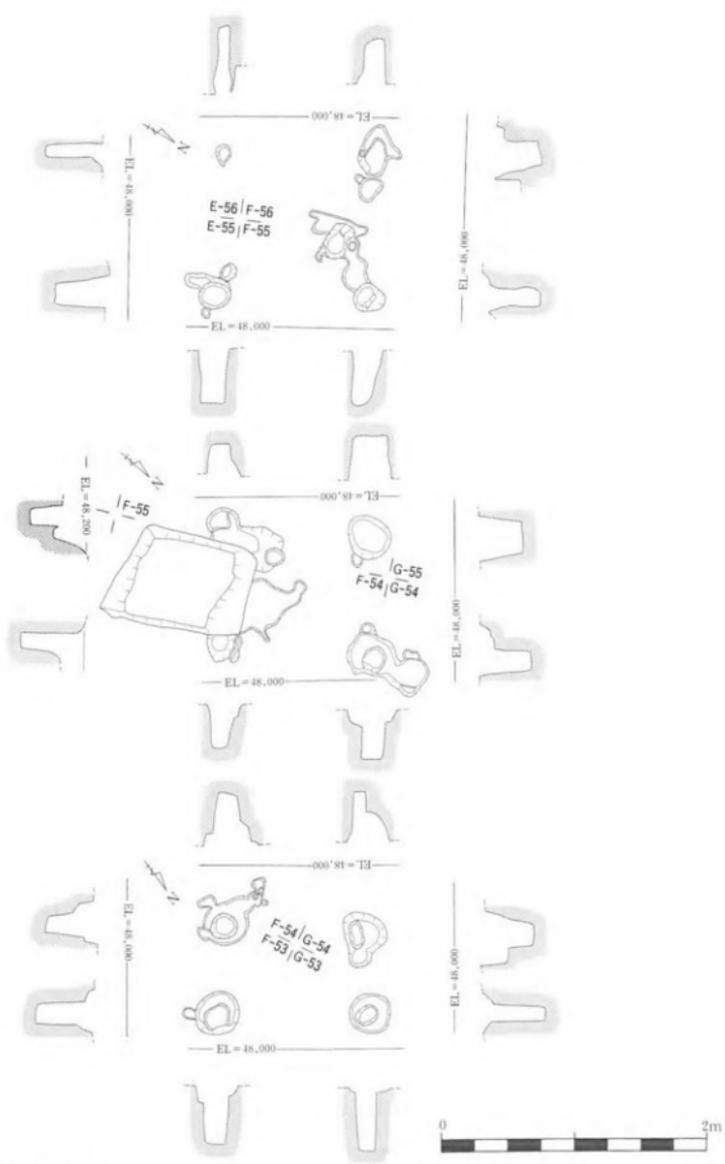
註4. 註3と同じ



第19図 III地区 牛骨検出土壌



第20図 III地区 層序・遺構全体・サーターヤ(砂糖小屋)跡・排水溝状石列



第21図 ■地区 平面プラン

第3表a III地区ピット群 法量・出土遺物一覧

№	P/F	遺構 番号	法量(cm)		形状	出土遺物	№	P/F	遺構 番号	法量(cm)		形状	出土遺物		
			長径	短径/深さ						長径	短径/深さ				
1	E52	2	54	52	29	円形	土器	75	F54	54	15	12	10	円形	
2		3	18	16	8	円形		76		55	-	-	5	-	
3		4	22	16	10	楕円形		77		56	-	-	64	-	
4		5	-	-	52	-	土器、陶質土器	78		57	-	-	21	-	
5	F52	1	122	83	36	楕円形	土器	79	G53	1	-	-	20	不定形	
6		2	98	76	33	楕円形	青磁	80	2	42	38	20	円形	土器、滑石	
7		3	86	70	28	楕円形	土器	81	3	60	60	94	円形	土器	
8		4	96	-	36	楕円形	青磁、瓦	82	5	-	-	18	不定形		
9		5	-	-	36	-		83	6	20	20	22	円形		
10		6	132	70	50	-		84	7	18	18	21	楕円形	土器	
11		7	-	-	22	-	土器	85	8	48	22	22	不定形		
12		8	108	86	30	楕円形	土器	86	9	14	14	10	円形		
13		9	40	22	28	楕円形	土器	87	10	12	10	8	木椀		
14		10	24	20	8	円形		88	11	10	10	12	円形		
15		11	26	26	13	円形		89	12	18	18	8	円形		
16		12	14	14	23	楕円形		90	14	16	14	11	円形		
17		13	22	20	12	円形		91	15	16	14	9	円形		
18		14	20	16	8	楕円形		92	16	16	14	6	円形		
19		15	-	-	12	-		93	17	14	13	13	円形		
20		16	-	-	32	-		94	18	14	14	8	円形		
21		17	-	-	14	-		95	19	-	-	12	-		
22	18	13	12	4	楕円形		96	20	-	-	-	-			
23	19	14	12	11	楕円形		97	21	12	12	22	円形			
24	F53	1	-	-	6	-		98	22	16	16	10	円形		
25		2	94	72	24	楕円形	白磁、土器	99	23	-	-	4	円形	土器	
26		3	-	60	36	円形	青磁、神鹿	100	24	18	18	8	円形		
27		4	46	20	34	円形	青磁、土器	101	25	-	-	6	-		
28		5	70	64	86	円形	青磁、土器	102	26	20	12	28	不定形		
29		6	78	60	76	-	青磁、白磁	103	E54	1	-	-	12	-	
30		8	-	-	5	不定形	土器	104	2	-	-	12	-		
31		9	46	30	13	不定形	土器	105	3	34	24	21	楕円形		
32		10	22	22	22	円形		106	4	12	10	9	円形	土器	
33		11	26	22	24	円形		107	5	10	10	8	楕円形		
34		12	-	-	10	円形	土器	108	6	22	18	15	楕円形		
35		14	12	10	12	円形		109	7	14	14	15	円形		
36		15	14	12	14	円形		110	8	20	18	12	円形		
37		16	-	-	9	円形		111	9	14	12	4	円形		
38		17	13	10	7	円形		112	10	-	-	22	-	土器	
39		18	-	-	-	-		113	11	-	-	16	-	土器	
40		19	-	-	-	-		114	F54	1	16	16	26	円形	
41		20	136	122	30	不定形	白磁、土器	115	2	20	20	26	円形		
42		21	18	18	20	円形		116	3	20	20	24	円形		
43		22	20	16	8	円形		117	4b	46	23	32	不定形		
44		23	16	14	8	円形		118	4b	50	40	30	不定形		
45		24	20	18	10	円形		119	5	12	10	14	円形	青磁	
46		25	32	22	22	円形	土器	120	6	14	12	20	円形		
47		26	23	22	14	円形		121	7	17	16	15	円形		
48		27	20	18	10	円形		122	8	14	14	8	円形		
49		28	-	-	63	-	土器	123	9	10	10	9	円形		
50		29	17	14	5	円形		124	10	26	20	18	楕円形	土器	
51		30	30	18	35	不定形		125	11	20	20	18	円形		
52		31	28	22	10	円形		126	12	14	12	12	楕円形		
53		32	17	16	8	円形		127	13	-	-	4	-		
54		33	-	-	5	-		128	14	39	37	34	楕円形	土器、瓦	
55		34	-	-	20	-		129	15	18	18	14	円形		
56	35	14	12	12	円形		130	16	8	8	10	円形			
57	36	20	20	23	円形		131	17	14	12	33	楕円形			
58	37	16	16	7	楕円形		132	18	22	20	15	楕円形			
59	38	16	16	10	円形		133	19	24	20	9	楕円形	土器		
60	39	20	18	10	円形		134	20	38	37	39	円形	土器、瓦		
61	40	16	14	11	円形		135	21a	104	76	29	楕円形	青磁、絹織、土器		
62	41	-	-	8	-		136	21b	-	-	-	不定形	土器		
63	42	20	18	8	円形		137	22	32	19	22	楕円形			
64	43	18	18	12	円形		138	23	14	12	12	-			
65	44	16	14	14	円形		139	24	20	14	22	-			
66	45	14	14	6	円形		140	25	14	14	-	木椀			
67	46	-	-	9	-		141	26	22	18	-	木椀			
68	47	24	20	32	円形		142	27	-	-	26	-			
69	48	-	-	10	-		143	28	-	-	28	-			
70	49	-	-	19	-	土器	144	29	-	-	42	不定形	青磁、土器、陶質土器		
71	50	20	20	8	円形		145	30	30	28	22	円形			
72	51	14	14	11	円形		146	32	20	20	4	円形			
73	52	-	-	6	-		147	33	68	30	16	不定形			
74	53	-	-	16	-		148	34	22	14	28	楕円形	土器		

第3表b Ⅲ地区ピット群 法量・出土遺物一覧

No.	F 3rd	法量 (cm)		形状	出土遺物	No.	F 3rd	法量 (cm)		形状	出土遺物
		長さ	幅					長さ	幅		
149	F54	35	14	12	8	円形					
150		36	20	18	31	楕円形					
151		37	16	10	27	不定形					
152		38	22	18	22	楕円形					
153		39	18	14	-	木椀					
154		40	-	-	9	-					
155		41	-	-	9	-					土器
156		42	8	4	13	-					
157		43	20	18	8	円形					土器
158		44	10	10	18	楕円形					
159		45	14	12	26	楕円形					
160		46	16	14	18	円形					
161		47	32	18	20	楕丸方形					
162		48	34	26	34	楕円形					
163		51	26	12	20	不定形					
164		52	22	16	21	楕丸方形					
165		53	14	12	5	円形					
166		54	14	10	10	円形					土器
167		55	36	28	26	楕円形					土器
168		56	14	12	7	楕円形					
169		57	18	18	10	円形					
170		58	14	14	-	木椀					
171		59	-	-	14	-					
172		60	28	10	24	不定形					
173		61	15	12	8	-					
174		62	24	18	15	円形					
175		63	28	6	5	木椀					
176		64	-	-	68	-					
177	G54	1	80	70	82	不定形					青磁、土器
178		2	38	34	76	不定形					青磁、土器
179		3	88	65	24	楕円形					
180		5	42	30	6	楕円形					
181		6	20	14	10	円形					
182		7	18	16	16	円形					
183		8	14	13	8	円形					
184		9	8	8	8	円形					
185		10	14	12	13	楕円形					
186		11	16	14	7	円形					
187		12	20	14	3	楕円形					土器
188		13	14	10	11	-					
189		14	22	20	27	楕円形					
190		15	17	15	8	円形					
191		16	16	14	6	円形					
192		17	14	14	5	円形					土器
193		18	20	20	17	円形					
194		19	12	12	4	円形					土器
195		20	22	20	20	円形					
196		21	16	14	6	円形					
197		22	22	20	18	円形					
198		24	26	24	14	円形					
199		25	22	20	16	円形					
200		26	22	20	10	円形					
201		27	16	14	6	円形					
202		28	18	18	10	円形					
203		29	14	14	16	楕円形					
204		30	20	16	8	楕円形					
205		31	16	16	7	楕円形					
206	E55	1	-	-	78	-					青磁、白磁、染付、南島須恵器、 沖麻、沖黒、土器、陶質土器
207		2	26	14	14	楕丸方形					土器
208		3	-	-	-	-					土器
209		4	-	-	-	-					土器
210		5	-	-	-	-					陶質土器
211		6	10	10	6	円形					
212		7	10	10	6	円形					
213		8	20	19	18	不定形					
214		9	20	20	18	円形					
215		10	-	-	-	-					
216		12	22	20	22	円形					
217		14	12	12	4	円形					土器
218		15	16	12	9	円形					土器
219		16	50	40	38	不定形					土器
220		17	30	18	27	楕円形					
221		18	36	20	18	不定形					土器
222	E55	19	32	30	26	楕円形					土器
223		20	24	20	23	円形					
224		21	22	17	8	不定形					
225		22	20	19	21	円形					
226		1	34	24	28	円形					青磁、土器
227	F55	2	20	12	6	不定形					
228		3	32	18	12	不定形					土器
229		4	20	16	13	円形					
230		5	34	20	15	楕丸方形					染付
231		6	22	20	20	楕円形					
232		7	28	16	24	楕円形					土器
233		8	14	12	6	円形					土器
234		9	42	24	16	不定形					
235		10	18	14	9	楕円形					
236		11	32	16	16	不定形					
237		12a	24	20	-	円形					土器
238		12b	38	18	-	不定形					
239		13	22	20	26	円形					
240		14	24	22	6	円形					土器
241		15a	-	-	-	-					溝状遺構
242		15b	34	26	48	円形					青磁、染付、土器
243		15c	14	12	30	円形					
244		15d	20	20	16	円形					
245		16	14	12	6	円形					
246		17	18	18	15	円形					
247		18	46	30	48	円形					土器
248		19	34	28	25	楕円形					土器
249		20	13	8	4	楕丸方形					
250		21	22	20	16	楕円形					
251		22	12	10	4	楕円形					
252		23	20	20	13	円形					
253		25	20	20	26	円形					
254		26a	20	18	30	不定形					
255		26b	36	32	27	円形					
256		27a	42	40	86	楕円形					土器
257		27b	72	38	48	楕円形					
258		27c	16	12	8	円形					
259		28	23	16	22	楕円形					
260		30	18	17	18	円形					土器
261		31	72	20	24	円形					
262		32	40	36	40	楕円形					土器
263		33	12	10	6	円形					土器
264		34	14	10	10	円形					
265		35a	50	38	58	楕円形					青磁、土器
266		35b	36	18	15	楕丸方形					
267		35c	42	38	53	円形					土器
268		35d	31	20	12	楕丸方形					土器
269		35e	12	10	6	楕円形					
270		35f	26	26	22	円形					
271		35g	24	18	22	円形					
272		36	30	23	18	楕丸方形					
273		39	16	14	6	円形					
274		40	26	28	22	円形					土器
275		41	16	14	5	不定形					
276		43	14	12	8	楕円形					
277		44	29	26	30	円形					
278		45	18	16	12	円形					
279		46	24	23	16	楕円形					
280		47	24	23	26	円形					青磁、土器
281		48	25	24	16	円形					
282		49	12	17	6	不定形					
283		50	20	17	17	楕丸方形					土器
284		51	-	-	-	-					木椀
285		52	24	24	30	円形					
286		53	17	16	21	円形					土器
287		54	26	24	27	不定形					土器
288		55	26	18	16	不定形					
289		56	35	30	16	楕円形					青磁、沖麻、沖黒、土器、瓦
290		57	18	16	7	円形					
291		58	24	19	12	円形					
292		59	20	19	9	円形					
293		62	14	14	6	円形					
294		63	19	18	16	円形					
295		64	18	13	6	円形					

第3表c III地区ピット群 法量・出土遺物一覧

No.	F1/F2	遺構		法量(m)		形状	出土遺物	
		番号	長径	短径	深さ			
296	F55	65	22	10	7	不定形		
297		66	10	10	4	楕円形		
298		67	10	10	6	円形		
299		68	20	20	25	円形		
300		69	26	20	10	不定形		
301		70	14	14	15	楕円形		
302		71	16	14	8	円形		
303		72	11	10	6	円形		
304		73	28	26	20	円形		
305		74	19	18	17	円形		
306	75	19	18	11	楕円形			
307	76	22	16	20	楕円方形			
308	77	16	14	-	木根			
309	78	70	63	67	-	土器		
310	80	28	12	16	-			
311	G55	81	40	23	6	不定形		
312		2	22	20	14	円形		
313		3	20	18	16	円形		
314		4	16	12	7	楕円形		
315		5	14	14	6	円形		
316		6	16	16	7	円形		
317		8a	30	26	21	円形	土器	
318		8b	14	13	10	円形		
319		8c	32	15	19	楕円方形		
320		8d	24	16	19	不定形		
321	8e	18	16	7	不定形			
322	8f	16	15	20	円形	土器		
323	8g	28	28	40	楕円形	土器		
324	9a	50	40	30	楕円方形	青磁、土器		
325	9b	22	18	36	楕円形			
326	9c	24	22	10	円形	土器		
327	9d	22	18	14	楕円形			
328	10	18	16	3	円形			
329	11	16	14	7	楕円形			
330	12	18	15	25	不定形			
331	13	32	30	28	楕円形	土器		
332	14	30	20	14	不定形	土器		
333	15	22	20	13	円形			
334	16	20	18	9	円形			
335	17	12	10	4	楕円形			
336	18	28	26	22	円形			
337	19	38	32	17	不定形			
338	20	76	74	32	円形	青磁、白磁、土器		
339	21	16	16	8	円形			
340	22	18	16	13	楕円形			
341	23	186	130	35	不定形	青磁、褐釉、南島須恵器、土器		
342	24	28	22	17	楕円方形			
343	25	20	18	13	楕円形			
344	26	20	18	12	円形			
345	27	30	18	12	楕円方形			
346	28	18	16	12	楕円形			
347	29	18	18	18	円形			
348	30	18	16	16	円形	土器		
349	31	16	14	8	円形			
350	32	12	12	7	楕円形			
351	33	50	40	10	円形	土器		
352	34	18	18	10	円形			
353	35	20	18	10	円形			
354	36	33	24	-	楕円方形			
355	37	16	14	11	円形			
356	38	20	20	24	円形			
357	39	16	14	22	楕円形			
358	40	38	36	24	楕円形			
359	41	22	22	22	円形			
360	42	28	22	22	円形			
361	43	26	26	11	楕円形	土器		
362	44	18	16	22	円形			
363	45	22	16	4	楕円方形			
364	46	8	8	5	円形			
365	47	8	8	20	木根			
366	H55	1	20	18	12	楕円形		
367		2	20	16	8	円形		
368		3	50	42	25	円形		
369		4	10	6	20	楕円形		
370		H55	5	-	-	22	-	
371	E56		1	32	16	21	不定形	青磁
372			2	16	16	10	円形	
373			3	-	-	-	円形	白磁
374			4	12	8	6	円形	
375			5	34	26	94	不定形	
376			6	30	23	34	円形	
377			7a	62	58	28	楕円形	白磁、褐釉、沖馬、土器
378			7b	18	16	14	円形	
379			8	40	36	60	円形	黒釉陶器、土器
380		10	31	20	9	円形		
381	F56	1b	26	22	16	楕円形		
382		1c	16	10	16	楕円形		
383		2	60	62	71	不定形	青磁、白磁、土器、陶質土器	
384		3	30	22	14	不定形	土器	
385		4a	22	22	36	円形	土器	
386		4b	34	34	41	円形	褐釉、土器	
387		4c	34	22	28	不定形	土器	
388		4d	18	17	16	不定形	土器	
389		4e	20	18	21	円形		
390		5	20	18	10	円形		
391	6	20	18	18	楕円形	土器		
392	7	16	14	13	楕円形			
393	8	13	12	20	円形			
394	9	25	17	16	楕円方形	土器		
395	11	20	18	22	楕円形			
396	12	38	24	18	不定形			
397	13	19	15	15	円形			
398	14	17	15	15	楕円方形	土器		
399	16	17	14	9	楕円形			
400	17	8	7	4	楕円形			
401	18	22	18	9	楕円形			
402	19	-	-	-	木根			
403	21	-	-	-	木根			
404	23	14	12	7	楕円形			
405	24a	42	27	40	不定形	土器		
406	24b	14	12	4	円形			
407	25	16	12	6	円形			
408	26	31	20	14	不定形	土器		
409	29	22	18	10	楕円形			
410	30	12	9	6	円形			
411	31	30	22	22	不定形	土器		
412	32	22	20	8	楕円形	土器		
413	33	18	16	14	円形	土器		
414	34	20	18	14	円形			
415	37	23	22	16	円形			
416	38	18	16	6	楕円形			
417	39	22	20	33	楕円形			
418	40	20	18	26	円形			
419	41	18	18	6	円形			
420	42	54	42	14	楕円方形	白磁、土器		
421	44	78	68	22	楕円方形	青磁、土器		
422	45	16	16	8	円形			
423	46	14	13	10	円形	沖馬		
424	47	24	17	18	楕円形			
425	49	12	12	7	円形			
426	50	18	16	16	楕円形			
427	G56	1	99	90	32	正方形	青磁、染付、沖馬、沖馬、土器、瓦質土器	
428		2	30	30	30	円形	玉	
429		3	22	20	20	円形		
430		4	18	18	26	円形		
431		5	26	26	18	楕円形		
432	E57	1	42	22	30	楕円形	土器	
433		2	48	10	26	-	土器	
434		3	-	-	23	-		
435		4	28	21	20	楕円形	土器、石器	
436		5	22	16	16	不定形		
437		6	28	24	24	円形	白磁	
438		7	-	-	17	-		
439		8	22	12	9	不定形		
440	9	18	12	25	楕円形			
441	F57	2	24	22	40	不定形	青磁、褐釉、土器	
442		3	68	68	26	正方形		

第V章 出土遺物

第1節 青磁

中国陶磁器で最も多く検出されたのは青磁である。総点数が1607点を数え、他の輸入陶磁器を圧倒する。青磁の器種としては、碗・小碗・大皿・皿・小皿・盤・大鉢・杯・蓋・瓶・壺・摺鉢の12器種が確認されている。中でも碗は730点を数え、これに皿・盤と続く。各地区における青磁の出土傾向としては、Ⅱ地区から792点検出されており全体の約50%を占めている。Ⅲ地区は526点と比較的少なく、Ⅰ地区は288点とかなり減少する傾向にある(第4表)。本遺跡で検出された青磁の中には古手の劃花文碗や鎬蓮弁碗など12世紀後半～13世紀後半の同安窯系や龍泉窯系の青磁が含まれており注目される場所である。またⅠ地区においてベトナム産と思われる青磁の破片資料が得られており、本節にてベトナム青磁として取り扱った。

以下、本地区より検出された青磁の分類概念を記述することにする。なお個々の特徴等については観察表(第5表)に呈示した。

(1) 碗(第22図1～33、第23図34～60、第24図61～67)

本遺跡にて検出された青磁碗は劃花文碗や鎬蓮弁文碗などの古手のタイプから縦刻細蓮弁文碗などの比較的新しいタイプまで幅広く含まれている。文様等の特徴からそれぞれⅠ類からⅤ類に分類し、必要に応じてa・bなどに細分した。

Ⅰ類 劃花文碗(第22図1～3)

直口タイプの碗で、内面に片切り彫りや鑿削りにより沈線や蓮華文などを描いている。前者をa、後者をbとした。

- a 内面に片切り彫りによる2本1組の沈線を描いている。
- b 内面に蓮華文などを描いている。

Ⅱ類 鎬蓮弁文碗(第22図4～7)

外面胴部に鎬を削りだした後、片切り彫りにより蓮弁を描いている。高台は低く成形され、内削りは浅目である。

Ⅲ類 二叉蓮弁文碗(第22図8～9)

薄手の直口碗で、先の尖った二叉状工具で蓮弁文を描いたものである。

Ⅳ類 弦文帯碗(第22図10)

外反口縁の碗で、外面胴部の上面に2本の沈線を描いている。

Ⅴ類 無鎬蓮弁文碗(第22図11～17)

直口タイプの碗で、外面に片切り彫りによる蓮弁文を描いている。高台は低く成形されており、内削りは浅い。畳付外端を斜位に削り取り面取りする。

Ⅵ類 無文直口碗(第22図18～27)

口縁部が直口するタイプの無文碗である。口縁部の諸特徴からa～dの4種類に細分した。

- a 全体に厚手のタイプである。口唇部は丸く成形されている。
- b 薄手のタイプで、口縁が逆「ハ」の字状に外側に大きく開く。
- c 口縁外面に比較的薄い肥厚帯を持つタイプである。
- d 口縁外面に陰圏線を施すタイプで、口唇部が尖ると丸みを帯びるのがある。

Ⅶ類 無文外反碗(第22図28～32)

口縁部が外反するタイプの大型の無文碗である。口唇部は丸く成形されている。

無文碗底部(第22図33、第23図34～36)

無文直口碗もしくは無文外反碗の底部になるものと思われるもので、特徴的なものについて図化した。見込みに印花文を施すものもある。

Ⅷ類 雷文帯碗(第23図37～41)

直口タイプの碗で、口縁の内面もしくは外面に雷文帯を廻らすタイプである。施文方法により、a・bの2種類に細分した。

- a 鑿削りによる片切り彫りで雷文帯を描いている。

b 型押し(スタンプ)による雷文帯を描くものである。

IX類 有文外反碗(第23図42)

やや厚手の外反碗で、外面にラマ式蓮弁類似文様を篋削りにより表現している。

X類 線刻細蓮弁文碗(第23図43~52)

直口タイプの碗で、外面に線描きによる蓮弁文を描いたものである。施文方法や器形等の特徴から a・b・c・d の4種類に分類した。

a 細い線描きによる蓮弁と弁先を描いている。

b 細い線描きによる蓮弁のみを描いており、弁先は描かれていない。

c 口縁外面に4本の陰圏線を施し、胴部に弁先と思われる波状の文様を描いている。

d 小碗になるものと思われるが、施文方法等がX-a類と同一であるためX-d類として分類した。

XI類(第23図53~56)

器形や施文方法等が特徴的な口縁資料をXI類としてまとめた。

a 口唇部に袂りを入れて輪花を成形する外反碗である。外面には篋削りによる擬位の線が1本確認できるが口唇部の袂り部分とは一致しない。内面には構図不明の文様が施されている。

b 口唇部に玉縁状の肥厚帯を成形する無文の碗である。

c 口縁部が微弱に外反する碗で、外面に蓮弁と思われる文様を篋状や櫛状の工具で施している。内面には櫛状の工具で青海波文を描いている。

d 口縁外面に波濤文と思われる沈線を櫛状の工具で描いている。

碗底部(第23図57~60、第24図61~67)

碗底部で文様の有無や高台造りなど特徴的なものについて図化した。

(2) 小碗(第24図68・69)

小碗の底部資料で特徴的なものを図化した。文様等は確認できない。高台外面まで地軸している。

(3) 大皿(第24図70・71)

大皿の口縁破片と底部破片が得られている。前者をa、後者をbとした。

a 口縁部に玉縁状の肥厚帯を成形している無文の大皿である。

b 内底面に七宝繋ぎ文を施す。首里城京の内跡(註1)出土の盤と類似するが比して小さい。

(4) 皿(第24図72~89)

皿の資料としては、櫛描文皿・口折皿・稜花皿・外反皿・直口皿の5種類が確認されている。器形や文様等からそれぞれI類からVI類に分類した。以下、分類概念を記述する。

I類 櫛描文皿(第24図72~73)

一般に珠光青磁と称される皿である。内面の文様の有無でa・bに細分した。

a 内底面に櫛描きによる文様が施されている。

b 無文タイプである。

II類 口折皿(第24図74~77)

口縁部を逆「L」字状に折り、口折れとする。外面に蓮弁文を施すが、施文方法でa・bに細分できる。

a 胴部外面に篋描きの蓮弁文が描かれている。

b 胴部外面に叉状工具により2本線の蓮弁文が描かれている。

III類 稜花皿(第24図78~81)

腰下部で折れて口縁部へ移行し、口唇部をラマ式蓮弁の弁先状に浅目の袂りを入れて稜花とする。内面には叉状工具による線彫りでラマ式蓮弁文を描いている。内底面に構図不明の文様を篋削りにより描く。

IV類 外反皿(第24図82~86)

外反口縁皿の中には無文皿と有文皿の2種類が確認されており、前者をa、後者をbとして細分した。

a 無文の外反皿である。

b 口縁に単篋による蓮弁文を描く。口唇に刻みが入るタイプと口縁内面に篋描きによる文様を描く。

V類 直口皿(第24図87)

直口タイプの無文碗である。口唇は尖り気味に成形されている。

皿底部(第24図88~89)

皿底部で特徴的なものについて図化した。腰折れタイプと丸みを帯びて口縁部へ移行するものがある。

(3) 小皿 (第24図 90)

内彎型の小皿になるものと思われ、口縁外面に1本の沈線を廻らす。

(4) 盤 (第25図 91~96)

鈎縁盤と称されるタイプの盤である。鈎端部をつまみあげて成形するタイプと稜花状に成形するタイプとがある。内面に篋描きによる蓮弁が描かれている。底部は厚手のタイプと薄手のタイプとがある。

(5) 大鉢 (第25図 97・98)

胴部片および底部片が得られている。内外面に篋削りによる文様が描かれている。

(6) 馬上杯 (第25図 99)

馬上杯の脚が1点得られている。外面に螺旋状の凹凸面が確認できる。

(7) 蓋 (第25図 100・101)

撮り部分の破片と鈎部の破片が得られており、これを図化した。酒会壺や小壺の蓋になるものと思われる。

(8) 瓶 (第25図 102・103)

瓶の頸部片、底部片が得られている。双耳環瓶や小型の瓶、長頸瓶などが予想される。

(9) 壺 (第25図 104・105)

口縁破片2点を図化した。口縁断面形が逆三角形を呈するようで、小壺になると思われるものと酒会壺の口縁部が考えられる。

(10) 摺鉢 (第25図 106)

摺鉢の胴部片が得られている。内面には筋目が確認できるが小破片であるため判然としない。

(11) ベトナム青磁 (第25図 107)

ベトナム青磁の皿底部と思われる破片資料が得られている。高台内に暗茶褐色を呈した鉄釉が施されている。

小 結

本遺跡から検出された青磁は時代的には12世紀後半~16世紀頃と時代幅はあるが主体となる時期は第4表の出土状況から、おおむね14世紀~15世紀に位置するⅥ・Ⅶ類の無文直口碗・無文外反碗であると言える。

本節の文頭でも述べたが、今回、本遺跡にて得られた輸入陶磁器で最も多いのは青磁である。器種・量ともに他を圧倒するところであるが、他の輸入陶磁器(白磁・染付・褐釉陶器等)にも見られる出土傾向として、Ⅱ地区2層からの出土量が最も多いということである。Ⅰ地区については県道工事や外人住宅建設の際に大部分が削平されたことから出土量も少ないため判然としないが、Ⅱ地区・Ⅲ地区においてはまとまった量で出土しており、時代的にも程度重なっているものと思われ、14世紀~15世紀以降の青磁の多くは近世~近現代まで伝世されていたものと考えられる。

青磁の碗で注目されたのは、古手の劃花文碗や鎗蓮弁文碗である。底部からの推定個体数はそれぞれ9点と8点である。最近の出土例としては銘苅原遺跡(註1)やヒヤジョー毛遺跡(註2)などがあげられる。

また今回は器形や施文方法等が特徴的な口縁資料をⅪ類としてまとめたが、Ⅺ-a類は類似資料が慶田崎遺跡(註3)・新里村遺跡(註4)・屋良グスク(註5)等に見られ、本遺跡出土の資料もこれらに平行もしくは後続するタイプと考えられる。Ⅺ-c類は外面に櫛状や篋状の工具で蓮弁と思われる文様を描き、内面には櫛状の工具で青海波と思われる文様を描いている。佐賀県教育委員会の大橋康二氏に鑑定(註6)を依頼したところ、14世紀後半~15世紀前半の龍泉窯の産であることが判明した。県内においてはこれまでに出土例がなく今後の検出増加を期待したい。Ⅺ-d類で分類したタイプの碗は、住屋遺跡(註7)から出土した白磁櫛描波状文碗と酷似しているほか、その他の類似資料として、クニンドー遺跡(註8)出土の波濤文帯碗がある。この資料についても佐賀県教育委員会の大橋康二氏に鑑定(註9)を依頼したところ、16世紀代の福建・広東系窯を産地とするであろうとの助言を頂いた。

その他の注目される資料としては、ベトナム産とみられる青磁である。Ⅰ地区において皿の破片資料が1点得られている。ベトナム青磁の多くは高台内に鉄錆釉を施すのが共通の特徴であるが、第25図107についても高台内に同様の特徴が見られる。県内においてベトナム陶磁が確認された遺跡は今帰仁城跡(註9)・勝連城跡(註10)・越来城跡(註11)・湧田古窯跡(註12)・首里城跡(註13)などこれまでに8遺跡を数えるが、湧田古窯跡をのぞいたいずれもがグスク時代の重要な拠点からの出土であり、注目されるところである。

第5表 a 青磁観察一覧

種別番号 図版番号 遺物番号	器種 部位	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・成形・文様の特徴	素地	釉色・施釉・貫入	出土地区 出土層
第22図 図版11 1	碗 口縁	I a	— — —	直口口縁で口唇は尖る。内面に片切り彫りによる2本1組の波線を描き区画する。外面に轆轤痕が僅かに観られる	灰白色の微粒子 微細な気泡痕。	灰白色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 G-41 遺構1
* * 2	碗 胴	I b	— — —	内面に彫削りによる蓮華文を描いている。	淡灰白色の微粒子。	淡灰緑色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入が観られる。	Ⅱ地区 F-65 遺構15
* * 3	碗 底	I b	— — —	—	* * *	灰白色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 F-53 1層
* * 4	碗 口縁	Ⅱ	15.7 — —	直口口縁で口唇は尖る。蓮弁の縁や筒弁は比較的丁寧に描かれている。内面に僅かに轆轤痕が観られる。	* * * 微細な黒色の疵物を僅かに含む。	淡青緑色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 F-54 3層
* * 5	碗 底	Ⅱ	— 5.0 —	高台は低く成形される。内削りは浅く、垂付外縁は斜位に削り取る。弁尻は高台脇まで描かれている。水平に成形されている。	* * * 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入が観られる。	Ⅱ地区 H-52A
* * 6	碗 底	Ⅱ	— — 5.0	—	* * * 微細な気泡痕。	淡緑色の釉を高台外面まで施す。	I地区 E-10 遺構3
* * 7	碗 底	Ⅱ	— — 5.2	—	* * *	二次的な火熱で変色。高台外面まで施釉。	Ⅱ地区 G-60B
* * 8	碗 底	Ⅲ	— — —	薄手の直口碗で、口唇を尖り気味に成形する。又杖工具で蓮弁文を描いている。	灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	I地区 E-10 遺構3
* * 9	碗 底	Ⅲ	— — —	—	* * * 微細な黒色の疵物を多量に含む。	淡灰白色の釉を両面に施す。内面に粗い貫入が観られる。	Ⅱ地区 F-37 1層
* * 10	碗 底	Ⅳ	— — —	口縁が微弱に外反し、口唇を丸く成形する。外面に3本の波線を施している。	灰白色の微粒子。 微細な黒色の疵物を僅かに含む。	淡緑色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 G-54 遺構2
* * 11	碗 底	V	13.0 — —	直口口縁の碗で、口唇は丸く成形されている。外面に片切り彫りによる蓮弁文を描いている。	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	I地区 1層
* * 12	碗 底	V	14.4 — —	直口口縁の碗で、口唇は尖る。	* * *	濃緑色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	Ⅱ地区 G-45 遺構5
* * 13	碗 底	V	— — —	直口口縁の碗で、口唇は丸みを持つ。	* * *	淡緑色の釉を両面に施す。両面に非常に粗い貫入が観られる。	H-43 遺構3
* * 14	碗 底	V	— — —	—	* * *	淡灰白色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 G-60B
* * 15	碗 底	V	6.0 — —	高台の器壁は厚く、高台内削りは比較的深い。垂付外縁を斜位に削り取る。弁尻は高台脇まで描かれている。内底面に除塵線と印花文を施している。	* * *	淡緑色の釉を両面に施す。	I地区 1層
* * 16	碗 底	V	5.4 — —	高台の内削りはやや深めで、垂付外縁を斜位に削り取る。弁尻は高台脇まで描かれている。	灰白色の微粒子で一部に焼成不良。	緑黄色の釉を高台内面まで施す。両面に細かい貫入。	I地区 1層
* * 17	碗 底	V	6.0 — —	高台は低く成形され、内削りは浅い。	淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕。	淡青緑色の釉を高台内面まで施す。	Ⅱ地区 F-58 遺構1
* * 18	碗 底	Ⅵ a	— — —	厚手の直口碗で、口唇は丸く成形されている。	淡灰白色の微粒子。	淡青緑色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 F-53 3層
* * 19	碗 底	Ⅵ a	— — —	—	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	I地区 1層
* * 20	碗 底	Ⅵ a	— — —	—	淡灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	I地区 G-17 2層
* * 21	碗 底	Ⅵ b	16.9 — —	薄手の直口口縁碗で、口縁が逆「ハ」の字状に外側に大きく開く。口唇は丸く成形されている。外面には不明瞭な轆轤痕が残る。	* * *	淡青緑色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入が観られる。	I地区 E-27 遺構1
* * 22	碗 底	Ⅵ b	16.8 — —	—	* * * 微細な黒色の疵物を多量に含む。	濃緑灰色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 G-53 3層
* * 23	碗 底	Ⅵ b	— — —	—	* * *	淡緑色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 F-56 遺構1

第5表b 青磁観察一覧

押印番号 図版番号 遺物番号	器種 部位	分類	口径 高台径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉・貫入	出土地区 ・ 出土層
第22図 図版11 24	碗	VI c	—	口縁外面に薄い肥厚帯持っタイプの碗である。口唇を丸く成形する。	淡灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	Ⅱ地区 F-41 2層
		VI c	14.8	* * *	灰白色の微粒子。	濃緑色の釉を両面に施す。	Ⅲ地区 F-55 3層
	縁	VI d	—	薄手の直口碗で、口縁外面に陰線線を1本廻らせている。口唇は丸く成形されている。	* * *	* * *	I地区 G-17 透構1
		VI d	—	やや薄手の直口碗で、口縁外面に陰線線を1本廻らせている。	灰白色の細粒子。	緑灰色の透明釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	Ⅲ地区 F-55 3層
	碗	VI	16.3	口縁がゆるやかに外反する碗である。口唇は丸みを持つ。内外面に不明瞭な緑線が走る。	淡灰白色の微粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施している。	Ⅲ地区 F-53 3層
		VI	15.1	口縁外面直下及び内面直下に彫削りによるものと思われる沈線が走る。	* * *	淡青緑色の釉を両面に施す。	Ⅲ地区 F-53 3層
		VI	15.2	* * *	桃茶褐色の細粒子。 焼成不良であると思われる。	黄茶色の釉を両面に施している。両面に細かい貫入。	I地区 E-10 透構3
		VI	13.9	* * *	淡灰白色の微粒子で 外面に轆轤成形痕が観られる。	青緑色の釉を両面に施す。	Ⅲ地区 G-48 透構1
	碗	VI	18.8	口縁がきつく外反する碗である。口唇は丸みを持つ。内外面口縁緑直下に彫削りが観られる。	白色の微粒子で黒色の疵物を含む。	緑灰色の厚い釉を両面に施す。	Ⅲ地区 G-47 透構2
		VI	—	厚手の無文線の底面片であると思われる。畳付外縁を斜位に削り取り面取りする。	灰白色の微粒子で白色の疵物を含む。	濃緑色の熱い釉を高台内面まで施している。	I地区 1層
VI		6.4	* * *	白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を高台外面まで施す。	I地区 1層	
VI		4.6	* * *	淡灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を高台内面まで施している。	Ⅱ地区 1層	
第23図 図版12 34	底	—	—	* * *	淡灰白色の微粒子。 白色の疵物を含む。	* * *	I地区 E-10 透構3
		—	4.8	* * *	淡灰白色の微粒子。	濃緑色の厚い釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	I地区 1層
碗	口	VI a	15.0	厚手の内鑿型の碗である。外面に龔指きで崩れた雷文を描いている。内面には龔指きでワズ式蓮弁類似文を描いている。	白色の微粒子。	淡緑色の透明釉を両面に施している。	I地区 1層
		VI a	—	* * *	淡灰白色の微粒子。 微細な黒色の疵物を含む。	淡緑色の透明釉を両面に施している。	I地区 1層
	縁	VI a	—	外面に龔指きで崩れた雷文を描き、胴部に横間不明の文様を描いている。内面にも横間不明の文様を描いている。	白色の微粒子。	緑色の釉を両面に施している。	Ⅲ地区 G-43 W内
		VI a	—	厚手の内鑿型の碗で、口唇を丸く成形する。外面に龔指きで崩れた雷文を描いている。	* * *	* * *	Ⅱ地区 F-38 2層
碗	口	VI b	—	厚手の内鑿型の碗で、口唇は丸みを持つ。内外面に雷文を彫押しする。	淡灰白色の微粒子。	淡青緑色の釉を両面に施している。	Ⅲ地区 G-48 透構1
		IX	—	口縁をきつく外反させ、口唇に丸みを持たせる。内外面にワズ式蓮弁類似文様を彫削りで施している。	白色の微粒子。	緑色の釉を両面に施している。	Ⅲ地区 F-56 3層
	口	X a	12.2	比較的薄手の内鑿型の碗で、口唇は丸みを持つ。細い線指きによる幅広い蓮弁を描いている。	淡灰白色の細粒子。	緑灰色の透明釉を両面に施す。両面に粗い貫入が観られる。	I地区 1層
		X a	12.6	内鑿型の碗で、口唇は丸みを持つ。細い線指きによる蓮弁を縁に描いている。	白色の細粒子。	灰緑色の釉を両面に施す。	Ⅲ地区 G-48 透構1
	縁	X a	15.2	直口型の碗で、口唇は丸く成形されている。	灰色の細粒子。	緑黄色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	I地区 E-27 透構1
		X a	14.2	内鑿型の碗で、口唇は丸く成形されている。細い線指きによる蓮弁を比較的丁寧に描いている。	灰色の細粒子で微細な黒色の疵物を多量に含む。	淡灰緑色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入が観られる。	Ⅲ地区 1層

第5表c 青磁観察一覧

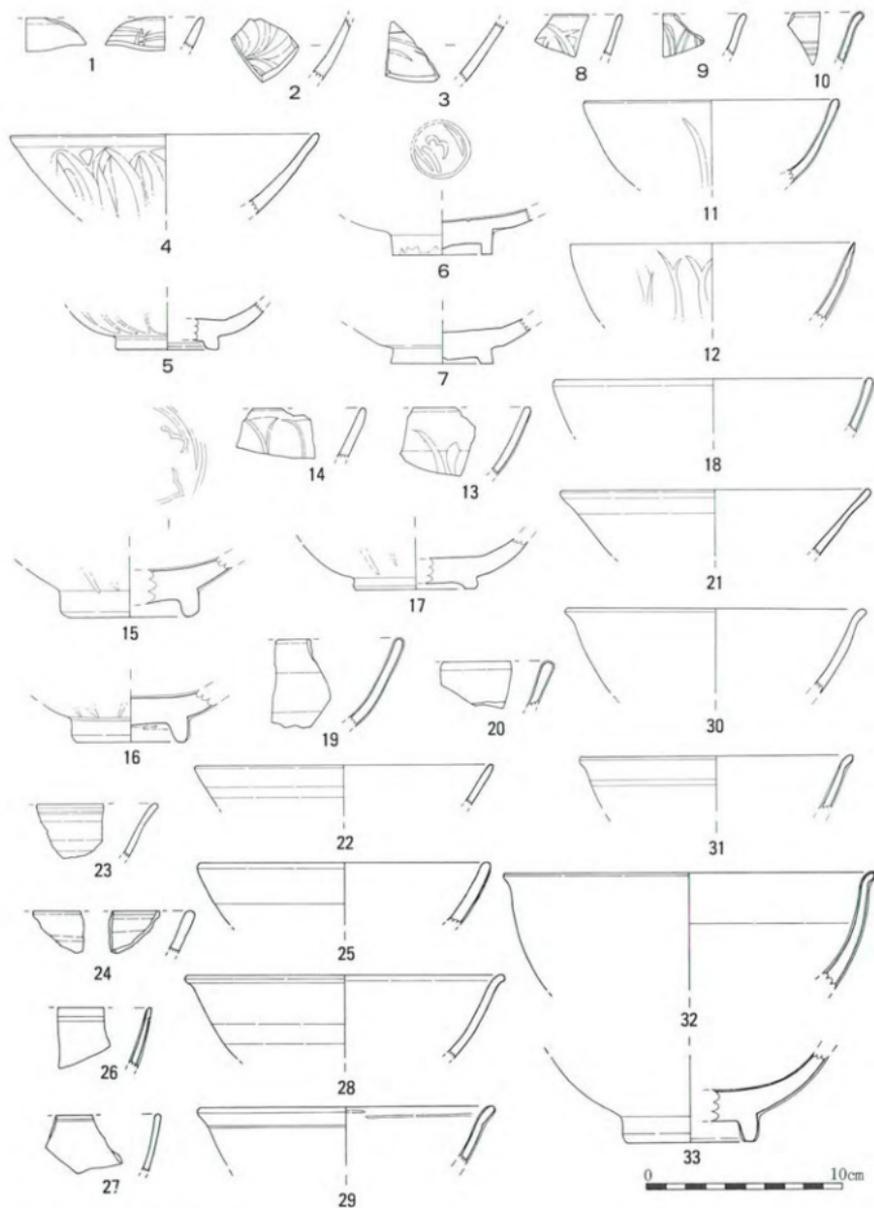
標記番号 図版番号 遺物番号	器種 部位	分期	口径 高台 高台径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉・貫入	出土地区 ・ 出土層
第23回 図版12 47	碗	X a	—	直口型の碗で、口唇は丸みを持つ。線掻きによる蓮弁を縁に描いている。	灰色の細粒子で白色の疵物を含む。	濃緑色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 F-53 3層
+		X a	—	* * * * *	淡灰白色の細粒子で白色の疵物を含む。	淡青緑色の釉を両面に施す。 * * *	Ⅱ地区 H-49 遺構2
+	縁	X b	—	比較的薄手の直口碗で、口唇を丸く成形する。口縁直下に除菌線を描き、胴部に蓮弁の文様を描いている。	灰色の細粒子で白色の疵物を含む。	灰緑色の釉を両面に施す。 * * *	Ⅰ地区 1層
+		X c	—	内臂型の碗で、口唇は丸みを持つ。口縁外面に4本の除菌線を施して、その下に弁先と思われる紋状の文様を描いている。	白色の細粒子。	淡緑灰色の透明釉を両面に施している。 両面に細かい貫入。	Ⅱ地区 G-60B
+	碗底部	—	—	高台脇まで弁尻を描いており、胴下部には除菌線を1本施している。	淡灰白色の細粒子。	淡青緑色の釉を両面に施している。 両面に細かい貫入。	Ⅱ地区 H-52A
+		—	—	—	—	—	—
+	碗口縁	X d	9.0	内臂型の小碗になるものと思われる。口唇を丸く成形する。細い線掻きによる蓮弁を描いている。	* * *	濃緑色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 F-41 遺構1
+	碗	XI a	—	口縁が微側に外反し、口唇は丸みを持つ。口唇に換りを入れて輪花とする。外面に彫削りによる縦位の線が1本観られ、内面には横間不明の文様が観られる。	灰色の細粒子。	緑黄色の釉を両面に施す。	Ⅰ地区 H-10 1層
+		XI b	13.4	内臂型の碗で、口唇部に玉縁帯の肥厚帯を持つ。	淡灰白色の細粒子。	黄緑色の釉を両面に施す。 両面に細かい貫入が観られる。	Ⅱ地区 F-53 遺構20
+	縁	XI c	14.6	口縁が微側に外反し、口唇を丸く成形する。外面に亀状や棒状の工具で蓮弁を描き、内面には3本の除菌線と棒状の工具による背海文を描いている。	淡灰白色の細粒子。	黄緑色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 F-58 3層
+		XI d	—	内臂型の碗で、口唇を丸く成形する。口縁外面直下に波渡文と思われる文様を描いている。	灰色の細粒子で黒色の疵物を多量に混入。	淡灰青色の透明釉を両面に施す。	Ⅱ地区 H-48 遺構12
+	碗	—	—	高台は低く成形され、高台内はやや縁に削り取られている。亀付外縁を斜位に削り取り面取りする。内底には除菌線と凡字と思われる印文。	白色の微粒子。	淡青緑色の釉を高台内面まで施す。	Ⅱ地区 H-49 遺構1
+		—	5.6	—	—	—	—
+	碗	—	—	高台内の内側りは比較的丁寧に削り取られている。内底には除菌線と横間不明の文様を描いている。	淡灰白色の微粒子。	淡緑灰色の透明釉を高台内面まで施す。	Ⅰ地区 E-27 遺構1
+		—	5.2	—	—	—	—
+	碗	—	—	高台は低く成形され、高台内の内側りは雑である。内底には横間不明の文様を描いている。	桃褐色の粗粒子。 焼成不良。灰色の疵物を多量に含む。	緑灰色の釉を高台内面まで施している。 粗い貫入。	Ⅱ地区 G-49 1層
+		—	6.8	—	—	—	—
+	碗	—	—	* * * * *	淡褐色の粗粒子。 焼成不良かと思われる。	灰褐色の釉。二次的な火熱を受けているものと思われる。	Ⅰ地区 E-10 遺構3
+		—	6.6	—	—	—	—
第24回 図版13 61	底	—	—	* * * * *	淡褐色の細粒子。	灰緑色の釉を高台外面まで施す。内底の線を蛇の目状に掻き取る。	Ⅱ地区 F-65 遺構56
+		—	6.8	—	—	—	—
+	部	—	—	* * * * *	* * * *	* * *	Ⅱ地区 G-52 3層
+		—	6.6	—	—	—	—
+	部	—	—	高台は「ハ」の字状に開く。内面に横間不明の文様を描いている。	淡灰白色の細粒子。	緑灰色の釉を高台内面まで施す。	Ⅱ地区 H-60B
+		—	4.2	—	—	—	—
+	部	—	—	高台内の内側りは「ハ」の字状を呈する。内面には印花文。	白色の細粒子。	濃緑色の釉を高台外面まで施している。	Ⅱ地区 G-60B
+		—	4.8	—	—	—	—
+	部	—	—	高台は低く成形され、高台内の内側りは比較的丁寧に削り取られている。内底には除菌線と魚文の型押しが観られる。	* * *	淡青緑色の透明釉を高台外面まで施す。 両面に粗い貫入。	Ⅱ地区 G-60B
+		—	4.4	—	—	—	—
+	部	—	—	高台は高く形成されており、比較的丁寧に削り取られている。亀付外縁を斜位に削り取る。	淡灰白色の微粒子。	淡青色の透明釉を高台内面まで施す。	Ⅱ地区 F-42 2層
+		—	5.4	—	—	—	—
+	部	—	—	高台は薄く、高めに成形されている。内底には除菌線と印花文を施している。	白色の微粒子。	淡緑灰色の透明釉を高台外面まで施す。雲に帯着痕が観られる。	Ⅰ地区 1層
+		—	5.0	—	—	—	—
+	小	—	—	薄手の小碗で、高台は高く成形され、高台内の内側りは丁寧に削り取られている。高台外面を斜位に削り取り面取りをする。	灰色の細粒子で微細な黒色の疵物を多量に含む。	淡灰青色の釉を高台外面まで施す。 両面に粗い貫入。	Ⅲ地区 F-53 3層
+		—	3.8	—	—	—	—
+	碗	—	—	やや厚手の小碗で、高台は低く、内側りは雑である。	淡灰白色の細粒子。	淡青緑色の釉を高台外面まで施している。	Ⅰ地区 F-11 1層
+		—	2.8	—	—	—	—

第5表d 青磁観察一覧

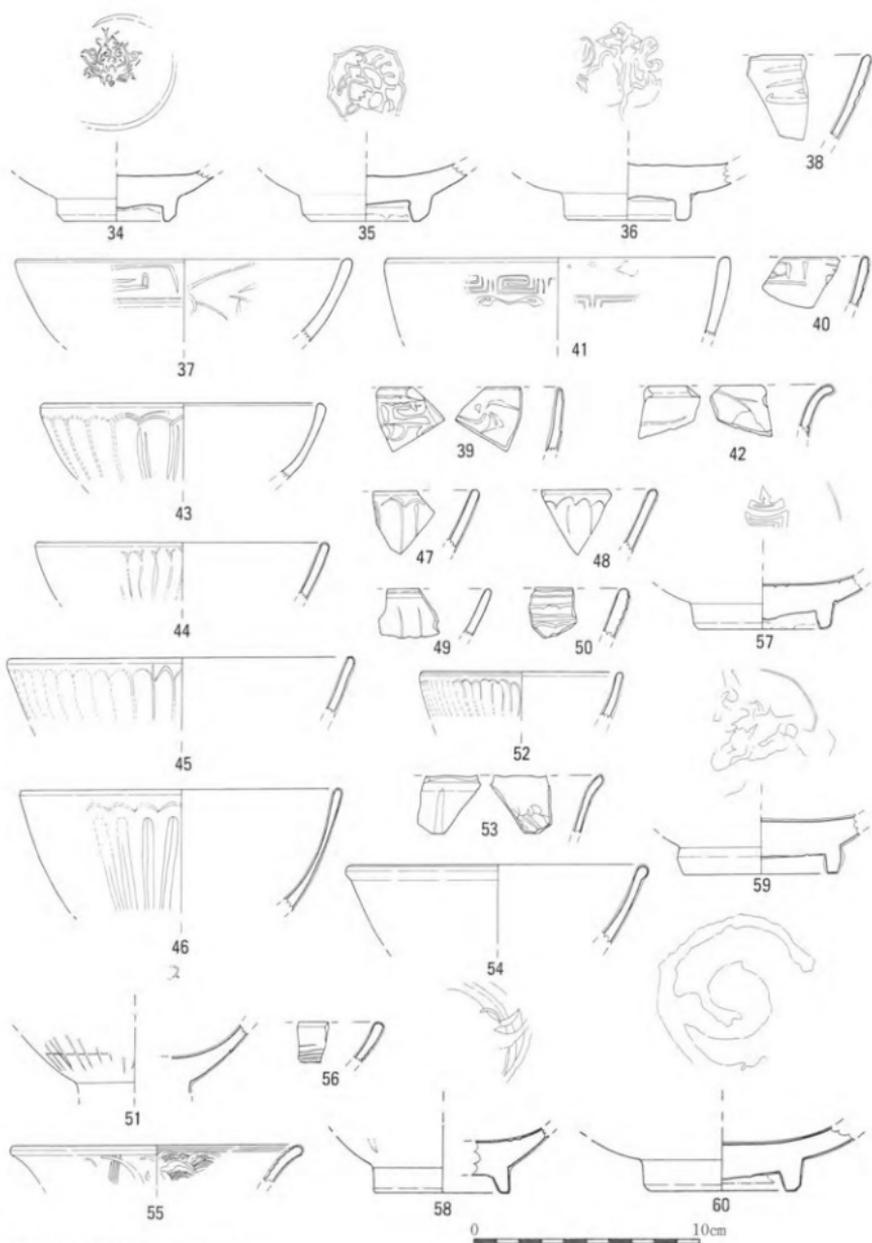
種別番号 図版番号 遺物番号	器種 部位	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施軸・貫入	出土地区 出土層
第24図 図版13 70	大皿	a	18.6 — —	内嚢気味の大きい皿である。口縁部に玉縁状の肥厚帯を押しつ。	灰白色の微粒子で微細な黒色の鉱物を含む。	濃緑色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	I地区 E-10 遺構3
* 71		b	— — —	内底面に「七宝蟹文」を押ししにより施している。	淡灰白色の細粒子。	濃緑色の釉を施す。粗い貫入。高台内の軸を指さ取る。	II地区 F-56 3層
* 72	楕圓文皿	I a	— 5.4	底部片で、ベタ底状を呈する。内底面に彫りによる文様が観られる。	* * *	淡灰緑色の釉を底部縁まで施す。	II地区 F-56 3層
* 73		I b	— 5.8	* * *。文様は確認できない。	* * *	灰緑色の釉を内底に施している。	II地区 H-43 2層
* 74	口折皿	II a	11.8 — —	口縁部を逆「し」字状に折り、口折れとする。彫りによる蓮弁が描かれている。	白色の微粒子で黒色の鉱物を含む。	濃緑色の釉を両面に施す。	II地区 F-56 3層
* 75		II a	12.2 — —	* * * * * * *	灰白色の微粒子で黒色の鉱物を含む。	緑色の釉を両面に施している。	I地区 1層 17ライン
* 76		II a	— — —	* * * * * * *	淡灰白色の微粒子。	* * *	II地区 G-43 2層
* 77		II b	— — —	* * *。除園線と又状工具により2本の蓮弁が描かれている。	灰白色の細粒子。微細な黒色の鉱物を含む。	淡灰緑色の釉を両面に施す。	I地区 1層
* 78	花皿	III	— — —	口唇部をラマ式蓮弁の弁先状に浅目の袈りを入れて緑花とする。内面には又状工具による彫り取りでラマ式蓮弁を描いている。	灰色の細粒子で微細な黒色の鉱物を混入する。	濃緑色の透明釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	II地区 F-56 3層
* 79		III	15.0 — —	* * * * * * *	淡灰白色の細粒子。	濃緑色の釉を両面に施す。	II地区 H-49 遺構1
* 80		III	16.0 — —	* * * * * * *	* * *	青緑色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	II地区 H-49 遺構2
* 81		III	10.5 2.6 4.0	* * *。内底面に模印不明の文様を施す。壺付外縁を斜めに削り取るため壺付内縁のみ残すに付く。	灰色の細粒子。	濃緑色の釉を壺まで施すが一部高台内まで釉が観られる。	I地区 F-10 1層
* 82	外反皿	IV a	12.0 — —	口縁をゆるやかに外反させ、口唇を丸く成形する無文の皿である。	灰色の微粒子。	濃緑色の釉を両面に施す。	I地区 E-27 2層
* 83		IV a	12.6 — —	* * *	淡灰白色の微粒子。	* * *	II地区 E-52 1層
* 84		IV a	10.5 3.4 4.2	* * *。壺付外縁を斜めに削り取り面取りする。	白色の細粒子。	* * *	II地区 G-61B
* 85		IV b	— — —	口縁がゆるやかに外反する皿である。口唇に刻みを入れて、内外面に彫り取りによる蓮弁を描いている。	淡灰白色の細粒子。	緑色の釉を両面に施している。	II地区 G-42 2層
* 86	直口皿	IV b	11.0 — —	* * *。内面に彫り取りによる文様を描いている。	白色の微粒子。	緑色の釉を両面に施しているが二次的な火熱を受ける。	II地区 G-48 遺構1
* 87		V	12.6 — —	直口型の皿で、口唇は尖り気味である。	灰色の微粒子で微細な黒色の鉱物を混入する。	濃緑色の釉を両面に施す。	II地区 G-53 3層
* 88	底部	—	— 4.6	踵下部から角度を変えて立ち上がる覆折の皿となる。高台は低く、高台の内側は踵である。壺付外縁を斜めに削り取る。	灰色の細粒子で微細な白色の鉱物を混入する。	緑色の透明釉を高台外面まで施す。内底に着着痕が観られる。	I地区 1層
* 89		—	— 6.8	踵下部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部へ移行するものと思われる。	淡灰白色の細粒子。	緑色の釉を高台外面まで施している。両面に細かい貫入。	II地区 G-60B
* 90		—	— 7.0	内嚢型の小皿である。口唇は丸く成形されている。外面に除園線を3本廻らせている。	* * *	濃緑色の釉を両面に施す。両面に細かい貫入。	I地区 1層
第25図 図版14 91	盤	a	— — —	踵縁部をつまみあげて成形している。内面に彫り取りによる2本で1単位の蓮弁を描いている。	白色の微粒子。	青緑色の釉を両面に施すが二次的な火熱のためか変色している。	II地区 1層
* 92		a	— — —	* * *。内面に彫り取りによる幅広の蓮弁を描いている。	淡灰白色の微粒子。微細な黒色の鉱物を含む。	濃緑色の釉を両面に施す。	II地区 G-43 遺構3

第5表 e 青磁観察一覧

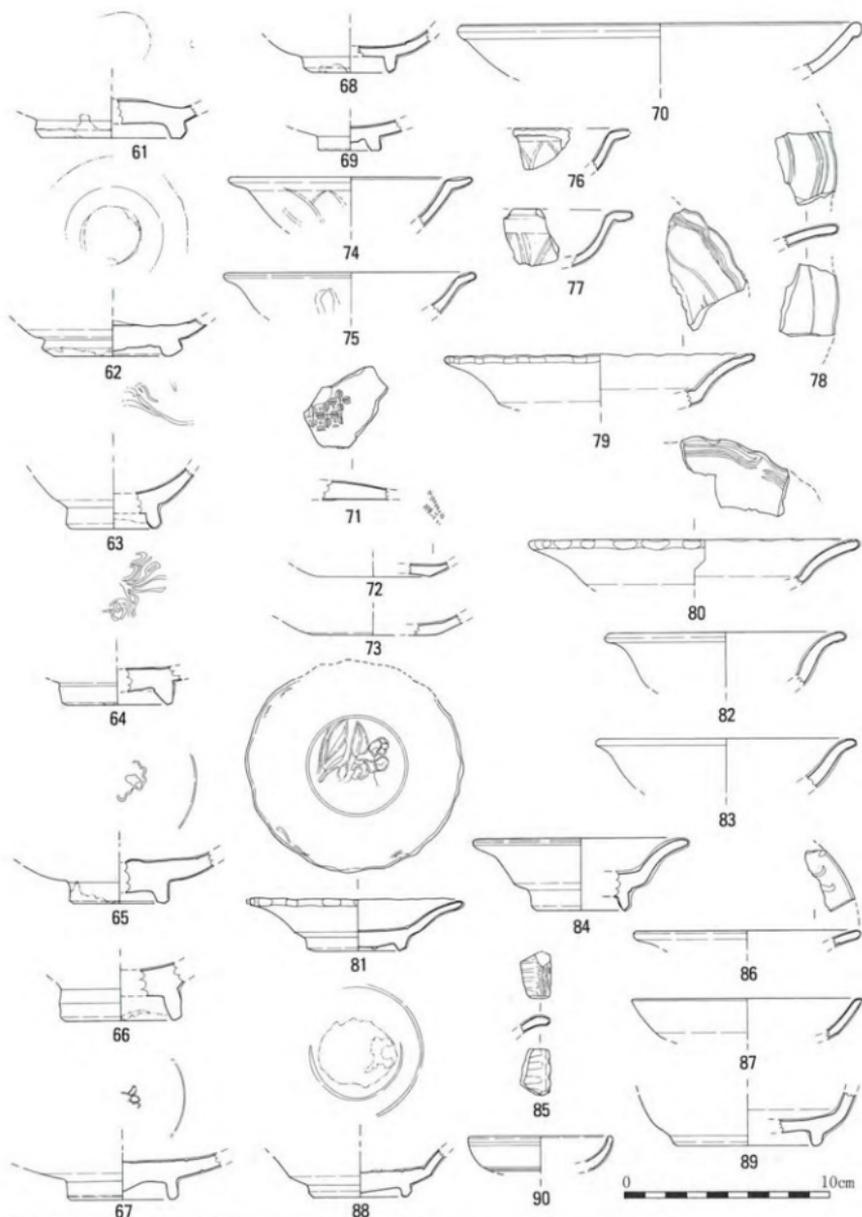
拝啓番号 図記号 通物番号	器種 部位	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・地釉・貫入	出土地区 出土層
第25回 図記14 93	盤	b	—	蹄端部をつまみあげて、口唇に削みを入れて椀花状に成形する。蹄内面及び内体面に篋削りによる蓮弁を描いている。	白色の微粒子。	淡緑色の透明釉を両面に施す。 両面に軽い貫入。	Ⅱ地区 H-48 遺構2
* * 94	盤	—	— 10.8	高台を逆三角形状に成形する。篋削りによる幅広い蓮弁を高台脇まで描いている。	淡褐色の細粒子。	緑黄色の釉を施している。 両面に軽い貫入。	Ⅱ地区 F-53 3層
* * 95	底	—	— 12.0	* * 。	白色の細粒子。	青白色の釉を施している。 * * 。	I地区 H-10 1層
* * 96	部	—	— 9.8	* * 。	灰色の微粒子で白色の微細な疵物を混入する。	淡緑色の透明釉を高台内面まで施す。 軽い貫入が認められる。	I地区 1層
* * 97	大	—	—	大鉢の底部分である。外面に篋削りによる蓮弁?を描き、内底面に陰文線と構図不明の文様を描いている。	灰色の粗粒子。	淡緑色の透明釉を両面に施している。 両面に軽い貫入。	Ⅱ地区 1層
* * 98	鉢	—	— 6.4	高台は低く成形され、畳付外縁を斜位に削り面取りする。内底面に陰文線と構図不明の文様を描く。	淡灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を高台内面まで施す。 両面に軽い貫入。	Ⅲ地区 G-60B
* * 99	馬上杯	—	—	外面に椀状の凹凸が認められる。	白色の細粒子。	灰青色の釉。 軽い貫入。	Ⅱ地区 G-49 1層
* * 100	蓋	—	—	酒会壺の蓋の横みであると思われる。円柱型の横みで中央を窪ませる。	淡灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。 両面に軽い貫入。	Ⅱ地区 H-50 遺構1
* * 101	蓋	—	— 口径11.5 内口径8.8	小壺の蓋になるものと思われる。蹄部は比較的厚めに成形されている。身受けの突起は外縁を斜位に削り取っている。	白色の微粒子。	青白色の釉を外面蹄端部まで施す。	Ⅱ地区 F-55 遺構2
* * 102	瓶	—	—	双耳甕瓶の頸部片で、輪状の甕を耳に通している。内面には轆轤痕が明瞭に認められる。	淡灰白色の微粒子。	緑灰色の透明釉を外面に施している。 軽い貫入。	Ⅱ地区 H-46 2層
* * 103	瓶	—	— 7.2	瓶の底部分である。高台は低く成形されており、畳付外縁を斜位に削り取る。高台脇をやや水平に削り取っている。	* * 。	淡青灰色の釉を高台脇まで施す。	Ⅱ地区 F-43 遺構5
* * 104	壺	—	— 7.8	小壺の口縁破片である。口縁断面が逆三角形状を呈する。	灰色の細粒子で黒色の疵物を含む。	二次的な火熱を受けたと思われる。変色している。	Ⅲ地区 F-58 遺構1
* * 105	壺	—	—	酒会壺の口縁破片である。口縁外面が三角形状に肥厚する。	淡灰白色の微粒子。	緑色の釉を両面に施している。口唇部は露筋とする。	Ⅱ地区 G-48 遺構1
* * 106	摺鉢	—	—	内面に筋目を施す。外面には轆轤痕が認められる。	* * 。	緑色の釉を外面に施している。	Ⅱ地区 F-41 遺構1
* * 107	ハット ト 壺	—	— 12.6	高台は低く成形されている。高台の内側りは比較的丁寧である。	灰白色の細粒子。	濃緑色の釉を高台内面まで施している。 高台内に鉄錆釉を施している。	I地区 E-27 遺構1



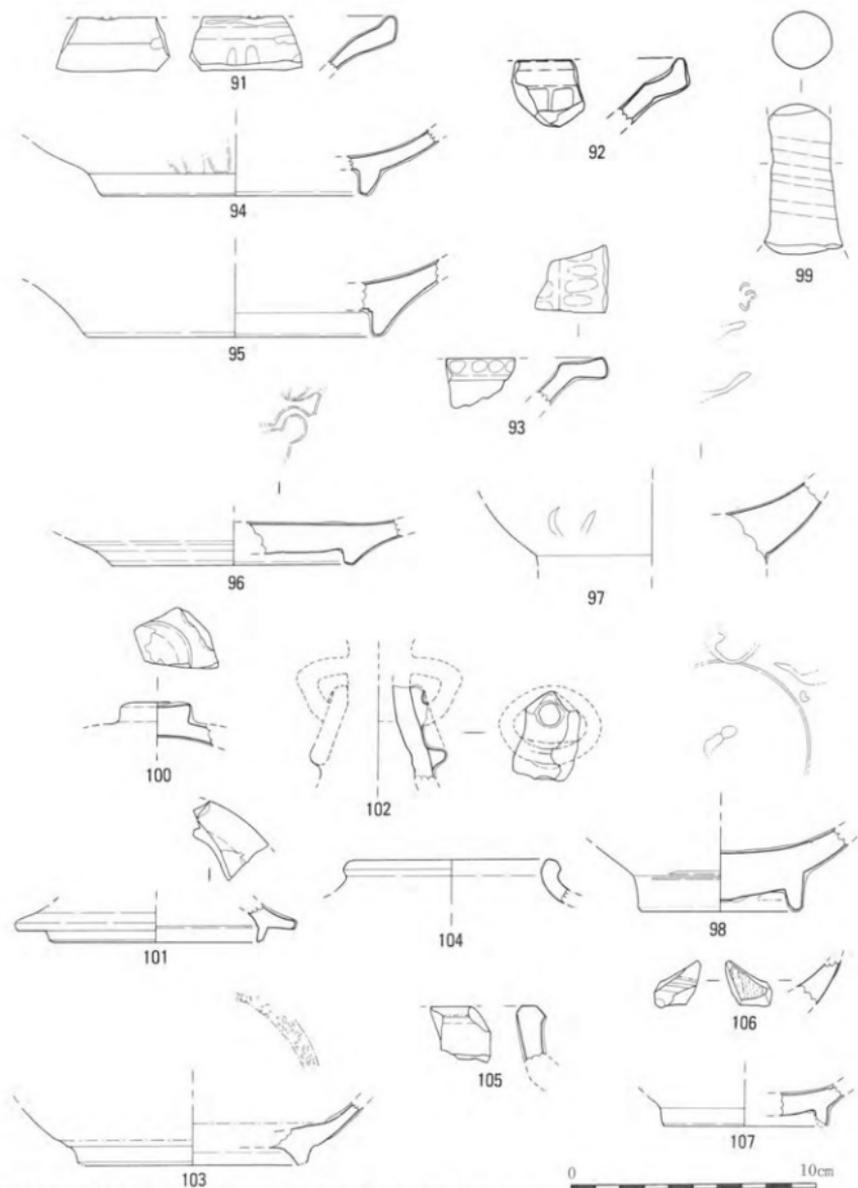
第22图 青磁 1 碗 (1~33)



第23图 青磁2碗 (34~60)



第24图 青磁3 碗(61-67)、小碗(68,69)、大皿(70,71)、皿(72-89)、小皿(90)



第25図 青磁4 盤(91~96)、大鉢(97,98)、馬上杯(99)、蓋(100,101)
 瓶(102,103)、壺(104,105)、摺鉢(106)、ベトナム産(107)

第2節 白磁

白磁の器種としては、碗・皿・小杯・蓋・壺・袋物などが確認されている。中でも碗は201点と最も多く、これに皿・小杯・蓋と続く。出土傾向としては、Ⅱ・Ⅲ地区が圧倒的多く、Ⅰ地区は少ない(第6表)。今回検出された白磁碗の中には古手の玉縁口縁碗・口折碗・ピロースクタイプ碗などが少量ではあるが含まれている。

以下、器種別に分類概念を述べることにする。なお個々の特徴などについては観察表に呈示した(第7表)。

(1) 碗(第26図1~18,第27図19~25)

最も多く得られているが、全形が窺えるような資料は少ない。碗の種類としては、玉縁口縁碗・口折碗・口禿碗などがあるが、大部分が無文外反碗である。これらの碗を口縁形態から玉縁口縁タイプ・外反口縁タイプ・直口口縁タイプ・内彎口縁タイプの4種類に大別し、それぞれⅠ類からⅣ類とした。また小破片のため法量等が算出できないが、有文もしくは口縁形態に特徴がある資料についてはⅤ類とした。

Ⅰ類 玉縁口縁タイプ(第26図1~5)

口縁部を玉縁状に肥厚させるタイプで、一般に玉縁口縁碗と称されるものである。口縁部の肥厚形態によりa・b・cに細分した。

- 胴部は直線的に開き、器壁は薄く造られている。口縁部に厚さ7mmの小さな玉縁状の肥厚を持つ。
- 全体の器形はa種に似ているが、口縁部の玉縁状の肥厚が9mmとa種に比べて大きい。
- 胴部の器壁が厚く、口縁部の玉縁状の肥厚もa・b種に比べ大きく、厚さ11mmを有する。

Ⅱ類 外反口縁タイプ(第26図6~9,第27図19~23)

口縁部を口折もしくは外反させるものを外反口縁タイプとしてまとめた。口縁成形や施釉方法でA・B・Cの3タイプに分類し、必要に応じてa・bに細分類した。

- 口縁部を外反させ端部を水平にするもので、一般に口折碗と称されるものである。
- 口唇部の釉を描き取って露胎とする。いわゆる口禿碗である。文様の有無でa・bに細分した。
 - 口縁部をゆるやかに外反させ、口唇部の釉を描き取って露胎とする。文様は無い。
 - 胴部内面に文様を有するもので、青海波文、波濤文を陽刻する。
- 口唇に丸みを持たせて成形する大振りの外反碗である。外面には不明瞭な稜線が走る。高台は深いのと非常に浅いのとがあり、畳付内端のみ畳に付く。見込みには印花文を施している。

Ⅲ類 直口口縁タイプ(第26図15~18)

薄手の直口口縁碗で、小振りと大振りの口縁破片が得られている。胴部は外側に大きく開き、口縁は僅かに肥大して丸みを持たせており、外面には明瞭な轆轤痕が認められる。高台は「ハ」の字状に開き、畳付の外端を斜位に削り取る。高台脇にはカンナ目が残るものもある。

Ⅳ類 内彎口縁タイプ(第26図10~14)

一般にピロースクタイプ碗と呼ばれている内彎型の碗である。口縁形態と文様の有無などからa・bに細分した。

- 外面の口縁直下を指で押さえて轆轤成形しており、僅かに窪む。内面上部には陰圏線を廻らす。いわゆるピロースクタイプ碗Ⅰに相当するものである。
- 口唇は丸みを持ち、口唇内端は内向する。外面には明瞭な稜線が認められる。ピロースクタイプ碗Ⅱに相当するものと思われる。

Ⅴ類 小破片であるため法量等が算出できないが、有文もしくは口縁形態に特徴がある資料をここでは取り扱った。前者をa、後者をbとした。(第27図24・25)

- 外面に菊花状の文様を施しているものと思われる内彎型の碗。
- 器壁を薄く成形し、口唇部には刻みを入れて輪花を成形する。

(2) 皿(第27図26~35)

皿についても、碗と同様に口縁形態や器形の特徴等から外反タイプ・直口タイプ・内彎タイプ・腰折タイプの4種類に大別し、それぞれⅠ類からⅣ類とした。また底部資料で特徴的なものをⅤ類として扱った。

Ⅰ類 外反タイプ(第27図26)

口縁をゆるやかに外反させる薄手の外反皿である。

Ⅱ類 直口タイプ(第27図27)

口唇を平坦に成形する薄手の直口皿である。

Ⅲ類 内彎タイプ(第27図28)

口縁をゆるやかに内彎させる薄手の内彎皿である。

Ⅳ類 腰折タイプ(第27図29)

一般に腰折皿と称されるものである。厚手のタイプで見込みには印花文を施す。

V類 皿底部(第27図30~35)

高台造りの特徴からA・B・C・Dの4タイプに分類した。

A ベタ底状を呈する。口禿皿になるものと思われる。

B 基筒底の底部となるものである。成形が丁寧なものと雑なものがある。

C 高台はやや厚めで、外面を雑に成形する。畳付は両端とも畳に付く。

D 全体に薄造りで、高台は逆三角形を呈する。畳付は内端のみ畳に付く。

(3) 杯(第27図36)

杯で確認されたものは八角杯のみであった。

外面を笥で削って八角に仕上げられており、高台は挟入高台となっている。

(4) 蓋(第27図37)

蓋の破片が検出されている。壺の蓋と考えられるが、この蓋に対応する身は確認されていない。

(5) 壺(第27図38~41)

壺の破片が数点得られており、特徴的なものを図示した。

薄手と厚手のものがある。薄手の壺には、内面を竹節状に形成するものがある。厚手の壺には内底に明瞭な轆轤痕が認められる。

(6) 袋物(第27図42・43)

袋物の破片が2点得られたものでこれを図示した。

胴部片と底部片があり、口縁部は確認されていないが小壺になるものと思われる。

小 結

本遺跡出土の白磁の出土状況を見ると、出土量は僅かではあるが玉縁口縁碗・口折碗・口禿碗・ピロースタイル碗などの古手のものが注目される。とくにⅢ地区からは口禿碗・皿がセットで出土していることや口折碗の出土が確認されており、他遺跡の出土例から見ても、Ⅲ地区にて検出された遺構が13世紀中~14世紀前半頃まで遡るものと考えられる。最近では銘苅原遺跡(註1)やヒヤジョー毛遺跡(註2)などで玉縁口縁碗・カムイヤキ系須恵器・滑石製石鍋がセットで出土している。碗ⅡBb類で分類した内面に青海波文を陽刻する胴部片については、佐賀県教育委員会の大橋康二氏に鑑定(註3)を依頼した。いわゆる「枢府タイプ」と称されるグループに属する可能性も考えられるとの助言を頂いた。この「枢府タイプ」の出土例としては、広島県尾道市尾道遺跡出土(註4)があげられる。県内においては湧田古窯跡(註5)に内面に青海波文の陽刻された白磁碗が求められるものの、他に出土例がなく、詳細については今後の研究課題としたい。参考までに比較資料として尾道遺跡出土の「枢府タイプ」碗を図示することにする。またV類aの外面に菊花状の文様を施すと思われる内彎型の碗についても類例が湧田古窯跡(註6)に見られるが器形や文様構成等に差異が認められ、V類bの輪花碗についても出土例はなく、今後の検出増加を期待したい。

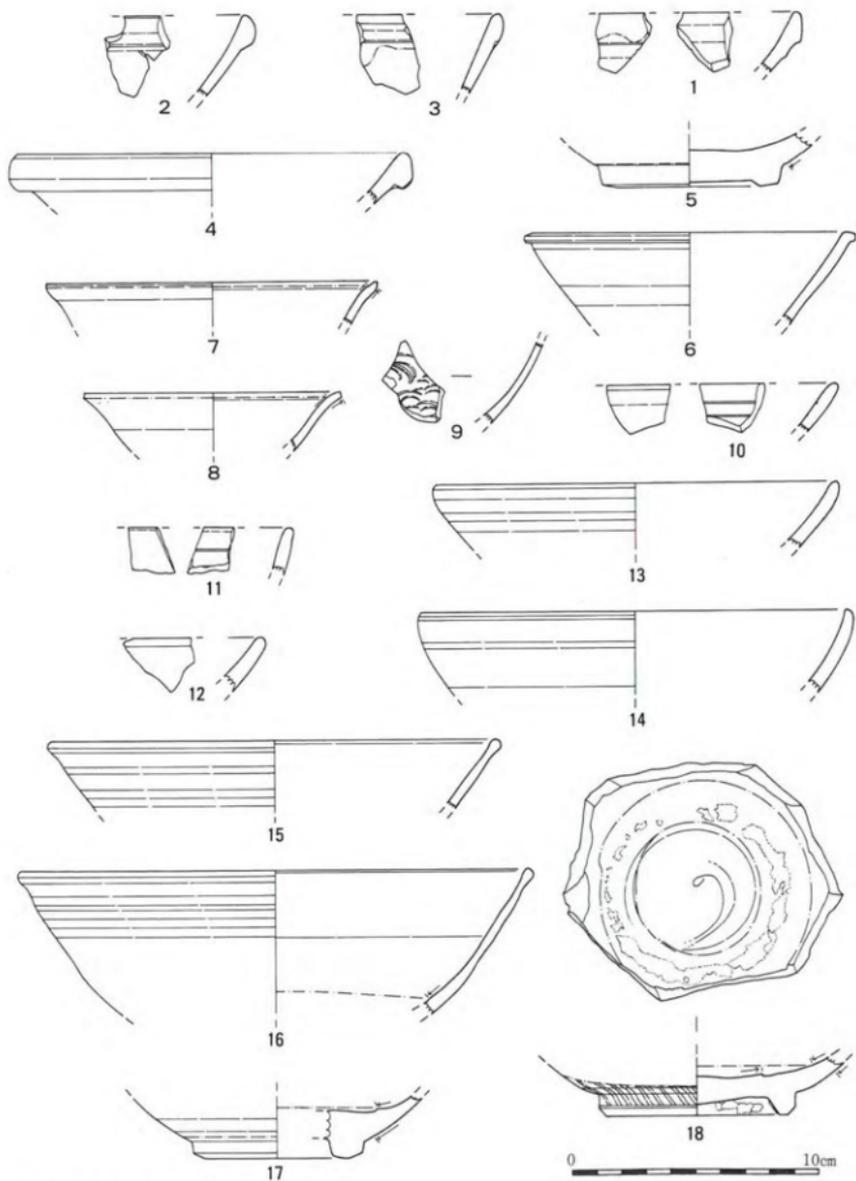
白磁の皿で特徴的なのは、Ⅳ類の腰折タイプがある。与那原(ドナンバル)遺跡(註7)にて同タイプのものと思われる資料が得られているが、腰部分で与那原遺跡の資料よりも器壁がかなり厚めである。この資料についても大橋康二氏に鑑定(註8)を依頼したところ、森田分類(註9)のB群に属する可能性も考慮されるとの助言を頂いた。参考までに福岡県宗像市石丸遺跡出土(註10)の資料を図示した。また皿のⅢ類として分類した内彎タイプの細片資料の中には、口唇部分に煤状のものが付着して黒く変色しているものがあり、湧田古窯跡(註11)において同様の資料が検出されていることから、これらの直口小皿も灯明用の道具として利用もしくは転用されたということも考えられるのではないだろうか。

第7表 a 白磁観察一覽

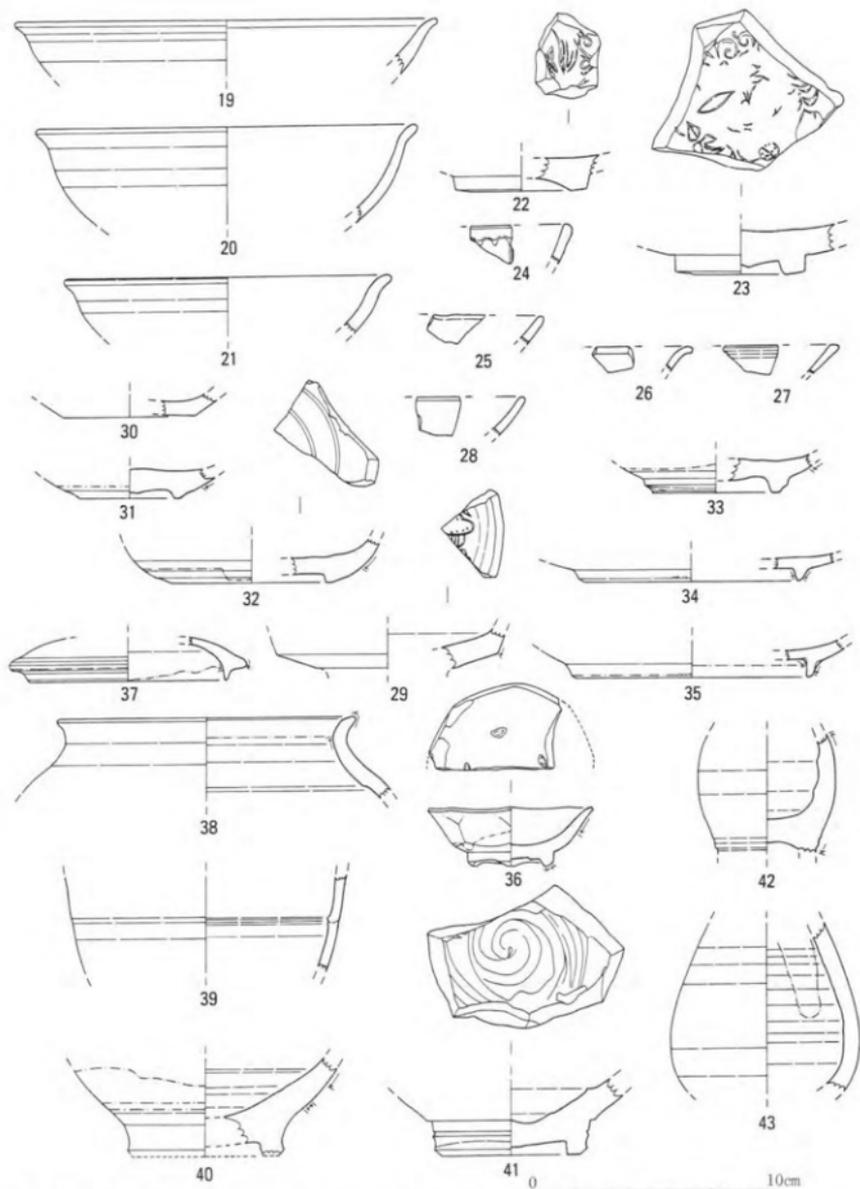
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉・貫入	出土地区 ・ 出土層
第26図 図版15 1	I a	— — —	薄手のタイプで玉縁も比較的小さい。玉縁 下端を跪で挟り取るように成形する。	灰白色の細粒子で 微細な黒色の鉱物 を多量に含む。	淡灰白色の釉を両面に 施す。玉縁下端に釉垂 れ。両面にアバタ状の 気泡痕が観られる。	Ⅲ地区 F-52 2層
* * 2	I a	— — —	面に明瞭な稜線が走る。 * * * * * 外	白色の細粒子で微 細な気泡痕が観ら れる。	乳白色の釉を両面 に施している。玉 縁中央に釉垂れ。 両面に細かい貫入。	Ⅲ地区 F-53 遺構6
* * 3	I b	— — —	全体に薄手のタイプであるが、口縁部の玉 縁がI-a種に比べて大きい。	* * *	黄白色の釉を両面 に施す。両面に細 かい貫入が観られ る。	Ⅲ地区 E-53 3層 0-10
* * 4	I c	15.6 — —	全体に器壁が厚く、口縁部の玉縁もI-a・ b種よりも大きく厚さ11mmを有する。	灰白色の微粒子。	灰白色の釉を両面 に施す。	Ⅲ地区 F-48 遺構1
* * 5	I	— 5.8 —	高台の内削りは非常に浅く、畳付内端のみ が畳に付く。	灰白色の細粒子で 微細な気泡痕が観 られる。	灰白色の釉を両面 に施すが、高台脇 で釉を掻き取る。	Ⅲ地区 F-52 3層 0-10
* * 6	Ⅱ A	13.6 — —	器壁は薄く、口縁部を短く外側に折り、口 唇を平坦に仕上げている。口縁下端を跪で 挟り取り成形する。	白色の細粒子。	乳白色の釉を両面 に施す。両面にア バタ状の気泡痕が 観られる。	Ⅲ地区 F-54 1層
* * 7	Ⅱ Ba	13.4 — —	口縁がゆるやかに外反する薄手の碗。口縁 直下に畳削りを加えて疑似肥厚の口縁とす るが肥厚は小さい。	灰白色の微粒子で 微細な黒色の鉱物 を多量に混入する。	淡灰白色の釉を両 面に施す。口縁内 端の釉を掻き取り 口壳とする。	Ⅲ地区 E-56 遺構3
* * 8	Ⅱ Ba	10.4 — —	口縁がゆるやかに外反するやや小振りの碗。 釉を掻き取る際に口唇部を平坦に仕上げて いる。	白色の微粒子。	* * * * * 口 唇部のみ釉を掻き 取る。	Ⅲ地区 G-55 3層 10-20
* * 9	Ⅱ Bb	— — —	胴部破片で器壁は薄い。内面に青海波文を 雕刻するが、上部には波濤文状も観られる。	淡灰白色の微粒子。	淡灰白色の釉を両 面に施す。両面に 細かい貫入が観ら れる。	Ⅲ地区 G-54 3層 0-20
第27図 図版16 19	Ⅱ C	17.2 — —	口縁がゆるやかに外反し、口唇を丸く成形 する。内面には轆轤痕が観られる。	灰白色の微粒子。	淡灰白色の釉を両 面に施す。	Ⅲ地区 E-55 遺構1 最下部
* * 20	Ⅱ C	15.6 — —	* * * * *	白色の微粒子で微 細な気泡痕が観ら れる。	淡灰白色の釉を両 面に施す。	Ⅲ地区 H-54 2層
* * 21	Ⅱ C	18.4 — —	* * * * *	灰白色の微粒子。	灰白色の釉を両面 に施す。両面に粗 い貫入。	Ⅲ地区 F-54 1層
* * 22	Ⅱ C	— 5.4 —	高台内削りは非常に浅い。畳付の内端のみ が畳に付く。	淡灰白色の微粒子。	灰白色の釉。見込 みに印花文。	Ⅱ地区 F-38 2層
* * 23	Ⅱ C	— 5.3 —	高台の内削りは浅く、畳付内端のみが畳に 付く。高台の作りは雑である。	微細な気泡痕。 * * * *	* * * *	Ⅲ地区 F-56 遺構2
第26図 図版15 15	Ⅲ	18.4 — —	胴部は外側に大きく開き、口唇部は肥大し て丸みを持つ。外面には明瞭な轆轤痕が観 られる。	灰白色の微粒子。	灰白色の透明釉を 両面に施す。両面 に細かい貫入。	I地区 E-27 遺構1
* * 16	Ⅲ	23.1 — —	* * * * *	淡灰白色の微粒子。	* * * *	I地区 E-27 遺構1

第7表 b 白磁観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	口径 器高 台径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉・貫入	出土地区・ 出土層
第26図 図版15 17	Ⅲ	— — 5.8	高台はやや外側に開く。壺付外端を斜位に削り取り、壺付内端のみ畳に付く。	白色の細粒子。	淡灰白色の釉を両面に施し、高台脇で掻き取る。内底も輪状に掻き取る。	Ⅲ地区 G-53 3層 0~10
〃 〃 18	Ⅲ	— — 7.4	高台は「ハ」の字状に開く。壺付外端を斜位に削り取る。高台脇にはカンナ目が観られる。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	灰白色の釉を高台脇まで施す。内底の釉を蛇の目状に掻き取る。	Ⅰ地区 E-10 遺構3
〃 〃 10	Ⅳ a	— — —	口唇に丸みを持たせ、外面の口唇直下を窪ませる。口縁直下内面には陰圏線が2本走る。	〃 〃 微細な気泡痕。	灰白色の釉を両面に施す。	Ⅲ地区 H-54 2層
〃 〃 11	Ⅳ a	— — —	〃 〃 が1本走る。口縁直下内面には陰圏線	〃 〃 〃	〃 〃 両面に細かい貫入が観られる。	Ⅲ地区 G-54 3層 0~5
〃 〃 12	Ⅳ b	— — —	口唇に丸みを持たせる。口唇内端はやや内向気味である。	白色の微粒子。 〃 〃	淡灰白色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入とアバタ状の気泡。	Ⅲ地区 H-54 2層 0~5
〃 〃 13	Ⅳ b	16.6 — —	〃 〃 外面には明瞭な稜線が走る。	灰白色の微粒子。 〃 〃	淡白色の釉を両面に施す。両面に細かい貫入が観られる。	Ⅰ地区 G-17 2層 0~5
〃 〃 14	Ⅳ b	17.7 — —	〃 〃 〃	淡灰白色の微粒子。	淡灰白色の釉を両面に施す。	Ⅰ地区 F-7 遺構1
〃 〃 24	V a	— — —	薄手の内彎型の碗で、口唇には丸みを持たせる。外面には菊花状の文様を施す。	淡灰白色の微粒子。	灰白色の釉を両面に施す。	Ⅲ地区 F-56 3層 0~10
〃 〃 25	V b	— — —	薄手の直口タイプで、口唇を輪花状に成形する。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	黄灰色の釉を両面に施す。	Ⅲ地区 F-55 3層 0~20
〃 〃 26	I	— — —	薄手の外反皿。口縁部をゆるやかに外反させる。	〃 〃 微細な白色の鉱物を多量に混入。	淡灰白色の釉を両面に施す。	Ⅲ地区 G-55 3層 0~10
〃 〃 27	Ⅱ	— — —	口唇を平坦に成形する薄手の直口皿。口唇部は肥大化する。	白色の微粒子。 微細な気泡痕。	乳白色の釉を両面に施す。外面には細かい貫入が観られる。	Ⅲ地区 F-57 3層 0~10
〃 〃 28	Ⅲ	— — —	口縁をゆるやかに内彎させる薄手の内彎皿である。	〃 〃 〃	黄白色の釉を両面に施す。両面に細かい貫入と内面にはアバタ状の気泡痕が観られる。	Ⅰ地区 1層
〃 〃 29	Ⅳ	— — 6.6	腰上部から角度を変えて立たせて腰部を成形する。腰部が比較的厚めに成形されている。	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡灰白色の釉を両面に施す。腰部外面は露胎である。	Ⅲ地区 F-53 3層 10~20
〃 〃 30	V A	— — 5.4	ベタ底状を呈しており、糸切りの後に外底を調整している。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	黄灰色の釉を内面に施している。細かい貫入が観られる。	Ⅲ地区 H-53A
〃 〃 31	V B	— — 4.0	幕筒底皿の底部片。底部脇を寛で雑に削って成形している。内削りはやや深目で、兜巾状を呈する。	〃 〃 微細な白色の鉱物を多量に混入する。	淡灰白色の釉を両面に施す。	Ⅱ地区 F-44 2層
〃 〃 32	V B	— — 6.6	幕筒底皿の底部片で、底部脇を寛で比較的丁寧に削って成形する。内削りは浅い。	白色の微粒子。	黄灰色の釉を両面に施す。底部脇で釉を掻き取る。	Ⅱ地区 G-42 3層



第26圖 白磁 1 碗 (1~18)



第27图 白磁2 碗 (19~25)、皿 (26~35)、八角杯 (36) 盖 (37)、壶 (38~41)、袋物 (42、43)

第3節 染付

染付で確認された器種としては碗・小碗・大皿・皿・小杯・蓋・瓶・壺の8器種であった。青磁や白磁などと同様に碗の検出量が278点と圧倒的に多い。染付の出土状況としては、Ⅱ地区から多量に検出されており、これにⅢ地区、Ⅰ地区と続く(第8表)。また今回検出された染付皿の中には大皿や魚形状の露胎部が認められる基筋底皿があり、注目される場所である。染付の分類に際しては器形・文様・口縁形態などから分類を試み、個々の特徴などについては観察表に提示した(第9表)。以下、碗・小碗などの順に器種別に分類概念を述べることにする。

(1) 碗(第28図1~18)

碗については器形・文様・口縁形態・高台の形態などから分類を実施し、Ⅰ類からⅤ類までの5種類に分類できた。これら5種類の中で細分類が可能なものについてはa・bなどに分けた。

I類(第28図1~2)

いわゆる「蓮子型」と称される碗。全形が窺える資料はないが、文様は外面口縁直下に「波濤文」、胴部外面に「芭蕉文」などを描く。

Ⅱ類(第28図3)

直口口縁の碗で口縁が逆「ハ」の字状に開くタイプ。外面口縁直下に抽象的な「波濤文」を描き、外面胴部には「四宝唐草文」と思われる文様を描いている。

Ⅲ類(第28図4~8)

薄手で口縁がゆるやかに外反するタイプの碗。口唇の形態からa・bに細分できる。

a 口唇を丸く成形するタイプの碗で、「四宝唐草文」と思われる文様などを描いている。

b 口唇を尖らせて成形するタイプの碗で、「唐草文」・「雷文帯」などを描く。

Ⅳ類(第28図11~16)

やや胸器質の粗い胎土で、灰色がかかった発色の釉薬が施されている一群をⅣ類とした。口唇が尖り気味に成形され、口縁は微弱に外反するタイプと直口するタイプの2種類があり、前者をa、後者をbに細分した。高台は畳付外端を斜位に削り取り、畳付内端のみが畳に付く。内底を蛇の目状に軸を描き取っており、内底及び腰下部に界線を廻らすものもある。

a 口縁が微弱に外反するタイプの碗で、口唇を尖り気味に成形する。外面に「草花文」を描く。

b 直口タイプの碗で、口唇を丸く成形する。

Ⅴ類(第28図17)

薄手の直口碗である。文様は外面に界線を1本、内面に2本、外面に構図不明な文様を描いている。

Ⅵ類(第28図18)

いわゆる腰折碗と称されるものである。外面に「アラベスク」と思われる文様を描き、内底には界線を廻らしている。

(2) 小碗(第28図19~24)

小碗は器形・口縁形態などによりⅠ類からⅡ類の2種類に分類し、Ⅱ類についてはa・bに細分した。

I類(第28図19)

薄手の直口口縁タイプで、口唇を丸く成形する。小破片のため器形は判然としない。口縁外面に「雷文帯」を描き、口縁内面に2本一組の界線を廻らす。

Ⅱ類(第28図20~22)

外反口縁で、口縁がきつく外反するのと微弱に外反するのとがあり、それぞれa・bとして細分した。

a 口縁がきつく外反するタイプで、口唇を尖り気味に成形する。外面に「四宝唐草文」と思われる文様を描き、口縁内面に界線を廻らす。

b 口縁を微弱に外反させて、口唇を尖り気味に成形する。文様は「算木文」・「唐草文」を描く。

(3) 大皿(第29図25・26)

大皿は、器形・文様・施釉方法などから、Ⅰ類とⅡ類の2種類に分類した。

I類(第29図25)

全体的に厚手で、胴部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に直線的に開く大振りの碗である。文様としては「花木文」・「唐草文」を描く。高台内には篆刻文の銘(Ⅱ地区 本土産磁器集中部一括出土)。

Ⅱ類(第29図26)

胴部がゆるやかに内彎する大皿である。文様は「鳳凰」などを描いている。

(4) 皿(第29図27~31)

皿の種類としては、稜花皿・内彎皿・萼筒底皿の3種類が確認された。それぞれⅠ類からⅢ類に分類した。また底部資料については2種類に分類した。

Ⅰ類(第29図27)

口縁部を稜花状に成形し、内外体面に篋削りによる連弁文を施す。文様は「蓮弁文」などを描いている。

Ⅱ類(第29図28・29)

胴部から口縁部にかけてゆるやかに内彎し、口唇部を丸く成形する。文様は抽象的な「波濤文」や「四方禪文」などを描く。

Ⅲ類(第29図30・31)

いわゆる萼筒底皿と称されるものである。全体に薄造りで文様は「草花文」などを描いており、見込み中央部に魚形状の露胎部が認められるものもある。

(5) 皿底部(第29図32~35)

皿の底部資料は、高台造りの特徴からⅠ類とⅡ類の2種類に分類した。

Ⅰ類(第29図32~34)

全体に薄く成形されており、高台は低く、逆三角形状に成形する。

Ⅱ類(第29図35)

高台は高く形成され、畳付は両端とも畳に付く。

(6) 小杯(第29図36・37)

小杯は器形・文様などの特徴からⅠ類とⅡ類の2種類に分類した。

Ⅰ類(第29図36)

いわゆる腰折杯である。高台を逆三角形状に成形する。

Ⅱ類(第29図37)

やや厚手のタイプで、高台脇から胴部にかけてゆるやかに内彎する。高台は高く成形されている。文様は「芭蕉文」・「草花文」を描いていて、高台内には「康熙年製」の字款が入る。

(7) 蓋(第29図38~40)

水注もしくは小壺の蓋と考えられる蓋の資料が得られている。Ⅰ類からⅢ類までの3種類に分類できた。

Ⅰ類(第29図38)

比較的広めに鈿部を成形しており、身受けの突起部分がないタイプである。文様は「雷文帯」を描く。蓋甲頂部の撮は欠落しているものと思われる。

Ⅱ類(第29図39)

水注の蓋若しくは瓶の脚になるものと考えられるが、今回は蓋で仮分類した。鈿部の縁を下方に折り曲げて外端を斜位に削り取り成形している。

Ⅲ類(第29図40)

小壺の蓋もしくは蓋の撮と思われる。鈿部・見受けの突起部分などは破片資料のため確認できない。渦巻文と考えられる文様を描いているが、構図等は判然としない。

(8) 瓶(第29図41・42)

瓶の頸部であると思われる破片が得られている。有文と無文とがあり、前者をⅠ類、後者をⅡ類とした。

Ⅰ類(第29図41)

いわゆる玉壺春瓶と称される瓶である。外面に文様を施しており、上から「芭蕉文」・「如意頭雲文」を雑に描き、界線で区画する。

Ⅱ類(第29図42)

頸部に文様等が確認できないものをⅡ類とした。外面にのみ施釉し、内面には明瞭な轆轤痕が認められる。

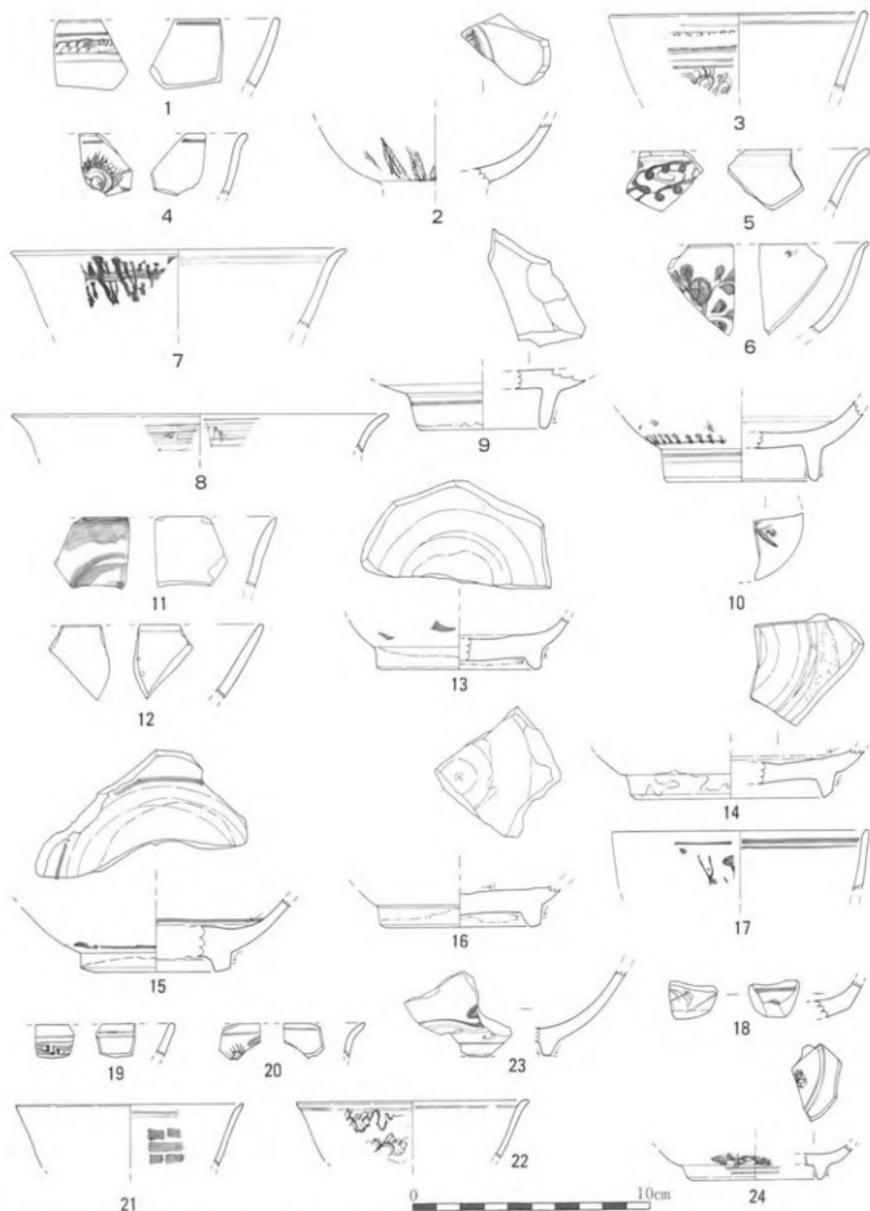
(9) 壺(第29図43)

第9表 a 染付観察一覧

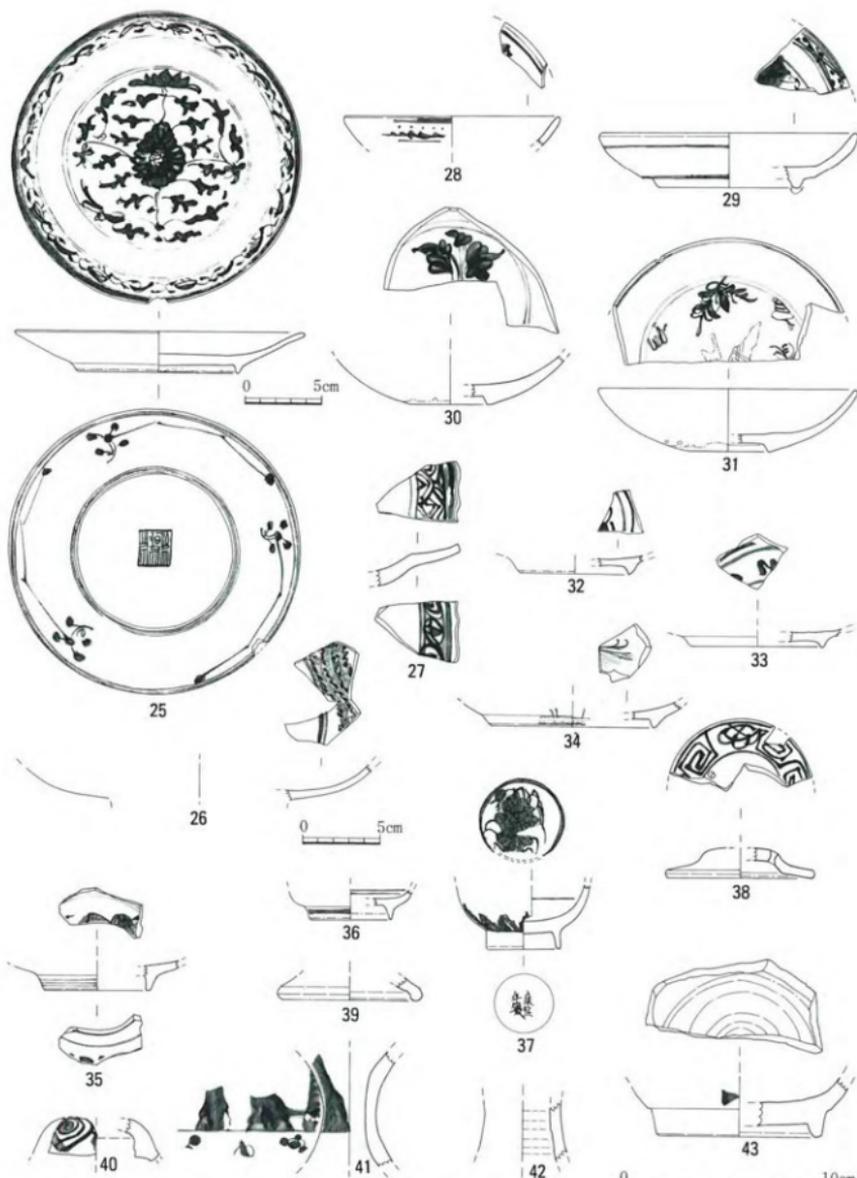
種別番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口徑 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施軸・裏地・貫入	出土地区・ 出土層
第28図 図版17 1	碗	I	—	外面は口縁下部に波濤文を描き、界線や区画している。内面口唇直下に界線を1本施す。	やや不鮮明である。	淡灰白色	両面に施軸。 白色の微粒子。	Ⅱ地区 H-59B
2			—	外面胴部に唐草文を1本施す。内底面には1本の圓線を施す。見込みに蓮華文を描いていると思われる。	鮮明である。	淡青白色	* * * 白色の微粒子で微細な気泡	Ⅱ地区 E-59 遺構6
3		II	10.8 —	外面は口縁に排葉的な波濤文を描き、二葉一組の界線で区画し、胴部に「四宝唐草文」を描く。	不鮮明である。	淡灰白色	* * * 淡灰白色の微粒子。	Ⅱ地区 G-60B
4		III a	—	口縁外面に界線を1本施す。胴部に「四宝唐草文」を描いていると思われる。内面口縁に界線。	やや不鮮明である。	淡灰白色	* * * * * *	I地区 E-27 遺構1
5		III a	—	外面の口縁に界線を施し、胴部に楕圓不明の文様を描く。内面には口縁直下に3本の界線。	不鮮明である。	淡灰白色	* * * 白色の細粒子。	Ⅱ地区 F-53 3層
6		III b	—	外面は口縁に2本の界線。胴部に草花文を描く。内面は口縁直下に界線を1本。	鮮明である。	淡青白色	* * * 白色の微粒子に微細な黒色の 疵物を含む。	I地区 1層
7		III b	14.2 —	外面に楕圓不明の文様を描いている。	鮮明である。 呉須が一部軸上に浮遊し黒ず んでいる。	灰白色	* * * 灰白色の微粒子。	I地区 E-27 遺構1
8		III b	16.0 —	内外面ともに口縁に雷文帯を描いている。	やや不鮮明である。	淡青白色	* * * 白色の細粒子。	Ⅱ地区 H-49 遺構1
9	碗 底部	—	5.4	高台外面に2本の界線。外面胴下部に界線1本。見込みに文様を描かれている。	不鮮明である。	淡青白色	高台外面まで施軸。内底と 裏地に 白色の細粒子。	Ⅱ地区 F-53 3層
10			6.4	* * *。外面胴下部にはくずれた「蓮弁文」。内底面に2本の圓線。高台内へ貫入。	やや不鮮明である。	淡灰白色	裏付以外は施軸。 灰白色の微粒子。	Ⅱ地区 1層
11	碗 口縁部	IV a	—	外面に「草花文」を描く。	不鮮明である。	淡灰白色	両面に施軸。口唇部は茶褐色を呈す。 淡灰色の微粒子。	Ⅱ地区 C-48,49 1層
12		IV b	—	外面口縁に2本の界線。内面には口縁に1本の界線。	* * *	灰白色	* * * 淡灰色の微粒子で僅かに白 色の疵物を含む。	Ⅱ地区 G-59B
13	碗 底部	IV	6.7	外面の胴下部に文様を描かれている。	やや不鮮明である。	淡黄灰色	総軸後に高台外面から内面 途中まで軸を抜き取る。内 底面の軸を輪状に抜き取る。 白色の微粒子。	Ⅱ地区 G-48,49 1層
14		IV	8.0	文様等は確認できない。		灰白色	高台脇まで施軸。 内底面の軸を輪状に抜き取る。 淡灰白色の細粒子。	Ⅱ地区 H-48 遺構1
15		IV	5.0	外面の胴下部に界線を1本施している。内底に圓線を1本施す。	不鮮明で軸が黒ずむ。	灰白色	高台脇まで施軸。高台外面に軸垂 れ。内底の軸を輪状に抜き取る。 淡灰色の微粒子。	I地区 1層
16		IV	6.0	文様等は確認できない。		灰白色	高台外面から内面にかけて裏地。 内底面を輪状に軸を抜き取る。 淡灰白色の微粒子。	Ⅱ地区 F-41 2層
17	碗 口縁部	V	11.0 —	外面口縁に界線を1本施し、胴部に楕圓不明の文様を描いている。内面には口縁に2本の界線。	鮮明である。	白色	両面に施軸。 口唇外側に軸垂れ。 白色の微粒子。	Ⅱ地区 F-43 遺構6
18	碗 胴部	VI	—	外面に「アラベスク」と思われる文様を描く。内底面に圓線。見込みに文様を描いている。	やや不鮮明である。	淡灰白色	* * * 淡灰色の微粒子。	Ⅱ地区 F-55 3層
19		I	—	外面口縁「雷文帯」を描き、内面口縁に2本の界線。	* * *	淡灰白色	* * * 淡灰白色の微粒子。	Ⅱ地区 F-56 3層
20	小 碗 口 縁部	II a	—	外面に「四宝唐草文」と思われる文様を描く。内面は口縁に界線を1本施す。	* * *	淡青白色	* * * 白色の微粒子。	I地区 1層 16フライン
21		II b	9.6 —	内面は口縁に界線を2本、胴部に「算木文」を描いている。	やや鮮明である。	淡青白色	* * * 白色の微粒子で微細な黒色 の疵物を含む。	I地区 F-10 1層
22		II b	9.9 —	外面は口縁に2本の界線。胴部に「唐草文」を描いている。内面は口縁に界線を1本施す。	鮮明である。	淡青白色	* * * 白色の微粒子で微細な黒色 の疵物を含む。	Ⅱ地区 F-43 2層

第9表b 染付観察一覧

押印番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 高台径 (cm)	文 様 構 成	具 須 の 発 色	釉 色	施軸・素地・貫入	出土地区・ 出土層	
第28図 図版17 23	小碗 底部	—	— —	内外面に構図不明の文様を描いている。	鮮明である。	淡青白色	畳付以外は総軸。 白色の微粒子で微細な黒色 の疵物を含む。	I地区 G-17 2層	
* * 24				— — 5.4	外面は胴部に「草花文」を描き、界線を高台脇に2本と高台外面に1本施す。内底面に2本の界線を施し、見込みに文様を描く。	不鮮明である。	淡青白色	総軸である。 白色の微粒子。	Ⅲ地区 F-57 3層
第29図 図版18 25	大皿	I	18.9 2.7 10.6	外面は口縁と高台外面に界線を施する。胴部に「草花文」、内面は口縁に唐草文と界線。内底面には「草花文」と唐線を施す。高台内面には篆書文の線が施される。	鮮明である。	淡青白色	畳付以外は総軸。 白色の微粒子。	Ⅱ地区 F-43 遺構6	
* * 26				II	— —	内面の胴下部に「鳳凰」を描く。内底面に2本の界線を施す。	鮮明である。	淡灰色	総軸後に内底及び高台脇の軸を掻き取る。 灰白色の微粒子。
* * 27	皿	I	— —	罽部上面には蓮弁文を描き、罽部下面には構図不明の文様と界線を施す。	やや不鮮明である。 一部軸が黒ずむ。	淡青白色	—	Ⅱ地区 G-49 1層	
* * 28				II	10.0 —	外面は口縁に抽象的な「波瀾文」を界線で区画する。内面は口縁に2本の界線。胴部に文様を描く。	やや鮮明である。	青白色	* * * 灰白色の微粒子。
* * 29	皿	II	10.0 2.6 6.4	外面は口縁と高台脇に界線。内面は口縁に「西方釋文」、内底面に唐線と構図不明の文様を描く。	やや不鮮明である。	淡灰白色	総軸である。 淡灰白色の細粒子で微細な気泡痕。	Ⅱ地区 H-49,50 5層	
* * 30				III	— — 3.7	内底面に2本の界線と「草花文」を描いている。	不鮮明である。	淡灰白色	総軸後に底部脇の軸を掻き取る。 淡灰白色の微粒子。
* * 31	皿	III	12.0 2.9 3.8	内面の口縁に界線を施す。内底面に2本の唐線と「草花文」を描いている。見込みに魚形状の露胎部。	やや鮮明である。	淡灰白色	* * * —	I地区 E-27 遺構1	
* * 32				I	— — 5.0	内底面に2本の唐線と構図不明の文様を描いている。	やや鮮明である。一部軸が黒ずむ。	淡青白色	畳付外縁から内縁にかけて露胎。 淡灰白色の微粒子。
* * 33	皿 底部	I	— — 8.0	内底面に3本の唐線と構図不明の文様を描く。	やや不鮮明である。	淡青白色	総軸である。	Ⅲ地区 F-53 2層	
* * 34				I	— — 7.6	外面は胴部に縦位の線が3本。高台外面に2本の界線。内底面に構図不明の文様を描く。	不鮮明である。	青白色	畳付から畳付外縁まで露胎。 灰白色の微粒子。
* * 35	部	II	— — 4.8	胴下部と高台外面に界線。胴部に文様を描く。内底面には2本の唐線と構図不明の文様を描く。	不鮮明である。	淡灰白色	畳付以外は総軸であると思われ。 白色の微粒子。	Ⅱ地区 H-49 遺構2	
* * 36				I	— — 3.8	高台外面に界線。内底面に2本の唐線を施す。	鮮明である。	灰青白色	畳付内縁は露胎。 淡灰白色の微粒子。
* * 37	杯	II	— — 3.4	外面は胴部に界線と芭蕉文。内面は胴部に界線を施し、内底面に唐線と「博覧文」を描いている。高台内に「唐本製」の字あり。	鮮明である。	白色	畳付以外は総軸。 白色の微粒子。	I地区 E-33 1層	
* * 38				I	— — 6.8	罽部上面に「雷文帝」等の文様を描いている。	鮮明である。	白色	罽部下の軸を掻き取る。 淡灰白色の微粒子。
* * 39	蓋	II	— — 6.8	文様等は確認できない。	—	淡灰白色	縁端部は露胎。内面の軸を掻き取る。 淡灰白色の細粒子。	Ⅲ地区 G-55 3層	
* * 40				III	— —	外面に「渦巻文」状の文様を描いている。	不鮮明である。	淡青白色	外面は二次的な火熱を受けている。内面は露胎である。 淡灰白色の細粒子。
* * 41	瓶	I	— —	頸部に上から「芭蕉文」と「如意頭雲文」を縦に描き、界線で区画する。	やや鮮明である。	淡灰白色	内外面に施軸する。 淡灰白色の微粒子。	Ⅱ地区 G-49 遺構1	
* * 42				II	— —	文様等は確認できない。	—	淡灰白色	外面にのみ施軸する。 白色の微粒子。
* * 43	蓋	—	—	7.0	外面の胴下部に文様が描かれている。	不鮮明である。	淡灰白色	外面胴下部に軸垂れ。 淡灰白色の微粒子。	Ⅲ地区 G-55 3層



第28図 染付1 碗(1~18)、小碗(19~24)



第29图 染付2 大皿(25、26)、皿(27~35)、小杯(36、37)、
盖(38~40)、瓶(41、42)、壶(43)

第4節 褐釉陶器

本節では中国産褐釉陶器及びタイ産褐釉陶器について述べることにする。確認された褐釉陶器の器種としては壺・水注・摺鉢がある。出土状況としては中国産褐釉陶器、タイ産褐釉陶器の総点数で899点もの破片資料が得られている。そのうち2地区からの出土数が519点と圧倒的に多く、中でも2地区Ⅱ層は271点と突出している(第11表)。以下、産地別に器種別の分類概念を記すことにする。個々の特徴などについては観察表に呈示した(第10表)。

1. 中国産褐釉陶器(第30図1~17)

中国産褐釉陶器の器種としては、壺・水注・摺鉢の3器種が確認されている。以下、壺・水注・摺鉢の順に記すことにする。

(1) 壺(第30図1~17)

最も多く得られているが、全形が窺える資料はない。口縁形態でⅠ類~Ⅳ類までの6種類に分類し、頸の有無や器壁の厚さでa種~b種に細分した。胴部資料や底部資料などについてはその多くが細片であることから、接合可能な資料や大型の資料についてのみ図化した。

Ⅰ類(第30図1~5)

口縁部の断面が方形状を呈する有頸壺である。器壁の厚さでa種~b種に細分した。

a 断面が方形状を呈する有形の壺。

b Ⅰa類と同様に断面が方形状を呈する有頸の壺であるが、全体的に小さめであることから小壺になるものと思われる。

Ⅱ類(第30図6)

口縁部の断面が逆三角形状を呈する有頸の壺で、やや厚手である。

Ⅲ類(第30図7・8)

口縁部の断面が「フ」の字状を呈する薄手の有頸の壺である。

Ⅳ類(第30図14)

口縁部が微弱に外反する有頸の壺で、口唇部を丸く成形する。

V類(第30図15)

肩部から角度を変えて立ち上がり、すばまるようにして口縁部を成形する。口唇部は丸みを持つ。

Ⅵ類(第30図16・17)

口縁部の断面が玉縁状を呈する壺である。頸の有無でa種~b種に細分した。

a 断面が玉縁状を呈する有頸の壺。

b Ⅵb類と同様に断面が玉縁状を呈するのが無頸の壺である。

胴部資料(第30図9)

接合可能な大型の胴部片を1点図化した。やや薄手の胴部片である。胴下部から角度を変えて大きく開き、直線的に移行するものと考えられる。

底部資料(第30図10~13)

大型の底部資料を3点図化した。底面中央が盛り上がり強いタイプと弱いタイプとがある。また小壺と思われる底部片も1点得られている。

(2) 水注(第31図18)

水注と思われる破片資料が1点検出されている。新里村(東)遺跡(註1)糸数城跡(註2)で出土した水注を参考に図上復元を試みた。口縁部は微弱に外反し、口唇部は丸く成形されている。胴上部には注ぎ口を貼りつけた痕跡が確認できる。全体的に小振りの水注になるものと思われる。

(3) 摺鉢(第31図19~22)

摺鉢の口縁破片と胴部破片が得られている。内彎気味の摺鉢が予想され、全体に薄造りであると思われる。口縁部を折り返した後、肥厚帯下部を丸型の工具で削りだし玉縁状に成形しているようである。肥厚帯外面には斲削りの後にナデ調整が施されている。内面には筋目(7条で一単位もしくは10条で一単位の2タイプ)が確認できるが、確認できない破片資料も得られている。

2. タイ産褐釉陶器

タイ産褐釉陶器の器種で確認できたのは壺のみである。

(1) 壺 (第31図23~35)

口縁形態や頸部などでⅠ類~Ⅴ類までの5種類に分類した。耳や底部資料については特徴的な資料についてのみ図化した。

Ⅰ類 (第31図23~25)

口頸部で一端締まった後に、口縁部をきつく外反させて丸みのある肥厚帯を造る。

Ⅱ類 (第31図26・27)

全体に薄手で、口頸部から口縁部にかけて外側に大きく外反させている。口唇を上方に突出させる玉縁状の肥厚形態となっている。

Ⅲ類 (第31図28)

口縁部を内側にやや内傾させるタイプである。小型の壺になるものと考えられる。口縁に玉縁状の小さな肥厚を造る。

Ⅳ類 (第31図29)

口頸部から外側にゆるやかに開き、口縁をきつく外反させている。口唇断面形は形状を呈する。

Ⅴ類 (第31図30)

口頸部をほぼ垂直に立ち上がらせて、そこから口縁をきつく外反させる。口唇部は丸く成形する。

胴部資料 (第31図31・32)

大型の胴部破片資料が得られており、Ⅰ類もしくはⅡ類に属するものと思われるものと中型の壺になるものと思われる2点を図化した。

底部資料 (第31図33~35)

図上復元が可能な底部資料3点を図化した。大型と小型の2タイプがあるようである。

小 結

今回の発掘調査により得られた中国産及びタイ産褐釉陶器の中で注目されたのは水注と摺鉢の資料である。褐釉水注の類例としては、新里村(東)遺跡(註1)や糸数城跡(註2)、首里城跡京の内(註3)で出土しているが、本水注とは器形が異なっているようである。佐賀県教育委員会の大橋康二氏に鑑定(註4)を依頼したところ、中国明代の褐釉水注であることが判明した。褐釉水注については県内では出土例が少なく、今後の検出増加を期待したい。

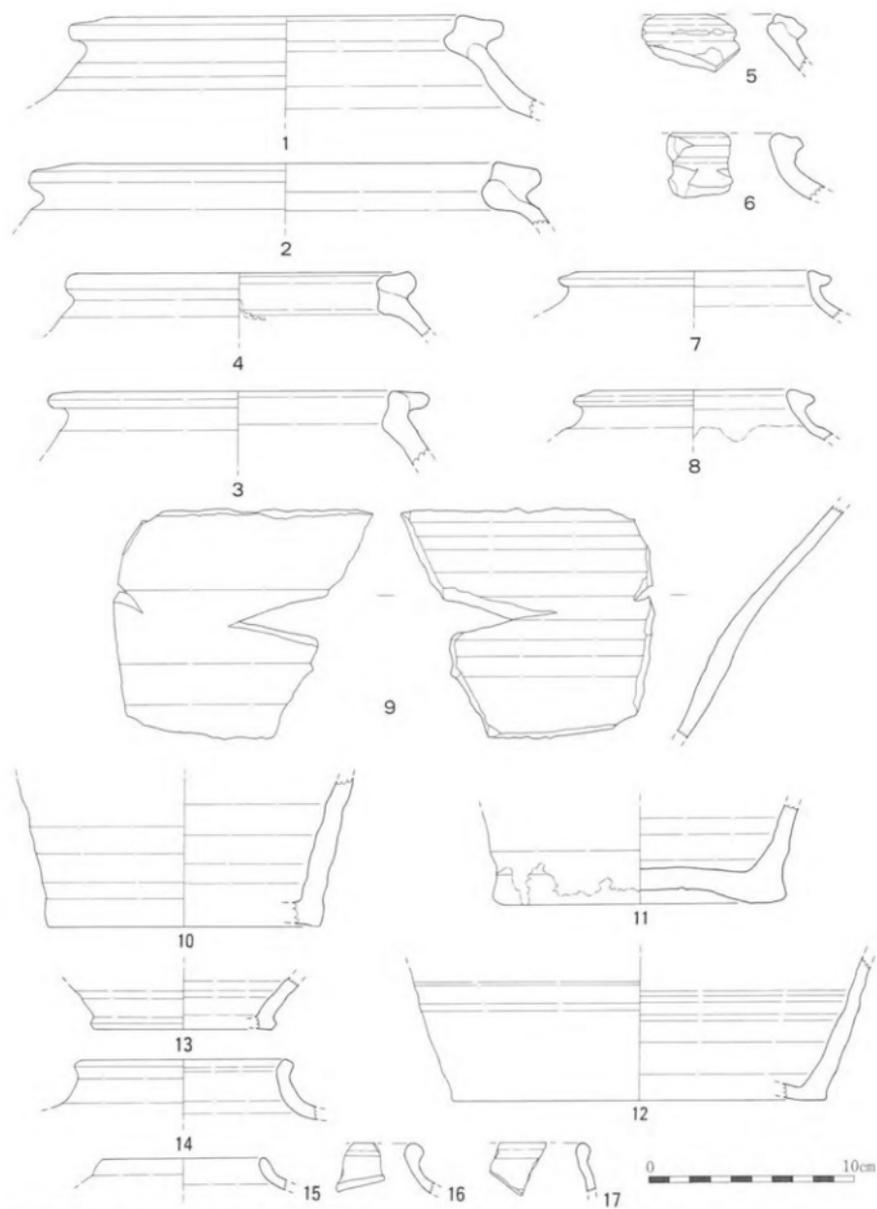
褐釉摺鉢の類例としては、銘苅原遺跡(註5)において同タイプの資料が得られているが、本遺跡にて出土した褐釉摺鉢には筋目が確認できないタイプ(第31図20)が含まれている。この資料についても大橋康二氏に鑑定(註6)を依頼したところ、鉢の可能性が考慮されるとの助言を頂いた。このタイプの褐釉摺鉢の出土した遺跡は先に述べた銘苅原遺跡に次いで本遺跡が2例目であり、県内でも貴重な資料と言える。

註

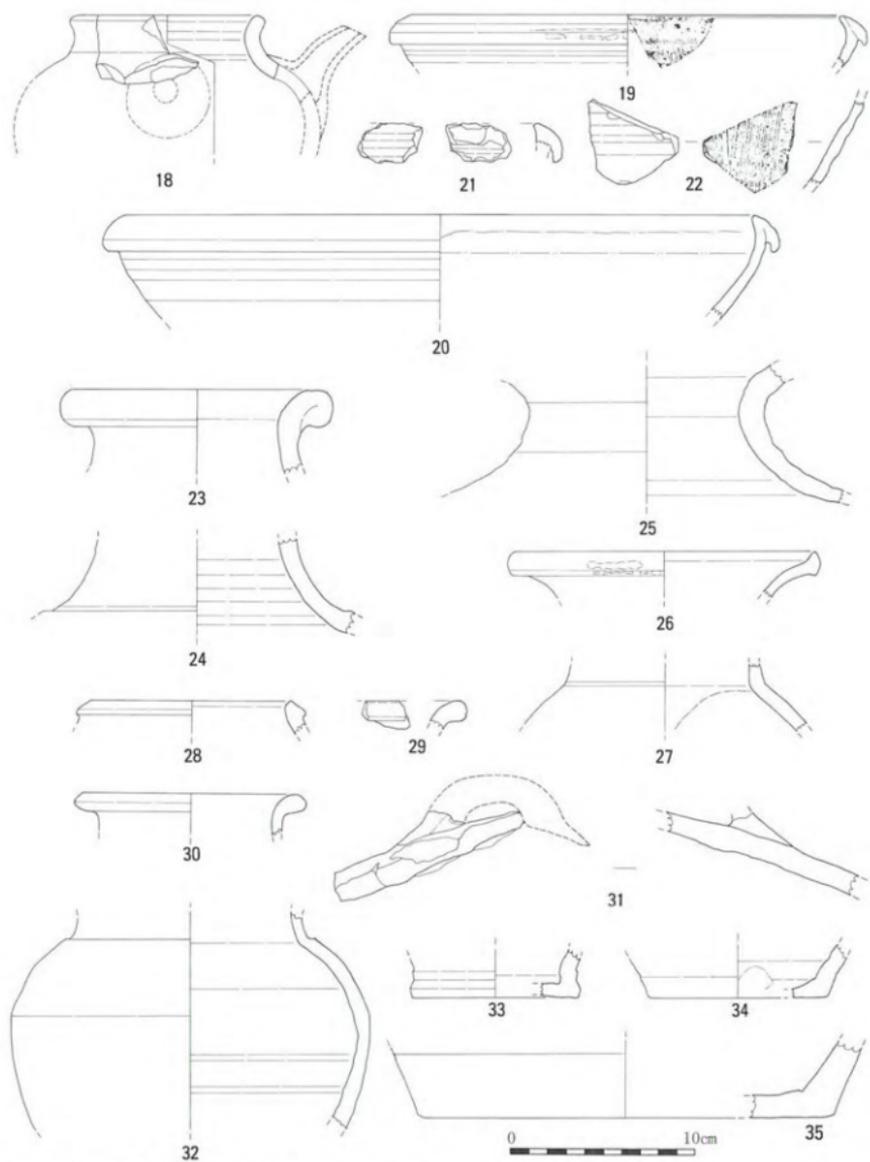
- 註1. 金武正紀「沖縄における12・13世紀の中国陶磁」『沖縄県立博物館紀要』第15号 沖縄県立博物館 1989年
- 註2. 金城亀信・黒住耐二他「糸数城跡」玉城村教育委員会 1991年
- 註3. 金城亀信・上原 静・城間 肇他「首里城跡京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)」沖縄県教育委員会 1998年
- 註4. 1998年12月26日(土)に現物を持参して、大橋康二氏に鑑定を依頼した。記して感謝の意を表したい。
- 註5. 金武正紀・島 弘・玉城 安明・仲宗根 啓他「銘苅原遺跡」那覇市教育委員会 1997年
- 註6. 註4に同じ

第10表 a 褐釉陶器観察一覧

標記番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器底 (cm)	器形・成形・器面調整等	素地	釉色	産地	出土地区 出土層		
第30図 図版19 1	壺	I a	16.8	口縁の成形は断面が方形状を呈しており、口縁内面が僅かに内側に突出する。口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。	淡灰紫色の粗粒子で微細な白色の鉱物を僅かに含む。	黄茶褐色の釉を両面に施す。一部に釉剥がれが観察される。	I地区 1層			
			20.4	口縁の成形は断面が方形状を呈する。口縁内面が内側に僅かに突出する。口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。	灰褐色の粗粒子で白色の鉱物を僅かに含む。	黄茶褐色の釉を両面に施す。一部に釉剥がれが観察される。			II地区 H-48 遺構1 2層	
		I a	15.0	口縁の成形は断面が方形状を呈しており、口縁外縁がやや突き出た状態に成形されている。口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。	淡灰色の粗粒子。	淡黄茶褐色の釉を両面に施す。一部に釉剥がれが観察される。	III地区 H-60B			
			16.0	口縁の成形は断面が方形状を呈しており、口縁外縁が上方に僅かに突出する。口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。	桃褐色の粗粒子で微細な白色の鉱物を僅かに含む。焼成不良と思われる。	淡茶褐色の釉を両面に施す。			III地区 F-52 3層 0-20	
		II	緑部	I b	—	口縁の成形は断面が方形状を呈しており、口縁内面は僅かに内側に突出し、口縁外縁は下方に突出する。口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。	淡桃褐色の粗粒子で微細な白色の鉱物を僅かに含む。焼成不良。	桃褐色の釉を両面に施す。一部に釉剥がれが観察される。	I地区 E-27 遺構1	
					—	口縁の成形は断面が三角形状を呈し、口縁外縁が突き出た状態に成形されている。口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。	灰色の微粒子で微細な白色の鉱物を僅かに含む。焼成不良と思われる。	淡茶褐色の釉を両面に施すが、二次的な火熱で変色し釉が剥がれる。		
				III	11.0	口縁の成形は断面が「フ」の字状を呈しており、口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。	桃褐色の微粒子。 焼成不良と思われる。	茶褐色の釉を両面に施す。	中 II地区 H-50	
					9.4	口縁の成形は断面が「フ」の字状を呈しており、口縁と口縁は裏面から見て内側に突出する。	桃褐色の粗粒子で微細な白色の鉱物を僅かに含む。焼成不良。	茶褐色の釉を両面に施すが、二次的な火熱で変色し釉が剥がれる。		
IV	壺胴部			—	やや薄手の胴部片で、胴下部から角度を変えて大きく開き、直線的に移行するものと思われる。内外面ともに明確な輪縁成形が認められる。	灰紫色の粗粒子で細い石灰質や白色の鉱物を含む。	黄茶色の釉を両面に施す。内面には釉剥がれが観察される。	I地区 E-27 遺構1	国	
				13.2	外底面は平坦気味に成形されており、胴部は両面とも輪縁成形後にナデを加えて仕上げている。	灰褐色の粗粒子で白色や黄色の鉱物を含む。	黄茶褐色の釉を両面に施す。外面には釉剥がれが観察される。			I地区 1層
II	底部	—	—	底面中央部は盛り上がりがついて薄ナデ調整を加えて仕上げている。胴部は両面とも輪縁成形後にナデを加えている。	淡灰白色の粗粒子で石英質を僅かに含む。	外面に黄茶褐色を、内面には黄茶色の釉を施す。内面には釉剥がれが観察される。	II地区 E-58 3層 0-10	III地区 G-43 遺構2		
			12.8	外底面は平坦に成形されているが、使用により磨耗しているようである。胴部は両面とも輪縁成形後にナデ調整を加えている。	濃灰色の粗粒子で僅かに白色の鉱物を混入する。	茶褐色の失透釉を両面に施す。			II地区 G-2 遺構1	
		—	—	小底の底面片と思われる。外底面は平坦に成形されており、胴部は輪縁成形後にナデを加えている。	濃桃褐色の粗粒子で僅かに白色の鉱物を混入する。	茶褐色の失透釉を両面に施す。	II地区 H-49 遺構1	III地区 H-49 遺構1		
			8.6	片部から角度を変えて立ち上がり、口縁部を微面に外反させる。胴部は両面とも輪縁成形後にナデ調整を加えている。	濃灰褐色の粗粒子で僅かに白色の鉱物を混入する。	茶褐色の釉を両面に施すが、二次的な火熱を受けた変色する。			I地区 1層	
		—	薄手のタイプで、すままるようにして口縁部を成形する。口唇部は大きく成形されている。内面の露出部にはナデ調整が観察される。	赤紫色の粗粒子。	黄茶褐色の釉を胴部内面から外面にかけて施している。	II地区 G-48 遺構1	陶			
—	薄手のタイプで、前部から角度を変えて立ち上がり、口縁部の断面は三角状を呈する。内面露出部には輪縁成形後にナデ調整を加えている。	灰白色の粗粒子。	黒褐色の釉を胴部内面から外面にかけて施している。	II地区 F-53 2層	器					
—	—	口縁断面はVI-a類と同様に玉縁状を呈するが、無頸の壺になるものと思われる。	灰色の粗粒子。	黄灰色の釉を両面に施す。		III地区 E-55 2層	III地区 E-49 遺構1			
第31図 図版20 18	水柱	10.4	口縁部は微面に外反し、口唇部は大きく成形されている。胴上部には注ぎ口を起りつた痕跡が僅かに残る。輪縁成形後にナデ調整を加えている。	灰白色の微粒子で白色や黄色の鉱物を多量に含む。	黄茶褐色の釉を両面に施す。	II地区 H-49 遺構1		III地区 G-53 3層		
		23.0	胴部がほぼ直線的に大きく開き、胴下部で内側に反り折れ、口縁部は三角状を呈する。内面に磨耗が認められる。内面には1単位毎の磨目を確認できる。	灰白色の微粒子で白色の鉱物を多量に混入する。	黄茶褐色の釉を口縁内面直下から外面にかけて施す。	II地区 G-53 3層				
—	—	—	—	—	—	—	I地区 1層			
—	—	—	—	—	—	—				
—	—	—	—	—	—	—	II地区 G-48 遺構1			
—	—	—	—	—	—	—				
—	—	—	—	—	—	—	I地区 F-11 1層			
—	—	—	—	—	—	—				
—	—	—	—	—	—	—	II地区 F-11 1層			
—	—	—	—	—	—	—				



第30图 褐釉陶器 1 中国産・壺 (1~17)



第31図 褐釉陶器2 中国産・水注 (18)、摺鉢 (19~22)、タイ産・壺 (23~35)

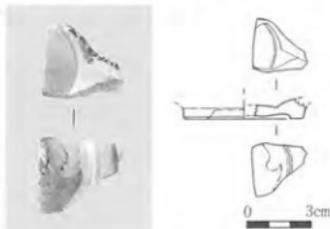
第5節 青白磁

青白磁碗の底部片と思われる資料がⅢ地区より1点検出されており、これを図化した(第32図・図版21)。推算高台径は5.4cmで、高台は低く成形されており、内削りは浅い。胴部は高台脇から外側に大きく開き、直線的に口縁部へ移行するものと思われる。内底中央を盛り上がった形に成形し、陰線線を施している。一般に「鏡」と称されるものである。釉は淡青白色の釉を全体に施しているが、高台内中央の釉を掻き取っている。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な黒色の鉱物を多量に混入する。僅かではあるが気泡痕も観られる(Ⅲ地区 F-53 3層)。

小 結

青白磁の出土例として、坂名城古島遺跡(註1)・(註2)・高腰城跡(註3)・阿波根古島遺跡(註4)・糸数城跡(註5)・住屋遺跡(註6)・クニンドー遺跡(註7)・銘苧原遺跡(註8)などがある。この資料については佐賀県教育委員会の大橋康二氏に鑑定(註9)を依頼したところ13世紀~14世紀頃の青白磁碗であることが判明した。県内において碗の出土例は少なく貴重な資料と言える。

- 註1. 金城電信【具志原村の遺跡】具志原教育委員会 1986年
 註2. 徳本 勲【大牧遺跡・野城遺跡】城辺町遺跡 1989年
 註3. 徳本 勲【高腰遺跡】城辺町遺跡 1989年
 註4. 金城電信・長嶺 均・照屋 孝・島袋 洋他【阿波根古島遺跡】沖縄県教育委員会 1990年
 註5. 金城電信【糸数城跡】玉城村教育委員会 1991年
 註6. 砂辺和正【住屋遺跡(平良市新庁舎建設に伴う記録保存のための緊急発掘調査記録)】平良市教育委員会 1992年
 註7. 金城電信・島袋 洋・上地克典他【クニンドー遺跡】南風原町教育委員会 1996年
 註8. 金武正記・島 弘・玉城安明・神宗善徳他【銘苧原遺跡】那覇市教育委員会 1997年
 註9. 1998年12月26日に出に現物を持参して、大橋康二氏に鑑定を依頼した。記して感謝の意を表したい。



図版21 青白磁 第32図 青白磁

第6節 中国産無釉陶器

中国産無釉陶器の破片がⅡ地区より1点のみ検出されている(第33図・図版22)。中国景德鎮の宜興窯を産とするものと考えられており、小型の急須の注ぎ口部分になるものと考えられる。注口の外面は研磨状の調整により丁寧に仕上げられているが、内面は雑に成形されている。素地は黒茶褐色の細粒子で混入物は観察できない。器色は濃茶褐色を呈しており、焼成は良好で硬い(Ⅱ地区 F-44 2層)。

小 結

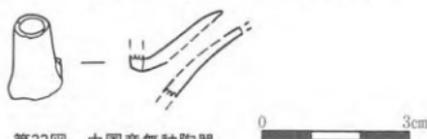
県内における中国景德鎮宜興窯産の無釉陶器の出土例として、慶来慶田城遺跡(註1)などで確認されているが少ないようである。景德鎮宜興窯は茶道具を多く生産していたようであり、今回得られた資料や慶来慶田城遺跡などで検出された無釉陶器についても茶道具や茶道具に関連する器種が予想される。この資料についても佐賀県教育委員会の大橋康二氏に鑑定(註2)を依頼したところ17世紀~19世紀前半に位置する資料であることが判明した。

湧田古窯跡にて類例資料(註3)がまとめて出土しており報告が待たれるところである。

- 註1. 金城電信・島袋 洋・金城 透他【慶来慶田城遺跡】沖縄県教育委員会 1997年
 註2. 1999年2月20日に出に現物を持参して、大橋康二氏に鑑定を依頼した。記して感謝の意を表したい。
 註3. 沖縄県教育委員会文化課保管の湧田古窯跡(県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査)出土品 現在資料整理中である。



図版22 中国産無釉陶器



第33図 中国産無釉陶器

第7節 黒釉陶器

本節では黒色の釉を施した焼物を黒釉陶器として取り扱った。黒釉陶器には黒釉天目茶碗、黒釉茶入れ壺、黒釉碗、壺、小壺の5種類が確認されているが、今回得られた資料は全て小破片であるため全形が窺えるような資料は見受けられない。以下、黒釉天目茶碗、黒釉茶入れ壺、黒釉碗、壺、小壺の順に個々の特徴などを記述する。

(1) 黒釉天目茶碗 (第34図1～5)

黒釉天目茶碗の破片が得られている。特徴的なものについて図示した。

1は高台に近い胴部破片で高台脇を水平に削る資料である。素地は灰黒色の細粒子で、微細な気泡痕が認められる。やや厚めの黒色の釉を両面に施しており、露胎部は雑に成形されている(Ⅲ地区F-55 3層10～20)。

2は高台に近い胴部破片である。素地は黄灰色の粗粒子で、厚い黒色の釉を両面に施している。露胎部は比較的丁寧に成形されている(Ⅲ地区F-55 3層0～5)。

3は高台脇を水平に削る胴部破片の資料である。素地は灰黒色の細粒子で、微細な気泡痕が認められる。やや厚めの黒色の釉に薄い茶色の釉を二度掛けしている。露胎部は雑に成形されている(Ⅱ地区F-37 2層)。

4は高台脇をやや水平に削る高台片の資料である。高台径は3.3cmで、内側りは浅く、外底を「の」の字状に掻き取っている。素地は灰黒色の細粒子で、厚い黒色の釉を施している(Ⅲ地区F-55 3層0～10)。

5も高台片である。高台径は2.8cmで、内側りは非常に浅く、外底を「の」の字状に掻き取っている。素地は淡灰色の粗粒子で、微細な気泡痕が認められるほか、灰色の鉱物を僅かに含む。内面に薄い黒色の釉を施している(Ⅰ地区1層9～10ライン)。

(2) 黒釉茶入れ壺 (第34図6)

黒釉茶入れ壺の破片が1点検出されている。

6は黒釉茶入れ壺の頸部片である。肩部で7mm前後張り出すことから肩衝茶入れの頸部片と思われる。素地は赤紫色の細粒子で、暗茶褐色の釉を外面に施している(Ⅲ地区G-56 3層0～10)。

(3) 黒釉碗 (第34図7)

釉色等は黒釉天目茶碗に類似するが、器形にかなりの差異があるものを黒釉碗として取り扱った。

7は高台片である。高台径は3.4cmで、畳付の外端を斜位に削り取り面取りしている。素地は淡棕色の粗粒子、出非常に薄い暗茶褐色の釉を施しており、高台には釉垂れが認められる(Ⅱ地区G-42 2層)。

(4) 壺 (第34図8)

8は厚手の壺の胴部片である。素地及び釉色等は黒釉天目茶碗に非常に類似するが、内面に明瞭な轆轤痕が確認できる。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が認められ、黒色の鉱物を含む。外面に薄い黒茶褐色の釉を施しており、禾目が認められる。(Ⅲ地区G-60 B)。

(5) 小壺 (第34図9)

9は小壺の口縁破片である。口径は3.6cmで、薄手の有頸小壺と思われる。素地は橙白色の細粒子で、微細な気泡痕が認められる。黒色の釉を両面に施した後で頸部内面から口唇外端にかけて釉を掻き取って露胎にしてある。頸部内面と口縁直下は茶褐色を呈す(Ⅱ地区G-42 2層)。

小 結

本遺跡より検出された黒釉天目茶碗については、高台脇を水平に削る深めの碗(註1)に相当し、首里城跡京の内において出土したものと同タイプと考えられる(註2)。また首里城跡京の内(註3)や屋良グスク(註4)出土の福州閩侯県南嶼窯産を生産地とするであろうと思われる黒釉天目茶碗に素地や釉色の特徴が類似していることから、本遺跡より出土した黒釉天目茶碗も閩侯県南嶼窯産の可能性が考えられる。黒釉茶入れ壺の出土例は、北は今帰仁城跡(註5)から南はピロースク遺跡(註6)にかけて広範囲にわたり出土しているが、Ⅲ地区より出土した肩衝茶入れ壺に関しては、首里城跡京の内(註7)や稲福遺跡(註8)等で見られるが出土例は少なく、今後の検出増加を待ちたいと考える。黒釉碗として分類した碗については、首里城跡京の内(註9)より出土した黒釉碗と多少の差異は見られるが、同様の範疇に納まるものと考えられる。壺と小壺については、図8の厚手の壺や図9の頸部内面から口唇外端まで釉を掻き取って成形しているタイプの小壺は今のところ例がなく、今後の検出増加を期待したい。今回本遺跡から黒釉天目茶碗や黒釉茶入れ壺等の黒釉陶器が検出されたことは、これらの茶器類を入手することが可能な有力な按司が喜友名グスクに存在した可能性を示すものと考えられる。

註

- 註1. 森本分類試案 森本朝子「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目-福建省建甌出土天目と日本伝世の天目-』茶道資料館 1994年
 註2. 金城亀信・上原 勝・城岡 肇他【百里城跡 京の内跡発掘調査報告書(1)】沖縄県教育委員会 1988年
 註3. 註2に同じ
 註4. 富真嗣一・大城 慧・金城亀信・鳥袋 洋他【歴史ガスク】嘉手納町教育委員会 1994年
 註5. 金武正紀・宮里末廣他【今帰仁城跡 発掘調査報告書1】今帰仁村教育委員会 1983年
 註6. 金城正紀・阿利直治【ピロースク遺跡】石垣市教育委員会 1983年
 註7. 註2に同じ
 註8. 富真嗣一・大城 慧他【細福遺跡発掘調査報告書】沖縄県教育委員会 1983年
 註9. 註2に同じ

第8節 三彩

三彩及び緑釉陶器片が得られているが、どちらも量的には僅少である。全て小破片の資料であるため、三彩については器種や器形が判然とせず、緑釉については皿・壺が確認されたが、全形が示せる資料はない。以下、特徴的なものについては図示し、記述することとする。

(1) 三彩 (第34図10)

10は素地が黄白色でやや粗く、内面の調整にナデや指圧を加えて成形している。外面には白化粧を施した後、黄釉と緑釉を施しており、一部変色して銀色となっている。内面は露胎である。また外面には葉っぱ様及び羽状の文様が描かれているが構図は判然としなない(Ⅲ地区H-55 3層0~10)。

(2) 緑釉 (第34図11~13)

11は皿の底部片であると考えられる。両面にナデを加えて成形し、内底面に白化粧をした後、明緑色の釉を施している。外底面は露胎である。文様としては外底面には葉っぱ様を確認できる。素地は淡橙色の粗粒子で、微細な黒色の鉱物が含まれている(Ⅲ地区G-60 B)。

12は壺の胴部片である。内面は轆轤成形後にナデを加えて調整している。外面には白化粧の後に明緑色の釉を施しており、文様等は見当らない。素地は桃褐色でやや粗く、微細な黒色の鉱物を僅かに混入している(Ⅰ地区F-12 遺構4)。

13は壺の底部片である。素地や釉色等の特徴から3と同一個体であると考えられる。底径は6.9cmを有し、内面は轆轤成形後、ナデを加えて調整し、外面には白化粧を施した後、明緑色の釉を施している。文様等は見当らない。素地は桃褐色でやや粗く、微細な黒色の鉱物を僅かに含む(Ⅰ地区 1層)。

小 結

三彩については、豊見城城内で確認された鶴型水注(註1)や南山城跡の鴨型水注(註2)、阿波根古島遺跡出土の人型水注(註3)等が確認されている。今回検出された三彩は器種不明としているが、置物もしくは瓶、水注の台や脚の可能性が今のところ考えられる。文様は鶴型水注の文様に類似しているが、このようなタイプの出土例は確認されておらず、今後の検出増加を期待したい。緑釉陶器皿及び壺出土例としては、湧田古窯跡(註4)、慶来慶田城遺跡(註5)、阿波根古島遺跡(註6)等で出土しており、これらの出土状況から本遺跡出土の緑釉陶器も15世紀終末~16世紀に納まるものと考えられる。

註

- 註1. 金城亀信「豊見城城内確認の明代三彩水注」【文化課紀要第6号】沖縄県教育委員会 1990年
 註2. 亀井明徳「明代華南彩陶をめぐる諸問題」【三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編】三上次男博士喜寿記念論文集編集委員会 1985年
 註3. 金城亀信他「阿波根古島遺跡」沖縄県教育委員会 1990年
 註4. 鳥袋 洋・金城亀信他【湧田古窯跡(Ⅱ)】沖縄県教育委員会 1995年
 註5. 金城亀信・鳥袋 洋・金城 透他【慶来慶田城遺跡】沖縄県教育委員会 1997年
 註6. 註3に同じ

第9節 色絵

色絵の破片が出土している（第34図14）。細片化しており全形が窺えるような資料はない。器種は碗と皿があるが、ここでは文様の確認された碗の口縁破片について述べることにする。

碗の口縁破片が1点得られている。

第34図14は口縁がきつく外反する碗で、外面の口縁直下に2本の圏線を描き、その下に構図不明の斜線などを描いているほか、内面にも口縁直下に2本の圏線を描いている。釉色は白色を呈しており、素地は淡灰白色の微粒子である（Ⅱ地区 E-41）。

第10節 瑠璃釉

瑠璃釉の小杯と水注の注ぎ口の破片が出土している。いずれも小破片であるため、特徴的なものを図示し、器種別に述べることにする。

(1) 小杯（第35図15）

15は小杯の口縁破片である。推算された口径が3.6cmを測る。釉は両面に施されているが、二次的な火熱を受けているものと思われ、外面は藍濁色。内面は白濁糸満市西川町を呈しており、口唇部は口禿となっている。素地は淡灰白色の微粒子である（Ⅲ地区 G-60 B）。

(2) 注ぎ口（第35図16）

16は水注の注ぎ口の破片資料である。注ぎ口の根元に近い部分であると思われる、外面には型合わせて成形されたと思われる浮文が確認できる。釉は厚い藍色のものを外面に施している。内面には薄い青白色の釉を施しているが、一部藍色の釉が垂れている。素地は白色の微粒子である（Ⅱ地区 H-49 1層）。

瑠璃釉水注の全形が窺える資料としては、首里城跡京の内（註1）出土の水注（仙蓋瓶）があるが、出土例は少ないようである。今後の検出増加を期待したい。

註

註1. 金城亀信・上原 静・城間 肇他『首里城跡京の内跡発掘調査報告書（1）』沖縄県教育委員会 1998年

第11節 鉄釉染付

小杯の口縁破片が1点出土している。

第35図17は口縁が僅かに外反する小杯の破片の資料である。推算口径は6.6cmであった。外面の釉は淡黄褐色を呈している。内面には口縁直下に呉須で2本の圏線を描く。釉色は淡青白色を呈する。素地は白色の微粒子（Ⅱ地区 G-48 遺構 1 1層）。

今回本遺跡より検出された鉄釉染付は、一般的な鉄釉染付の外面に施された鉄釉とは釉の色調が異なるため、褐釉が施された可能性も考慮されるものと思われる。今後の類例資料の増加に期待したい。

第12節 白釉陶器

ここでは白色の釉薬がかった焼物を白釉陶器として取り扱った。

第35図18は袋物の底部破片であると思われる。外面の一部には白釉が施されているのが確認できるが、内面は露胎である。外面の露胎部と内面及び外底部にはナデによる調整と指圧痕が認められる。素地は淡桃褐色を呈しており、やや粗めである（Ⅱ地区 H-43 2層）。

第13節 タイ産半練

タイ産半練が出土しているが、小破片のため全形が窺える資料はない。器種は蓋と身が確認されている。

(1) 蓋（第35図19）

19は落し蓋の端部破片である。折り曲げた先端部をつまみ上げて突起状に成形しているようであるが、破損している。つまみの内側下部に幅5mm前後の窪りを廻らし、器面には指ナデを加えて調整している。器色は橙白色で、焼成は良く硬い。胎土は細かく、粗い石英?と黒色、茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。劈開面は灰褐色を帯びる(Ⅱ地区 G-43 2層)。

(2) 身(第35図20)

20は身の胴部破片で、器種としては壺が考えられる。外面には斜位の叩き痕があり、内面には指圧痕が認められ、内面に指をあてて外面から叩いたものと考えられる。器色は両面とも橙灰色で、焼成は良く硬い。胎土は非常に細かく、微細な灰色の鉱物を僅かに含む。劈開面は灰白色を帯びる(Ⅱ地区 F-40 遺構1 1層)。タイ産半練の落し蓋については、金武正紀氏(註1)や金城亀信氏(註2)によって詳細な分類がなされている。壺と思われる身の器形については、博多出土の半練壺(註3)などの例から、フラスコ状の器形を呈するものと考えられ、類例としては首里城跡(註4)、ヒヤジョー毛遺跡(註5)出土がある。

註

- 註1 金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』第11号 日本貿易陶磁研究会 1991年
註2 金城亀信・上原 静・城間 肇他「首里城跡宮の内発掘調査報告書(Ⅰ)」沖縄県教育委員会 1998年
註3 有島美江「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』第11号 日本貿易陶磁研究会 1991年
註4 富眞嗣一・上原 静「首里城跡敷地門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査」沖縄県教育委員会 1988年
註5 金武正紀・城間千栄子「ヒヤジョー毛遺跡」那覇市教育委員会 1994年

第14節 鉄 絵

ここではタイ産鉄絵と中国もしくは東南アジアを生産地とするであろうと思われる鉄絵について取り扱うことにする。各地域から撤入された鉄絵を器種別に見てみると、合子・壺・碗もしくは蓋が検出されている。以下、産地別に分類整理して、述べることにする。

(1) タイ産鉄絵(第35図21~24)

タイ産鉄絵の器種としては、合子と壺の2器種が確認されている。

21は合子の蓋の破片で、図上復元を試みた。縁端の径は10.4cmを測る。蓋甲外面に灰黒色の釉で界線・縦線・斜位に格子状の文様を描いた後に灰白色の透明釉を施して、縁外端部の釉を掻き取って口壳にしている。内面は露胎で、轆轤成形後にナデ調整を加えている。素地は灰白色で比較的細かく、微細な黒色の鉱物が多量に含まれている(Ⅰ地区 E-27 遺構1上部)。

22は合子の身の破片と思われる資料である。外面に灰黒色の釉で3本の界線を描いた後に灰白色の透明釉を施しているが、胴下部は釉を掻き取って露胎にしている。内面は露胎で、轆轤成形後のナデ調整や指圧痕が認められる。素地は灰白色の粗粒子で、微細な黒色及び灰色の鉱物を多量に含む(Ⅲ地区 E-59 遺構6)。

23は厚手の壺の破片である。両面に灰白色の透明釉を施した後、外面に暗茶褐色の釉で2本の界線と波状の文様、さらに2本の界線を描いており、細かい貫入も見られる。素地は灰白色の細粒子である(Ⅰ地区 1層)。

24は碗の高台片もしくは蓋の破片で、復元直径は5.7cmを有する。外面に暗茶褐色の釉を施した後、下部を掻き取っている。内面は露胎で、明瞭な轆轤痕が確認できる。素地は灰白色の粗粒子で、微細な灰色と黒色の鉱物を多量に含む(Ⅱ地区 G-43 2層5~10)。

(2) 中国産か東南アジア産(第35図25・26)

壺と小壺が検出されている。

25は薄手の壺の胴部片と思われる資料である。外面に淡橙白色の釉を施した後、茶褐色の釉を施しているが文様の構図等は不明である。内面は露胎で、轆轤痕が明瞭に確認できる。素地は暗茶褐色の細粒子で微細な気泡痕が認められる(Ⅰ地区 1層)。

26は小壺の胴部破片で、外面には灰緑色の釉に濃緑色の釉を施している。内面は露胎で、明瞭な轆轤痕が認められる。素地は灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が観察できる(Ⅰ地区 E-35 2層)。

小 結

タイ産鉄絵の合子については、慶楽慶田城遺跡(註1)・クニンドー遺跡(註2)・湧田古窯跡(註3)・阿波根古島遺跡(註4)等で出土しており、最近になって発見例が増加している。本遺跡出土のタイ産鉄絵の合子は他の遺跡の出土例などから15~16世紀に納まるものと思われる。24は碗もしくは蓋が今のところ考えられ

るが、内面が露胎である状況などから蓋の可能性が強いのではないだろうか。県内にはこのタイプの類例資料がないことから、今後の研究や発掘調査の成果に期待したい。

註

- 註1. 金城亀信・鳥袋 洋・金城 透他『慶徳田城遺跡』沖縄県教育委員会 1997年
 註2. 金城亀信・鳥袋 洋・上地克哉他『クニンドー遺跡』南風原町教育委員会 1996年
 註3. 鳥袋 洋・金城亀信他『湧田古窯跡(Ⅱ)』沖縄県教育委員会 1995年
 註4. 金城亀信他『阿波根古鳥遺跡』沖縄県教育委員会 1990年

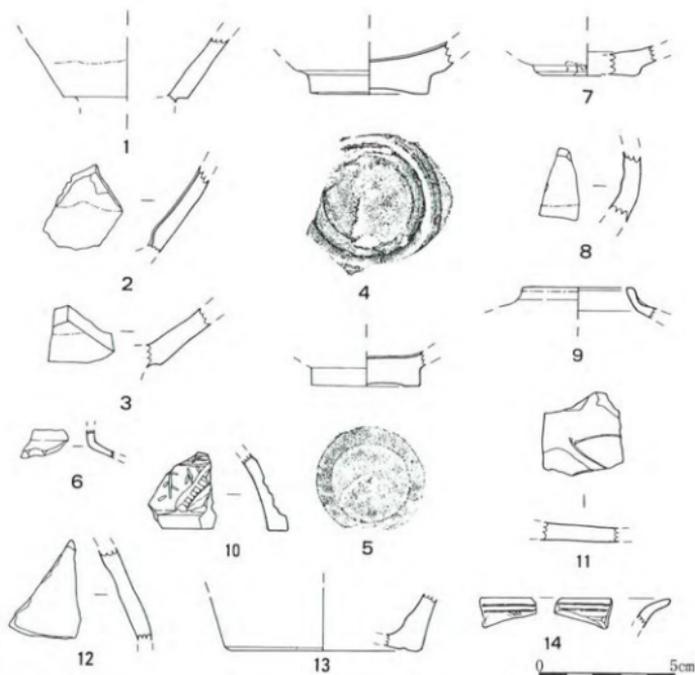
第15節 備前

備前焼の摺鉢の口縁破片が1点検出されている。口縁部には盤口状の縁帯を持ち、ほぼ直立して成形されている。内面にはおろし目とされる筋状の櫛目が1状確認できる。外面の成形は内面よりも雑である。素地は茶紫色の粗粒子で、細かい白色の鉱物を多量に含んでおり、僅かではあるが4mm×5mm程度の白色の鉱物が含まれている。

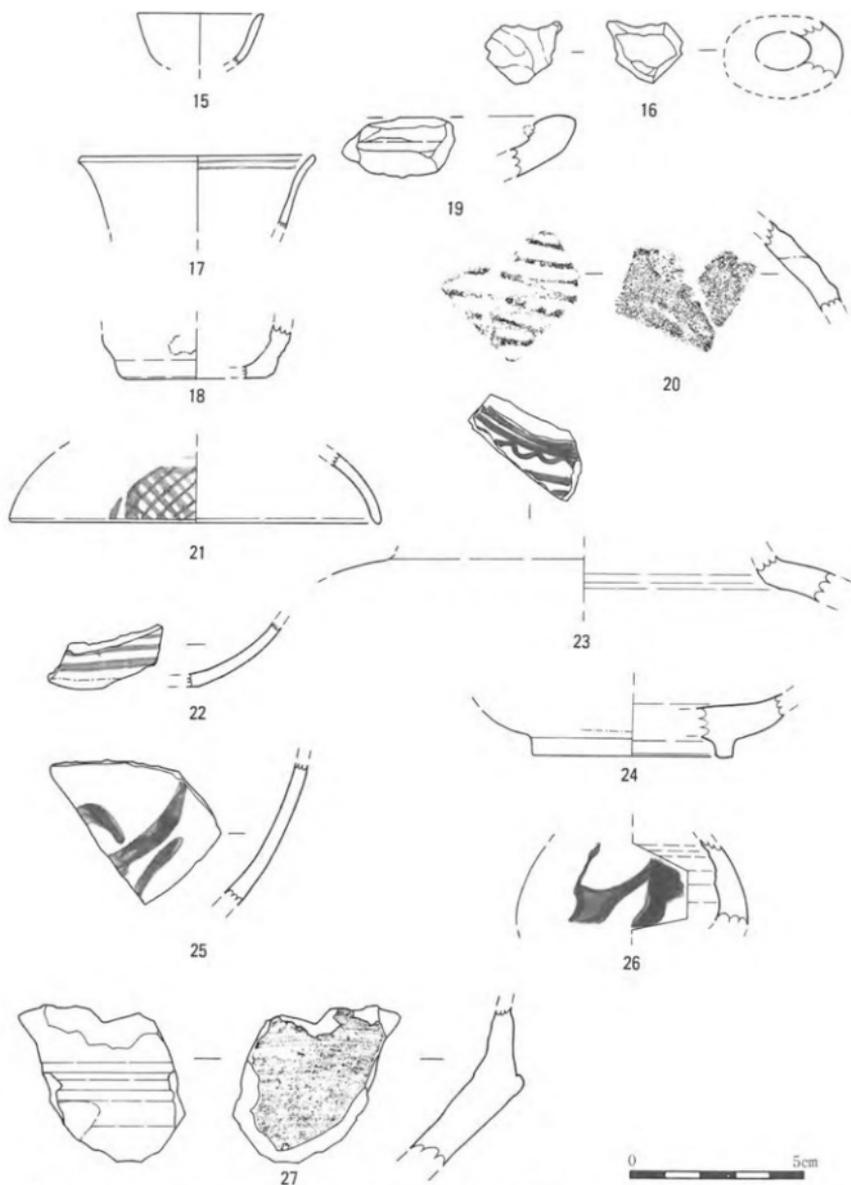
口縁形態等の諸特徴から間壁福年(註1)のⅣ期に相当するものと思われるが、口縁部の盤口状の縁帯の突起が上向きに成形されており、いわゆるⅣ期とされるタイプへ移行する時期の資料の可能性も考慮されるものと思われる(Ⅲ地区 H-52~53A)。

註

- 註1. 間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社 1991年



第34図 黒釉陶器(1~9)、三彩(10~13)、色絵(14)



第35図 瑠璃軸(15、16)、鉄釉染付(17)、白釉陶器(18)、タイ産半練(19、20)、鉄絵(21~26)、備前(27)

第16節 本土産陶磁器

今回の調査により本土産陶磁器とみられる資料が900点余得られており、時期的には17・18世紀～20世紀半ば頃迄のものようである。しかし近・現代の資料が殆どで、器種としては碗・小碗・皿・小杯・急須等が得られており、量的には碗の資料が多い。肥前系・薩摩系の資料も僅かではあるが得られている。以下、17～19世紀の資料と近・現代の資料に分けて略述する。

(1) 17～19世紀の陶磁器〔明治以前〕(第36図)

今回得られた資料は11点で、その中から碗・小碗・皿・蓋等の特徴的なものを第36図に掲げた。1は、皿?の口縁部資料で、九州産とみられる。口縁部が、やや内傾する直口口縁。胎土に白化粧を施し、釉は褐色で両面に施す。口唇外面は、釉をかきとる、いわゆる釉剥げとなっている。17～18世紀頃の所産とみられる(Ⅲ地区 F-53 3層)。2は、薩摩系とみられる碗の底部で底径4.0cmを測る。湯呑み碗とみられ、腰部に施文しているが、構図は不明。釉は灰白色で、呉須の発色は鈍い。畳付は無釉。19世紀前半頃(Ⅰ地区 1層)。3は、薩摩系とみられる碗の底部で底径3.8cmを測る。高台脇と胴部に界線を廻らす。釉は灰白色で、呉須の発色は鈍い。見込みに貫入が見られる。畳付は無釉。19世紀頃。(Ⅲ地区 G-60 B)。4は肥前系の皿で、見込みに草花文を描きそれを蛸唐草文で囲む、外面にも花唐草?を描く。高台には雷文帯を施す。高台内には「富貴長春」の銘あり。釉は白色で、呉須の発色は見込みは鮮明であるが、胴部の内外面は鈍い。畳付は無釉。18世紀頃(Ⅱ地区 F-43 遺構2 5層)。5は、肥前系の蓋の破片資料である。推算径は8.0cmを測る。釉は灰白色。蓋内面の縁は無釉。19世紀以降。(Ⅱ地区 1層)。

(2) 近・現代の陶磁器〔明治以降〕(第37図～第39図)

明治に入ると磁器の絵付けの手法に工夫がなされ、これまでの筆による絵付けに代わって間接的に絵付けを行う、印判又は印判手(註1)と呼ばれる技法が一般的となる。これは、技法により①型紙絵付け(註2)・②刷版絵付け(註3)・③ゴム版絵付け(註4)に分けられ、また特殊な絵付けとして④吹き絵(註5)の技法もあり、これらの技法とあわせて絵具としての⑤クロム(註6)の普及が日常雑器の大量生産をもたらしたようである。本遺跡出土の陶磁器も、これらの資料が中心をなし、それに加え⑥戦時中に生産した(註7)とみられる資料も得られている。個々の資料の特徴については、観察一覧(第13表)にて表す。

①の碗は文様によって、かなりのパターンに分類できると思われるが、今回は6種の文様を取り上げた。

Aタイプ-外反碗。外面は点描で三角と逆三角を配し、胴部に菱形の窓が連続的に廻る。その窓内には、内側に向く三角文を円形状に配し、その中に花文を配する。内面の口縁上端部に1条の圏線を施し、口唇部から圏線に逆三角を点描で配し、圏線との間にできた三角の窓内に花文?を配する。内底面に1条の圏線と花文(梅)を配する。

Bタイプ-外反碗。外面は草花(梅)を廻らす。内面の口縁上端部に1条の圏線を施し、その上部に花文(梅?)を廻らす。内底面に1条の圏線と花文(梅?)を配する。

Cタイプ-外反碗。外面は短斜線を交差させ、菱形を連ねた文様を施し、丸窓には花文?と寿?の文様を配する。内面の口縁上端部に1条の圏線を施し、その上部に短斜線を交差させた文様を廻らす。内底面に1条の圏線を施す。

Dタイプ-外反碗。外面は点描を廻らし、その中に星・笹・松を描く。また梅形の窓を設け、花文(水仙)を配する。内面の口縁上端部に1条の圏線を施し、その上部に点描を廻らし、その中に梅・笹・松を描く。内底面に1条の圏線と草花文(梅・菊?)を配する。

Eタイプ-外反碗。外面は点描を廻らし、その中に菱形と梅型の窓を設け、菱形には福寿・梅型には鶴丸の文様を配する。内面の口縁上端部に1条の圏線を施し、その上部に点描を廻らし、その中に花文(菊)を描く。内底面に1条の圏線と草花文(梅・菊?)を配する。

Fタイプ-直口碗。外面は点描で三角と逆三角を配し、胴部に菱形の窓が連続的に廻る。その窓内に花文(菊)を配する。内面の口縁上端部に短斜線で五角形と逆五角形を描き、菱形の窓内に短斜線で菱形を描く。内底面に1条の圏線と草花文(菊)を配する。

小 結

本土産陶磁器とみられる資料900点余のうち、①～⑥の資料が890点余と全体の約98%を占めた。①は、沖縄で

第13表 a 本土産陶磁器観察一覧

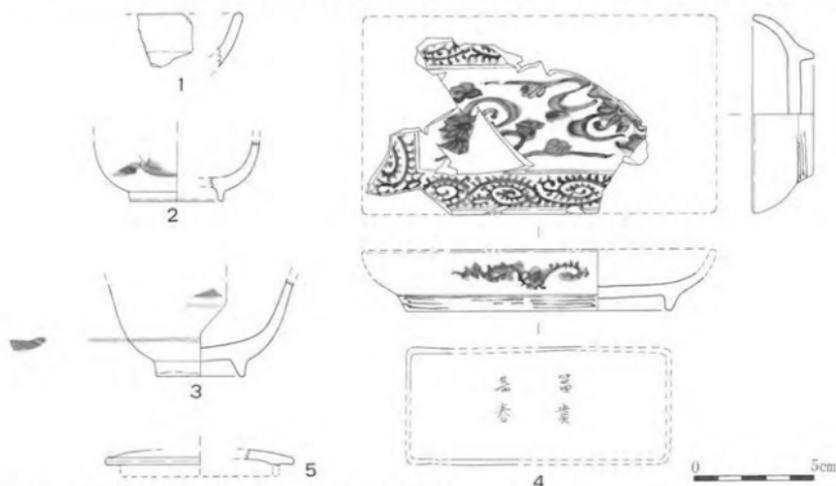
種別	器名	部位	口径	底径	高さ	素材・ 釉色	形状	文様等の特徴	備考	出土地点
第3区7回 図録26	1	陶	口縁部 ～ 底部	13.3 4.6	5.6	灰白色の 染付土 灰白色	磨付を 除き 染付 施す。	高台脇に破線と1条の磨線、その間に三角文様を施す。高台にも1条の磨線。高台内に底ノリあり。内底面に胎土目を5箇所確認する。外面・口縁内面とも型紙3枚で陶削する。	★より同タイプ6点出土。	I地区 F-49
	3	陶	口縁部 ～ 底部	16.0 5.1	5.7	白色の 染付土 灰白色	内外共にとも 磨付を 施す。	高台脇に破線と1条の磨線、その間に三角文様を施す。内底面に胎土目を1箇所確認する。内外面に貫入がみられる。	I地区 1層	
										4
	5	陶	口縁部 ～ 底部	12.8 4.6	5.4	白色の 染付土 灰白色	磨付を 除き 染付 施す。	高台脇に破線、その下部に三角文様を施す。内底面に胎土目を5箇所確認する。外面・口縁内面とも型紙3枚で陶削する。	★より同タイプ2点出土。 I地区 F-49 ★	
										6
	7	陶	口縁部 ～ 底部	11.6 3.9	5.1	白色の 染付土 白色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口縁、外面は破線の樹木の葉で区画し、その間に扇形化した花文と雲を施す。締込み成型。ゴム紙貼付け。	I地区 1層	
										8
	9	陶	口縁部 ～ 底部	11.2 4.1	5.2	白色の 染付土 濃緑色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口縁、磨付を除いて全面に濃緑色の釉を施す。磨付部分に砂粒付替。戦時中の統制経済下の食器。	神戸・美濃系。 ★より同タイプ6点出土。	
										10
11	小陶	口縁部 ～ 底部	7.5 3.5	4.7	白色の 染付土 白色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口縁、外面に花文(牡丹)を配する。輪下形。締込み成型。新製給付け。	★より類似タイプで花文を配する小陶6点出土。 I地区 F-49 ★		
									12	小陶
13	小陶	口縁部 ～ 底部	7.8 3.7	4.7	白色の 染付土 白色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口縁、外面に胸の丸と月?を配する。磨付部分に砂粒付替。輪下形。締込み成型。新製給付け。	I地区 F-49 ★		
									14	小陶
15	小陶	口縁部 ～ 底部	8.3 3.0	4.8	白色の 染付土 白色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口縁、外面に3タイプの丸形文様を配する。口縁部・高台ぎわに1条の磨線を配する。磨付部分に砂粒付替。締込み成型。ゴム紙貼付け。	★より同タイプ1点出土。 I地区 F-49 ★		
									16	小陶
17	陶	口縁部 ～ 底部	6.5 3.7	7.3	白色の 染付土 白色	磨付を 除き 染付 施す。	色絵の陶茶碗。外面の色は全て削げ落ちており、斜然としない。文様は花と虫か。磨付の外側を斜めに面取り。締込み成型。輪上形。	明治遺。I地区 E-27 遺跡1上		
									1	陶
2	陶	口縁部 ～ 底部	10.8 6.6	2.2	白色の 染付土 灰白色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口口縁、内面は扇車と草花(藤か)文を配する。外面にも文様を施すが斜然としない。口唇部にコバルト釉を施す。型紙貼付け。	I地区 F-47 2層 9-10		
									3	陶
4	陶	口縁部 ～ 底部	12.8 7.3	4.5	白色の 染付土 白色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口口縁、内面に桜花を六つ開らし、見込みには丸の中に桜花を施す。新製給付け。	★より同タイプ7点出土。 I地区 F-49 ★		
									5	陶
6	陶	口縁部 ～ 底部	11.2 6.1	2.5	白色の 染付土 白色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口口縁、内面は紗線形で区画した窓に、3層の山水画を配し見込みには草花文を施す。新製給付け。	★より同タイプ4点出土。 I地区 F-49 ★		
									7	陶
8	陶	口縁部 ～ 底部	10.4 6.4	1.8	白色の 染付土 濃緑色	磨付を 除き 染付 施す。	蓋口口縁、内面に草花文と鶴?を施すが、全体の磨証は斜然としない。クロム青施。	明治～大正頃。田地区 H-52		
									9	陶

※表中の★は本土産陶磁器集中期を指す、Sはサターナーンを指す。口径・底径・高さの単位はcm。

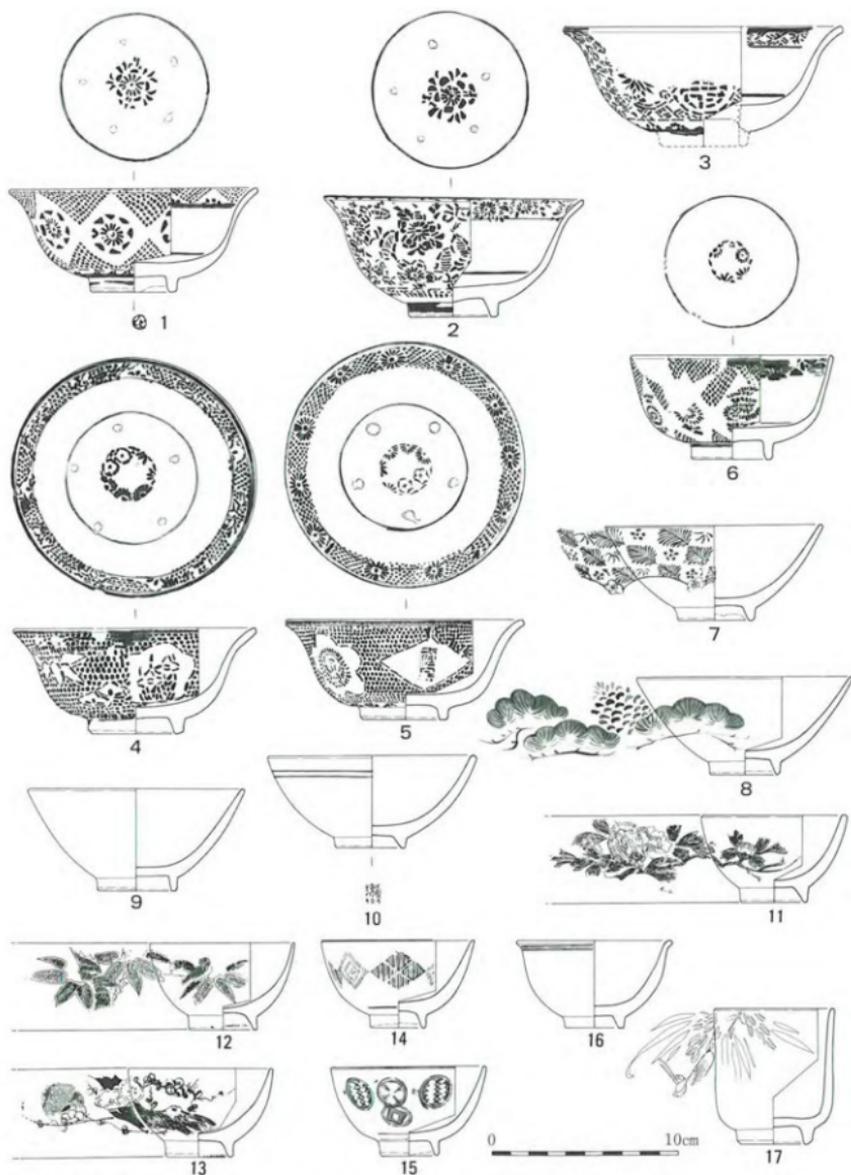
第13表 b 本土産陶磁器観察一覧

採出地 年代 器物番号	種類	部位	口径 底径 高さ 特色	裏地 特色	形状	文様等の特徴	備考	出土地点
第39回 昭和27	小杯	口縁部 ～ 底部	13.3 7.2 2.7	白色の 焼成。 白色。	覆付と 除き 乾輪。	裏口口縁。内面は赤色と金色で文様(蔓草)を施すが、裏面は自然とし ない。裏中には厚手の中に「金」字と「草」字の透かし彫りの形に施 す。裏面から裏面に横状の割れ筋がある。	★より同タイプ2点出土。類似タイプ 6点出土。	日地区 F-43 ★
"	小杯	口縁部 ～ 底部	8.4 2.8 2.7	白色の 焼成。 白色。	覆付と 除き 乾輪。	裏口口縁。外面の口縁部から内面にかけて、3層の鉄線を施す。外 面にはコバルト釉で幾何的な文様を配する。口縁外面を厚めに仕立 上げる。裏面内は楕円の凹状の彫りに施してある。見込みと外面には緑 色の鉄線が施される。	明治以降。関西系?又は神戸・美濃 産?	日地区 F-43 ★
"	小杯	口縁部 ～ 底部	5.5 2.2 3.0	白色の 焼成。 内面白色	覆付を 除き 乾輪。	外反口縁。内面に金色で、「特別大萬葉歌」(野篁二十四)「真赤 」と記す。見込みには厚手の中に「金」字と「草」字の透かし彫りして いる。外面は赤色の鉄線を施し、裏とその花びらを通らす。内面と裏 面内は白色鉄線を施す。跡込み成型。		日地区 F-43 ★
"	小杯	口縁部 ～ 底部	5.5 2.3 3.0	白色の 焼成。 白色。	覆付を 除き 乾輪。	外反口縁。内面に金色で、「真磨」と記す。見込みには厚手の中に「忠 義」と記す。その上に目の丸と蔓草。互に裏に施す。裏面に配してい る。口縁部の内外面から裏面には淡青色の鉄線を施す。裏面の内面に 砂粒付着。跡込み成型。		日地区 F-43 ★
"	小杯	口縁部 ～ 底部	5.8 2.4 2.8	白色の 焼成。 白色。	覆付を 除き 乾輪。	外反口縁。内面の文様は割れ落ちて自然としない。口縁内外面には、 淡青色の鉄線を施す。裏面は彫りに成型し、裏面から裏面に横状にか けて乾の型を施す。		日地区 F-43 ★
"	小杯	口縁部 ～ 底部	4.1 2.3 2.6	白色の 焼成。 白色。	覆付を 除き 乾輪。	外反口縁。内面の文様は割れ落ちて自然としないが草花文か。 口縁部の内面に赤色の鉄線が施される。		日地区 F-43 ★
"	小杯	口縁部 ～ 底部	5.6 2.3 3.1	緑色の 焼成。 緑色。	覆付を 除き 乾輪。	外反口縁。内面に金色で施した文様は割れ落ちて自然としない。見 込みには幾何的な中に「草」字の型を施す。裏面の内面に砂粒付着。 跡込み成型。クロム青磁。	★より同タイプ1点出土。	日地区 F-43 ★
"	小杯	口縁部 ～ 底部	3.1 1.9 2.8	白色の 焼成。 白色。	覆付を 除き 乾輪。	外反口縁。内面に松と鶴を配する。松と鶴の色の彫りは割れ落ちて いるが僅かに赤・緑・金を輝かす。裏面の内面に砂粒付着。		日地区 F-43 ★
"	小杯	口縁部 ～ 底部	5.4 2.5 2.8	白色の 焼成。 白色。	覆付を 除き 乾輪。	外反口縁。内面に金色で「真磨」と記す。見込みには赤・黒・墨 ・金文字を配する。裏面には赤・黒・墨文字を施す。外面は鉄 線を施し「赤」字と「大和心」を「精」字と「山花」を「草」字と 「草」字を型押ししてある。裏面は彫りに成型する。		日地区 F-43 ★
"	瓶	口縁部 ～ 底部	30.0 5.0 15.1	白色の 焼成。 淡緑色。	覆付を 除き 乾輪。	裏口口縁。外面は淡緑色の鉄線を施す。内面と裏面は透明釉。 肩部分から腹部分にかけて大柄の草花文を施す。内面に緑色の鉄線が 施される。裏面に砂粒付着。クロム青磁。	明治・大正頃。 神戸・美濃系。	I地区 I層
"	煮鉢	口縁部 ～ 底部	11.4 10.8 7.8	白色の 焼成。 白色。	覆付と 高台内 面焼。	外面は口縁部に8本の鉄線、底部に9本の鉄線を施す。口縁部は 逆L字状に成型し口唇部を広く作る。釉は外面から内面途中で、 その途中から内面まで施す。裏面は三層鉄線が施される。	明治・大正頃。 神戸・美濃系。	日地区 G-57 I層 S
"	皿		7.4 — —	白色の 焼成。 — 白色。	外面は 焼成。	裏面にコバルト釉で、文様を施すが裏面は自然としない。裏面 (厚手層上部)に1本の鉄線を施す。つまみは欠落。裏面内面の鉄 線部分のみ焼成。	明治以降。 神戸・美濃系?	不明
"	皿		6.6 — 2.7	白色の 焼成。 灰白色。	外面は 焼成。	裏面にコバルト釉で、文様を施すが裏面は自然としない。裏面 (厚手層上部)に1本の鉄線を施す。つまみは欠落。裏面内面の鉄 線部分のみ焼成。	明治以降。 神戸・美濃系?	日地区 G-43 F-43内
"	急須		5.6 6.9 7.4	白色の 焼成。 淡灰白色。	内外面 は	外面は淡灰白色で焼成し、緑と茶色の釉で文様(龍)を施す。把手 は緑色の鉄線を施す。裏面は白色鉄線を施す。裏面・覆付・高台内 面に砂粒付着。跡込み成型。	明治・大正頃。	不明

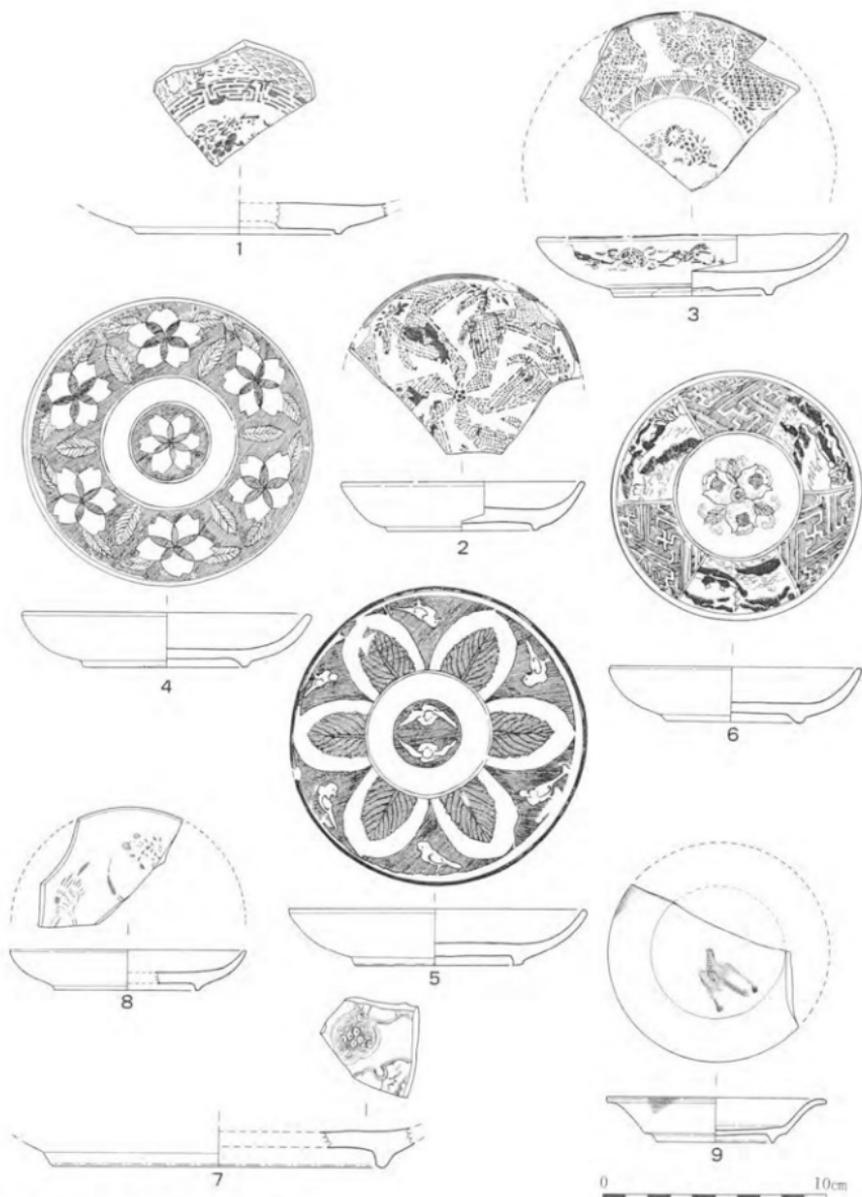
※表中の★は本土産陶磁器類中を指す。Sはサーカー、Fはフル内はワッフルを指す。口径・底径・高さの単位は cm。



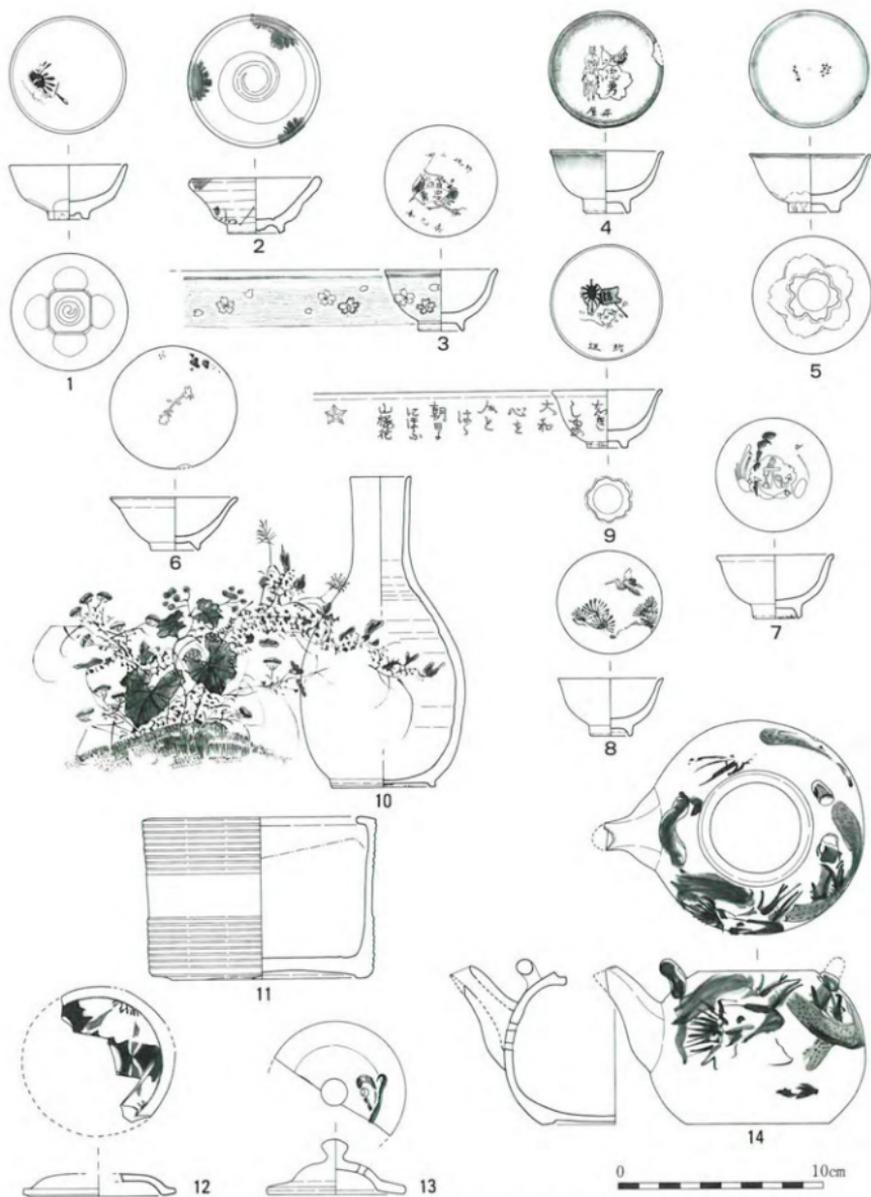
第36図 本土産陶磁器 1 皿(1、4)、碗(2、3)、蓋(5)



第37圖 本土産陶磁器2 碗 (1-10)、小碗 (11-16)、筒碗 (17)



第38図 本土産陶磁器 3 皿 (1~9)



第39图 本土産陶磁器 4 小杯(1~9)、瓶(10)、香炉(11)、蓋(12、13)、急須(14)

第17節 南島須恵器

総て小破片の資料で、50点が確認されている。内訳は口縁部が4点、胴部が44点、底部が2点である。これらの資料は粘土・混入物・器色その他の特徴などから、池田榮史のいう南島の類須恵器(註1)の一群に属するものである。県下のグスク～近世遺跡から普通に出土し、奄美徳之島にあるカムイヤキ古窯(註2)が産地とされるものの範疇に入るものである。近年のヒヤジョー毛遺跡(註3)などの調査により、白磁玉縁口縁碗や滑石製石鍋とのセット関係が明確になってきている。今回得られたいずれの資料にも文様はみられない。

出土状況を見るとⅠ地区から4点、Ⅱ地区から15点、Ⅲ地区から29点、地区不明2点となっており、グスクの時期とみられるⅢ地区から最も多く得られている。Ⅱ地区のものはⅠ地区から流れ込んだものかと考えられる。器種的にはほとんどが壺形になるものとみられ、明らかにそれ以外の器種を示すものは見受けられなかった。特徴的な12点を第40図に示した。以下、部位別に簡記する。

・口縁部

第40図1～4に示す4点である。口縁部の形状からすると大きく2種に分けられる。1～3に示す外反口縁と4の直口口縁である。前者は細部をみるとそれぞれ異なった形状を示す。1・2は口縁部上端の内側を僅かに摘み上げるようにして内面に段差を設けている。口縁部外面をみると1が中央部が尖るような感じに仕上げ、2は1の尖る部分に紐状の凸帯を貼り付け、1よりも尖り部が強調されるように仕上っている。3は口縁部上端を上方へ折り曲げるように立てている。口縁部外面は中央部が若干尖り、下端部は紐状の凸帯を廻らしたように下方へ突き出ており、より口縁部外面が強調された形状となっている。

2は推算口径の算出ができ、約16cmを測る。2は他の2点よりも回転擦痕が明瞭に残り、3点とも内面の方が丁寧なナデ調整を施している。1・2はほぼ同じような厚みを有すが、3は薄手である。1・3は器表面が灰黒色で割れ面は暗茶褐色を呈すが、2は器表面も割れ面も暗灰色を呈し、1・3より脆い感じがする。

4は丸みを持つ肩部から頸部が約2cm直方向へ立ち上がって口縁部をつくる。口唇部は平坦に仕上げている。外面は丁寧なナデ調整が施され、内面は口縁部がナデ調整を施すが、以下は回転擦痕が明瞭に残る。器厚は約10mmと厚手である。器色や全体的な状況は2と似たような感じである。

・胴部

5～10に示す6点である。器面調整の状況を見ると表面にたたき痕を残すものは7～10の4点で、7・9は部分的に残る。7だけが斜め方向の沈線で、他の3点は横方向の沈線である。表面に当て具の痕が残るものは6・8の2点である。6は不明瞭であるが、8は明瞭に認められる。この2点も含め、いずれも回転擦痕がみられる。厚いものは6の約8mm、薄いものは9の約5mmで、大体同じような厚さのものようである。6は表裏面が灰黒色、割れ面は表面側が灰黒色、裏面側が暗茶褐色を呈すもので、他の資料は表裏面が灰黒色、割れ面が暗茶褐色を呈す。

・底部

11・12に示す2点である。11は表面にたたき痕(斜め方向に沈線)が明瞭に残るものであるが、底面から約3cm幅はナデられており、その部分では一部に残るだけである。内面は回転擦痕とナデ調整が施されている。器厚は約10mmであるが、底面部の厚みは約7mmと薄くなるようである。表裏面は灰黒色を呈し、割れ面は表面側に薄く暗茶褐色の部分のみみられるものの、大部分は灰黒色を呈す。

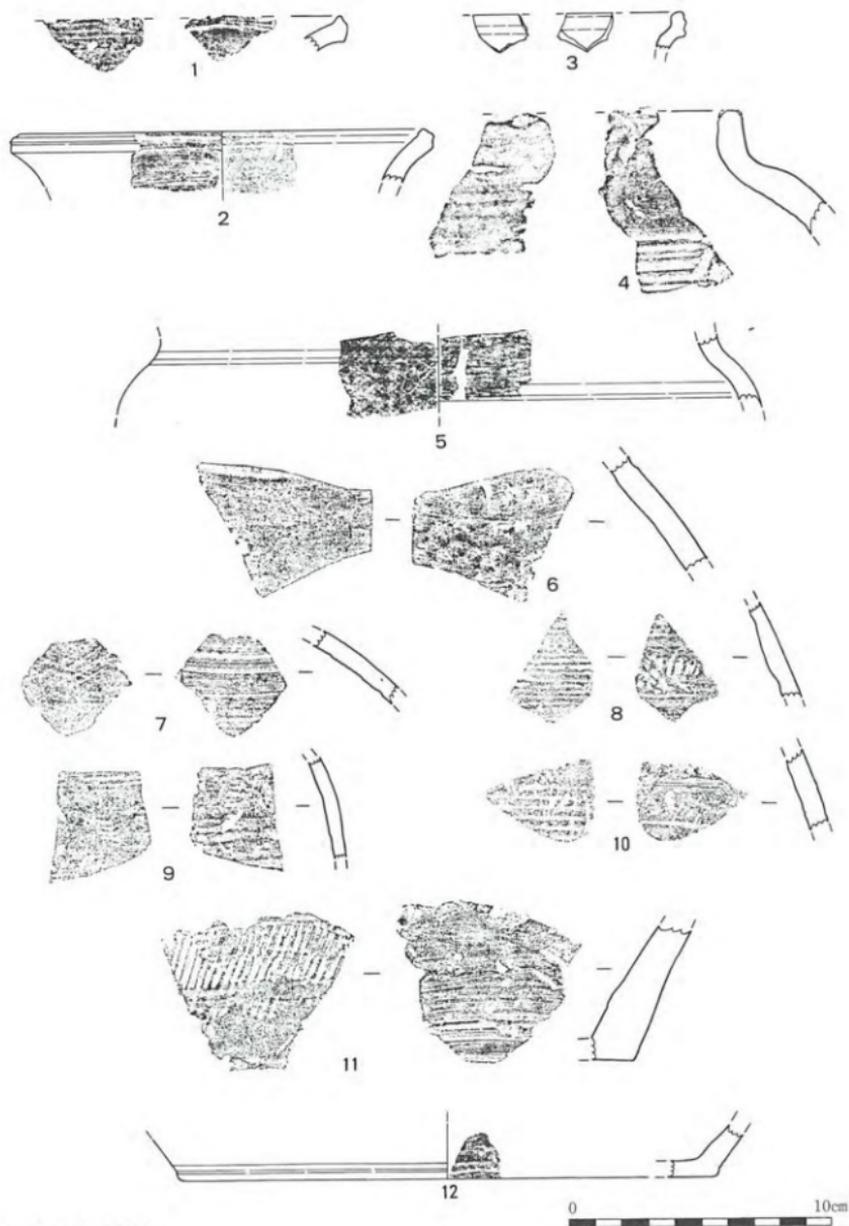
12は表裏面とも回転擦痕とナデ調整がみられるだけで、たたき痕や当て具の痕跡は見受けられない。器厚は約7mmで、底面部分は若干薄くなるようである。表裏面が灰黒色、割れ面が暗茶褐色を呈す。

註

註1. 池田榮史「南島の類須恵器」『季刊考古学』 雄山閣出版 1993年

註2. 伊仙町教育委員会「カムイヤキ古窯群Ⅰ・Ⅱ」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』 3-5 1985年

註3. 金武正紀・城間千栄子『ヒヤジョー毛遺跡』 那覇市教育委員会 1994年



第40図 南島須恵器

第18節 沖繩産施釉陶器

施釉するもので、「ジヨウヤチ（上焼）」と呼ばれるものが殆どであるが、素地土の特徴が後述する無釉陶器（アラヤチ：荒焼）と同質のものも少量含まれる。器種としては、碗類（碗・小碗）を主体に皿・水注・酒注・壺類（瓶・嘉瓶・油壺など）・火入・炉・鍋・蓋類・鉢（小鉢・大鉢）が確認できる。施釉される釉薬は、灰釉・鉄釉（鉛釉）・黒釉・透明釉などが基本的なものである。透明釉を施釉するものは、素地に白土を塗り、白化粧を施す。絵付けには、呉須・鉛釉を多用する。以下、各器種ごとにその特徴を述べ、細分を行う。尚、施釉陶器の文様名称は、『御細工所跡』（註1）を参考にした。

(1) 碗（第41図1～12）

碗の資料は、透明釉と白化粧を組み合わせて施釉するものが主体を占める。その他の釉薬を施釉する資料は量的に少なく、細片資料が大部分で、全体的器形の不明瞭なものが多かった。そのため、ここでは施釉される釉薬の種類で分類を行った。

第1類：灰釉の単掛け（1～3）

有文と無文の2種がある。有文資料（1・2）は、口縁部の細片で、口縁外面に鉄釉で曲線状文を施す。3は、無文の灰釉碗である。全体的器形が明確なものは、この1点のみであった。高台脇から口縁にかけて直線的に開く器形である。施釉方法は、内外面の上半部のみには施釉し、下半部を露胎のまま残す「フィガキー」手法である。

第2類：鉄釉の単掛け（4～6）

口縁から底部まで残存する資料では、高台脇から口縁にかけて緩やかに曲線を描きながら膨らみ、口縁部で僅かに外反する器形である。施釉の範囲は口縁部・胴部の内外面を対象とし、外面が高台近くの胴下部以下、内面は見込みを露胎とする。ただし、見込み（内底面）には、鉄釉で中央に丸文を描き、その周囲に圏線を巡らせる。

第3類：鉄釉と灰釉の掛け分け（7）

器外面に鉄釉、内面に灰釉を施釉するものである。7は底部資料で、器外面は高台脇まで施釉し、高台以下は露胎である。見込みには、蛇の目釉剥ぎを施す。見込み中央に、鉄釉を施釉する。

第4類：透明釉（+白化粧）の単掛け（8～12）

今回得られた碗資料の内、量的に最も多いものである。器形は、高台脇から口縁にかけて緩やかに曲線を描きながら膨らみ、口縁部で外反する。畳付を除き総釉掛けで、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。

有文と無文の2種がある。有文資料は、中央に鉛釉、その周囲に呉須を施す染花文（9・10）が殆どである。その他、器外面に呉須のみで菊花文を描くもの（11）や線影りによる曲線状文の上に鉛釉・呉須を施すもの（12）などがある。

(2) 小碗（第41図13～21）

小碗に関しても、碗と同じく透明釉と白化粧を組み合わせて施釉するものが主体を占める。高台脇から腰部にかけて緩やかに曲線を描きながら膨らみ、そこから口縁部にかけて外傾する器形である。口縁形態及び器面整形の特徴から、以下の4つに分けられる。

第1類（13・14）

口縁の立ち上がりが直線的で外反しないものである。透明釉と白化粧を組み合わせて施釉し、畳付を除き総釉掛けで、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。

第2類（15～17）

口唇直下で僅かに外反するものである。畳付を除き総釉掛けで、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。鉄釉と透明釉（+白化粧）の掛け分けと透明釉（+白化粧）の単釉掛けの2種がある。前者は、器外面に鉄釉、内面に透明釉（+白化粧）を施す。後者には、無文と有文があり、有文のもの（17）は呉須で染花文を施す。

第3類（18・19）

口縁部が緩やかな曲線を描きながら外反するものである。透明釉と白化粧を組み合わせて施釉し、畳付を除き総釉掛けで、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。無文と有文の2種がある。有文のもの（19）は、呉須と鉛釉

で染花文を施す。

第4類 (20・21)

腰部から口縁部にかけて篋削りにより面取りを施すものである。透明釉と白化粧を組み合わせて施釉し、壺付を除き総軸掛けで、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。

(3) 皿 (第41図22~25)

22・23は、いずれも高台胎から緩やかに湾曲しながら口縁部へ至るもので、小皿になる資料である。22は、口唇下で僅かに外反する。23は、口縁が畝状に波打ちながら巡るものである。透明釉と白化粧を組み合わせて施釉し、壺付を除き総軸掛けで、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。いずれも、口縁内面の縁に沿って、呉須で絵付けを施す。

24は、皿の底部資料と思われる。透明釉と白化粧を組み合わせて施釉し、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。器内面に呉須で菊花文を絵付けした後、蛇の目釉剥ぎを施しているようである。

25は、皿の口縁資料である。口縁部が緩やかに湾曲しながら外傾するもので、口唇下で外反する。灰釉の単軸掛けで、本資料では内外面の胴部下端が露胎であることが確認できる。見込みに白釉で幅約1cmほどの圏線を施し、その上下を鉄釉の細線で縁取る。また、圏線の上に丸点を円形に配したものを二重に施す。内側は鉄釉で、その周囲は白釉である。

(4) 水注 (第42図27~30)

無文と有文の2つで大別できる。

第1類 (27・28)

無文になるもので、今回得られた資料の中では量的に少なく、細片資料のみであるため全形の窺えるものはない。胴部が大きく膨らみ、口縁部で屈曲して口縁上端が立ち上がるものである。

27は、透明釉と白化粧を組み合わせて施釉するもので、本資料では口唇部を除き総軸掛けである。28は、器外面に黒釉を施すもので、内面は露胎である。

第2類 (29・30)

有文のもので、量的に主体となるものである。器形は、第1類と同様、胴部が大きく膨らみ、口縁部で屈曲して口縁上端が立ち上がる。胴部上位に2つの把手装着部を垂直またはやや斜に取り付け、1つの把手装着部の下位に注口部がある。外底面には3つの突起が配されるものと思われ、底面中央に丸く釉の溶着痕や白土の付着のみられるものがある。注口部と胴部との間には、2つの穴を横位または縦位に穿孔する。穴は露胎のままである。

器外面には、透明釉と白化粧を組み合わせて施釉し、口唇部と外底面は露胎である。内面は、透明釉と白化粧を組み合わせて施釉するか、白化粧のみを施し、また釉色が暗褐色・灰白色を呈するものもある。

外面に線彫りを施し、その上に絵付けをする。線彫りは、2条一組の平行沈線により幾何学的文様を施すものが主体である。口縁部・胴部下位にそれぞれ圏線を巡らし、その間に波形文(29)・丸文を施すもの、あるいは二組の縦位沈線で方形に区画した中に格子文を充填するもの(30)等がある。絵付けは、呉須・鉛釉等を施し、線彫りの沈線に沿って施釉する。線彫り文の輪郭には呉須、その内側には鉛釉を施す傾向がみられる。また、把手装着部・注口部の根元に緑釉・鉛釉を施す。

(5) 大型水注 (第42図31~33)

「アンビン(按瓶)」と呼ばれるもので、把手部分も陶製となる。断片的な資料のみで、全形の窺えるものはない。上半分の器形は、水注と同様、胴部が膨らみ、口縁部で屈曲して口縁上端が立ち上がる。内外面に施釉し、口縁内面の先端と平坦な口唇部は露胎となる。釉色は、黒色・暗褐色を呈する。

31は、肩部の張る器形である。32は、ナデ肩の器形で、胴部上位に把手の根元が残る。33は、把手部分のみで、断面形は三日月形である。

(6) 酒注 (第42図34・36~39)

図示した資料は、いずれも胴部の器高よりも最大胴径が大きくなるもので、胴部が外側に強く張り出す器形で

ある。最大胴径に比べ頸部で急激に細くなり、そこから口縁部がやや屈曲ぎみに外側に張り出し、さらに口縁上端で垂直に立ち上がる。底部は、削り出しにより低い高台をつくる。畳付け面は内側に向かって傾斜しており、平滑な接地面では畳付けの外端のみが地につく。いずれも、各々の胴部に注口部を有するものと思われる。胴部形態の特徴により、以下の2つに大別できる。

第1類 (36・37)

胴部の断面形が、楕円状に膨らむものである。無文・有文の2種がある。

37は、無文資料で、注口部の根元部分が僅かに残存する。

36は、有文の胴部資料である。線彫りにより、頸部下端と胴部下に各々圏線を1条ずつ巡らし、その間を縦位の沈線で繋いで胴部面を幾つかに区画する。その区画内に、呉須・鉛軸を交互に施している。頸下部には、呉須のみを施す。

第2類 (38・39)

胴中央が「く」字状に屈曲するもので、胴部の形状が算盤玉状のもの。無文・有文の2種がある。

39は、ほぼ全体が残る無文資料である。胴屈曲部より上位にある注口部のみが欠失している。

38は、有文の胴部資料である。屈曲部上位に、線彫りによる2条一組の平行沈線を縦位及び斜位に施しているのが確認できる。屈曲部より上位の器外面には、鉛軸を施す。

(7) 壺類 (第42図35・40~44)

器形的に壺形になるものを、一括してここで扱う。

35・40・41は、瓶になる資料である。35は、肩部の張る器形で、口縁部・頸部は欠失している。外底面は、弧状に窪む。本資料は、素地土の特徴が他の施釉陶器と異なり、肉眼で観察する限りでは後述する沖繩産無釉陶器第3群のものと同質である。40は口縁資料で、頸部が長く、口唇直下で僅かに外反する。41は、胴部から底部にかけての資料である。胴部が球状に膨らみ、底部は高台をつくらず外底面は平坦である。

42は、「ユシビン(嘉瓶)」の胴部資料である。胴中央が一旦窄む器形で、胴部の形状が瓢箪形を呈するものである。

44は、いわゆる「アンダガミ(油壺)」で、口縁から胴部にかけての資料である。壺と呼称されるが、その器形からここに含めた。胴部が丸く膨らみ、頸部下端で屈曲して、頸部から口縁部にかけて直線的に内傾する器形である。平坦な口唇部は肥厚し、口唇部外端が外側に張り出すため口唇直下で僅かに外反する。胴部上位に縦耳を貼付し、横位に丸い穴を穿つ。

43は、瓶の胴部資料である。胴部は、直線的に直立する円筒形である。肩部で「く」状に屈曲し、直線的に内傾する。全形のわかる資料が那覇市湧田古窯跡の発掘調査で得られており、「昭和初期頃まで使用されていた酒や醤油の瓶」であるという(註2)。

(8) 火入 (第42図45・46)

「ヒートウイ(火取)」と呼ばれるものである。いずれも、高台脇から斜位に立ち上がり、胴下部で屈曲して直立し、胴部から口縁部にかけて円筒形となる器形である。

45は、口縁上端が僅かに内湾し、口唇部を斜めに面取している。内外面に白化粧を施し、胴下部の屈曲部より上位の器外面のみに透明釉を施軸する。口唇直下に呉須を施し、帯状に巡らす。

46は、底部資料である。胴下部の屈曲部より上位に、7条の横位沈線が確認できる。釉色は褐色を呈し、胴下部の屈曲部以下と内面は露胎である。

(9) 炉 (第42図47~49)

「ヒールー(火炉)」と呼ばれるものである。今回得られた資料は、いずれも円筒形の器形である。

47・48は、口縁部から胴部にかけての資料である。47は、口縁部をU字状に挟り取った火窓の一部が残存している。胴下部で、ほぼ水平に屈曲する。口縁部に沈線を格子状に施し、その下位に横位の凹線を5条巡らす。48は、口唇部を平坦に整形し、白土を塗る。口唇部外端が外側に張り出すため、口縁部が僅かに外反する器形である。口縁内面上端に器物を据えるための突起を貼付し、その形状はし字状に屈曲する。器外面の胴部には、沈線を巡らす。

49は、胴部資料で、獅子面の把手をもち、目・鼻等が確認できる。把手の横には2条の沈線が巡るようである。

(10) 鍋 (第43図50~54)

細片資料のみで、全形の窺えるものはない。釉色は、褐色・暗褐色・茶褐色を呈する。

50~52は、口縁部資料である。口縁部上部が「く」字状に屈曲し、蓋受け部をつくる。50・51は、蓋受け部が緩やかに湾曲し、口縁部上端は外傾する。胴部で膨らむ器形である。52は、蓋受け部が強く湾曲し、口縁部上端は直立する。胴部に膨らみをもたず、底部に向かって緩やかに湾曲しながら窄んでいく器形のものである。口唇部に紐状の把手を上方に向けて斜位に貼付する。

53は、胴部資料である。胴部が膨らむ器形のもので、胴下部外面は露胎である。

54は、底部資料である。外面は露胎で、円錐状の突起を貼付する。外底面中央に段があり、円形に窪むようである。外面には、煤が付着している。

(11) 蓋類 (第43図55~61)

55~57は、水注の蓋と思われる資料である。57は第1類、55・56は第2類の水注とセットになるものと考えられる。57は無文資料で、蓋上部のみに施釉し、他は露胎である。釉色は暗褐色を呈する。55・56は全体に白化粧を施し、蓋上部のみに透明釉を施軸する。上面に線彫りを施し、呉須・鉛釉で絵付けを行う。

58は、合子の蓋かと思われる。蓋上部のみに灰釉を施し、他は露胎である。上面中央と縁に、鉄釉・白釉で圏線を巡らす。

59は、蓋上部に施釉し、釉色は褐色を呈する。本資料は、第42図35の資料と同様、素地土の特徴が他の施釉陶器と異なり、肉眼で観察する限りでは後述する沖繩産無釉陶器第3群のものと同質である。

60・61の2点共に、蓋上部のみに施釉し、他は露胎である。釉色は、60が褐色、61が暗褐色・茶褐色を呈する。61は縁に沿って2条の沈線を巡らし、縁の幅約1cmの部分のみに施軸する。その内側は露胎で、釉の溶着痕がみられる。

(12) 鉢 (第41図26・第43図62~68)

小型のものと大型のものがある。

第41図26は、小鉢になると思われる胴部資料である。内外面に白化粧を施し、透明釉を施軸する。内面に線彫りを施し、その上面に呉須・鉛釉で彩色を行う。

第43図62~68は、大鉢の資料で、「ワンブー」と呼ばれるものである。いずれも、高台脇から口縁部にかけて緩やかに湾曲しながら外傾する器形で、口縁上部で屈曲して外側に張り出す。

62は、屈曲した口縁部がほぼ水平に張り出す器形のものである。屈曲した口縁部の最外端はやや平坦に整形され、その面の上下端に稜をもつ。畳付けを除き総釉掛けで、口縁最外端以下と内面（張り出した口縁部の上面も含む）とで釉の掛け分けを行っている。外面及び高台内面の釉色は、褐色を呈する。内面の釉種は判然としなが、素地土に白化粧を施さず、そのまま透明釉を施軸したものであろうか。見込みには、蛇の目釉刺ぎを施す。

63~65は、屈曲した口縁部がやや下方に向かって張り出す器形のものである。屈曲した口縁部の最外端の断面形は、舌状かまたはやや尖る。畳付けを除き総釉掛けで、62と同様、釉の掛け分けを行う。3点共に、器内面（張り出した口縁部の上面も含む）に白化粧を施し、透明釉を施軸する。外面及び高台内面の釉色は、63が褐色、64が茶褐色、65が暗褐色を呈する。63・64には、張り出した口縁部の上面の一部に、褐色の釉（鉛釉）が施されている（63は口縁内面にもそれがみられる）。63・64の見込みには、蛇の目釉刺ぎを施す。

66~68は、底部資料である。66・67は、内外面共に同種の釉を施し、釉色は褐色を呈する。器外面の胴下部以下は、露胎である（ただし、高台内面は施釉）。見込みには、鉄釉で中央に丸文とその周囲に圏線を巡らす。66は高台に穿孔している。68も、内外面共に同種の釉を施し、釉色は茶褐色を呈する。高台脇以下（高台内面も含む）は、露胎である。見込みも、露胎（蛇の目釉刺ぎ？）となる。畳付け及び見込みに、白土（砂？）の付着がみられる。

註

註1. 金武正紀・鳥 弘也【御細工所跡】那覇市教育委員会 1991年

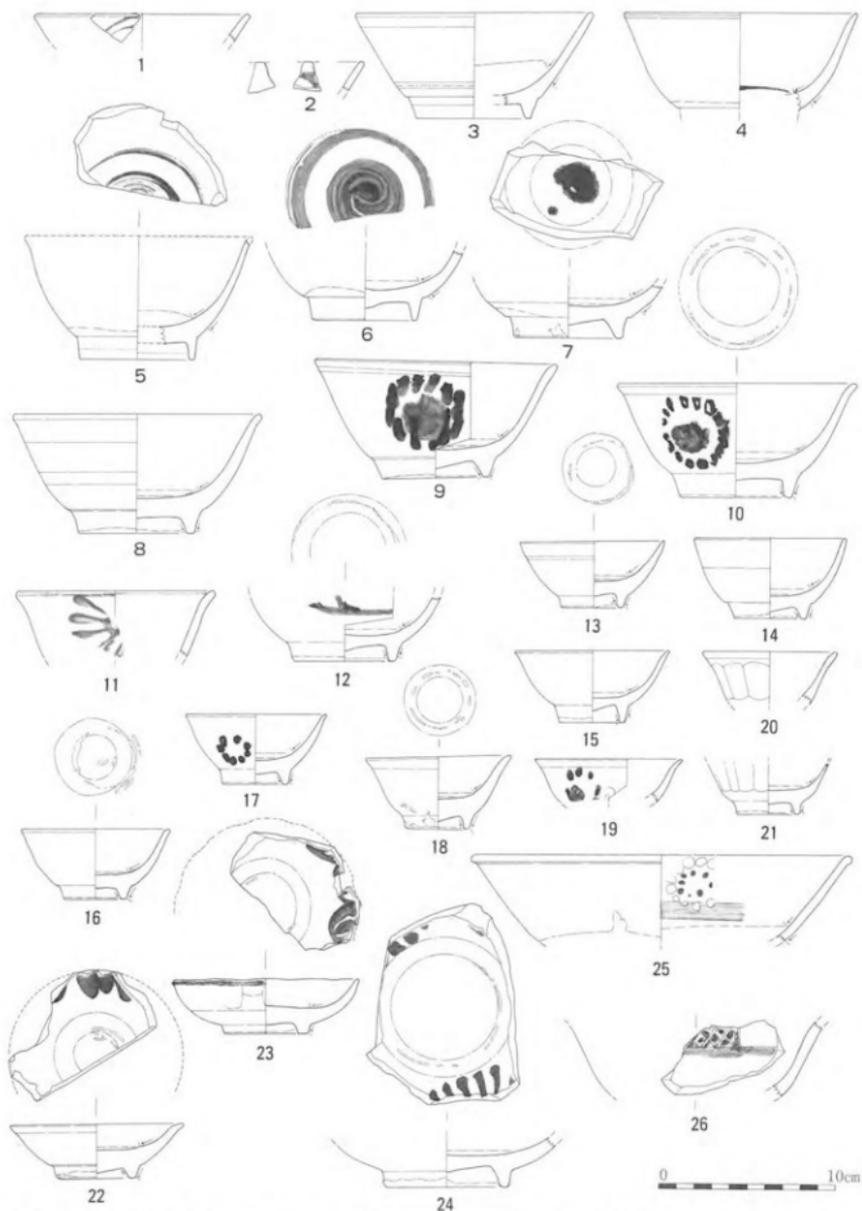
註2. 大城 慧・鳥袋 洋・金城亀信他【湧田古窯跡(1)】沖縄県教育委員会 1993年

第15表 b 沖縄産施釉陶器観察一覧

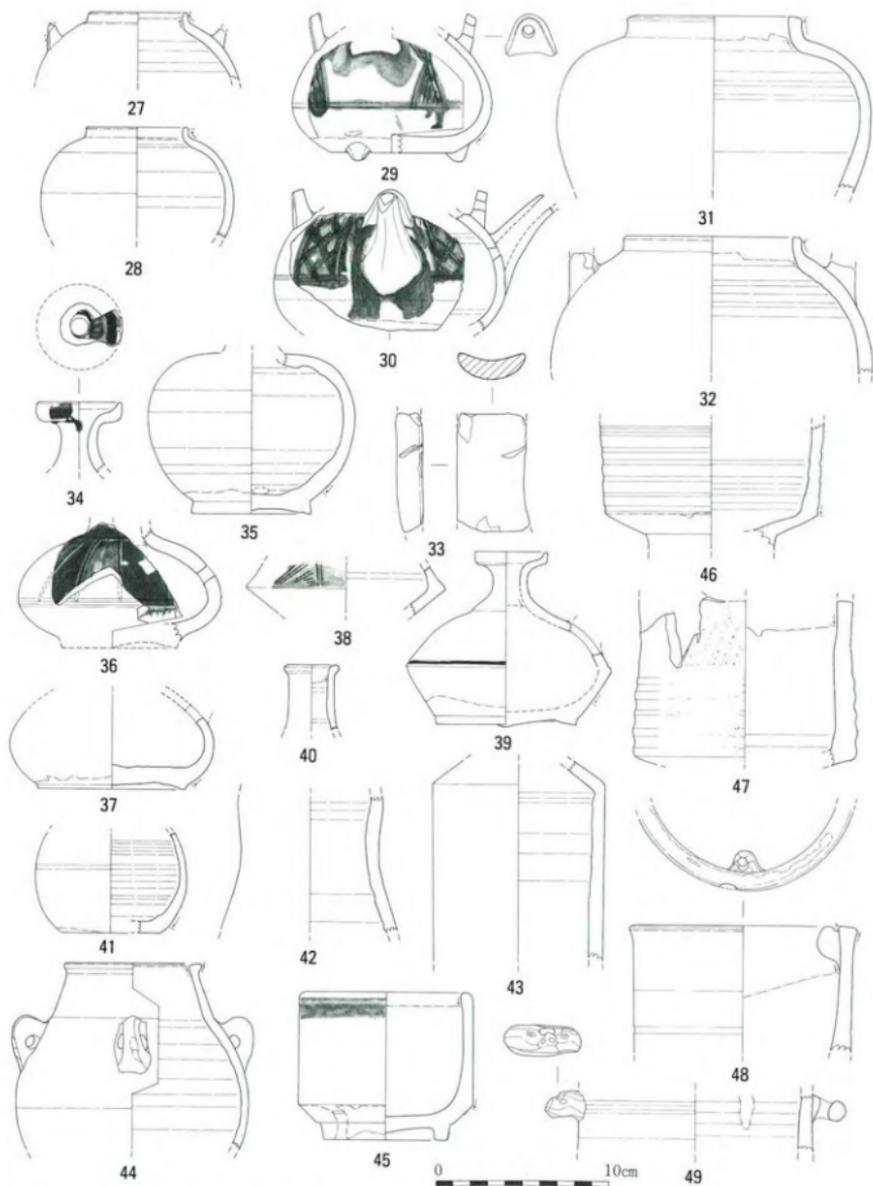
標記 番号	分類	口径 高さ 底径 (単位:cm)	軸の状況	施釉範囲	質地	備考	出土地点
第41回 図録30 5	甗	— — 6.4	— 鉄軸、暗褐色。	見込み及び高台近くの胴下部 以下は露胎。ただし、見込みに は、鉄軸で中央に丸文とその 周囲に墨線を施す。	乳白色、微粒子。	高台下部には、白土が付着、遺物No.4と同一個体の可能 性あり。	Ⅱ地区 H-48 遺構1 2層
〃 〃 6	甗	— — 6.0	— 鉄軸、暗褐色。	見込み及び高台近くの胴下部 以下は露胎。ただし、見込みに は、鉄軸で中央に丸文とその 周囲に墨線を施す。	灰白色、微粒子。	—	Ⅲ地区 E-F-09 1層
〃 〃 7	甗	— — 6.0	外:鉄軸、暗褐色。 内:灰軸、灰白色。	見込み及び高台近くの胴下部 以下は露胎。蛇の目軸刺ぎ有 り。	乳白色、微粒子。	見込み中央に鉄軸を施軸。	Ⅰ地区 1層
〃 〃 8	甗	14.0 6.8 6.5	— 透明軸+白化粧。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	橙白色、微粒子。	見込みの軸刺ぎ部分に、白土が丸く付着する。	Ⅱ地区 G-42 遺構3
〃 〃 9	甗	13.7 6.6 6.0	透明軸+白化粧。外器面 には、暗褐色の微細な点が多 くみられる。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	灰白色、微粒子。	花弁状文は、中央が胎軸で、その周囲に貝葉を施す。外 器面の3か所に配す。貝葉は口縁に向かって垂れている。	Ⅱ地区 G-42 遺構2 上
〃 〃 10	甗	13.6 6.5 6.0	透明軸+白化粧。外器面 には、小穴が多くみられる。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	橙白色、微粒子。	花弁状文は、中央が胎軸で、その周囲に貝葉を施す。外 器面の3か所に配す。貝葉は口縁に向かって垂れている。 見込みの軸刺ぎ部分に、白土が多く付着する。	Ⅱ地区 G-42 2層
〃 〃 11	甗	11.2 — —	透明軸+白化粧。	残存部総軸。	赤褐色、微粒子。	外器面に貝葉で草花文を描く。また、口唇部に沿って貝 葉を施す。	Ⅱ地区 G-47 2層
〃 〃 12	甗	— 5.6	透明軸+白化粧。内外面共に 明瞭な貫入がみられる。	曇付けは露胎。蛇の目軸刺ぎ 有り。	乳白色、微粒子。	文様は、菊形を施し、その上に胎軸・貝葉を施軸する。 見込みの軸刺ぎ部分に、白土が丸く付着する。	Ⅱ地区 F-41 遺構3
〃 〃 13	小甗	8.2 3.7 3.4	透明軸+白化粧。口唇直下で 透明軸が厚くなる。内外面共に 細かい貫入がみられる。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	暗灰色、微粒子。	見込みの軸刺ぎ部分に、軸の接着底が残る。器面に火を 受けている?	Ⅰ地区 1層
〃 〃 14	小甗	8.5 4.6 4.0	透明軸+白化粧。口唇直下で 透明軸が厚くなる。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	口縁部・胴部は灰 白色。高台付近は 暗灰色、微粒子。	口縁及び高台下端の一部に僅かに鉄軸の付着がみられ る。	Ⅱ地区 F-40 遺構5
〃 〃 15	小甗	8.8 4.1 3.7	外面は鉄軸を施軸。暗褐色。 内面は透明軸+白化粧で、細 かい貫入がみられる。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	口縁部・胴部は灰 白色。高台付近は 乳白色、微粒子。	—	Ⅲ地区 3層
〃 〃 16	小甗	8.4 4.0 3.4	透明軸+白化粧。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	乳白色、微粒子。	見込みの軸刺ぎ部分に、軸の接着底が残る。	Ⅱ地区 1層
〃 〃 17	小甗	8.0 4.0 3.6	透明軸+白化粧。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	乳白色、微粒子。	花弁状文を貝葉で描く。外器面の3か所に配す。見込み に鉄軸の付着がみられる。	Ⅰ地区 1層
〃 〃 18	小甗	8.2 4.1 3.2	透明軸+白化粧。内外面共に 細かい貫入がみられる。外面 には小穴がみられる。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	灰白色、微粒子。	見込みの軸刺ぎ部分に、軸の接着底が丸く残る。見込み に鉄軸が僅かに付着する。	Ⅰ地区 1層
〃 〃 19	小甗	8.4 — —	透明軸+白化粧。	残存部総軸。	暗灰色、微粒子。	花弁状文は、中央が胎軸で、その周囲に貝葉を施す。外 器面の3か所(?)に配す。貝葉は底部に向かって垂れて いる。	Ⅱ地区 G-48,49 1層
〃 〃 20	小甗	7.6 — —	透明軸+白化粧。内外面共に 細かい貫入がみられる。	残存部総軸。	乳白色、微粒子。	—	Ⅲ地区 F-55 3層
〃 〃 21	小甗	— — 3.5	透明軸+白化粧。内外面共に 細かい貫入があり、外面には小 穴がみられる。	曇付けは露胎。蛇の目軸刺ぎ 有り。	乳白色、微粒子。	見込みの軸刺ぎ部分に、白土が丸く付着する。	Ⅲ地区 H-60 B
〃 〃 22	甗	9.8 3.1 4.0	透明軸+白化粧。内外面共に 細かい貫入があり、外面には小 穴が数多くみられる。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	乳白色、微粒子。	口縁内面に沿って貝葉で胎付けを施す。見込みの軸刺 ぎ部分と曇付けに、白土が付着する。	Ⅱ地区 G-48 遺構1 1層
〃 〃 23	甗	10.5 3.1 4.6	透明軸+白化粧。内外面共に 細かい貫入がみられる。	曇付けを除き総軸、蛇の目軸 刺ぎ有り。	乳白色、微粒子。	口縁内面に沿って貝葉で胎付けを施す。見込みの軸刺 ぎ部分と曇付けに、白土が付着する。	Ⅱ地区 G-49 遺構1 1層
〃 〃 24	甗	— — 6.8	透明軸+白化粧。	曇付けを除き残存部総軸、蛇 の目軸刺ぎ有り。	乳白色、微粒子。	口縁内面に貝葉で胎付けを施す。見込みの軸刺ぎ部分 と曇付けに、白土が付着する。	Ⅰ地区 1層
〃 〃 25	甗	21.5 — —	灰軸。黄色染を帯びた灰色。	胴下部に露胎。見込みも露胎 か?	灰白色、微粒子。	口縁部に内胎(白土)と鉄軸で胎付けを施す。	Ⅲ地区 F-58 遺構1

第15表 d 沖繩産施釉陶器観覧一覽

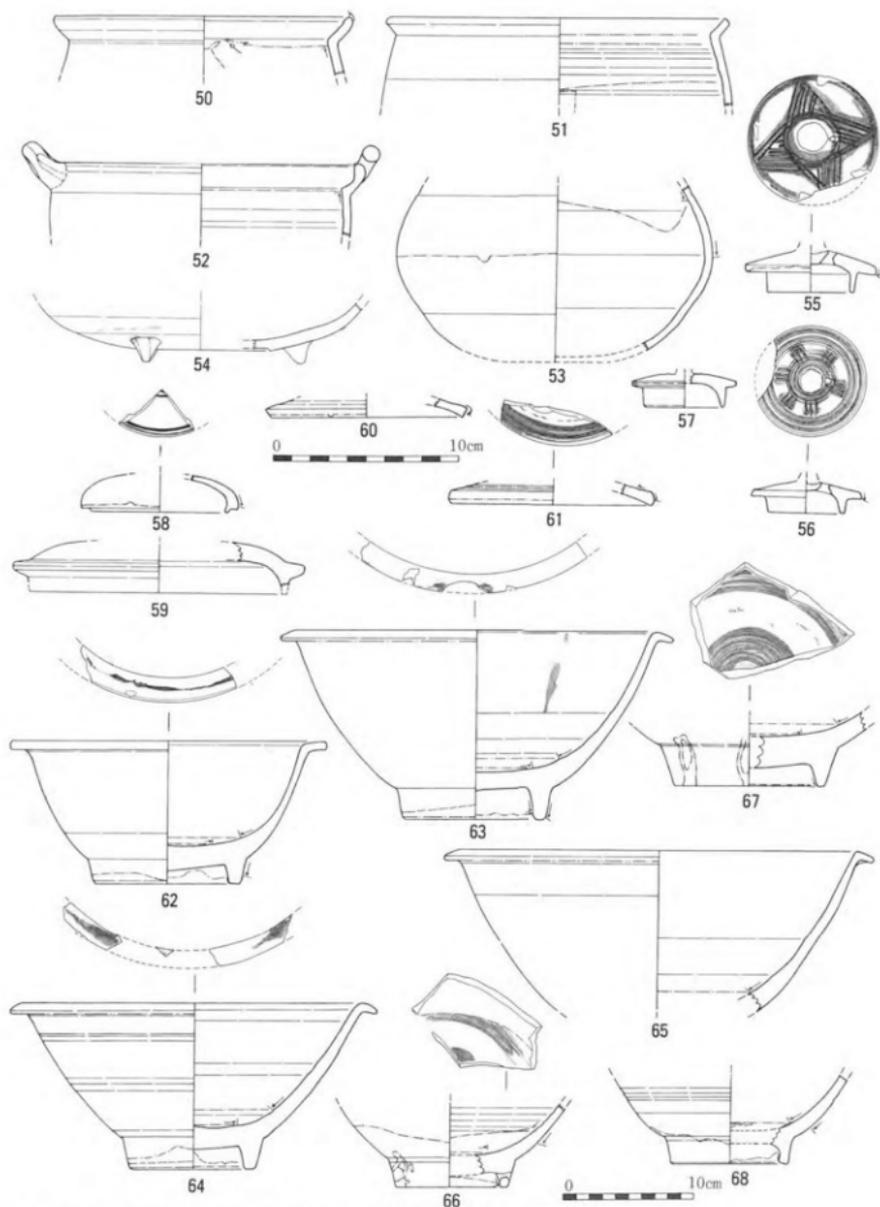
押図番号	分類	口徑 器高 底径 (単位:cm)	釉の状態	底軸範圍	裏地	備考	出土地点
第41回 図版31 48	伊	13.2	—	—	—	—	—
#	伊	—	暗褐色。	口唇及び口縁内面上位まで施釉。口唇部は露胎。	暗褐色及び暗灰色。微粒子。	口唇部に白土が付着。	II地区 G-42 遺構2 6層
#	伊	—	暗褐色。	内面露胎。	乳白色。微粒子。	有孔の胴子面把手を貼付。孔の直径は、8~9cm。	I地区 1層
第41回 図版32 50	鍋	16.0	—	—	—	—	—
#	鍋	—	暗褐色。	蓋受部は露胎。	灰白色。微粒子。	蓋受部幅1.7cm。	III地区 F-55 3層
#	鍋	18.4	—	—	—	—	—
#	鍋	—	暗褐色。	蓋受部は露胎。本資料では口縁部内面下位も露胎となっている。	灰白色。微粒子。	蓋受部幅1.1cm。	II地区 G-49 遺構1 2層
#	鍋	17.5	—	—	—	—	—
#	鍋	—	暗褐色。外面には細かい貫入がみられる。内面は透明釉か？	蓋受部は露胎。	灰白色。微粒子。	蓋受部幅1.4cm。	III地区 H-60 B
#	鍋	—	外面:茶褐色。内面:暗茶褐色。外面には細かい貫入がみられる。	外面側面半部及び内面側上部は露胎。	灰白色。微粒子。	最大胴径16.8cm。	II地区 F-41 2層
#	鍋	—	暗茶褐色。	外面は露胎。	灰色。微粒子。	外面には、煤が付着。底面	II地区 F-41 遺構3
#	蓋	—	—	—	—	—	—
#	蓋	—	透明釉+白化粧。細かい貫入がみられる。	総化粧掛けを施し、蓋上部のみに施釉。	乳白色。微粒子。	直径7.0cm。横組み椀元と蓋縁に沿って各々二重円を、またその間に4つの三角文を縦並び、二重円と三角文の縁に沿って真頂、三角文内に飾線を施す。横組み椀元に直径4mmの孔を施した後、穿孔。	II地区 G-43 遺構2 6層
#	蓋	—	—	—	—	—	—
#	蓋	—	透明釉+白化粧。細かい貫入がみられる。	総化粧掛けを施し、蓋上部のみに施釉。	乳白色。微粒子。	直径5.8cm。横組み椀元に二重円。蓋縁に沿って三重円を縦並び、その間に3本一組の6つの横並び文でつながり、円文上に真頂、その間の横並び文上に真頂・飾軸を交互に施す。横組み椀元に直径4mmの孔を施した後(?)に穿孔。	III地区 H-52,53 A
#	蓋	—	暗褐色。	蓋上部のみに施釉。	乳白色。微粒子。	直径5.6cm。	II地区 G-41 2層
#	蓋	—	—	—	—	—	—
#	蓋	—	灰釉、暗灰色。	蓋上部のみに施釉。	暗灰色。微粒子。	直径6.4cm。蓋縁及び中央の各々に飾軸・白釉で二重円を描く。	III地区 H-60 B
#	蓋	—	—	—	—	—	—
#	蓋	—	褐色。施釉面には微細な小穴が多くみられる。	蓋上部に施釉。	暗赤褐色。微粒子。	直径15.6cm。内腹観察では、裏地土は仲縄産無釉陶器第3群のものと同質。	II地区 H-48 遺構1 2層
#	蓋	—	暗褐色。	蓋外面のみに施釉。	乳白色。微粒子。	直径10.8cm。	II地区 G-41 2層
#	蓋	—	—	—	—	—	—
#	蓋	—	黒褐色。	蓋外面の縁(幅約1cm)に沿って施釉。	乳白色。微粒子。	直径11.0cm。縁に二重の凹縁を巡らす。蓋縁の内側1.3cmの部分に釉の着着痕がみられる。	II地区 1層
#	大鉢	24.0 10.9 10.8	—	—	—	—	—
#	大鉢	—	外面:褐色。内面:透明釉？	髷付けを施さぬ鉢。蛇の目輪割き有り。	乳白色。微粒子。	—	III地区 H-53 A
#	大鉢	30.0 14.3 10.4	—	—	—	—	—
#	大鉢	—	外面:褐色。内面:透明釉+白化粧。内面には、細かい貫入がみられる。	髷付けを施さぬ鉢。蛇の目輪割き有り。	乳白色。微粒子。	屈曲した口縁部の上面及び口縁内面に鉄軸を部分的に施す。見込みの輪割き部分に白土の付着と釉の着着痕がみられる。	I地区 1層
#	大鉢	27.7 12.7 9.2	—	—	—	—	—
#	大鉢	—	外面:茶褐色。内面:透明釉+白化粧。内面には、細かい貫入がみられる。	髷付けを施さぬ鉢。蛇の目輪割き有り。	灰白色及び暗白色。微粒子。	屈曲した口縁部の上面に鉄軸を部分的に施す。見込みの輪割き部分に白土の付着がみられる。	不 明
#	大鉢	32.6	—	—	—	—	—
#	大鉢	—	外面:暗褐色。内面:透明釉+白化粧。内面には、細かい貫入がみられる。	残存部全面施釉。蛇の目輪割き有り。	灰白色。微粒子。	—	I地区 1層
#	大鉢	—	褐色。	見込み及び胴下部以下(高台内面は施釉)は露胎。ただし、見込みに、鉄軸で中央に丸文とその周囲に墨線を巡らす。	乳白色。微粒子。	高台に直径4mmの孔を穿孔。高台外面に施釉部の指紋が残る。	III地区 1層 サーゴ-層
#	大鉢	8.8	—	—	—	—	—
#	大鉢	—	褐色。	高台内面に施釉。見込みに、鉄軸で中央に丸文とその周囲に墨線を巡らす。	乳白色。微粒子。	高台外面に施釉部の指紋が残る。66と同一個体の可能性あり。	III地区 G-52 3層
#	大鉢	8.0	—	—	—	—	—
#	大鉢	—	茶褐色。	高台縁以下及び見込みは露胎。蛇の目輪割きか？	灰白色。微粒子。	髷付け及び見込みの露胎部には、白土(砂?)の付着がみられる。	III地区 H-52 A
#	大鉢	8.7	—	—	—	—	—



第41図 沖縄産施釉陶器 1 碗(1~12)、小碗(13~21)、皿(22~25)、小鉢(26)



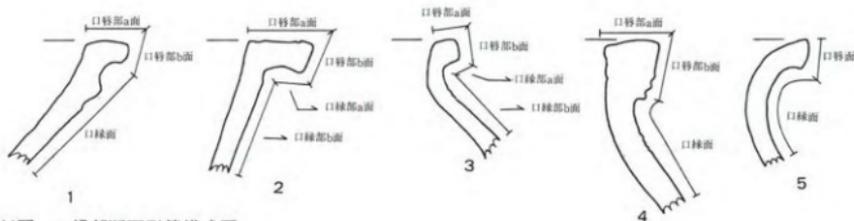
第42図 沖繩産施釉陶器 2 水注(27~30)、大型水注(31、32、33)、酒注(34・36~39)、
 壺類(35・40~44)、火入(45、46)、炉(47~49)



第43図 沖縄産施釉陶器3 鍋 (50~54)、蓋類 (55~61)、大鉢 (62~68)

第19節 沖縄産無釉陶器

「アラヤチ（荒焼）」と呼ばれるもので、基本的に無釉であるが、マンガン釉・泥釉を施すものも、ここに含めた。今回得られた沖縄産無釉陶器の資料には、摺鉢・鉢・水鉢・甕・壺類（瓶・徳利他）・炉などの器種が確認できた。以下で述べる各器種ごとの分類では、その口縁部の断面形態について、複雑な文章表現を避けるため、第44図に示すように口唇部・口縁部に狭義の意味付けを行った。また、以下では各器種の器形の特徴を中心に分類を行ったが、それとは別に胎土（素地土）の特徴からも分類を試みた。



第44図 口縁部断面形態模式図

(1) 摺鉢（第45図1～13）

口縁資料は、その形態から以下の4つに分類できる。

第1類（1～5）（口縁形態：第44図1参照）

口縁部が屈曲し、口縁面に凹面とその直下に稜を有するものである。口縁の断面形は、F字状となる。胴部から口縁部にかけての概形は、逆「ハ」字状に直線的に外傾する器形である。

3～5に比べ、1・2は薄手の器厚で、口唇部a・b面の幅も狭い。また、後述するように胎土の特徴も3～5とは異なる。

第2類（6）

口縁部に植木鉢状の有段肥厚部を有するものである。肥厚部外面中央はやや窪み、口唇部外端が若干外側に張り出す。肥厚部で直立し、肥厚部下から底部に向かって直線的に窄む器形のようなものである。

第3類（7）（口縁形態：第44図2参照）

口縁部が逆L字状に屈曲し、口縁部b面に稜を有するものである。口唇部b面の上下端に稜を有し、口縁部a面が窪む。胴部から口縁部にかけての概形は、逆「ハ」字状に直線的に外傾する器形である。

第4類（8・9）（口縁形態：第44図2参照）

口縁部が逆L字状に屈曲するもので、a・bの2種に細分できる。a種は、口唇部b面の上下端に稜を有し、口縁部a面が窪むものである（8）。b種は、口唇部b面の下端に丸みをもち、口縁部a面が平坦なものである（9）。両種共に口唇部a面の外端に沿って沈線が1条走る。

9は、全体形のわかる資料である。底部から口縁部にかけて緩やかな曲線を描きながら外傾する器形である。外底面の縁には、工具による調整痕が確認できる。

底部資料（12・13）

12は、外底面の縁からやや直立ぎみに立ち上がり、そこから胴部にかけて外傾する器形と思われる。13は、摺鉢の脚部と思われる資料で、穿孔されている。壺屋古窯（註1）・湧田古窯（註2）出土の資料を参考にすると、第3類または第4類a種のものにこのような底部形態がみられるようである。

(2) 鉢（第45図14～16）（口縁形態：第44図2参照）

鉢形の口縁資料は、いずれも摺鉢の第4類のものと口縁形態が同一である。口縁部は逆L字状に屈曲し、摺鉢第4類と同様、さらにa・bの2種に細分できる。a種は、口唇部b面の上下端に稜を有し、口縁部a面が窪むものである（14）。b種は、口唇部b面の下端に丸みをもち、口縁部a面が平坦なものである（15）。両種共に口

唇部 a 面の外端に沿って沈線が 1 条巡る。

15は、胴部から口縁部にかけて緩やかな曲線を描きながら外傾する器形である。

16は、鉢形の底部資料と思われるもので、胴下部から外底面にかけて工具による器面の調整痕が明瞭である。

(3) 水鉢 (第45図17~19)

「ミジクブサー」と呼ばれるものである。口縁形態により、以下の 2 つに分類できる。

第 1 類 (17・18)

口縁部上端を折り曲げて、口唇部を平坦に整形するものである。口唇面は肥厚し、口唇外端が張り出す。胴部は膨らみ、最大径が胴上部にくる。17は、口縁部に数条一組の波状沈線を巡らす。18は、口縁部に 2 条の沈線を巡らし、その下位に数条一組の波状沈線を巡らす。

第 2 類 (19)

口唇部に丸みをもち、口縁部がやや内湾するものである。19は、完形資料である。底部から口縁部にかけて緩やかな曲線を描きながら外傾し、口縁部で内湾する器形である。口縁部に 2 条の沈線を巡らし、その下位に数条一組の波状沈線を巡らす。外底面の縁には、工具による調整痕が確認できる。

(4) 壺 (第45図20~30)

「ハンドゥーガーマ (半胴壺)」または「ミジガミ (水壺)」と呼ばれるものである。胴部が膨らみ、胴上部から頸部・口縁部にかけて内傾する器形のもの为主体である。口縁形態から、5 つに分類した。

第 1 類 (20)

口縁部の断面形が三角形に肥厚するもので、口唇部を水平な平坦面に整形するものである。今回、20の口縁資料 1 点のみが得られた。口縁肥厚部下の器壁の傾きから、胴部の膨らむ器形が予想される。

第 2 類 (21) (口縁形態：第44図 3 参照)

口縁部上端が逆し字状に屈曲し、口唇部が鐮状に張り出すものである。口唇部 a・b 面の幅が狭く、口縁部・胴部の平均的な器厚値に近い。21は、胴部が膨らむ器形で、口縁部 b 面に 3 条の沈線を巡らし、その下位に間をあけて刻目突帯を貼付しているのが僅かに確認できる。

第 3 類 (23~25) (口縁形態：第44図 4 参照)

口縁部に有段肥厚部 (口唇部 b 面) をもつものである。口唇部 b 面には沈線を 2 条巡らし、口唇面の幅が広いものではその下端に沈線を施す。いずれも、胴部の膨らむ器形である。

23は、口唇部 b 面の幅が狭く、第 2 類との中間的な形態となっている。口縁面には 4 条以上の沈線が巡るようである。24は、口縁面に 4 条の沈線を施文し、その下位に間をあけて幅約 1 cm の無文突帯を巡らすもので、沈線と突帯の間には直径約 2 cm の円盤を貼付する。25は、口縁面に 4 条の沈線が確認できる。

第 4 類 (26) (口縁形態：第44図 2 参照)

口縁部が逆し字状に屈曲し、口唇部 a 面の幅が口唇部 b 面に比べ著しく広いものである。胴部の膨らむ器形と思われる。26は、口唇部 b 面の下端に沈線を 1 条巡らし、口縁部 b 面にも沈線の施文が僅かに確認できる。

第 5 類 (27)

口唇部を平坦に整形し、口唇面の内外端が張り出すもので、口縁の断面形が T 字状となる。27は、口縁部に 2 条の凸面が巡り、その下位に 2 条一組の波状沈線を施し、その上に直径約 1 cm の円盤を貼付する。

胴部資料 (22・28~30)

22は、口縁部を欠失しているが、おそらく第 2 類に属する資料と思われる。胴部の膨らむ器形で、最大径が胴上部にくる。口縁下部に沈線を 2 条巡らし、その下位に間をあけて 1 条の突帯を巡らす。突帯は、断面三角形のものを規則的に間隔をあけて横幅 1 cm 程に押し潰している。

28~30は、幅約 3 cm の突帯状の凸面を胴部に 1 条巡らすもので、その上位には平行沈線・波状沈線等を施文する。30は、凸面の上位に直径約 4.5 cm の円盤を貼付するもので、器外面には補修のためと思われるコンクリートが付着している。28・29の内面には、全体的に石灰が薄く付着する。

(5) 壺類 (第46図31~46)

器形的に壺形になるものを、一括してここで扱う。口縁形態から、4つに分類した。

第1類 (31)

口唇部に丸みをもち、口縁部が緩やかな曲線を描きながら外反するものである。31は、瓶の口縁資料と思われる。

第2類 (32~34・38・44・45) (口縁形態: 第44図3参照)

口縁部上端が逆L字状に屈曲し、口唇部が鈎状に張り出すものである。頸部の立ち上がりが直線的になるものが、主体である。

33は、頸部の立ち上がりが曲線的なもので、内外面共に泥釉が掛けられ、器面の色調が暗褐色を呈する。

32・38・45は、頸部が直立するものである。38は、口唇部a面の幅が口唇部b面に比べ広いもので、口唇部b面及び胴上部に沈線を巡らす。45は、完形資料である。頸部下端に沈線を巡らし、その下に「三」の字を記した判がみられる。外底面の縁には、工具による調整痕が確認できる。この資料は、Ⅱ地区のウワーフルに隣接して出土し、内部から加工された豚骨が検出された。「宜野湾市史」(註3)によると、旧暦12月27日のウワー・クルシーに豚をつぶし、肉・骨・脂肪を別々に蓄えたとあり、「行事の時などは、甕に保存してある豚のソーキ骨(あばら骨)でだしを取った」というから、おそらく本資料はだし骨を保存するための容器として利用したものではないかと思われる。

34・44は、頸部がやや斜位に内傾するものである。34は、頸下部に段を有する。44は、肩部に沈線を1条巡らし、その下に「」の記号を記した判がみられる。

第3類 (35~37) (口縁形態: 第44図5参照)

口縁部が強く外反するもので、口唇面は外側を向き、その上下端に稜を有する。35は、口唇面上端が尖り、口唇面下端の稜はやや不明瞭となる資料で、徳利になるものと思われる。36は、頸部下に沈線を数条施文する。37は、頸部下に螺旋状沈線、肩部に沈線を1条巡らし、その間には判らしきものが一部確認できるが、欠失のため判然としない。

第4類 (39・46)

口縁部が玉縁状に肥厚するものである。39は、肩部から口縁部にかけて直線的に内傾する器形である。肩部に沈線を2条巡らし、その上位には耳を貼付する。耳のアーチ部分は、上下から押し潰され、その断面形は三角形となる。耳の横に、「」の記号を記した判がみられる。46は、玉縁状の口縁肥厚部が長くなるもので、口縁部から底部までの全体形がわかる大型資料である。胴部は大きく膨らみ、頸部の立ち上がりを有し、口縁肥厚部で外反する器形である。頸部下と肩部に2条ずつ沈線を巡らし、その間に耳を4つ配する。耳のアーチ部分は、上下から押し潰している。耳の横には、「」の記号を記した判が確認できる。胴下部から外底面にかけて、暗褐色のマンガネ釉(?)を施す。外底面の縁に沿って工具による調整痕が確認でき、内底面には器面の調整痕が平行にみられる。この資料は、上から押し潰されたような状況で、Ⅱ地区のウワーフルに隣接して出土した。

胴部資料 (40~43)

40は、肩部に沈線が2条確認でき、その上位に耳を貼付する。耳のアーチ部分は、上下から押し潰され、その断面形は三角形となる。41は、頸部下に沈線を3条巡らし、その下に「十」の字を記した判がみられる。42は、沈線が2条確認できる。43は、縦耳を貼付する資料で、横位に丸い孔を穿つ。アンダガーム(油甕)になるものであろうか。

(6) 炉 (第47図47~50)

「ヒールー(火炉)」と呼ばれるものである。47・48・50の3点は口縁資料で、「く」字状に屈曲するものである。口唇部を平坦に整形し、屈曲部直上に沈線を1~2条巡らす。50は、屈曲部直下にも沈線を1条施す。48・50は、口唇部と屈曲部との間の距離が近いことから、火窓の一部ではないかと思われる。48の口唇部は、弧状に湾曲している。49は胴部資料で、屈曲部直下に把手を貼付している。把手の上面襷は台形状となり、丁寧に面取りされ、稜が明瞭である。縦位に丸い孔を穿つ。

(7) 器種不明 (第47図51~57)

口縁部資料 (52~55)

52・53・55は、概ね壺形になるものかと思われるが、細片資料で胴部以下の器形が判然としなため、ここに含めた。52・53・55の3点は、共に口縁上部がほぼ直立し、その下からやや屈曲きみに角度を変えて胴部の張り出す器形のように見える。口唇部は、平坦に整形する。54は、口縁概形が内湾するもので、口唇部外端が張り出すため、口唇直下で僅かに外反する。

胴部資料 (51・56)

51は、水鉢の第1類になるものかと思われるが、口唇部を欠失しているため不明。外面に数条一組の波状沈線を描く。56は、甕形、または壺形になる資料で、刻目突帯が1条確認できる。

底部資料 (57)

57は、甕・壺いずれかの底部と思われる。内面には、器面の調整痕が明瞭に残る。

(8) 胎土分類

胎土中に含まれる混入物の特徴から、3つに大別した。第1群は、胎土に白土・赤土を筋状に含むもので、白土のみを確認できるものが主体である。確認できる混入物の量には疎密があり、肉眼観察で微細な白土の筋を僅かに1条のみ確認し得たものもある。また、石英かと思われる白色粒を含むものがある。第2群は、胎土に赤土を筋状に含むもので、大きいものでは5mm程の大きさの粒もみられる。胎土の一部に赤土を筋状に含むものがある。第1群と同じく、確認できる混入物の量に疎密があり、赤色粒が小さく、確認できる量があまりにも少ないものは、後述する第3群に含めた。第3群は、胎土中に特に目立つような混入物を含まないもので、今回得られた沖縄産無釉陶器の圧倒的多数を占める。ただ、岩石小片かと思われる茶褐色粒や石灰質小礫を含むもの、巻貝の圧痕を有するもの等があるが、資料全体の大きさに比べ確認できる混入物の量が僅かであったため、各々を細分することはせず一括して取り扱った。また、器面が若干ざらつき、微細な粒を多量に含むと思われるものがあり、光沢をもつ鈹物粒が器面にみられたが、混入する粒の大きさが1mmよりもかなり下回り、肉眼では一見して混入物の有無を明瞭には確認できないことから、このような特徴をもつ資料も第3群に含めた。

今回図示した第1群の資料は、第45図1・2・11・20、第46図33、第47図51・57である。確認できた器種は、摺鉢(第1類)・甕(第1類)・壺(第2類)・水鉢(第1類)(?)等がある。第2群の資料は、第45図4・5・10・12・16・21・22、第47図49・56である。器種は、摺鉢(第1類)・鉢・甕(第2類)・炉等がある。その他の図示資料は、全て第3群のものである。

第3群になる資料が大多数であるため、実際には分類作業は第3群の中から第1群・第2群の特徴をもつものを肉眼観察で探し出すような状況であった。第3群に含めたものの一部には、上述した第1群・第2群の胎土の特徴を確認できなかったもの、器色や胎土・器面の状態等が第1群・第2群のものとはかなり近似したものがあり、混入物の疎密性の点から必ずしも第3群から第1群・第2群のものを完全に分離し得たとは考えていない。

今回3つに分けた無釉陶器の胎土の特徴が、製作された時期または生産地の違い等をどの程度明確に示しているのかについては、今後の検討課題として残る。

※本稿を草するにあたり、仲宗根求氏(読谷村教育委員会)から喜名古窯跡の出土資料を観察する機会と、有益な御助言を数多く頂いた。ここに記して、感謝の意を表する。

註

- 註1. 島 弘・内間 靖・玉城安明他『壺屋古窯群 I』那覇市教育委員会 1992年
註2. 大城 慧・島袋 洋・金城俊信他『湊田古窯跡(I)』沖縄県教育委員会 1993年
註3. 『宜野湾市史』第五巻(資料編四 民俗) 1985年

参考文献

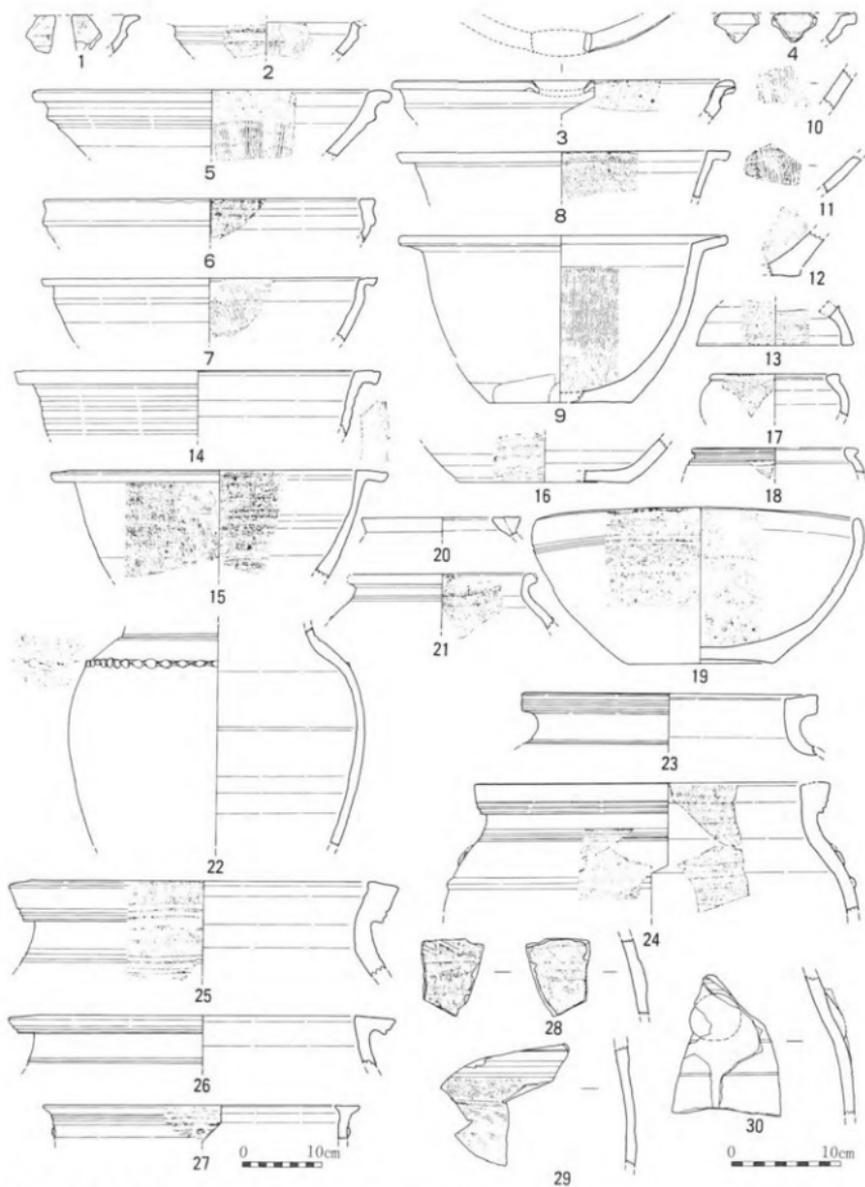
- ・宮城篤正『荒焼の刊について』【琉球政府立博物館 館報】No. 5 1972年
・宮城篤正『沖縄の古窯』【歴史資料調査報告書Ⅲ 県内漆器・陶器遺品調査報告書】沖縄県教育委員会書 第26集 1980年
・安里進・上原政昌・家田淳一『摺鉢編年からみた近世琉球陶業の展開』【名護博物館紀要 あじま】3 1987年
・知名定順『ハンドゥーゲーム』【宜野湾村立博物館紀要 ガラマン】4 1998年

第17表 b 沖縄産無釉陶器観察一覧

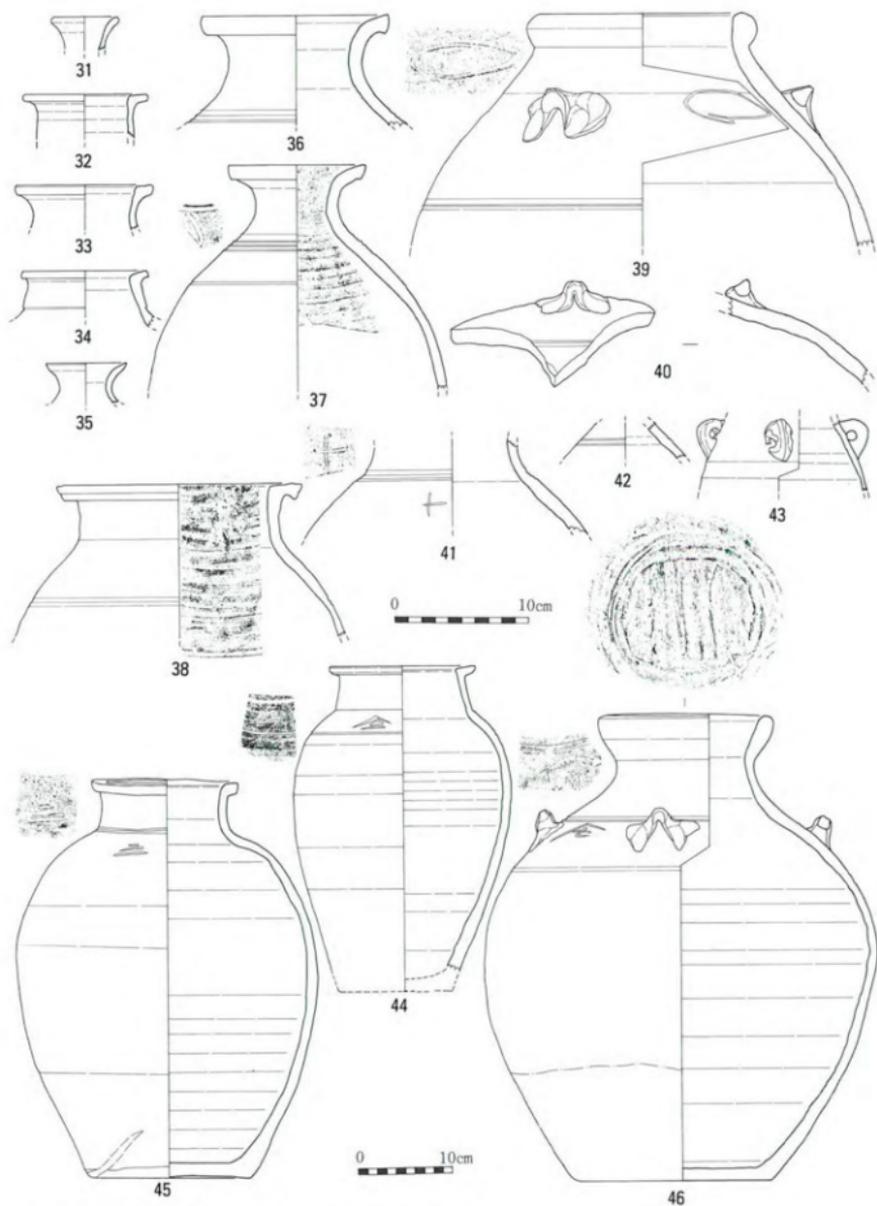
標本 番号	器種 分類	口 径 高さ (単位:cm)	色類(外)	色類(内)	着 地	器 厚 (単位:cm)	備 考	出土地区	
第45回 図33 7	甕鉢 第3類	29.9	暗朱色	暗朱色	第3群, 朱色・暗朱色。器面はややざらつき, 明瞭ではないが微細な砂粒を多量に含むようである。	8	口器面幅a17cm, b19cm。	旧地区 F-42 遺構1	
8	甕鉢 a種	30.1	茶褐色	朱色	第3群, 暗朱色。	6~7	口器面幅a20cm, b19cm。	旧地区 G-52 3層	
9	甕鉢 第4類 b種	29.8 15.1 12.8	朱色	朱色	第3群, 暗朱色。僅かに、白色砂粒(石灰質?)・茶褐色粒を含む。	8~10	口器面幅a21cm, b17cm。	旧地区 E-27 遺構1	
10	甕鉢 胴部	—	褐色	褐色	第2群, 暗朱色。赤色粒が多く含まれる。器面はややざらつき, 明瞭ではないが微細な砂粒を多量に含むようである。	11~13	—	旧地区 G-48, 49 1層	
11	甕鉢 胴部	—	茶褐色	暗紫色	第1群, 暗紫色。白色砂粒(石灰質?)を含む。粒状の白土は、それ程顕著ではない。	8~9	—	旧地区 G-47 2層	
12	甕鉢 底部	—	褐色	暗朱色	第2群, 暗朱色。器面はややざらつき, 明瞭ではないが微細な砂粒を多量に含むようである。	15~22	—	旧地区 H-49 遺構1 1層	
13	甕鉢 胴部	—	暗紫色	朱色	第3群, 暗茶褐色。	8~10	量付けの幅は、11cm, 確認できる孔は、1つのみ。	旧地区 1層	
14	鉢 a種	32.7	暗茶褐色	暗朱色	第3群, 暗茶褐色, 暗朱色。	7~8	口器面幅a20cm, b11cm。	旧地区 G-80 B	
15	鉢 b種	30.1	暗褐色	朱色	第3群, 暗茶褐色粒を含む。	6~12	口器面幅a20cm, b19cm。	旧地区 1層	
16	鉢 底部	—	暗茶褐色	暗朱色	第2群, 暗紫色。	10~13	胴下部から外面面にかけて工具による網眼状が明瞭。	旧地区 H-49 遺構1 1層	
17	水鉢 第1類	11.6	暗茶褐色	暗茶褐色	第3群, 内外面別: 灰褐色。中央: 暗紫色。	6~10	口器面幅13cm。	旧地区 G-49 遺構1	
18	水鉢 第1類	15.0	暗褐色	暗褐色	第3群, 暗紫色。	7~8	口器面幅17cm。	旧地区 G-49 1層	
19	水鉢 第2類	28.7 13.0~14.5 12.0	茶褐色・ 暗褐色・ 暗褐色	暗褐色	第3群, 朱色。 胴縁部~胴下部: 9~12	胴縁部~胴上部: 8~10 胴下部~胴底: 9~12	内面には、3~6mm程の小穴が多くみられる。クワープール内で、コンクリートで固定し入れとして利用していたため、器外面にはコンクリートが付着している。	旧地区 G-49 2層 99-7-9内	
20	壺形 第1類	14.4	暗褐色	暗紫色	第1群, 暗紫色。白土・赤土が粒状にみられる。	—	口器面幅25cm, 口縁部に断面三角形の帯を嵌めて、口器部の肥厚面をつくる。	旧地区 G-42 2層	
21	壺形 第2類	—	茶褐色	朱色	第2群, 暗茶褐色。最大6mm程の赤色粒がみられる。一部に赤土が粒状に入り込む。	7	口器b18cm, 口径(内径)15.2cm。	旧地区 1層	
22	壺形 胴部	—	暗茶褐色	暗紫色	第2群, 暗紫色。最大4~6mm程の赤色粒がみられる。	6~10	胴縁幅6~9cm, 最大径径26.3cm。	旧地区 1層	
23	壺形 第3類	26.5	暗茶褐色	暗朱色	第3群, 暗茶褐色。胎土中に、1~2mm程の小穴が数多くみられる。	10~14	口器幅a28cm, b17cm。	旧地区 1層	
24	壺形 第3類	31.8	灰白色	暗褐色	第3群, 暗茶褐色。	12~14	口器幅a25cm, b12cm。	旧地区 G-60 B	
25	壺形 第3類	34.8	朱色	朱色	第3群, 朱色。	14~18	口器幅a27cm, b23cm。	旧地区 G-59 B	
26	壺形 第4類	34.6	茶褐色	朱色	第3群, 朱色。	10~13	口器幅a27cm, b16cm。	旧地区 1層	
27	壺形 第5類	40.0	—	茶褐色	朱色	第3群, 朱色。	11~13	口器面幅30cm。	旧地区 1層
28	壺形 胴部	—	茶褐色	茶褐色	第3群, 暗茶褐色。	8~10	内面に石灰が厚く付着する。	旧地区 1層	
29	壺形 胴部	—	茶褐色・ 朱色	朱色	第3群, 暗褐色粒を含む。	8~13	—	旧地区 G-52 1層	
30	壺形 胴部	—	灰茶褐色	茶褐色	第3群, 暗茶褐色。	9~12	外面には、補修のためと思われるコンクリートが付着。内面には、石灰が厚く付着する。	旧地区 1層	
第46回 図34 31	甕瓶 第1類	5.8	暗褐色	暗茶褐色	第3群, 内外面の厚さ1~2mm程は暗褐色。中央は、暗茶褐色。	3~5	—	旧地区 G-46 遺構1	
32	甕瓶 第2類	9.3	褐色	褐色	第3群, 暗茶褐色。	4~5	口器幅a14cm, b15cm。	旧地区 F-52 1層	

第17表 c 沖縄産無釉陶器観察一覧

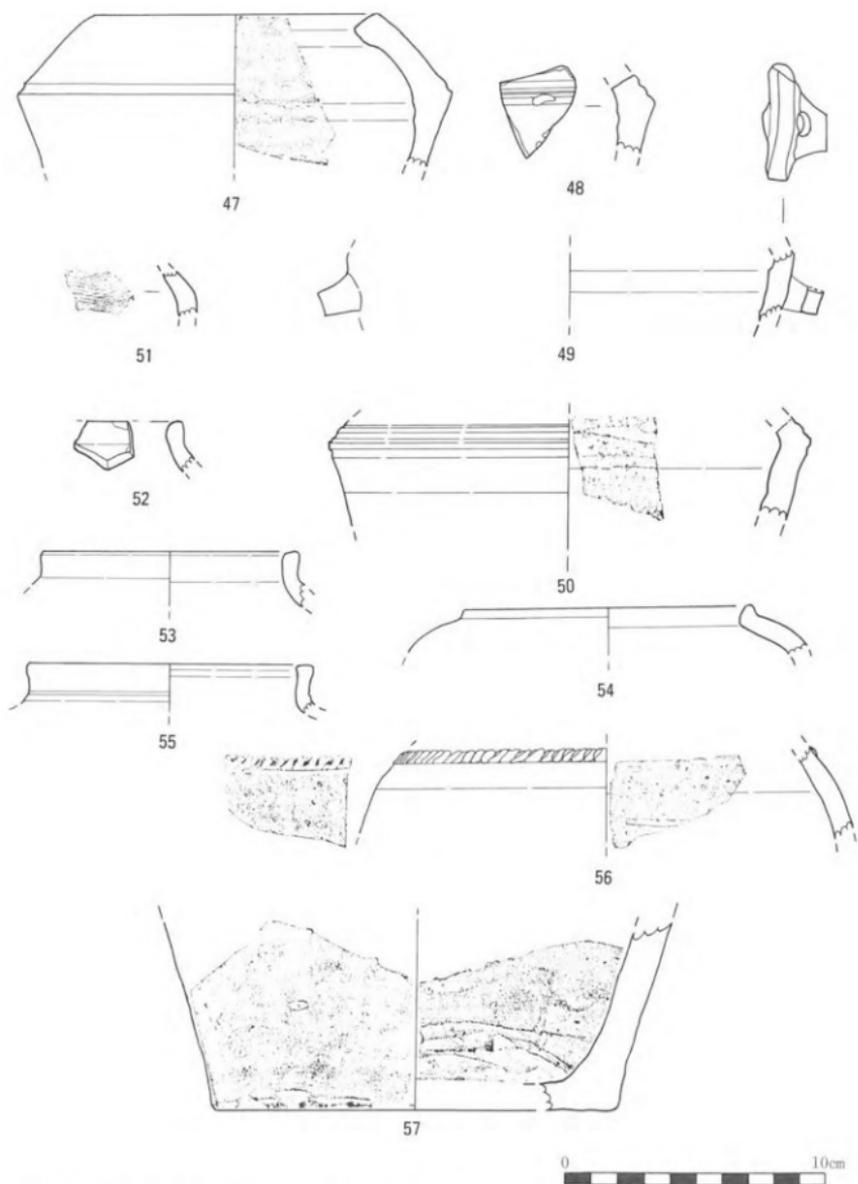
採回番号	器種分類	口径 高さ 径(cm)	色調(外)	色調(内)	備 考	出土地点			
第46回 図34 33	甕類 第2類	10.2 —	暗褐色	暗褐色	第1群。暗紫色。白土の筋が多くみられる。	4~5	口径幅a型12cm, b型7cm。	田地区 G-48, 49 1層	
# 34	甕類 第2類	9.5 —	—	暗褐色	第3群。暗茶褐色。赤色粒が、僅かに散見される。	4~9	口径幅a型14cm, b型6cm。	田地区 F-43 遺構3	
# 35	甕類 第3類	5.9 —	—	茶褐色	褐色	第3群。暗茶褐色。	4~5	口径幅6cm。	田地区 1層
# 36	甕類 第3類	13.8 —	—	茶白色	暗褐色	第3群。暗褐色・暗茶褐色。帯貝の厚痕あり。	7~9	口径幅14cm。	田地区 F-43 遺構3
# 37	甕類 第3類	10.2 —	—	茶褐色	茶褐色	第3群。茶褐色。	6~10	口径幅10cm, 最大径径22.0cm。	田地区 1層
# 38	甕類 第2類	18.0 —	—	茶白色	朱色	第3群。朱色。暗褐色粒が散見される。	5~9	口径幅a型24cm, b型11cm, 最大径径24.2cm。	田地区 1層
# 39	甕類 第4類	14.6 —	—	茶褐色	朱色	第3群。暗茶褐色。	9~14	最大径径33.8cm, 口縁肥厚部の幅22cm, 器厚径は17cm, 耳の最大幅10cm。	田地区 1層
# 40	甕類 胴部	— —	—	暗褐色	暗朱色	第3群。暗茶褐色。暗褐色粒が散見される。	10~12	耳の最大幅53mm。	田地区 1層
# 41	甕類 胴部	— —	—	暗褐色	暗朱色	第3群。暗茶褐色。	8~10	最大径径20.7cm, 頸径10.5cm, 外表面には、黄褐色の自然釉がみられる。	田地区 H-60 B
# 42	甕類 胴部	— —	—	暗褐色	暗朱色	第2群。暗茶褐色。2~3mmの赤色粒がみられる。	6~7	最大径径9.0cm。	田地区 1層
# 43	甕類 胴部	— —	—	褐色	茶褐色	第3群。内外面の厚さ2~3mm程は暗灰色。中央は、暗茶褐色。帯貝の厚痕あり。	3~5	最大径径12.2cm, 耳の最大長33mm。	田地区 G-60 B
# 44	甕類 第2類	15.3 —	—	褐色	暗茶褐色	第3群。暗茶褐色。	口縁部~胴上部:6~9 胴下部~底部:8~14	残存最大径高32.0cm, 最大径径22.8cm, 口径幅a型21cm, b型8cm。	田地区 1層
# 45	甕類 第2類	15.2 41.5 15.9	—	暗茶褐色	暗朱色	成形資料のため、観察不可能。	口縁部~胴上部:8~12 胴下部~底部:9~21	最大径径31.2cm, 口径幅a型14cm, b型11cm。	田地区 不明
# 46	甕類 第4類	18.3 48.8 19.5	—	褐色	暗朱色	第3群。石灰質と思われる3~4mm程の白色砂粒が、散見される。	口縁部~胴上部:7~13 胴下部~底部:8~18	最大径径40.4cm, 口縁肥厚部の幅49cm, 最大器厚径は17cm, 耳の最大幅77mm。	田地区 H-44 2層
第47回 図35 47	甕 口縁部	10.6 —	—	暗褐色	暗褐色	第3群。暗茶褐色。	7~16	—	田地区 F-41 2層
# 48	甕 口縁部	— —	—	暗褐色	暗褐色	第3群。暗茶褐色。赤色粒が僅かに散見される。	8~14	—	田地区 G-44 2層
# 49	甕 胴部	— —	—	暗朱色	暗朱色	第2群。暗茶褐色。1~2mm程の赤色粒がみられる。	6~8	把手の最大幅30mm, 最大径径17.0cm。	田地区 F-47 遺構1
# 50	甕 口縁部	— —	—	朱色	朱色	第3群。朱色。	9~10	最大径径18.2cm。	田地区 G-60 B
# 51	器種不明 胴部	— —	—	褐色	褐色	第1群。暗紫色。白土・赤土が、筋状に入り込む。石炭かと思われる砂粒がみられる。	6~7	—	田地区 G-43 2層
# 52	器種不明 口縁部	— —	—	暗褐色	暗灰色	第3群。外側の厚さ2~3mm程は暗灰色。中央は、暗茶褐色。	5~7	口縁上部の立ち上がり幅は、9cm。	田地区 H-49 遺構3
# 53	器種不明 口縁部	9.7 —	—	褐色	褐色	第3群。暗灰色。	6	口縁上部の立ち上がり幅は、10cm。	田地区 F-39 2層
# 54	器種不明 口縁部	10.8 —	—	暗褐色	暗褐色	第3群。内外面の厚さ2mm程は灰色。中央は、暗茶褐色。	6~7	口径幅8~9cm。	田地区 F-35 2層
# 55	器種不明 口縁部	10.8 —	—	暗茶褐色	暗朱色	第3群。暗茶褐色。	5	口縁上部の立ち上がり幅は、11cm。	田地区 H-49 遺構1 1層
# 56	器種不明 胴部	— —	—	褐色	暗朱色	第3群。暗茶褐色。2~5mm程の赤色粒がみられる。赤土が筋状に入り込む。	7~9	最大径径18.7cm。	田地区 1層
# 57	器種不明 底部	— 15.1	—	褐色	暗灰色	第1群。暗茶褐色。白土・赤土が、筋状に入り込む。石炭かと思われる砂粒がみられる。	11~17	—	田地区 G-54 3層



第45図 沖縄産無軸陶器 1 摺鉢(1~13)、鉢(14~16)、水鉢(17~19)、甕(20~30)



第46図 沖縄産無軸陶器2 壺類(31~46)



第47図 沖縄産無釉陶器 3 炉¹(47~50)、器種不明(51~57)

第20節 土器

出土土器は、大きく2つに分けることができる。第1群は、宇佐浜式を主体とする高宮暫定編年Ⅳ・Ⅴ期(縄文時代後・晩期相当)の土器である。第2群は、フェンサ上層式土器・グスク土器・グスク系土器等と呼称されるもので、グスク時代に使用された土器である。また、僅かではあるが第1群・第2群以外の土器資料があり、その他の土器として扱った。その中には、高宮暫定編年後期の土器底部資料と思われるものが、1点含まれている。以下で示す土器の推算口径は、すべて口縁外径とする。

(1) 第1群

第1群土器は、I地区で最も多く出土している。以下では、型式分類を基本に第1群土器を5つに細分する。また、胎土の特徴からも、2つに大別した。胎土a種の特徴は、鉱物・岩石の細片・砂粒を多量に含むもので、器面はザラザラした触感のものが多く、b種は、胎土中に多くの小穴を有するもので、器面はアバタ状となる。a種と同様の砂粒を含むものもあるが、混入される量はa種ほど多くない。また、胎土に石灰質かと思われる白色砂粒の混入がみられるものもある。確認できる土器型式としては、宇佐浜式を主体に伊波式・萩堂式・室川式・室川上層式・カヤウチバンタ式の6型式がある。その他、細片資料のため判然としないが、神野D式・大山西・喜念I式ではないかと思われるものもある。尚、以下で使用する土器文様の名称は、基本的に高宮廣衛氏が定めたものに従う(註1)。

第1類(第48図1~6、第49図11~20)

伊波式、または萩堂式に属するものである。細片資料が多く、兩型式のいずれになるのか、判然としないものがあるため、一括して取り扱う。確認できた器種は、全て深鉢形である。胎土の特徴は全てa種に属し、チャートと思われる青灰色の細片を含むものが多い。

第48図1~6、第49図11~17に図示した資料は、I地区d区の竪穴式住居[F36;3]内から出土したものである。第48図1・2・4・6及び第49図11~13・15は、既存の型式概念から、伊波式の範疇に属する。

第48図1は、口唇部に2つの突起を1組としたものを3組配置するものと思われ、その3組の突起間にそれよりもやや小ぶりの突起を1つずつ配する。口径17.5cm。文様は、口唇直下に1条、胴上部に2条、単篋工具による押し引き文を施し、その間に羽状文を施文する。

2の山形突起は、両裾で一段下がり、中央の先端が3つに別れるものを1組とし、これが口唇部に4組配置される。口径14.0cm。口唇部には、短沈線文を施す。口縁外面の文様は、口唇直下及び胴上部にそれぞれ2組の短沈線文を横位に施し、山形突起の先端下で縦位の短沈線文を3組施文する。口縁部の2カ所で穿孔しているのが確認できる。

3では、接合はできなかったが、同一個体と思われる口縁部片2点が出土しており、共に山形突起が確認できなかったことから、平口縁として図示した。口径13.2cm。推算器高17.0cm。同一個体と思われる底部資料の底径は、6.6cmである。文様は、口唇直下から胴上部にかけて、横位の短沈線文を5組施文する。

4は、山形口縁である。推算口径21.8cm。口唇直下から胴上部にかけて、半截竹管状工具による横位の押し引き文を5条施し、山形突起下に同種の文様を縦位に3条施文する。

5は、山形口縁である。推算口径13.4cm。口唇直下に沿って突帯を1条貼付し、単篋工具による押し引き文を施している。突帯下には、横位の連点文が3組確認できる。

6は、山形口縁である。推算口径12.7cm。口唇部に、短沈線文を施す。口縁外面全体の文様構成は判然としませんが、口唇直下にやや形の崩れた羽状文、山形突起下に縦位の短沈線文を施すようである。

第49図11は、山形口縁となるもので、山形突起下に4組の中沈線文を縦位に施す。

12は、第48図4と同一個体である可能性をもつもので、口唇直下から胴上部にかけて、半截竹管状工具による横位の押し引き文を5条施す。縦位の押し引き文も1条確認できる。ただ、欠失のため明瞭ではないが、横位の押し引き文の下位に沈線文(鋸歯文?)を施すようであり、第48図4と施文の状況がやや異なる。

13は、口唇直下に単篋工具による横位の横捺刻文を2列施し、その下位にも間をあけて1列のみ欠損部分に沿って確認できる。

14は、山形突起の裾部が僅かに残存する。口縁外面に、横位の点刻文が3組確認できる。

15は、口唇部に刻み目を施し、口縁外面に2組の中沈線文(?)が確認できる。

16・17の2点は、胴部資料である。16は、上位に斜位沈線、中位に横位連点文が2組、下位に鋸歯文の施文が確認できる。17は、器面が荒れて施文状況が判然としないが、横位に突帯状の稜(有段肥厚?)を有し、その稜上に点刻文を1組(?)施し、その上位に組帯文を施文する。

18は、横位の連点文(疑似点刻文?)をやや不規則に施文する。

19は、伊波式土器である。口唇下に2組の点刻文が確認できる。

20は、萩堂式土器である。山形突起下に一組の短沈線文、その両側に横位の又状工具による沈線を施文する。

第2類(第49図21~29)

口唇部を強調するもので、確認できる器種は深鉢形だけである。口唇部が肥厚するものを第1種、口縁上端を折り曲げて疑似肥厚させるものを第2種とする。また、胎土の特徴もa・bの両種があり、第2類a種は室川式、b種は室川上層式の特徴をもつものである。

第2類a種(室川式)のものは、21・23・24・26~29に図示した。有文と無文の2つがある。口縁形態では、21・23・24が第1種、26~29が第2種となる。

21・23・24・26は、有文資料である。21は、口縁外面に斜位の沈線文(組帯文?)を施す。23は、口唇部と口縁外面に、横位の押し引き文がそれぞれ1条ずつ確認できる。24は、口唇部を平坦に整形し、口唇面の上に沈線の施文が3条確認できる。26は、横位の横捺刻文を口唇直下に1条施し、さらに間をあけてその下位に少なくとも2条の施文が確認できる。21・23・26の3点はa種に含めたが、ややb種に近い質感を有する。

27~29は、無文資料である。いずれも、胎土の特徴は後述する第4類と同質で、石英と思われる白色鉱物の砂粒や岩石細片(粘板岩?)等を多量に混入する。27・28は、同一個体である可能性が高い。28は、口唇部に山形突起を有するが、この部分は口縁上端を折り曲げないため、肥厚しない。推算口径は、28が24.0cm、29が28.6cmである。

第2類b種(室川上層式)のものは、22・25に図示した。2点共に、口縁形態は第1種に属する。22は、口縁の断面形が23に類似するが、その肥厚はかなり微弱である。口唇部とその直下に、横位の横捺刻文を1条ずつ施す。25は、口縁外面に横位沈線を施文するようであるが(あるいは、有段肥厚部か?)、欠失のため判然としない。胎土中に、細かい白色物質(石灰質砂粒?)を多量に含む。

第3類(第50図30~33)

口縁形態が有段肥厚となる、カヤウチパンタ式土器である。胎土は、30・32・33がa種、31がb種に属する。推算口径は、30が20.6cm、32が19.4cmである。31~33の3点は、有文資料で、肥厚帯外面に施文する。31は、横位の横捺刻文を2条施す。肥厚帯下端の有段部は、やや不明瞭である。32は、単筒工具による斜位の沈線が1条確認できる。33は、横位の点刻文を1組施す。

第4類(第48図7~10、第50図34~44)

口縁断面が三角形またはカマボコ状に肥厚するもので、今回得られた第1群土器の内、型式不明の第5類を除くと最も出土量が多い。口縁が肥厚する度合いの強弱に、個体差がみられる。胎土はすべてa種に属し、第1類と比べて胎土の混入物は全般的にやや粗い。石英と思われる光沢のある白色鉱物の砂粒や岩石細片(粘板岩?)等を多量に混入するものが、主体である。第50図35に図示した1点を除き、他はすべて宇佐浜式土器である。

第50図35は、喜念I式かと思われる口縁資料で、口縁外面に幅2~3mm前後の細い突帯を縦位に1条貼付しているのが僅かに確認できる。突帯横の刺突連点の施文は、確認できない。胎土には、微砂粒を多量に混入する。

第48図7~10、第50図34・36~44は、宇佐浜式土器である。有文と無文の2つがある。

有文の宇佐浜式は出土量が少なく、細片資料が殆どである。口縁肥厚部に横位の横捺刻文を1条施すものが比較的多く、僅かに又状工具による点刻文及び沈線文を施文するものが出土している。特徴的な有文資料を、第50図34・36~38に図示した。34は、壺形に近い器形で、推算口径は11.8cmである。断面が三角形となる口縁肥厚部の稜を境として、その上下に横位の横捺刻文を1条ずつ施す。また、口唇部から口縁外面にかけて、幅4~5mm

程の突帯を縦位に1条貼付しているのが確認できる。36は、口縁肥厚部とその直下に、点刻文をそれぞれ1条ずつ施す。口縁肥厚部には、縦長の瘤状突起の貼付が1つ確認できる。37は、口縁肥厚部に横位の横捺刻文を2条施す。肥厚部下には、「」状の沈線が確認できる。38は、叉状工具による沈線文を口縁肥厚部上部と肥厚部下に施文する。肥厚部下では、横位沈線1組とその下に縦位沈線1組の施文が確認できる。

第48図7～10、第50図39～44は、宇佐浜式の無文資料である。第50図44を除き、他はすべて深鉢形になるものと思われる。第50図44は、小鉢または壺形になる器形かと思われる。推算口径8.4cm。深鉢形には、胴部に膨らみをもつもの(第48図8・9、第50図39～43)と、胴部から口縁部にかけて直線的に開くもの(第48図7・10)がある。第48図7と第50図41は、口縁肥厚部に瘤状突起を有する。第50図43は、口縁の肥厚部がかなり微弱である。推算口径は、第48図7(26.9cm)・8(18.0cm)・9(24.0cm)・10(23.8cm)・第50図39(12.3cm)・40(13.3cm)・41(16.8cm)・43(16.9cm)である。

第5類(第51図45～55)

土器型式が不明、または不明瞭なものである。無文の胴部資料もここに含めたので、第1群土器の圧倒的多数が第5類となる。有文と無文の2つに分けられ、その中から特徴的な資料を以下で紹介する。

49～54は、有文の口縁資料である。胎土の特徴は、いずれもa種に属する。49は、口唇直下に横捺刻文が2列確認できる。施文具を使用する方向が上列と下列でことなり、上列は横位に、下列は斜位に使用している。大山式であろうか。50は、萩堂式または大山式になるものと思われる。口唇直下に、横捺刻文を5列施す。51は、口唇部のやや肥厚するもので、口縁部に横位の突帯を貼付する。口唇部から突帯にかけて、縦位の沈線が3条確認できる。口唇直下には、横位の押し引き文を1条施す。52は、口唇下で僅かに肥厚し、肥厚部に横位の押し引き文を1条施す。肥厚部下には、縦位の沈線が2条確認できる。胎土の特徴は、第4類(宇佐浜式)に近い。53・54は、口唇部で肥厚し、口縁部に横位の突帯を貼付するものである。53は、突帯に列点文を施す。46・48・55は、有文胴部資料である。46は、2条の沈線がL字状に施文されている。推算最大胴径16.7cm。48は、神野D式の頭部片かと思われるもので、有段肥厚部下端に点刻文を施す。55は、胴部の膨らむ器形で、胴上部に横位の押し引き文を1条施す。また、押し引き文の上位に3条の縦位沈線を施し、沈線の下部は押し引き文の下位で直角ぎみに曲がる。推算最大胴径19.2cm。46・55の胎土はa種で、共に第4類(宇佐浜式)の胎土の特徴に近似する。

45・47は、無文資料である。45は、口縁部の外反する壺形土器である。第2群土器に含めるべきものかもしれないが、I地区a区2の層からの出土であり、この層では第1群土器の出土量が圧倒的に多く、また、胎土の特徴から前V期の仲原式土器となる可能性もあるかと思われたため、ここで取り扱った。胎土はb種であるが、器面の小穴はそれほど多くない。また、胎土中に、特に目立つような混入物はみられない。器面の質感は、硬質の第三紀細粒砂岩(通称:ニーピの骨)に類似する。推算口径10.4cm。推算頸径8.1cm。47は、胴部資料で、底部形態は丸底または尖底になるものかと思われる。推算最大胴径15.4cm。器面は比較的丁寧に調整されている。胎土はa種で、第4類(宇佐浜式)の胎土の特徴に近似する。

底部資料(第51図56～63)

平底と尖底の2形態がある。底径の推算可能な平底資料を、56～59に図示した。胎土は、すべてa種に属し、58は第1類、59は第4類の胎土に近似する。推算底径は、56(6.0cm)・57(6.4cm)・58(5.1cm)・59(5.4cm)である。60～63は尖底資料で、いずれも胎土が第4類に近似し、宇佐浜式の底部になるものと思われる。63は、胴下部まで残存する資料で、推算最大胴径は17.4cmである。

(2) 第2群

第2群土器は、Ⅲ地区で最も多く出土している。細片資料のみで、全形の窺えるものはない。確認できた器種は、鉢形・鍋形・壺形の3つがある。胎土中に小穴を数多く有し、器面がアバタ状となるものが主体であるが、光沢のある黒色鉱物・白色鉱物等の微砂粒を多量に混入するものも少なからずみられる。前者には、胎土に石灰質と思われる白色砂粒を混入するものがある。

鉢形(第52図64～67)

64・65は、口縁部がほぼ直立するものである。64の推算口径は、22.4cm。66は、胴部に膨らみをもち、口縁上

端で直立する。67は、胴部が膨らみ、口縁部は「く」字状に屈曲して、口縁上部が外傾する器形である。

鍋形（第52図68～76）

68・69は、口唇直下に突起（耳）を貼付するものである。耳の正面観は、本来、方形を意識したものであろうが、上辺が広く下辺が狭いため、やや逆二等辺三角形形状の概形を呈する。口唇部は平坦に整形され、耳の上面も口唇面と連続した平坦面を形成する。70・73・75の3点は、口唇部を平坦に整形する。75は、口唇部で肥厚し、口唇部の内外端が張り出している。71・72・74・76の4点は、口唇部の断面形が舌状を呈する。72は、口唇部が波状となる。

壺形（第52図77）

77は、胴部が大きく膨らみ、頸下部で直立ぎみに立ち上がる器形である。推算最大胴径18.5cm。推算頸径11.6cm。

器種不明（第52図78～81）

78～81の4点は、壺形か、胴部に膨らみをもち口縁上部が外傾または直立する鍋形になるものと思われるが、細片資料のため判然としない。

底部資料（第53図85～91）

85・86・89・90の4点は、外底面と胴最下部との境界（外底面の縁）に稜を有し、底部から胴部に向かって外傾するものである。90は、外底面に葉痕を有する。推算底径は、85が8.0cm、86が11.8cm。

88は、外底面と胴下部との境界が不明瞭で、外底面の縁から胴部に向かって曲線的に移行する。87も、底面を欠失しているが、88と同じ底部形態になるものと思われる。87の推算最大胴径は、31.7cm。

91は、外底面の縁から外器面が直立ぎみに立ち上がり、そこから胴部に向かって外傾する。

(3) その他

第1群・第2群に含まれない、その他の土器として扱ったものは、第53図82～84に図示した、3点である。

82・83は、第2群土器に類似するが、器面調整の手法や器色等がやや異なる。82は、壺形かと思われる大形の胴部資料である。推算最大胴径23.5cm。外器面は工具によりかなり丁寧に調整され、平滑で光沢をもつ。内面には調整痕が明瞭で、指頭による幅1.5～2.0cm程の凹線（あるいは工具によるものか）が縦位に数条みられる。83も、82と同様、外器面の調整が丁寧に平滑である。胴部の資料であるが、底部に近い部分かと思われる。2点ともに、胎土に粒の大きさが1～2mm以下の白色微砂粒を多量に含み、83には赤色粒の混入も目立つ。

84は、高宮暫定編年後期の土器底部片と思われるものである。平底形態であるが、外底面の縁から外器面が直立ぎみに立ち上がる器形のように、外底面の縁が外側に張り出す「くびれ平底」とは形態が異なる。推算底径4.6cm。外底面中央は、僅かに窪む。胎土中に目立った混入物はないが、大きさ1～2mm程の茶褐色粒が若干みられる。

註

註1. 高宮廣衛 「第四章 伊波式土器と葦堂式土器」 『先史古代の沖縄』 第一書房 1991年

第19表 b 土器観察一覧

採回番号	分類	断面観察	胎土	色調(外・内)	厚厚(単位:cm)	備考	出土地点
第49回 図版37 13	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、微砂粒を多量に含む。	外:暗褐色 内:暗褐色	6~8	口唇部幅6~7cm。	1地区 F-36 遺構3 (掘穴式住居)
14	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、微砂粒を多量に含む。3~5mm程の岩石粒片もみられる。光沢のある黄灰色砂粒が散見される。	外:茶褐色 内:暗褐色	7~8	口唇部幅7~11cm。	1地区 F-36 遺構3 (掘穴式住居)
15	第1種	外面には、断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。内面では、横位の高度が確認できる。	a種、微砂粒を多量に含む。	外:茶褐色 内:黄白色	7~8	口唇部幅6~7cm。	1地区 F-36 遺構3 (掘穴式住居)
16	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、微砂粒を多量に含む。2~3mm程の光沢のある黄灰色砂粒が散見される。	外:黄白色 内:暗褐色	6~7	—	1地区 F-36 遺構3 (掘穴式住居)
17	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、混入物は全く無くて、1~2mm程の砂粒を多量に含む。光沢のある黄灰色砂粒が散見される。	外:暗褐色 下が暗褐色を呈する。 内面も外面と同様、上が暗褐色、下が暗褐色となる。	6~8	—	1地区 F-36 遺構3 (掘穴式住居)
18	第1種	外面には、横位の高度のみみられる。内面には、特に観察度はない。	a種、微砂粒を多量に含む。	外:茶褐色 内:暗褐色	6~7	口唇部幅7~8cm。	1地区 G-17 遺構12
19	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、微砂粒を多量に含む。	外:暗褐色 内:茶褐色	6~8	口唇部幅7~9cm。	1地区 F-12 遺構11
20	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、微砂粒を多量に含む。1~2mm程の光沢のある黄灰色砂粒が散見される。	外:暗褐色 内:茶褐色	6~7	口唇部幅6~9cm。	1地区 H-10 1層
21	第1種 2種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、1mm以下の細砂粒を多量に含む。1mm程度の小穴が表面に多くみられるが、b種ほど顕著ではない。	外:暗褐色 内:暗褐色	3~6	口唇部厚部の厚厚は、10cm。	1地区 E-9 2層
22	第1種 2種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	b種、断面に、2~3mm前後の小穴が数多くみられる。	外:黄白色 内:黄白色	6~8	—	1地区 E-10 遺構3
23	第1種 2種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、微砂粒を多量に含む。1mm以下の光沢のある黄褐色が多量にみられる。断面は、全くアバタ状を呈するが、b種ほど顕著ではない。	外:暗褐色 内:暗褐色	10~14	—	1地区 F-11 2層
24	第1種 2種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、1~2mm程の細砂粒を混入する。光沢のある白色砂粒のみみられる。	外:暗褐色 内:黄白色	9~10	口唇部幅12~14cm。	1地区 F-10 2層
25	第1種 2種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	b種、胎土中に1~3mm程の白色砂粒(石灰質?)を多量に混入する。	外:暗褐色 内:暗褐色	5~7	口唇部幅15cm。	1地区 F-13 遺構1
26	第1種 2種	内外面に、横位の高度が僅かにみられる。	a種、微砂粒を多量に混入する。断面は、全くアバタ状を呈するが、b種ほど顕著ではない。	外:暗褐色 内:暗褐色	12~14	—	1地区 G-17 2層
27	第1種 2種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、1~3mm程の砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒や黄褐色の岩石粒片を含む。	外:暗褐色 内:暗褐色	5~7	口唇部幅10~13cm。	1地区 E-10 2層
28	第1種 2種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、1~3mm程の砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒や黄褐色の岩石粒片を含む。	外:暗褐色 内:暗褐色	5~7	口唇部幅6~10cm。	1地区 F-9 2層
29	第1種 2種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、1~3mm程の砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒や黄褐色の岩石粒片を含む。	外:茶褐色 内:暗褐色	5~7	口唇部幅10~14cm。	1地区 F-9 2層
第50回 図版38 30	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、微砂粒を多量に混入する。断面に1mm以下の小穴が多量にみられる。混入物が剥落したのか?	外:暗褐色 内:暗褐色	6~7	口唇部幅12~15cm。有段肥厚部幅13~16cm。	1地区 E-10 2層
31	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	b種。	外:黄白色 内:茶褐色	8	口唇部幅11cm。有段肥厚部幅30cm。	1地区 F-10 2層
32	第1種	断面・高度等はみられず、指痕による観察度も不明瞭。	a種、微砂粒を多量に混入する。断面に1mm以下の小穴が多量にみられる。混入物が剥落したのか?	外:暗褐色 内:茶褐色	6~7	口唇部幅6~7cm。有段肥厚部幅16cm。	1地区 F-9 2層

第19表 c 土器観察一覧

採回 番号	分類	器 型 調 整	土	色 調 (外・内)	器厚 (単位:cm)	備 考	出土地点
第50回 図録38 33	第3類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。雑砂粒を多量に混入する。器面に1mm 以下の小穴が多くみられる。混入物が剥落 したのか?	外:茶褐色 内:茶白色	4~5	口唇部幅8~9cm。有段 肥厚部幅10cm。	I地区 1層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。雑砂粒を多量に混入する。光沢のある 黄灰色粒が散見される。	外:茶褐色 内:黄白色	4~5	口縁厚部の器厚値は、 10~11cm。	I地区 F-11 2層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。雑砂粒を多量に混入する。	外:橙褐色 内:橙褐色	6~7	口縁厚部の器厚値は、 12~14cm。	I地区 F-12 2層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を混入する。	外:茶褐色 内:茶褐色	4	口縁厚部の器厚値は、 8cm。	I地区 G-17 遺構2
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~3mm程の砂粒を多量に含む。光沢 のある白色砂粒が、散見される。	外:暗褐色 内:暗褐色	6	口縁厚部の器厚値は、 13cm。	I地区 G-17 2層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を混入する。	外:暗褐色 内:暗褐色	6~7	口縁厚部の器厚値は、 11cm。	I地区 F-11 2層
"	第4類	外面は、工具により丁寧に調整され、平滑 である。内面は、断面・糸痕等のみならず、 指跡による調整痕も不明瞭。	a層。1~3mm程の砂粒を多量に混入する。 光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石 鱗片が散見される。	外:茶褐色 内:暗褐色	6~7	口縁厚部の器厚値は、 10~11cm。	I地区 G-17 2層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を多量に混入す る。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石 鱗片が散見される。	外:橙褐色 内:灰白色	6~7	口縁厚部の器厚値は、 10~11cm。	I地区 1層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を多量に混入す る。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石 鱗片が散見される。	外:暗褐色 内:暗褐色	7~8	口縁厚部の器厚値は、 10cm。	I地区 G-17 2層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を多量に混入す る。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石 鱗片が散見される。	外:暗褐色 内:暗褐色	5~7	口縁厚部の器厚値は、 10~11cm。	I地区 F-9 2層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を多量に混入す る。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石 鱗片が散見される。	外:橙褐色 内:橙褐色	5~6	口縁厚部の器厚値は、 8~9cm。	I地区 F-10 2層
"	第4類	断面・糸痕等はみられず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を多量に混入す る。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石 鱗片が散見される。	外:橙褐色 内:橙褐色・茶白色	4~5	口縁厚部の器厚値は、 6cm。	I地区 E-9 2層
第51回 図録39 45	第5類	外面は、断面・糸痕等のみならず、丁 跡に調整され平滑である。内面は、指 痕かと思われる凹凸が若干みられるが、 あまり明瞭ではない。	b層。器面にみられる小穴は、それほど多 くはない。	外:茶褐色 内:茶褐色	4~6	口縁部に粘土層を貼付 して、やや肥厚させる。器厚 値は、7mmほどである。	I地区 F-10 2層
"	第5類	内外面共に、比較的丁寧に調整され、平滑 である。	a層。1mm以下の細砂粒を多量に混入す る。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石 鱗片が散見される。	外:茶白色 内:暗褐色	5~7	—	I地区 F-9 2層
"	第5類	外面は、工具により丁寧に調整され、平滑 である。内面では、断面・糸痕等のみならず、 指跡による調整痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を多量に混入す る。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石 鱗片が散見される。	外:暗褐色 内:暗褐色	5~7	—	I地区 F-9 2層
"	第5類	断面・糸痕等のみならず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。雑砂粒を多量に混入する。2mm程の 光沢のある黄灰色粒が散見される。	外:暗褐色 内:暗褐色	5~6	有段肥厚部の器厚値は、 8cm。	I地区 F-36 遺構2
"	第5類	断面・糸痕等のみならず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。雑砂粒を多量に混入する。	外:暗褐色 内:暗褐色	8	口唇部幅8cm。	I地区 G-16 2層
"	第5類	断面・糸痕等のみならず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。雑砂粒を多量に混入し、2~3mm程 の砂粒も多くみられる。	外:暗褐色 内:暗褐色	5~6	口唇部幅5cm。	I地区 F-11 遺構3
"	第5類	断面・糸痕等のみならず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を多量に混入す る。	外:暗褐色 内:茶褐色	5~6	口唇部幅9cm。	I地区 F-10 2層
"	第5類	断面・糸痕等のみならず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~2mm程の細砂粒を混入する。光 沢のある白色砂粒が散見される。	外:暗褐色 内:暗褐色	5~6	口縁厚部の器厚値は、 6~7cm。	I地区 F-10 2層
"	第5類	断面・糸痕等のみならず、指跡による調整 痕も不明瞭。	a層。1~3mm程の砂粒を多量に混入する。 光沢のある白色砂粒が散見される。	外:茶褐色 内:茶褐色	7~8	口唇部幅9cm。突帯幅9 ~10cm。	I地区 F-17 2層

第19表 d 土器観察一覧

探出 番号	分類	器 形 調 整	胎 土	色 調 (外 ・ 内)	胎厚 ^① (単位:cm)	備 考	出土地点
第51回 図40 54	第5類	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。1～2mm程の細砂粒を多量に混入する。	外:増茶褐色 内:茶褐色	5～6	口唇部幅9mm、突唇幅7～9mm。	I地区 E-9 2層
"	第5類	外面は、丁寧に調整され平滑である。内面は、胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。1～2mm程の砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石細片が散見される。	外:増褐色 内:増褐色	4～7	—	I地区 F-11 遺構1
"	平皿	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。微砂粒を多量に混入する。器面に1mm以下の小穴が多くみられる。混入物が脱落したものか?	外:茶褐色 内:増茶褐色	7～10	胎底の胎厚値は、11mm。	I地区 F-10 2層
"	平皿	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。微砂粒を多量に混入し、1～2mm程の細砂粒も多くみられる。	外:茶褐色 内:増褐色	—	胎底の胎厚値は、10mm。	I地区 F-12 遺構4
"	平皿	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。微砂粒を多量に混入し、1～2mm程の細砂粒も多くみられる。	外:茶褐色 内:増褐色	7～11	胎底の胎厚値は、15mm。	I地区 G-11 遺構1
"	平皿	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。1～3mm程の砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石細片が散見される。	外:茶褐色 内:茶褐色	9～12	胎底の胎厚値は、11mm。	I地区 H-10 1層
"	尖底	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。1mm以下の細砂粒を多量に混入する。光沢のある黄茶褐色の岩石細片が散見される。	外:増褐色 内:増褐色	8～11	—	I地区 F-10 2層
"	尖底	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。1～2mm程の細砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石細片が散見される。	外:茶褐色 内:増茶褐色	7～17	—	I地区 H-10 1層
"	尖底	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。1～2mm程の細砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒が散見される。	外:増褐色 内:茶褐色	7～13	—	I地区 E-9 2層
"	尖底	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	a種。1～2mm程の細砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒が散見される。	外:増褐色 内:茶褐色	6～12	—	I地区 G-17 遺構2

〈第2群〉

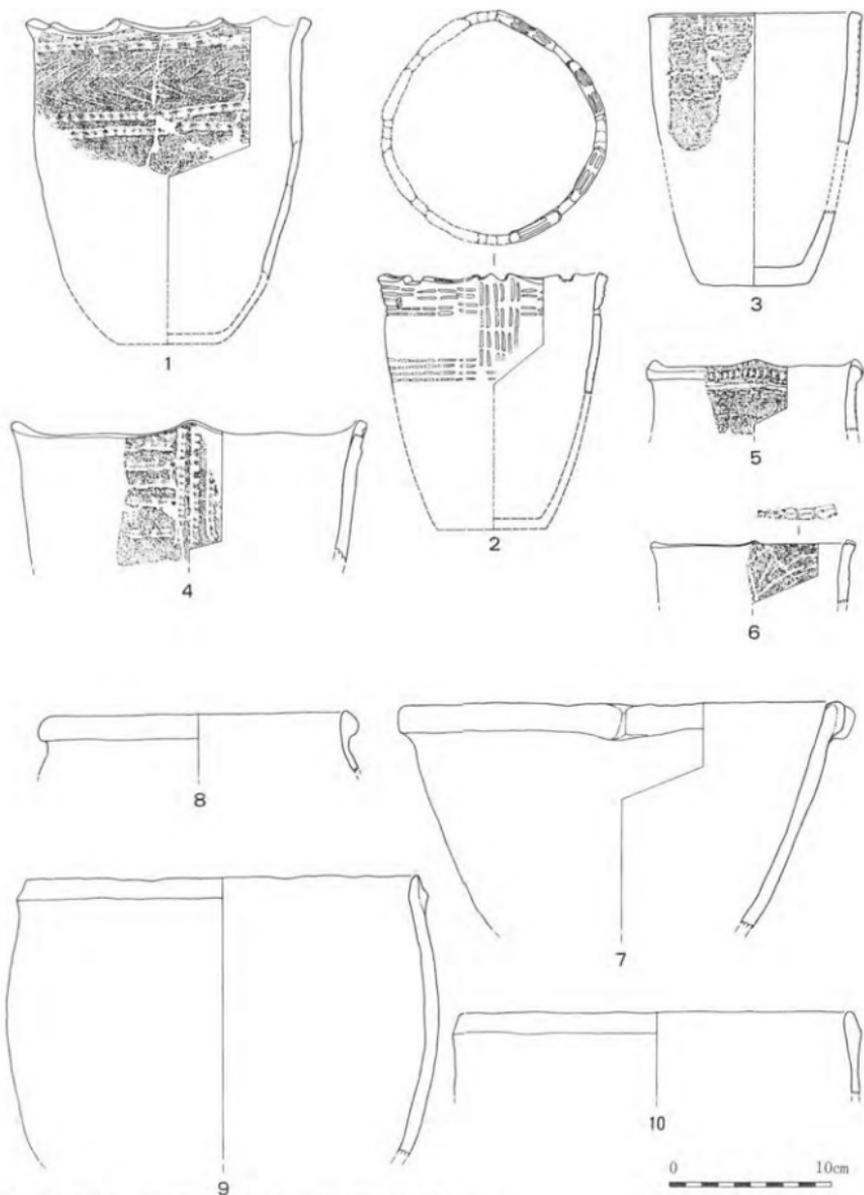
探出 番号	分類	器 形 調 整	胎 土	色 調 (外 ・ 内)	胎厚 ^① (単位:cm)	備 考	出土地点
第52回 図40 64	鉢形	外面には、部分的に指頭痕が僅かに確認できる。内面の調整度は、不明瞭。	微砂粒を混入し、光沢のある黒色粒が散見される。	外:茶褐色 内:茶褐色	6～7	—	III地区 G-54 3層
"	鉢形	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	微砂粒を混入し、光沢のある黒色粒が散見される。	外:茶褐色 内:茶白色	9～10	—	III地区 G-60 B
"	鉢形	外面の口唇直下に、指頭による圧痕が並ぶ。内外面の調整度は、不明瞭。	器面は、アバタ状を呈する。特に目立つ混入物なし。	外:茶褐色 内:茶白色	3～6	—	III地区 E-52 遺構2
"	鉢形	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	器面は、アバタ状を呈する。特に目立つ混入物なし。	外:増褐色 内:茶褐色	7～9	—	III地区 G-61 B
"	鉢形	耳側面には、指頭による調整痕が明確。内外面の調整度は、不明瞭。	器面は、アバタ状を呈し、僅かに白色砂粒が散見される。	外:増褐色 内:増褐色	6～7	突出し、九耳の正面の上辺は長さ15mm、縦位の最大長は21mm。	III地区 G-17 3層
"	鉢形	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	特に目立つ混入物なし。	外:茶白色 内:茶白色	5～6	突出し、九耳の正面の上辺は長さ12mm、縦位の最大長は19mm。	III地区 H-49 遺構1 1層
"	鉢形	内外面に、横位の条痕が僅かにみられる。	器面はアバタ状を呈し、光沢のある微砂粒を混入する。赤色粒も散見される。	外:増褐色 内:茶褐色	6～8	—	III地区 F-52 3層
"	鉢形	胎底・胎底等はみられず、指頭による調整度も不明瞭。	器面はアバタ状を呈し、白色砂粒を多量に混入する。	外:増褐色 内:橙白色	5～8	—	III地区 G-59 B
"	鉢形	外面の調整度は、不明瞭。内面には、横位の条痕が顕著にみられる。	器面はアバタ状を呈し、白色砂粒・赤色粒を混入する。	外:増褐色 内:茶白色	4～6	—	III地区 E-52 3層

第19表 e 土器観察一覧

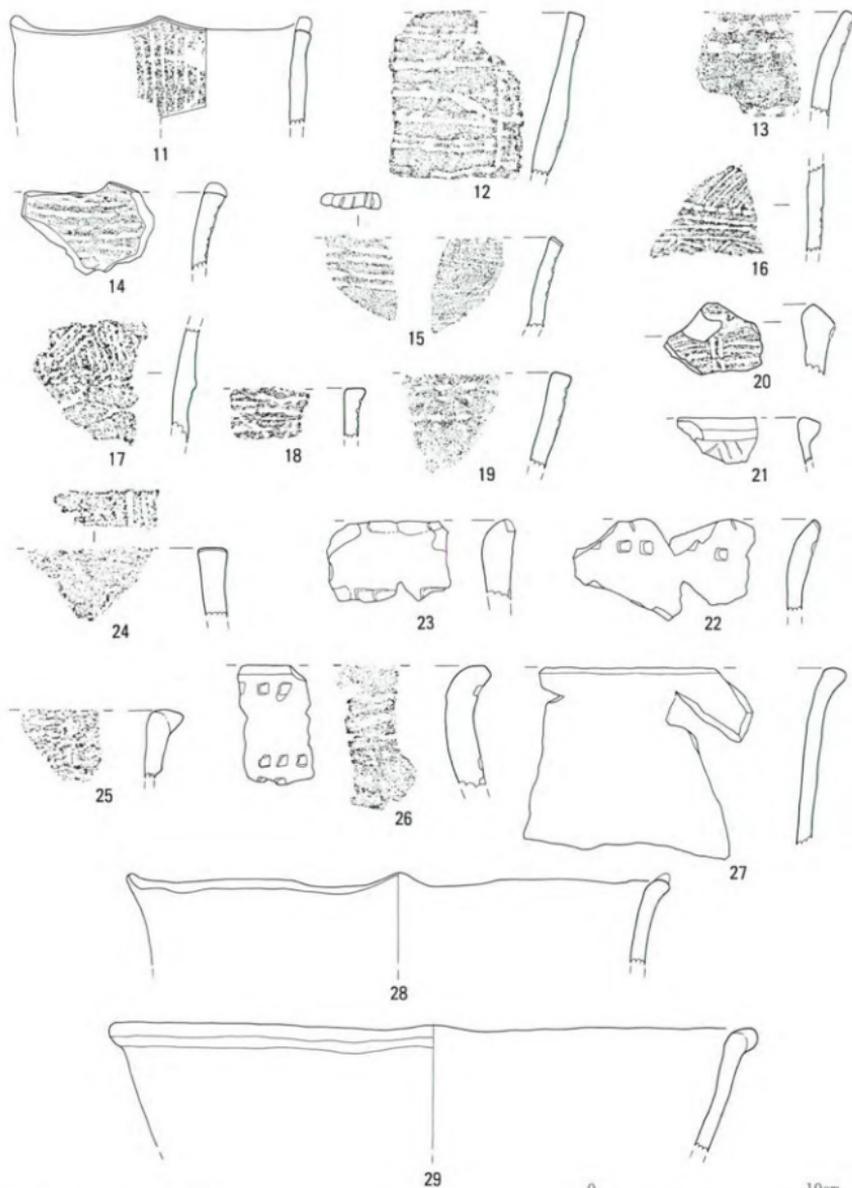
押出番号	器種	器面調整	胎土	色調(外・内)	器厚(単位:mm)	備考	出土地点
第53区 図40 73	鉢形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	胎面は、アノク状を呈する。特に目立つ混入物なし。	外:灰白色 内:灰白色	5~8	—	II地区 F-39 7層
"	鉢形	外面の調整痕は、不明瞭。内面には、横位の糸痕が僅かにみられる。	胎面はアノク状を呈し、光沢のある微砂粒を混入する。	外:茶褐色 内:橙褐色	6	—	II地区 E-41 遺構1 1層
"	鉢形	外面の調整痕は、不明瞭。内面には、横位の糸痕が顕著にみられる。	1~2mm程の細砂粒を多量に混入する。光沢のある白色砂粒が、顕著にみられる。	外:橙褐色 内:灰白色	5~7	—	II地区 F-40 遺構1 1層
"	鉢形	内外面には、横位の糸痕が僅かにみられる。	胎面はアノク状を呈し、光沢のある微砂粒を混入する。	外:橙褐色 内:橙褐色	6~7	—	III地区 G-52 3層
"	甕形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	胎面はアノク状を呈し、白色砂粒を多量に混入する。	外:暗茶褐色 内:暗茶褐色	6	—	I地区 E-27 遺構1 3層
"	器種 不明	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	光沢のある微砂粒を多量に混入する。赤色粒や光沢のある黒色粒が、散見される。	外:橙白色 内:灰白色	7~10	—	III地区 E-55 3層
"	器種 不明	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	光沢のある微砂粒を多量に混入する。光沢のある黒色粒が散見される。	外:灰白色 内:灰白色	6~10	—	III地区 G-54 遺構2
"	器種 不明	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	光沢のある微砂粒を多量に混入する。茶褐色粒や光沢のある黒色粒が散見される。	外:橙白色 内:橙白色	6~9	—	III地区 E-57 3層
"	器種 不明	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	光沢のある微砂粒を混入する。茶褐色粒が散見される。	外:暗灰色 内:灰白色	7~8	—	不 明
第53区 図41 85	底形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	胎面は、アノク状を呈する。茶褐色粒が散見される。	外:橙白色 内:灰白色	8~14	底面の器厚値は、7~14mm。	II地区 G-51 2層
"	底形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	1~2mm程の細砂粒を多量に混入し、光沢のある白色砂粒や黄茶褐色の岩石薄片が散見される。	外:橙褐色 内:灰白色	11~18	底面の器厚値は、11~18mm。	III地区 F-54 遺構55
"	底形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	光沢のある微砂粒を多量に混入する。赤色粒が顕著にみられ、光沢のある黒色粒も散見される。	外:灰白色 内:橙褐色	8~12	—	III地区 E-65 遺構1
"	底形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	胎面は、ややアノク状を呈する。茶褐色粒や光沢のある白色砂粒が散見される。	外:橙褐色 内:茶褐色	8~10	底面の器厚値は、9mm。	III地区 F-54 1層
"	底形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	光沢のある微砂粒を多量に混入する。	外:灰白色・灰白色 内:灰白色	4~10	底面の器厚値は8~10mm。	III地区 G-52 1層
"	底形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	胎面は、アノク状を呈する。特に目立つ混入物なし。	外:灰白色 内:灰白色	8~13	底面の器厚値は9~13mm。	III地区 G-61 B
"	底形	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	胎面は、アノク状を呈する。赤色粒が顕著にみられ、白色砂粒も散見される。	外:橙白色 内:橙白色	6~7	—	III地区 F-53 3層

〈その他〉

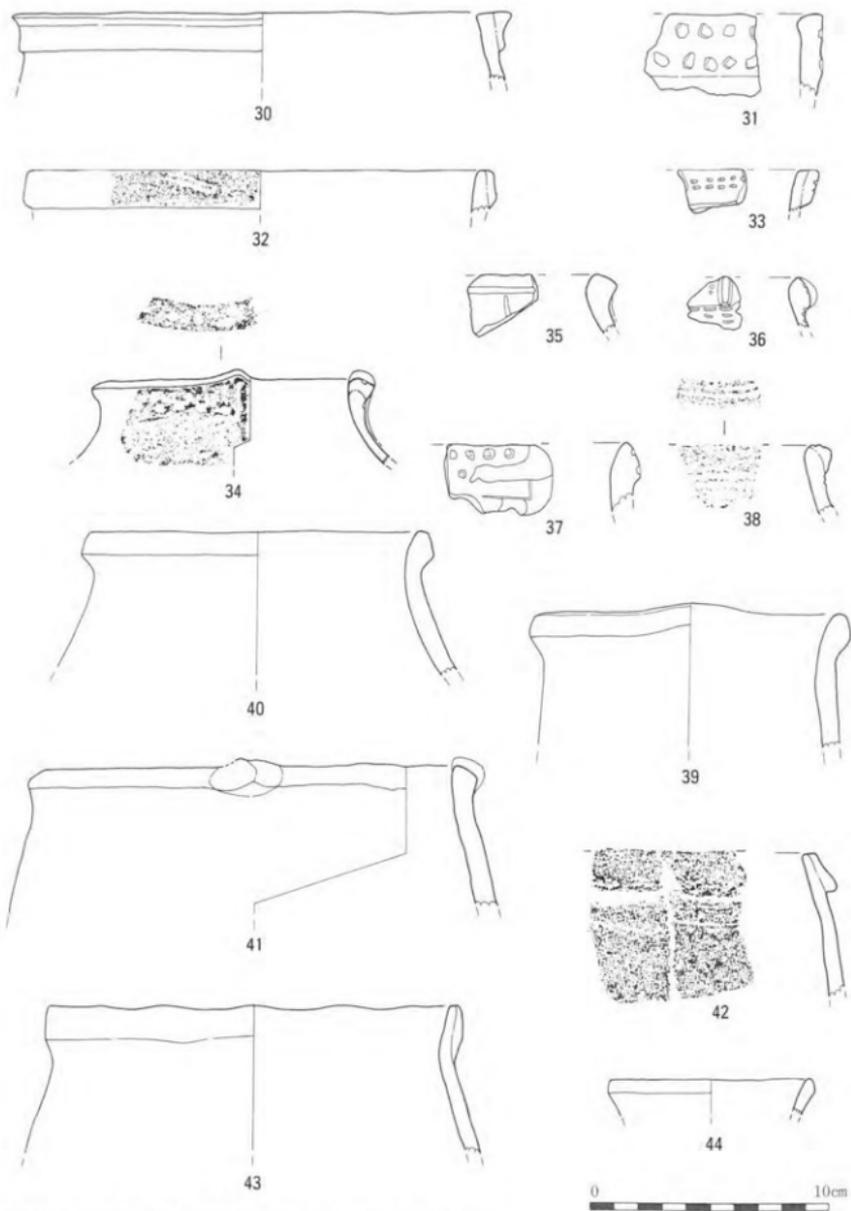
押出番号	分類	器面調整	胎土	色調(外・内)	器厚(単位:mm)	備考	出土地点
第53区 図41 82	—	外面は丁寧に調整され、光沢をもち、平滑である。内面には、幅1.5~2.0mm程の凹線が縦位に数丈みられる。	1mm以下の白色砂粒を多量に混入し、茶褐色粒も散見される。	外:黒褐色 内:灰白色	4~11	—	I地区 E-27 遺構1
"	—	外面は丁寧に調整され、平滑である。内面も平滑であるが、外面はどぼはない。	1mm以下の白色砂粒を多量に混入し、茶褐色粒も顕著にみられる。	外:黒灰色 内:灰白色	8~16	—	II地区 G-49 遺構2
"	—	胎底・糸痕等のみならず、指頭による調整痕も不明瞭。	1~2mm程の茶褐色粒が散見される。	外:灰白色 内: —	—	—	III地区 F-52 遺構3



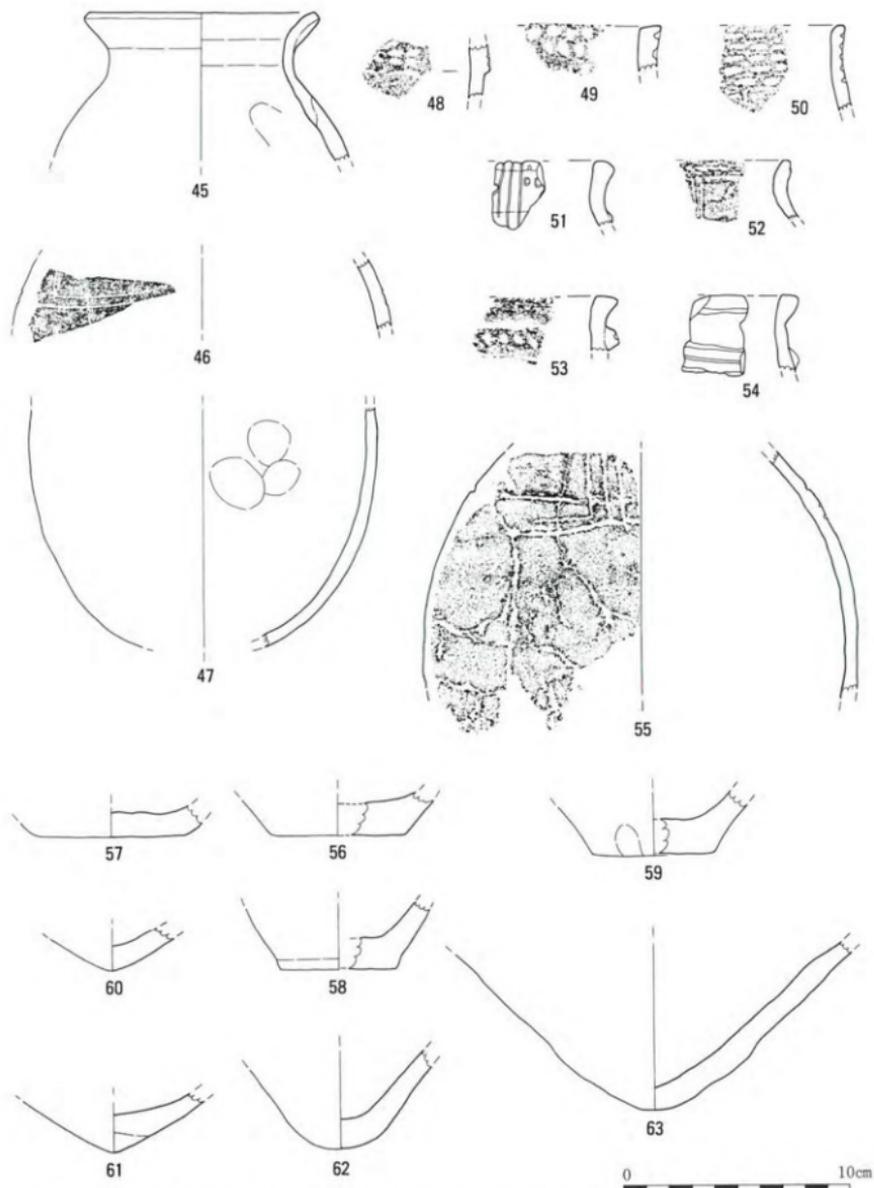
第48図 土器1 第1群第1類 (1~6)、第4類 (7-10)



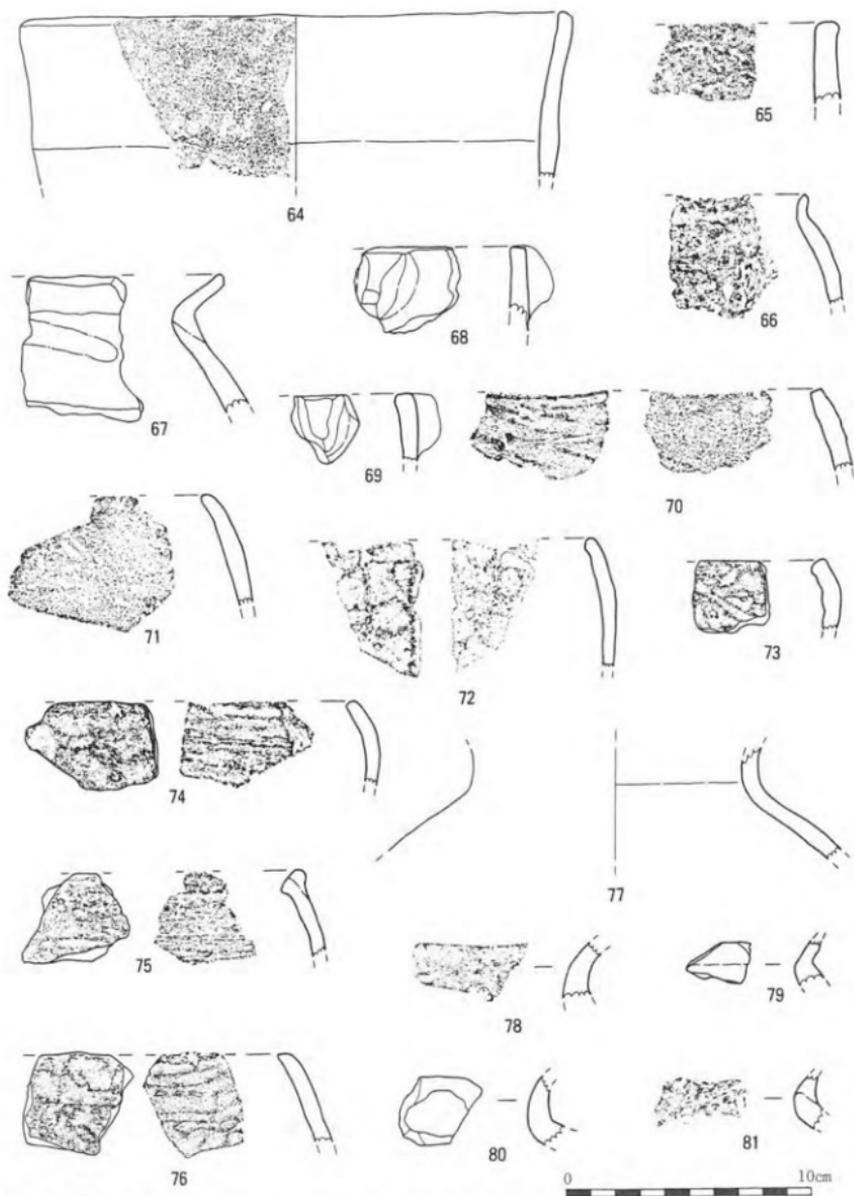
第49圖 土器2 第1群第1類 (11~20)、第2類 (21~29)



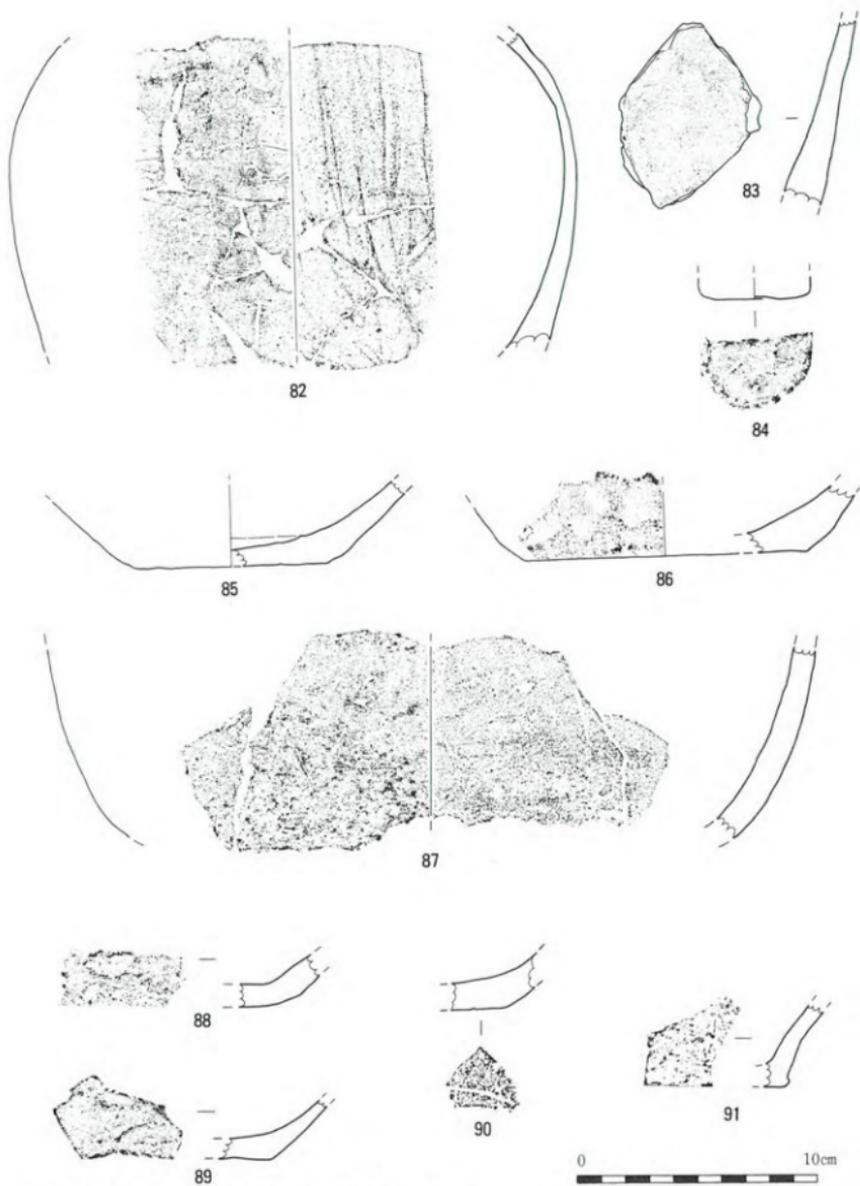
第50図 土器3 第1群第3類 (30~33)、第4類 (34~44)



第51圖 土器4 第1群第5類 (45~55)、平底 (56~59)、尖底 (60~63)



第52圖 土器5 第2群鉢形(64~67)、鍋形(68~76)、壺形(77)、器種不明(78~81)



第53図 土器6 第2群底部 (85-91)、その他 (82-84)

第21節 陶質土器

「アカムヌー（アカモノ）」と呼ばれるものである。この種の土器（陶器）を「軟質陶器」（註1）と呼称する場合もあるが、ここでは通例に従い「陶質土器」としておく。ロクロ成形を行うものが主体で、胎土は細かく、雲母片・赤色粒等が混入する。器厚の薄いものが主体で、胎土が脆弱であるためか、殆どが細片資料のみで全形の窺えるものはない。器種としては、炉・水鉢・鍋・水注等が確認できた。

(1) 炉（第54図1～10・第55図26）

器形から、3つに大別できる。

第1類（第54図1～4・8・9）

胴部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁部で「く」字状に屈曲する器形である。屈曲部より上位は内傾する。屈曲部直下には、縦位に丸く穿孔した把手が1対取り付けられるものと思われる。口縁形態から、さらにa～cの3種に細分できる。

a種（1・2）は、屈曲部より上位が直線的に内傾し、その内傾する口縁部の外面がほぼ平坦なものである。口唇部は平坦に整形され、内側を向く。屈曲部直上には、沈線を2条巡らす。把手の上面観は台形状を呈し、工具で丁寧に面取りされ、稜が明瞭である。胎土は堅緻で、沖繩産無釉陶器に質感に近い。器厚も、b・c種に比べ厚い。

b種（3）は、屈曲部より上位の内傾する口縁外面に、断面形が階段状となる沈線が2条巡る。口唇部は水平な平坦面となり、口唇内外端に稜を有する。

c種（4）は、b種に類似するが、口唇部の平坦面が若干斜位となり、口唇内外端にやや丸みを帯びる点で異なる。把手の上面観は台形状を呈するが、a種に比べ、その概形は丸みを帯び、貼付後の整形に工具を使用しない可能性が高い。また、把手の厚も、a種に比べて薄い。

8・9は、第1類の底部と思われるものである。8・9の両者共に、外底面が平坦で、底面の縁から胴部にかけて直線的に外傾する器形である。9は、底面縁の上位に稜を有する。2点共に、外底面には糸切り痕がみられる。

第2類（第54図5～7・10）

口縁部が内湾するものである。胴上部に把手が1対取り付けられるものと思われる。

5～7は、口縁資料である。5には、胴上部に把手の根元が僅かに残存する。6・7は、口縁内面に器物を握えるための突起がみられる。5・7の2点には、その器外面に幅2～3mm程の白線が横位に数条確認できる。

10は、第2類の底部資料と思われるもので、高台をつくる。高台脇には、白線が僅かに確認できる。

第3類（第55図26）

26は、大形の資料で、第1類・第2類に比べると著しく器形が異なるが、機能的には近いものがあるかと思われたため、ここに含めた。

同一器形と思われる他遺跡の断片的な資料等も参考にして、図上復元を試みた。本資料は2つの部分に分けられ、上面観が円形となる本体部と、本体部より突出し上面観が方形となる部分があり、側面からみると突出部は本体部より口唇部が階段状に一段下がる。上段の口唇部は水平な平坦面で、下段の口唇部は側面からみると曲線を描きながら垂直方向から水平方向に曲がる。口唇部は上段・下段共に幅広く、その断面形は上段がT字状、下段では逆L字状を呈する。本体部の口唇部内端には、上面観が台形状となる器物を握えるための突起が1つ確認できるが、本来は本体部から突出部へと下がる角部分にも1つずつ配され、計3つの突起があるものと思われる。底部から口縁部にかけては、直線的にやや外傾する器形である。外底面は平坦で、本体部と突出部を接合した際の痕跡が弧状に確認できる。器面の調整は比較的粗く、内面には調整の際にできたと思われる横位の凹線が数条みられる。また、外底面の縁に沿って、工具による調整痕が側面の一部にみられる。口縁内面には、煤が付着している。

(2) 水鉢 (第54図11・12、第55図13~17)

「ミジクブサー」と通称されるもので、口縁部が内湾する鉢形の器形のをここに含めた。口縁部でやや肥厚し、口唇部の断面形は舌状を呈する。施文の有無から、2つに分けられる。

第1類 (11)

無文のものである。11は、口唇部が突る。

第2類 (12~15・17)

口縁部上端から1~2cm程の間をあけて沈線を1条巡らし、その下位に数条一組の波状沈線を施文するものである。17は、口縁部上端と横位沈線との間をあけずに、口唇直下で施文している。

底部資料 (16)

16は、その器壁の傾きから水鉢の底部になるかと思われる資料であるが、判然としない。外底面には、糸切り痕がみられる。

(3) 鍋 (第55図18~25)

「サークー」と通称されるものである。蓋と身の部分に分けられる。

蓋 (20~25)

いずれも細片資料のみで、全形のわかるものはない。高台をもつ皿を伏せたような器形になるものと思われる。20~22は、高台状の摘まみ部分で、その形状に幾分個体差がある。23~25は、身と接する縁部で、その断面形は緩やかな曲線を描く。その下端は、舌状または丸みを帯びる。

身 (18・19)

口縁上部が「く」字状に屈曲し、蓋受け部をつくる。胴部で膨らみ、底部は丸底になるものと思われる。

(4) 水注 (第56図27~35)

蓋と身の部分に分けられる。

蓋 (27~30)

27は、摘まみの部分で、上面がほぼ平坦となり、側面から見ると逆台形状を呈する。28~30は、底部となる資料で、下面には高台状のすべり止めをつくる。28・29は、底部外端の下面を平坦に整形している。

31は、底部外端の下面が弧状を呈し、底部外端がやや下方を向く。

身 (31~35)

31は、口縁資料で、胴部が大きく膨らみ、僅かに口縁上端で直立ぎみに立ち上がる。32~34は、把手の装着部で、形状は台形状を呈し、丸く穿孔する。35は、注口部の資料である。胎土は、他の口縁部・胴部の資料に比べ、やや堅緻である感じを受ける。

(5) 器種不明 (第56図36・37)

36は、全形が円盤状になるかと思われるもので、内側に孔が2つ確認できる。これに類似したものが、那覇市の御細工所跡(註2)から出土しており、七輪の「灰おとし」とされている。

37は、器外面に施釉する胴部資料で、釉色は暗茶褐色を呈する。内面上端にも、施釉が確認できる。壺の頸部となるものであろうか。

註

- 註1. 金武正紀・島 弘他『城間遺跡』浦添市教育委員会 1992年
註2. 松川 章・下地安弘他『御細工所跡』那覇市教育委員会 1991年

第20表 陶質土器出土状況一覧

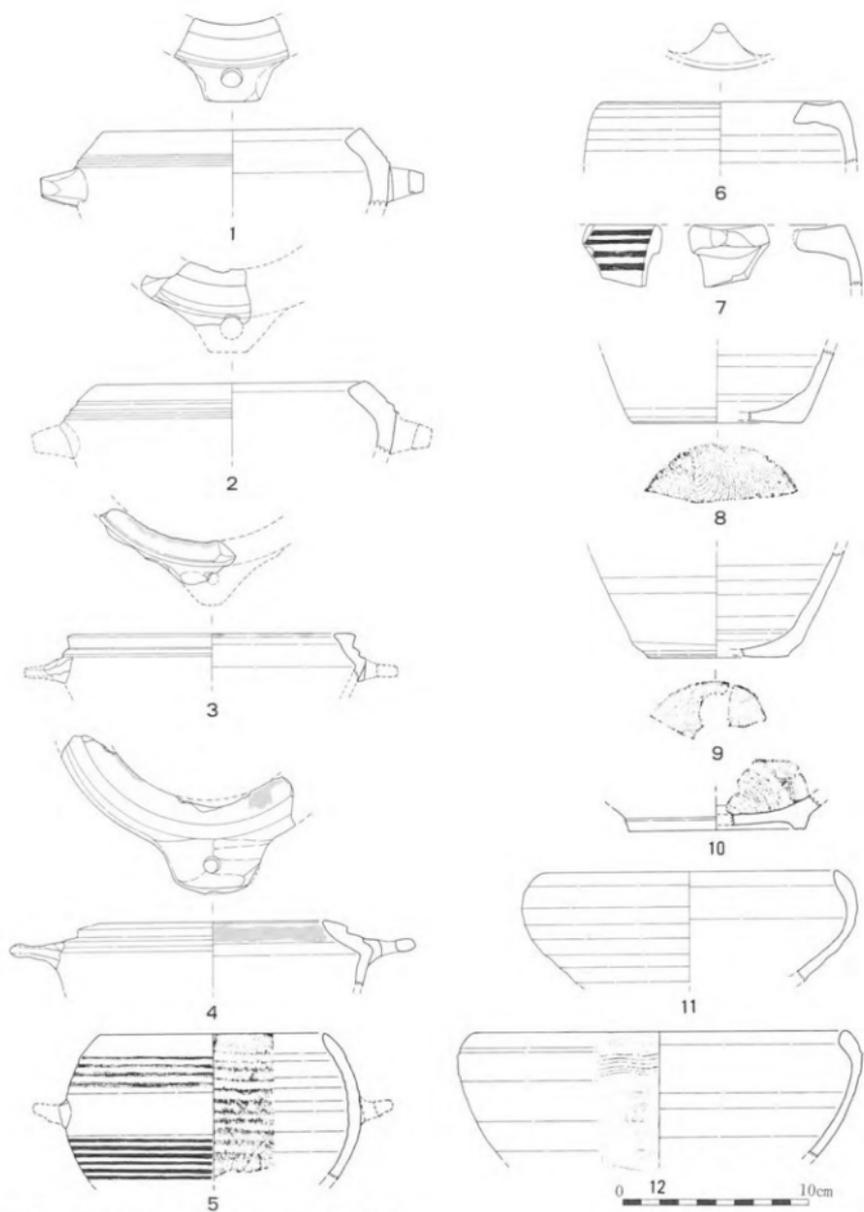
出土地	分類	伊										水鉢				鉢				水注				特殊不明		合計														
		1 類		2 類		3 類		把平	1類		2類		把平	1類		2類		把平	1類		2類		把平	口	底															
		口	底	口	底	口	底		口	底	口	底		口	底	口	底		口	底	口	底																		
I 地区	1 層	1		2	2	1			5	1	1	8			1									6	75	20	124													
	a 区																							11	13		13													
	b 区																							21	2		26													
	Pw 及び土坑		2																								1													
	I 地区小計	0	1	0	2	0	2	2	1	0	0	1	0	0	5	2	1	8	0	0	1	1	0	0	1	0	0	6	107	23	164									
	II 地区	1 層					1			1	1	1			1			2										13	24											
		2 層		2										5	1	2	2	4	3	2	3	2			2	2	199	29	202											
		3 層																												2										
		Pw 及び土坑					1					1					3													18	9	34								
		黒石遺構																													1	1	1							
遺構																															6	7								
溝																															1	1	2							
①																																1	43	21	90					
②			1				1							2	1			3	1	1	4			3	4	1	1				1	2	1	43	21	90				
③																																		2	1	43	21	90		
クワール																																		1	2	8	32			
クワール造成																																			1	1	15	15		
不明																																				1	1	1		
II 地区小計	1	0	0	1	3	0	0	1	4	0	1	0	1	3	4	2	0	17	1	3	3	8	8	9	4	1	6	3	344	88	516									
III 地区	1 層					1								1																						9	9	29		
	2 層																																				11	2	15	
	3 層																																							
	A						1	3	3									6																						
	B		1																																					
	Pw 及び土坑																																							
	黒石遺構																																							
	サター屋内埋乱																																							
	III 地区小計	1	0	0	0	1	2	5	3	1	0	0	1	2	2	1	0	13	6	4	0	5	1	1	3	2	2	3	151	83	287									
	地区不明																																							
合計		2	1	1	5	1	4	8	8	1	1	1	2	5	11	5	1	38	1	7	4	14	10	10	8	3	8	12	614	195	981									

第21表 a 陶質土器観察一覧

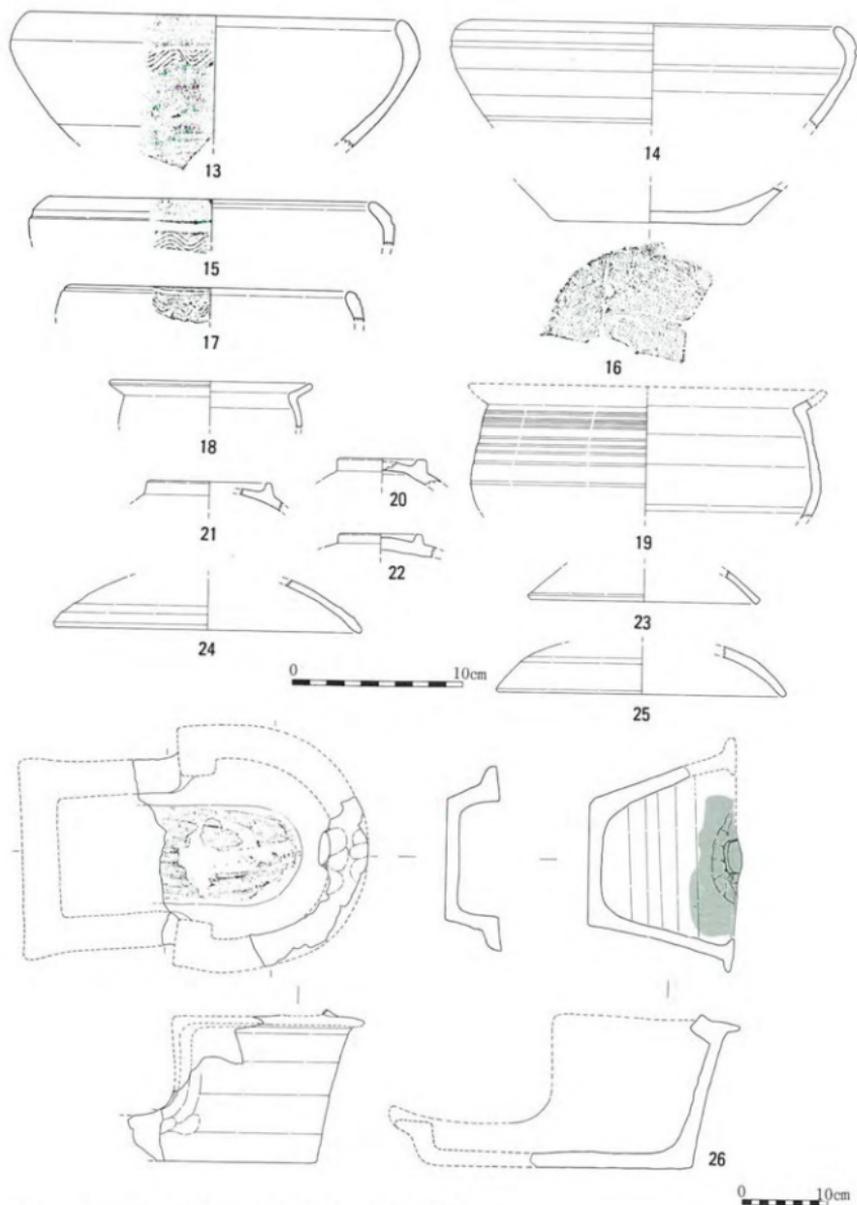
標記番号	分類	口縁部直径 (単位:cm)	色調	混入物	器厚 (単位:mm)	備考	出土地点
第54回 図版42 1	伊 1 類 a 種	13.8	茶褐色	光沢のある微砂粒が、僅かに散見される。	8~11	口縁部の屈曲部から口唇部までの幅は、26mm、胎土は、沖繩産無釉陶器に近い質感をもつ。	III 地区 H-52A
2	伊 1 類 a 種	14.3	橙褐色	赤色粒が散見される。	7~11	口縁部の屈曲部から口唇部までの幅は、28mm、口縁内部には、煤の付着がみられる。	II 地区 F-43 遺構3
3	伊 1 類 b 種	15.4	橙白色	光沢のある微砂粒が、僅かに散見される。	4	口縁部の屈曲部から口唇部までの幅は、15mm、口縁内部には、煤の付着がみられる。	I 地区 1層
4	伊 1 類 c 種	14.4	外:橙白色 内:茶白色	光沢のある微砂粒を多数に混入する。	4~5	口縁部の屈曲部から口唇部までの幅は、18mm、口縁内部には、煤の付着がみられる。	II 地区 G-49 遺構1 1層
5	伊 2 類	12.0	橙白色	光沢のある微砂粒を混入する。	4~6	—	III 地区 G-53 3層
6	伊 2 類	12.7	橙白色	光沢のある微砂粒を混入する。	6	—	III 地区 G-52 3層
7	伊 2 類	—	茶白色	光沢のある微砂粒を混入する。	5	—	I 地区 1層
8	伊 1 類 底部	9.0	外:橙褐色 内:茶褐色	光沢のある微砂粒を混入する。	5~7	底面の器厚値は、5~11mm。	III 地区 F-55 3層
9	伊 1 類 底部	7.6	橙白色	光沢のある微砂粒を混入し、茶褐色粒が散見される。	6~8	底面の器厚値は、3~11mm。	I 地区 1層
10	伊 2 類 底部	9.4	橙白色	光沢のある微砂粒を混入する。	8~9	底面の器厚値は、5~9mm。	II 地区 F-44 2層
11	水鉢 1 類	15.6	橙白色	光沢のある微砂粒を混入し、茶褐色粒・雲母片が散見される。	4~5	口縁部厚部の器厚値は、8mm。	II 地区 H-42 遺構2 5層
12	水鉢 2 類	19.6	茶白色	光沢のある微砂粒を混入する。	4~5	口縁部厚部の器厚値は、9mm。	I 地区 1層

第21表 b 陶質土器観察一覧

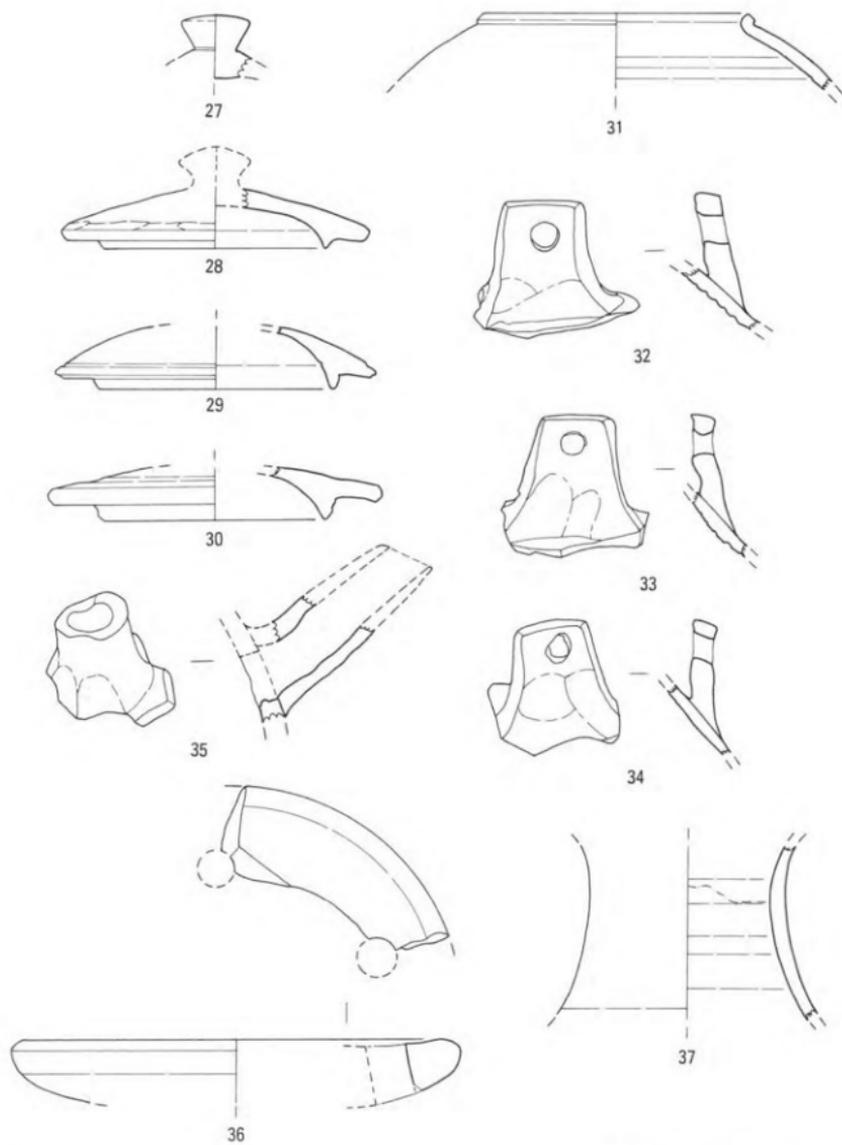
標 号	分 類	口 径 高 径 (単位:cm)	色 調	混 入 物	器 厚 (単位: mm)	備 考	出 土 地 点
第55回 図版43 13	水鉢 2期	21.4 —	橙白色	光沢のある微砂粒を混入し、茶褐色 粒・雲母片が散見される。	5~8	口縁肥厚部の器厚値は、9mm。	Ⅱ地区 G-49 遺構1 1層
14	水鉢 2期	21.2 —	茶白色	光沢のある微砂粒を混入する。	5~6	口縁肥厚部の器厚値は、7mm。	I地区 1層
15	水鉢 2期	18.3 —	橙白色	光沢のある微砂粒を混入し、茶褐色 粒・雲母片が散見される。	5	口縁肥厚部の器厚値は、7mm。	Ⅱ地区 H-43 遺構2 6層
16	水鉢 底部	— 11.2	茶白色	光沢のある微砂粒が、僅かに散見さ れる。	4~10	底面の器厚値は、6~12mm。	I地区 1層
17	水鉢 2期	16.2 —	橙褐色	光沢のある微砂粒が、僅かに散見さ れる。	—	口縁肥厚部の器厚値は、8mm。	Ⅲ地区 H-60 B
18	鍋	11.8 —	外:茶白色 内:橙白色	光沢のある微砂粒が、僅かに散見さ れる。	3~4	—	I地区 1層
19	鍋	—	茶白色	光沢のある微砂粒を混入する。	4~6	推定最大胴径20.3cm。	Ⅱ地区 H-43 遺構2 6層
20	鍋蓋	—	茶白色	光沢のある微砂粒を混入し、雲母片 が散見される。	5~6	縁まみの直径は、5.3cm。	Ⅱ地区 H-49 遺構1 1層
21	鍋蓋	—	橙白色	光沢のある微砂粒を混入する。	3~5	縁まみの直径は、7.2cm。	Ⅱ地区 H-49 遺構1 1層
22	鍋蓋	—	橙白色	光沢のある微砂粒を混入する。	6~7	縁まみの直径は、5.0cm。	Ⅱ地区 G-48 遺構1 1層
23	鍋蓋	—	茶白色	光沢のある微砂粒が散見される。	4	直径13.6cm。	Ⅲ地区 H-59 B
24	鍋蓋	—	外:茶白色 内:橙白色	光沢のある微砂粒を混入する。	4~5	直径17.9cm。	I地区 1層
25	鍋蓋	—	橙褐色	光沢のある微砂粒を混入し、雲母片 が散見される。	4~6	直径16.8cm。	Ⅲ地区 F-58 3層
26	伊 3期	17.9 —	茶白色	光沢のある微砂粒を混入し、雲母片 が散見される。	13~25	底径(短径)13.9cm、口唇部の幅は、上段が39mm、下 段が40mm。	Ⅲ地区 G-60 B
第56回 図版44 27	水注 蓋	—	茶白色	光沢のある微砂粒を混入する。	—	縁まみ部の直径19mm、高さ10mm。	Ⅱ地区 F-42 2層
28	水注 蓋	—	茶褐色	光沢のある微砂粒を混入し、茶褐色 粒・雲母片が散見される。	4~6	直径8.5cm。	Ⅱ地区 H-45 2層
29	水注 蓋	—	橙白色	光沢のある微砂粒を混入し、茶褐色 粒が散見される。	2~5	直径8.8cm。	Ⅱ地区 G-49 遺構1 2層
30	水注 蓋	—	茶白色	光沢のある微砂粒を混入する。	2~5	直径9.2cm。	Ⅱ地区 G-49 遺構1 2層
31	水注	—	橙白色	光沢のある微砂粒を混入する。	3	—	Ⅱ地区 G-49 遺構1 1層
32	水注 胴部	—	橙白色	光沢のある微砂粒を混入する。	3	内面には、横位の条痕がみられる。孔の直径は、7 mm。	Ⅱ地区 G-43 ウラワム内
33	水注 胴部	—	茶白色	光沢のある微砂粒を混入する。	3	内面には、横位の条痕がみられる。孔の直径は、6 mm。	Ⅱ地区 H-49 遺構1 1層
34	水注 胴部	—	茶白色	茶褐色粒や光沢のある微砂粒が、散 見される。	3	孔の直径は、6mm。	Ⅱ地区 H-49 遺構1 1層
35	水注 胴部	—	茶白色	光沢のある微砂粒が散見される。	4	注口部内径12mm、外面には、縦痕がみられる。	Ⅱ地区 G-37 2層
36	器種不明	—	橙白色	光沢のある微砂粒を多量に混入す る。	—	推定直径12.4cm、最厚部15mm。	Ⅱ地区 G-46 2層
37	器種不明 胴部	—	外:暗茶褐色 内:橙褐色	特に目立つ混入物なし。	2~4	最小胴径5.4cm、外面及び内面上端に、暗茶褐色の 軸を施す。	I地区 1層



第54図 陶質土器 1 炉 (1~10)、水鉢 (11,12)



第55図 陶質土器2 水鉢(13~17)、鍋(18~25)、炉²(26)



第56図 陶質土器3 水注 (27~35)、器種不明 (36,37)

第22節 瓦質土器

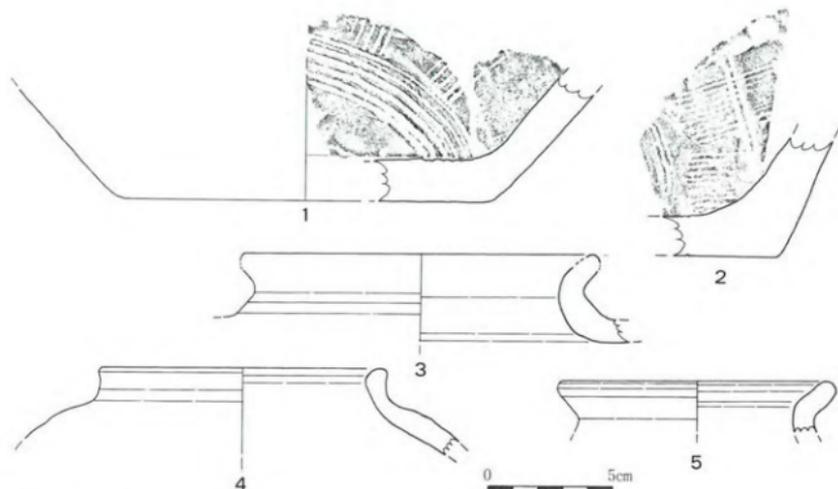
瓦質土器で確認された器種は搗鉢と壺の二器種であった。二器種とも破片資料であり、内訳を記すと搗鉢が底部2点、壺は口縁部が2点の合計5点であった。以下、搗鉢と壺に分けて、個々の特徴を記す。

(1) 搗鉢(第57図1・2、図版44)

1は推算底径が15.0cmを求めたが、2は外底の縁辺が僅かに残っているのみで底径を求めていない。内面の摺り目は1が胴下部に五条一組、内底面が六条一組である。2は胴下部に十条一組、内底面の摺り目は不明であるが、五条のみ数えた。2は外底面に「一」の字様にヘラ記号が残っている。器色は1の外表面が暗灰色。内面は黄灰色。2は外表面が暗灰色、内面は明灰色を帯びる。器面の調整で1は外面が篋削りの後にナデを加える。内面はナデを主体とするが、僅かに篋削りがみられる。2も外面に篋削りの後にナデを加えるが1よりも丁寧である。内面は磨耗するが、ナデを主体に指圧を加えたようである。混入物として1は灰褐色で粗細な物質を多量に含む。稀に細かい石英や微細な雲母を含む。2は少量ながら微細な石英と雲母を含む。稀に粗い茶褐色の物質が観察される。1はⅡ地区のG-60 B、2がⅡ地区 1層からの出土である。

(2) 壺(同図3~5、図版44)

3は口縁の両端を僅かに欠いているが外端を図上で復元し、口径を求めたところ7.1cmが得られた。本資料は頸部で「く」の字状に折れているのが特徴である。4は推算の口径が11.4cmを求めた。器色は3が内外面とも灰黒色、4は内外面とも明灰色を帯びる。器面の調整で3の外面は篋ナデ様の回転擦痕。内面は磨耗するが篋削りの後に丁寧なナデを施したようである。4は外面に指による丁寧な回転擦痕(指紋が残る)。内面はナデ様の回転擦痕が観察される。混入物として3が微細な雲母を多く含み、稀に細かい石英や粗い茶色の物質を含む。4は微細な雲母と石英を多く含み、僅かに粗い茶色の物質が含まれている。3はⅠ地区のE-27 2層、4がⅠ地区のE-27 遺構1の直上から出土した。5は口径の推算が11.0cmを求めた。器色は両面とも明灰色を帯びる。器面の調整は両面とも回転擦痕がみられる。混入物として微細な石灰質の砂粒が多く含まれ、稀に粗い茶褐色の物質が僅かに含まれている。Ⅰ地区E-27 遺構1の黒色土層直上より出土している。



第57図 瓦質土器 搗鉢(1, 2)、壺(3~5)

第23節 石器

総数97点得られており、Ⅰ地区73点、Ⅱ地区13点、Ⅲ地区10点、地区不明1点である。県内の場合、沖縄前期から後期さらにグスク期と時期が下るにつれ、石器の種類や量が減少する傾向が知られている。今回の出土状況とⅠ～Ⅲ地区の主体的な時期からすると、その傾向に符合している。しかしながら、後期の具志堅貝塚(註1)や屋良グスク(註2)などのように、後期やグスク期の遺跡でも多くの石器が出土する場合も見受けられる。

種類別にみると石斧、クガニシ、敲打器、磨石、球状石器、くぼみ石、砥石、石皿、有孔製品、軽石製品が確認できた。その中でクガニシ(第58図10)、球状の敲打器類(第59図21・22)、Ⅰ地区遺構から出土している大型の石皿(第60図31)は注目されよう。また、軽石製品(第60図34)も注意される。以下、種別に概略を簡記する。なお、個々の特徴などは観察表にまとめた。

(1) 石斧

第58図1～9に特徴的なものを示した。小型(1～3)、中型(4～7・9)、大型(8)に分けることも可能かと考えられる。小型・中型の物はバチ形、短冊形のみがみられる。3は柱状に整形されたもので、ノミ状工具として用途が想定される。8は大きさだけでなく、刃縁の形状なども他の資料と異なり注意されよう。

(2) クガニシ

第58図10に示す1点だけである。白木原和美氏のいうA型(註3)に属すもので、今帰仁村の渡喜仁浜原貝塚(註4)や宮城島の高嶺遺跡(註5)などで報告がみられる。

(3) 敲打器

第58図11～14、第59図15～17に示すものである。たたき・磨るという作業の痕跡を残すもので、棒状の形態を呈するもの(11・12)や石殻状の定型化したもの(14・15)などが得られている。これらの資料は6面使用のものが基本のようである。17は石殻状のものが使用により正方形形状になったとみることでもできる。

(4) 磨石

第59図18～20に特徴的なものを示した。いずれも破片の資料で、19・20はかなり大型のものになるかとみられる。18はやや扁平なもので、平面形は14・15などと似たような形状が想定される所であり、あまり報告例を聞かない。

(5) 球状石器

第59図21・22に示すものである。敲打痕と磨面を有すことからすれば敲打器のグループに入るが、球状を呈すことから別にした。知場塚原遺跡(註6)などから報告されている。

(6) くぼみ石

第59図23～25、第60図26に示したもので、前者は小型の、後者はやや大きめの資料である。小型のものは円形状のもので、特徴的である。拝山遺跡(註7)などから報告されている。

(7) 砥石

第60図27～30に示したもので、断面が三角形のもの(27)、板状のもの(28・29)がみられる。27・29は正面が使用の中心で、28は裏表面ともよく使用されている。30は大型のもので、正面および両側面に磨面がみられる。全体的な状況を見ると砥石かどうか判然としませんが、注目される資料である。

(8) 石皿

厚みのある大型のもの(31)と板状のもの(32)が得られている。前者は25kgを越す重さであり、古座間味貝塚(註8)などから報告されているように住居と関連する可能性も考えられる。

註

註1. 岸本義彦・上地千賀子・田中寿賀子【具志堅貝塚 発掘調査報告】 本部村教育委員会 1986年

註2. 富賀麻一・大城 慧・金城亀信【屋良グスク】 嘉手納町教育委員会 1994年

註3. 白木原和美【クガニシ】『法文論叢』 第四十一号 熊本大学法文学会発行 1978年

註4. 新田重清・呉屋義勝ほか【渡喜仁浜原貝塚 調査報告書〔I〕】 今帰仁村教育委員会 1977年

註5. 金武正紀・金城亀信・島袋春美【宮城島遺跡分布調査報告】 沖縄県教育委員会 1989年

註6. 岸本義彦・黒住耐二・金子浩昌【知場塚原遺跡】 本部町教育委員会 1988年

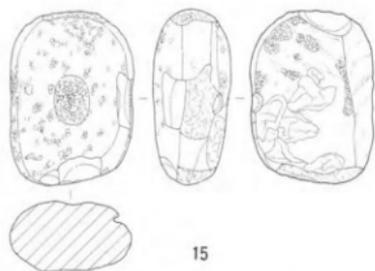
註7. 安里嗣淳・座間味政光・大田宏好【拝山遺跡】 沖縄県教育委員会 1987年

第22表 b 石器観察一覧

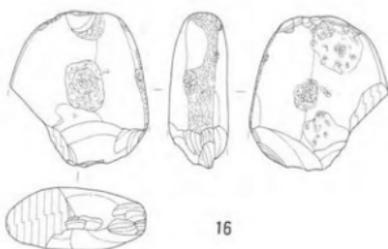
種別	図版	器種・石質	出土地	観	察
新59号 図版47 16	△10.6 9.2 4.0 610	敲打器具 片状砂岩	I地区 H-10 1層	下端部を大きく欠失するが、平面形は石鏡状を呈すものと推察される。横断面はレンズ状。6面使用の石器とみられ、表・裏面は磨面の中央部付近に楕円形状の凹部がみられ、表面は約1cm、裏面は若干凹み程度である。上縁部は敲打による齧傷やつぶれが目立ち、両側面には細かな敲打、裏面の部分のみがみられる。	
*	7.6 8.1 5.1 600	敲打器具 角閃岩	I地区 1層	定形の敲打器具である。平面形は正方形を呈し、断面は台形状に下端部の方が厚くなる。6面使用の資料で、現実資料の形状は使用された結果のものであるといえる。裏面は磨面が主で、側縁部が叩きを重点にしている。しかし、上縁部は磨面が広く、平坦面をつくる。	
*	7.3 7.3 3.4 290	礫石 はんれい岩	II地区 G-42 2層	横断面が楕円形状を呈す。平面形は上部が大きく破損しており、判断としない。部分的に製作時の調整痕が残るものの、表・裏面及び3側面ともほとんど磨面。	
*	12.5 10.7 8.2 1590	礫石 輝緑岩	II地区 F-42 遺構1	大型の礫石類かとみられるが大きく破損し形状は不明。表面と左上縁は非常に滑らかな面を有す。両者の境いは比較的明瞭な線を有すが、左側面と表面との境は不明瞭な線である。	
*	12.0 7.6 3.7 380	礫石 凝灰岩	I地区 F-42 遺構3	大型礫石の破片。側縁部を敲きにも使用している。その部分以外は滑らかな面となっている。	
*	5.8 5.8 6.2 330	敲打器具 ひん岩	I地区 F-34 2層	略球状を呈し、ほぼ全面に敲打痕がみられる。特に、平面と平面の境目を丁寧な敲打により丸味をもたせている。	
*	6.1 5.5 6.0 330	敲打器具 はん岩	II地区 F-54 3層 0-5	不定形の敲打器具類で多面を有す。磨面である正面は凸面。他の面は自然面を多く残し、凹面。平面と平面の境目は丸味を持つ。	
*	5.2 4.4 2.5 100	くぼみ石 凝灰質砂岩	I地区 E-11 2層下	平面形は楕円形状を呈す。表・裏面とも中央部に凹部を有しており、断面が瓢箪形になる。表面は長径が約3cm、短径が約2.6cmの楕円形状、裏面は長径が約2.6cmの円形状の凹部のみがやみ深い。	
*	5.6 5.45 3.85 160	くぼみ石 細粒砂岩 (ニービ)	I地区 F-17 2層 0-10	小型の円盤を利用したくぼみ石。平面形はほぼ円形。正面に2.5cm-3.0cmのほぼ円形状の凹部がみられ、中央部の深さが約3mmである。また、右側縁部から下端部にかけて敲打痕がみられる。背面は若干凹面をつくり、側縁部は平坦面を有す。	
*	8.2 6.7 3.85 235	くぼみ石 砂岩	I地区 F-10 2層 10-15	平面形がいわゆる石鏡状を呈すくぼみ石。断面はやや偏平の楕円形状で、上縁部と右側が厚くなる。正面のほぼ中央に円形状の凹部(深さ約3mm)がみられるが、他の部分の状況は判断としない。	
第60号 図版48 26	12.1 9.45 8.95 740	くぼみ石 砂岩	I地区 1層	ほぼ定形。略長方形の平面形であったかとみられる。正面のほぼ中央に約4.7cm×4.3cmの円形状の凹部(深さ約1.5cm)あり、背面にも凹部がみられる。左側縁部は破損のため不明だが、上縁部と右側縁部には敲打による浅い凹部が認められる。下縁は打削調整のままで、正面部が使用の主体。	
*	13.15 7.2 5.8 640	礫石 片状砂岩	I地区 G-17 遺構6	平面形が長方形をなし、縦断面が三角形を呈す。下縁から上縁の方へ磨きを施し、くぼみ形状になる。正面は非常に滑らかで、凹面を形成する。背面に部分的な磨面を有すだけで、自然面を多く残す。縁の部分は比較的丁寧な敲打を施す。	
*	△10.4 △5.6 3.5 275	礫石 細粒砂岩 (ニービ)	II地区 G-60 1層	全体の形状や大きさなどは不明。残っている面をみると、頂の一端の面だけが製作時の状況を残す。正面・背面・側面は、非常に滑らかな磨面を形成し、特に前二者は中央部の方へ凹面を形成する。	
*	7.9 5.9 1.55 120	礫石 砂岩	I地区 E-10 遺構3	表面が滑らかな磨面を有し、若干凹面を有す。他に明瞭な使用痕はみられず、裏面に手なれ様の磨面が認められる。詳細は不明。	
*	35.0 16.2 13.2 124g	礫石 細粒砂岩	II地区 2層	正面の全体に研磨が及んでいることやゆるやかな凹面を形成していることなどから、礫石としての用途が考えられるが、全体的な状況からすると、まったく別の機能を有す可能性もある。上・下縁は割り取った際の状態をそのまま残しているが、正面磨面の状況を見ると四角形の柱状をなす。三面とも凹面を形成し、正面と右側面は研磨がみられる。しかし、研磨は磨減しているおかげではなく、研磨のおよびない凹部が全面に散在する。右側面の研磨は上縁部の方へはおよばない。下縁部は大きな割れ面となっている。左側面は削って平坦面に整形している。裏面は自然面のままで、凹凸が著しい。	
*	35.2 27.4 20.0 27.5kg	石皿 凝灰質砂岩	I地区 F-12 遺構4	大型の石皿で、定形の資料である。平面形は下端部が弧状をなすものの、略長方形(たて30cm×よこ24cm)状を呈す。厚みもあり、27.5kgと重量もかなりある。正面のやや右上寄りに、右上から左下への斜角線上になる感じで、楕円形状の凹部が認められる。裏面部分については滑らかな面となっている。その部分以外はほとんど打削面に磨面であるが、左下縁部に磨面の部分が残る。	
*	23.6 15.8 5.0 2090	石皿 礫砂岩 (磨層層中)	I地区 G-17 遺構6	左側縁、下端部は自然面を残し、上縁部から右側縁は大きく破損。また、右下端は大きく割がれている。中央部付近が磨面となっているが、使用痕度は低くない。正面だけを使用し、裏面は打削面を残す。	
*	4.75 4.2 5.0 20	有孔 黒色干枚岩	II地区 1層S	偏平な板状の石材に1孔を穿たつたものである。中央や右上縁部に5mmほどの略ひし形様の孔が開けられている。他に加工痕はみられない。用途不明。	
*	8.8 9.1 3.4 70	軽石	I地区 E-10 遺構1	略台形状の軽石のほぼ中央部に孔があり、ドーナツ状を呈す。孔は略楕円形状で長径約2.5cm、短径約2cm。表・裏側面から孔をあけていただけで、全体的に自然面のままである。	



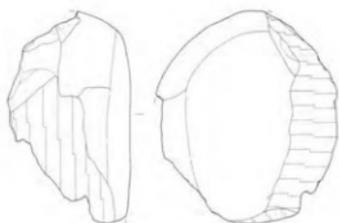
第58图 石器 1



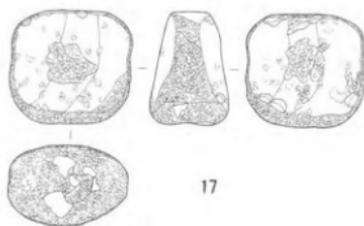
15



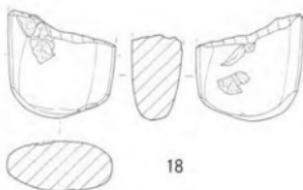
16



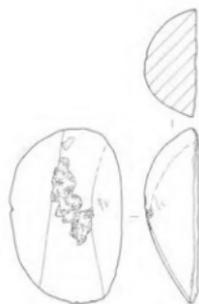
19



17



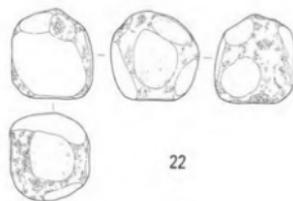
18



20



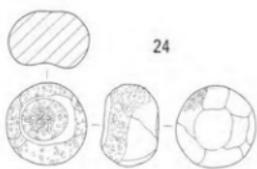
21



22



23

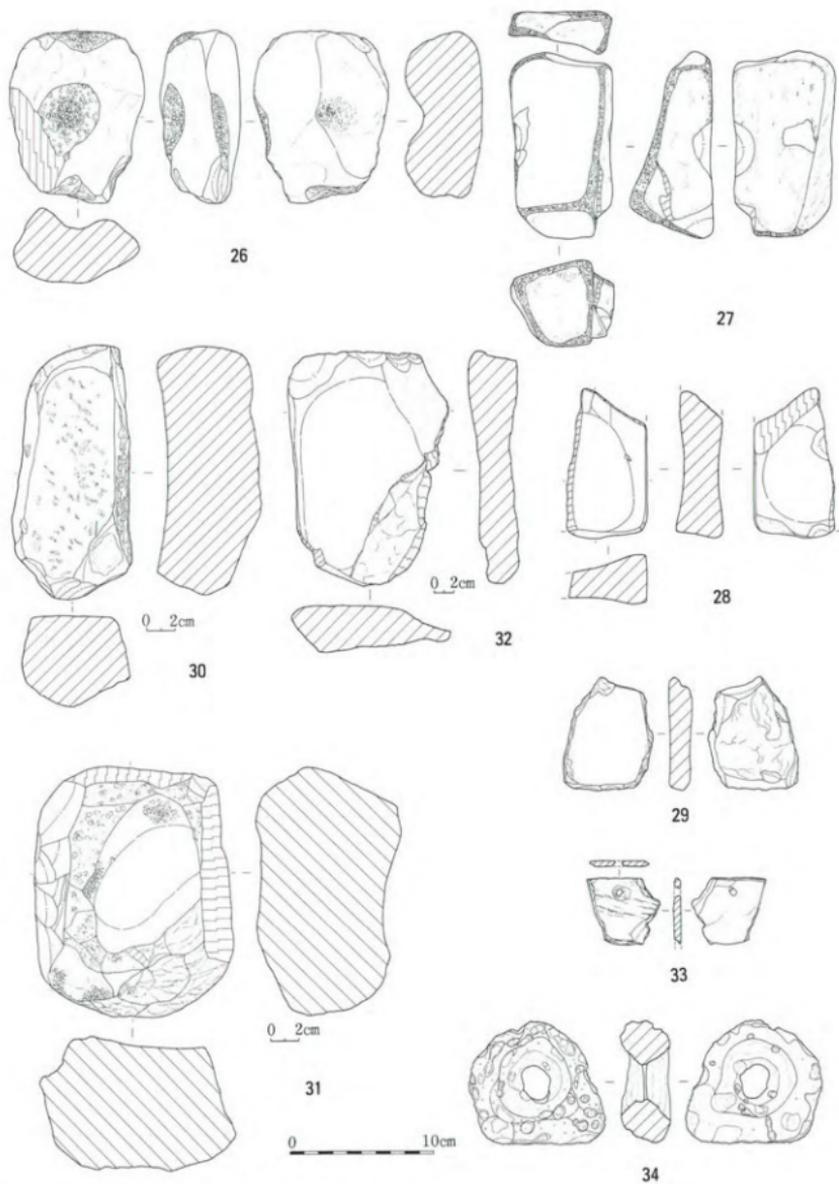


24



25

0 10cm



第60图 石器 3

第24節 石 鏃

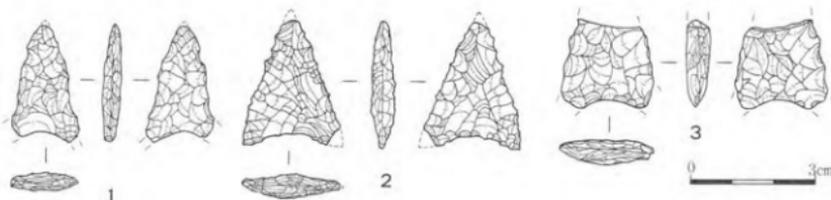
Ⅱ地区から3点得られており、第61図1～3に示した。いずれも無茎の凹基タイプの資料である。1・2は先端部・基部部が僅かに欠けているだけで、全体の形状が窺えるものである。両者とも二等辺三角形を基本としている。1は2よりも細身のもので、先端部と基部部の両側が若干欠けている。側辺のチャッピングはやや粗く、全体的に雑なつくりである。現存の先端から基部凹部までの長さが24.7mm、基部両端の現存幅が16mmを測る。石英製で、Ⅱ地区 F-41 黒色土層0～10からの出土。

2は先端部と基部部の右側が若干欠けているだけで、バランスのとれた二等辺三角形形状を呈す。側辺のチャッピングは細かく、比較的丁寧なつくりである。素材そのものの質はあまりよくない。現存の先端から基部凹部までの長さが26.9mm、基部両端の現存幅が20.8mmを測る。チャート製で、Ⅱ地区H-43 2層20～30からの出土。3は先端部を欠失するものの、基部部および残っている側辺部の状況などから、2とはほぼ同じような大きさ・形状を示すものかと推察される。側辺のチャッピングは粗く、全体的に雑なつくりである。本資料も素材としてはあまりよくない。チャート製で、Ⅱ地区 F-42 2層0～10からの出土。

県内における石鏃の出土は高宮稲年の前V期（縄文晩期相当）に集中的にみられることが指摘されている（註1）。しかし、シヌグ堂遺跡（註2）などの前V期の遺跡だけではなく、伊原遺跡（註3）や伊良波東遺跡（註4）などのグスク時代を主体とする遺跡からも報告例があり、今回得られた3点の石鏃の所属時期については検討の余地があろう。また、真志喜大川原第三遺跡（註5）から報告されている石鏃にはチャート製のものに混じって、石英製の石鏃も1点報告されている。今回の調査で得られた3点と同じような形状のものも見受けられることから、本遺跡との関わりなど注意される遺跡といえよう。

註

- 註1. 知念 勇「解説 南西諸島の石器」宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図 考古編』柏書房株式会社 1983年
 註2. 金武正紀・比嘉春美他『シヌグ堂遺跡—第1・2・3次発掘調査報告—』沖縄県教育委員会 1985年
 註3. 大城 慧・島袋 洋他『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986年
 註4. 安里嗣淳・島袋春美・島 弘『伊良波東遺跡』豊見城村教育委員会 1987年
 註5. 呉屋義勝『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市教育委員会 1989年



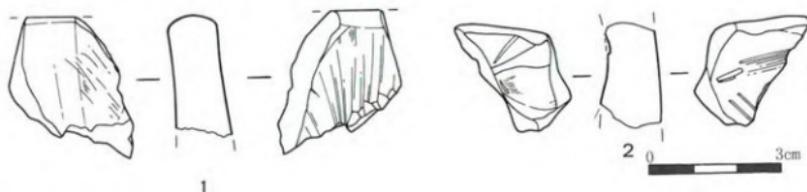
第61図 石鏃

第25節 滑石

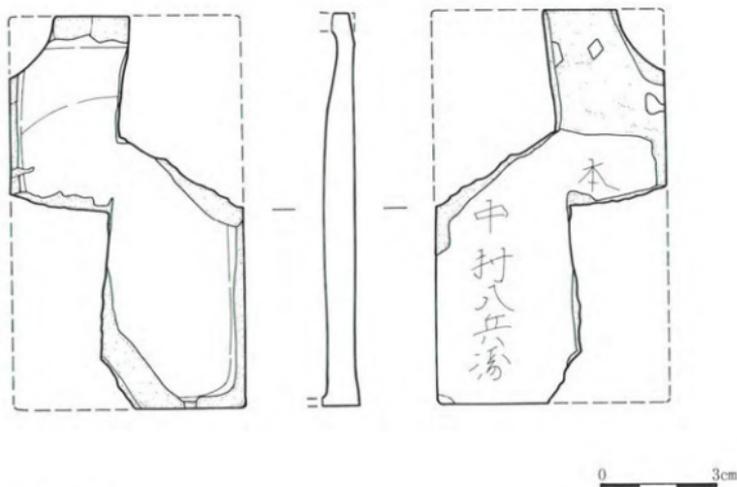
Ⅱ地区から2点、Ⅲ地区から2点の4点得られている。いずれも小破片であり、判然としない。Ⅱ地区F-46から出土した1点を除く他の3点は、割れ面に削り痕が認められる。2次利用を意図したものと考えられる。大きめの破片2点を第62図1・2に示した。2点とも石鍋として使用されていた時の内外面を有しており、両者とも約10mmの厚さを測る。いずれも内外面には、制作時の調整痕が残る。1は3ヶ所のわれ面に、2は割れ面のほぼ全体に削り痕が認められる。1はⅢ地区G-53遺構2から、2はⅡ地区G-42から出土している。

第26節 硯

1点だけ得られており、第63図に示した。大きく破損しているものの、全体の大きさや形状はある程度推定できる。長さ約10cm、幅約6cmの長方形をなし、下方の厚いところで約9mm、上方の深くなつたところで約3mmの厚さを測る。緑の部分はほとんど欠けているが、幅は両側が約2.5mm、上端側が約6mm、下端側が約3mmを有す。裏面も周縁部に表面と同じような幅で縁部をつくるように、その内側を僅かに凹ませている。その凹部は上端まではおよばないようである。また、裏面の下端部左側には持ち主の名前なのか細い線彫りで「中村八兵衛」の文字が認められる。Ⅱ地区F-42遺構1から出土。



第62図 滑石



第63図 硯

第27節 骨製品

(1) 骨製錐

第64図1、2はイノシシの右尺骨の近位部を用いたもので、いずれも内側の遠位部を切り取り、先端部を尖らし、錐状に加工したものである。1は頭部が破損するが、先端部はかなり、削り込みが大きく2に比べて短く、先端も直線的である。残存部の長さは50mm、幅14.6mmを測る。I地区 G-11遺構1の出土である。

同図2はほぼ完成品で右尺骨で遠位部の反りを残す。先端部の研磨調整は顕著である。I地区F-36 遺構3(竪穴式住居)から出土する。

(2) ヘラ状製品

同図3はジュゴンの肋骨を利用したものである。近位部は頭部に遠位部を刃部に加工する。頭部は破損し、形状は不明であるが、あまり加工痕が認められないことから大きな加工は施されてないと思われる。刃部は片刃状で、一面は未完成のためか段をなす、他面は研磨面を2～3面形成し、調整も顕著である、全体に肋骨の素材による緩やかな湾曲がみられる。頭部の幅は22mm、厚さは16.9mm、刃部は幅26.1mm、厚さは刃部の付け根で16.3mmを測る。I地区1層の出土である。類例は少ないが、宮城島シヌグ堂遺跡(註1)にある。

(3) 牙製品

同図4はイノシシの下顎左犬歯を加工したものであるが両端とも破損する。基部側に3.3mmの小孔を施し、幅9.4mmに外縁を削り、研磨を施す。残存部の長さは38.1mmを測る。垂飾品と思われる。I地区F-12 遺構4から出土である。

(4) 脊椎有孔製品

同図4はエイの脊椎の中央部に径3.4mmの小孔を施すものである。脊椎の径は14.4mm、厚さ7.1mmを測る。I地区F-17 2層0～10出土である。

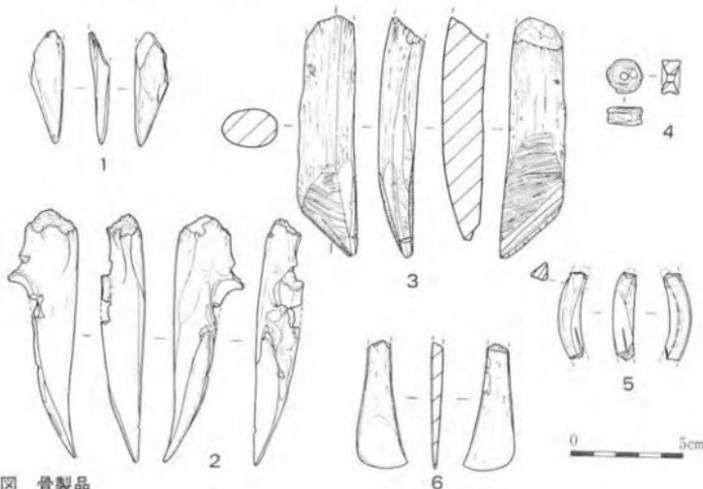
(5) ヘラ製品

同図5はウシの四肢骨を利用したもので裁縫用のヘラと考えられる製品であるが、頭部は破損する。刃部は青龍刀形を呈し、両面から研磨するが、片刃状になる。II地区G-46 2層0～10の出土。首里城跡(註2)に出土例がある。

註

註1. 金武正紀・比嘉春美他 『シヌグ堂遺跡-第1-2-3次発掘調査報告-』 沖縄県教育委員会 1985年

註2. 富真嗣一・上原 静 『首里城跡-首里城正殿跡の遺構調査-』 沖縄県教育委員会 1992年



第64図 骨製品

第28節 円盤状製品

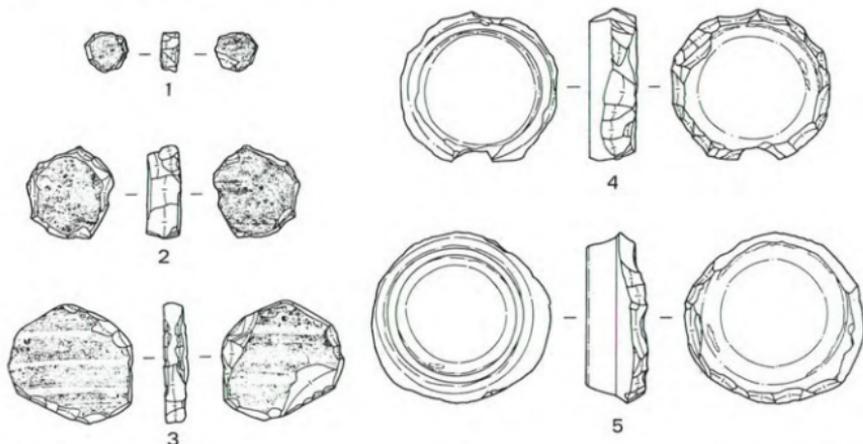
本製品は日常生活の身の回りにあるものを、打割もしくは磨研調整した二次製品である。用途としては現在のところ、遊具と考えられている。今回、本遺跡において15点出土しており、うち12点が沖縄産無釉陶器を素材としており、素材の選択に偏りが見られた。ここでは特徴的なものについて図示し、詳細については観察表に示した(第23表)。

参考文献

- ・上原 静 「グスク時代・近世出土の円盤状製品」 【読谷村立歴史民族資料館紀要 第10号】 1986年
- ・上原 静 「円盤状製品その後の資料」 【読谷村立歴史民族資料館紀要 第13号】 1989年

第23表 円盤状製品観察一覧

番号	素材	完・未破	長径(mm)	短径(mm)	重さ(g)	平面形	使用部位	備考	出土地点
第65図 図版60									
1	沖無釉	完	19.5	18	3.9	不定形	胴部	外→内へ雑に剥離。器種不明。	I地区 F-19 1層
2	沖無釉	完	53	36	25.3	不定形	胴部	内→外へかなり雑に剥離。表面に自然釉がはかる。裏面ナデ調整あり。カメ。	II地区 H-45 2層 0~10
3	沖無釉	完	57	49	36.0	不定形	胴部	両面より雑に剥離。表面に3条の隠線あり。蓋。	II地区 G-48 遺構1 1層
4	沖無釉	完	73	71	77.1	円形	底部	内→外へやや雑に剥離。表裏面に乳白色の釉が高台内まで施釉。内側蛇の目に軸をかきとっている。白化無あり。碗。	III地区 G-60 B
5	沖無釉	完	83	79	118.0	楕円形	底部	内→外へ丁寧に剥離。表・裏面に灰白色の釉が高台内まで施釉。内側蛇の目に軸をかきとっている。白化無あり。碗。	III地区 G-60 B
6	沖無釉	完	52	44	28.9	不定形	胴部	両面よりかなり雑に剥離。表面に紫茶色の釉。裏面ナデ調整あり。カメ。	II地区 G-45 2層
7	沖無釉	破	49	38	27.2	円形	胴部	内→外へ丁寧に剥離。器種不明。	II地区 F-45 2層
8	沖無釉	破	46	40	18.3	円形	胴部	内→外へ丁寧に剥離。カメ。	II地区 G-47 2層 0~10
9	沖無釉	破	63	46	34.5	円形	胴部	外→内へ雑に剥離。蓋。	III地区 H-54 2層
10	沖無釉	完	56	43	36.2	不定形	胴部	外→内へ雑に剥離。摺鉢。	I地区 E-36 2層 10~20
11	沖無釉	破	66	51	52.4	不定形	胴部	外→内へ雑に剥離。カメ。	III地区 G-60B
12	沖無釉	破	44	36	20.2	不定形	胴部	両面より雑に剥離。表面に自然釉。器種不明。	I地区 F-10 遺構2
13	沖無釉	完	18	15	18.0	不定形	胴部	外→内へ雑に剥離。蓋。	II地区 H-44 遺構1
14	沖無釉	破	67	57	78.9	不定形	胴部	内→外へ雑に剥離。カメ。	III地区 テータテ 1層
15	瓦	完	44	38	28.9	不定形	胴部	外→内へ雑に剥離。赤瓦。側面に津液が付着している。	II地区 F,G-42 2層



第65図 円盤状製品

第29節 煙管

今回、煙管は総数17点を数え各地区から得られており（第24表参照）、中でもⅡ地区F～H・40～50グリッドを中心に出土している。種類はパイプ（羅中煙管）形が主流で僅かに柱状形と、延べ煙管があり、材質は沖繩産施釉陶器、沖繩産無釉陶器、青銅製などである。図化した資料は出土品のなかでも残存状況の良いものを選び、詳細については観察表にまとめて記述した。観察表中、材質の欄で沖繩産施釉陶器を沖施、沖繩産無釉陶器を沖無、青銅製を青銅と略記している。

第24表 煙管出土状況一覧表

	1層	旧表土	2層	3層	E-27 遺構1	F-48 遺構1-2層	G-48 遺構1-2層	G-45 遺構6	G-49 遺構1-1層
I地区	○				△				
II地区			○○○△ ☆☆★★			△	△	△	■
III地区	◇	◇		◇					

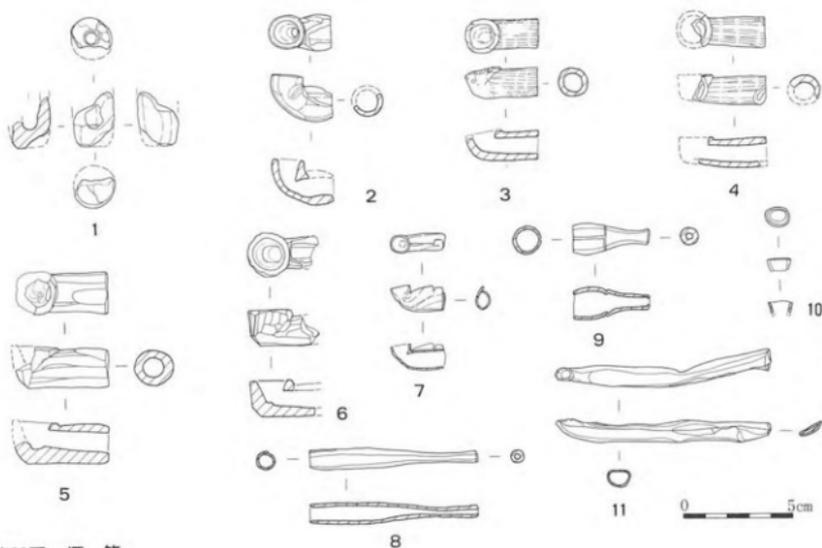
凡例： 沖繩産施釉陶器○ 沖繩産無釉陶器◇ 沖繩産無釉陶器（朱泥）△ 瓦質■
青銅製（雁首）☆ 青銅製（吸口）★
*各地区で層序の性格は異なっているが、紙面の都合上まとめて表記した。

第25表 煙管・雁首観察一覧

図版番号	材質	形態	完形/破損	全長 cm	吸い口 内径cm	吸い口 外径cm	羅字接続部 内径cm	羅字接続部 外径cm	現重量 g	観察事項	出土地点
第60図 図版50	瓦質	柱状形	破損	2.6	0.6	1.7	--	--	5.2	破損がはげしく磨耗している為、欠損部分も不明瞭である。	II地区 G-49
1	沖施	パイプ形	破損	2.9	1.0	1.3	--	--	7.1	羅字接続部、上部が破損。素地が青灰色で透明の釉がかかる。	遺構1-1層 II地区 G-37
2	沖無	パイプ形	完形	3.4	1.0	1.7	0.9	1.3	7.3	火皿縁部の欠損がいらしい。火皿の下部と、羅字接続部分（雁首・脚部）に使用痕と考えられる欠損がみられる。素地は朱泥。	II地区 G-45
3	沖無	パイプ形	破損	3.2	--	--	--	--	5.5	火皿部分と羅字接続部分の半分が欠損。素地は朱泥。	遺構6 II地区 G-48
4	沖無	パイプ形	破損	4.2	--	--	0.9	1.6	16.5	火皿部分が欠損。素地は赤褐色で緑褐色の釉（自然釉）がかかる。羅字接続部・外径上部や、火皿、外縁が使用により磨り減っている。	遺構1-2層 II地区 H-60
5	沖無	パイプ形	破損	3.3	1.4	2.1	--	--	7.0	羅字接続部分欠損。素地は赤褐色で表面は黄色がかかった暗褐色。形態は面取りによって多角形を呈し、部分的にけずりによる粘土の露りもみられる。火皿内部は黒色化。火皿面に黒いコゲ欠損も残っている。	II地区 F-53 3層0～5
6	青銅	パイプ形	破損	2.5	0.8	0.9	0.7	0.8	2.2	羅字接続部分がつぶれて、上面で割れ、中に残っていた羅字が若干飛び出している。火皿と羅字接続部分（脚部）とは、はめ込みのようである。	II地区 F-46
7	青銅	延べ煙管	破損	--	0.9	1.1	--	--	0.8	9と同一体と考えられるが、接合できない。	3層0～10 II地区 G-44
8	青銅	延べ煙管	破損	9.9	--	--	0.9	1.1	8.7	羅字部分は変形し、吸い口もつぶれている。全体的に青サビ以外にも鉄サビが部分的にみられ、それ以外とこれ以上が着しこびりついているが、アルミのような低比光りを出し、軽量である。	II地区 G-44 ウラフ ルシ-リ内
9	青銅	延べ煙管	破損	9.9	--	--	0.9	1.1	8.7	羅字部分は変形し、吸い口もつぶれている。全体的に青サビ以外にも鉄サビが部分的にみられ、それ以外とこれ以上が着しこびりついているが、アルミのような低比光りを出し、軽量である。	II地区 G-44 ウラフ ルシ-リ内

第26表 煙管・吸口観察一覧

図版番号	材質	完形/破損	全長 cm	吸い口 内径cm	吸い口 外径cm	羅字接続部 内径cm	羅字接続部 外径cm	現重量 g	観察事項	出土地点
第60図 図版50	青銅	完形	7.8	0.2	0.6	0.7	0.8	6.0	全体的に青銅化しているが、所々、本来の白金の輝きがみられる。土のこびりついている箇所も多い。	II地区 H-43
10	青銅	完形	3.5	0.3	0.8	1.0	1.2	9.2	羅字接続部分の裾らみ外面に沈澱のような盛り込みがみられる。羅字接続部分と吸い口部分のはめ込みによるけずりと考えられる。	II地区 H-43 3層0～30
11	青銅	完形	3.5	0.3	0.8	1.0	1.2	9.2	羅字接続部分の裾らみ外面に沈澱のような盛り込みがみられる。羅字接続部分と吸い口部分のはめ込みによるけずりと考えられる。	II地区 H-43 3層0～30



第66図 煙管

第30節 金属製品

(1) 鉄釘 (第67図1~10)

本遺跡で鉄釘は46点出土している。Ⅰ地区で2点、Ⅱ地区で33点、Ⅲ地区で10点出土し、Ⅱ地区F-46 2層より12点出土している。特にⅡ地区での出土数が他地区より多いのは43-44グリッドで検出されているウールフルへの関連が考えられる。出土資料の残存状態は悪く、錆・錆膨れ・ヒビ・剥離が著しいため原形を留めるものは少ない。原形は残存部より身の断面がほぼ正方形であり先端で楔型を成すことが確認できる。分類は頭部形状より試み2類を設定した。

Ⅰ類……頭部形状が凸型を成す。

Ⅱ類……腐食・欠損・破損による分類不可能品。

Ⅰ類に設定した3品以外は原形が判然としないため全てをⅡ類として設定した。測定の際、頭部正面-背面軸を頭部a軸、頭部横軸を頭部b軸とした。なお、類別・残存状態及びサイズより出土資料から10点選別し(第67図)その詳細を観察表(第27表)に示した。

Ⅰ類 (第67図1~3)

第67図1は若干錆による剥離が認められるがほぼ完形を保っていると考えられる。頭部・身ともに反りは無いが頭部根元より身が側面方向に僅かに傾く。同図2は錆膨れ・亀裂を生じ、身全体が背面方向に傾くがほぼ完形を保っていると考えられる。同図3は錆による剥離のため身先端部・背面及び頭部上面に地金が露出するが、復元寸法は同図1及び2と同サイズになると考えられる。身全体が頭部下部より僅かに背面方向に傾く。

Ⅱ類 (第67図4~10)

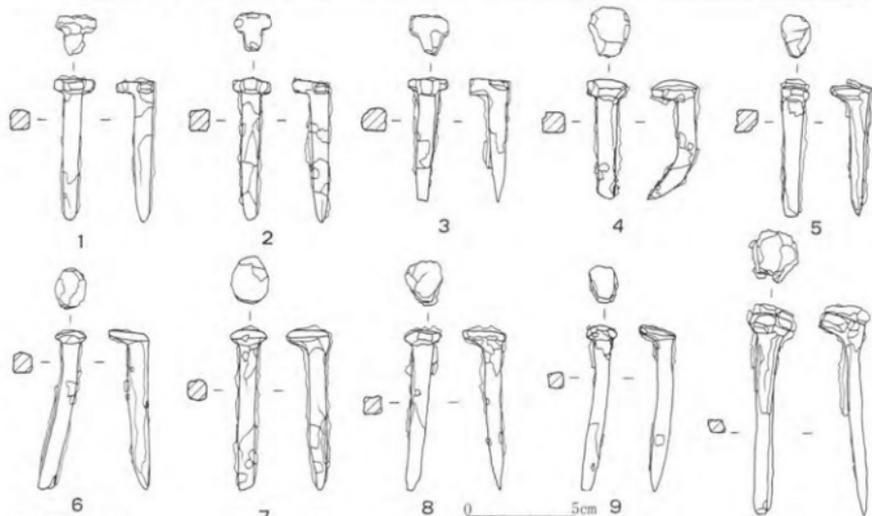
同図4は剥離・亀裂が各所に生じ身下半部が「く」の字状に正面に強く曲る。残存長は釘背面を測定。同図5は錆膨れによる亀裂・剥離のため地金が各所に露呈している。背面への僅かな反りを認める。同図6は頭部上部及び身背面下部に剥離が認められる。身上半部に折れを持つが、反りは認められない。同図7は全体を淡褐色の錆が覆い、僅かに亀裂が生じる。歪み・反りは認められない。同図8は錆による剥離がひどく特に身はその大半で地金が露呈しており、先端部はその半分を欠く。身は僅かに背面に反る。同図9は錆化による剥離のため地金

がほぼ露出する。身上半部に側面への歪みが生じ、背面は緩やかに正面へ反る。同図10は出土釘中最長のものであるが、錆化による剥離が著しく一部を除きほぼ地金のみ残存する。身が頭部根元より側面方向に傾き背面に反る。

近代において鍛冶屋が普天間宮の隣り、並松街道沿い、宇地泊で操業されていた(註1)ことが確認されている。本遺跡出土鉄釘はこれらの鍛冶屋で製造され流通していた可能性もあり、特にI類の様な特徴的な鉄釘は釘の生産供給の流れを考察する上で有効な資料となると考えられる。

第27表 鉄釘観察一覧

図版番号	分類	長さ(cm)	頭部直径(cm)	頭部幅(cm)	頭部高(cm)	頭部厚(cm)	頭部重量(g)	観察事項	出土地点
第67図 図版52 1	I類	6.7	1.8	1.9	0.9	0.9	27.8	頭部上面形が凸形を成す。ほぼ完形を保つ。身が側面に僅かに傾く。	II地区 G-42 2層0~20
" 2	I類	6.7	1.7	1.6	0.9	1.0	26.2	頭部上面形が凸形を成す。ほぼ完形を保つが、錆膨れ・亀裂を生じる。身が背面に傾く。	III地区 1層 サ-8-キ-
" 3	I類	5.6	1.6	1.8	1.1	1.0	26.6	頭部上面形が凸形を成す。錆離により身先端部、背面及び頭部上面で地金が露呈する。身は背面に僅かに反る。	III地区 1層 サ-8-キ-
" 4	II類	5.7	2.2	1.8	1.0	1.1	31.7	身下半部が正面に強く「く」の字状に曲る。剥離・亀裂が各所に生じる。	II地区 F-46 2層
" 5	II類	6.4	1.9	1.3	1.0	1.1	27.7	亀裂・剥離により各所に地金が露出する。背面に僅かに反る。	II地区 F-43 遺構1
" 6	II類	7.6	1.8	1.6	1.0	0.9	29.6	身上半部に折れを持つ。	II地区 F-46 2層10~15
" 7	II類	7.6	2.1	1.6	0.9	0.9	35.8	残存状態良好。歪み・反りは認められない。	III地区 E-57 2層
" 8	II類	7.7	2.0	1.7	0.8	0.9	28.8	錆化が進む。身が背面に僅かに反る。先端部が欠ける。	II地区 F-45 2層10~15
" 9	II類	8.1	1.6	1.2	0.7	0.7	26.5	地金がほぼ露出する。身上半部に側面への歪みと、背面への反りを持つ。	II地区 G-44 2層
" 10	II類	9.8	2.1	2.3	0.7	1.0	42.2	出土釘中最長。剥離が著しくほぼ地金のみ残存。身は側面に歪み、背面に反る。	II地区 F-46 2層0~10



第67図 鉄釘

(2) 簪 (第68図 1~5)

簪は5点出土しておりその形状から3形態に分類できる。民族事例に拠ると簪は男簪・女簪に大別され、さらに各2種、計4種に分類される。男簪は本簪である髪差、副簪の押差、女簪は本簪のジューファーと士女以上の正装時に差す副簪の側差となる。本遺跡出土の簪は側差以外の3種に類別でき、その内訳はジューファー2点、髪差1点、押差2点である(第68図)。なお詳細は観察表(第28表)に示した。

I類…ジューファー。カブ・首・ムディ・竿の4部からなる。カブは大きく杓子状で、首・竿は共に6面に面取りされている。ムディは首・竿の境界部で両部の面と稜線が山形を成すように交差する。

II類…髪差。花・首・ムディ・竿の4部からなる。頭部に花型の飾りを持つ。ムディはジューファーとは異なり独立した部位で首・竿より細くねじれを持つ。竿は4面に面取りされる。

III類…押差。カブ・首・ムディ・竿の4部からなる。カブは耳掻き型で、他の部位はジューファーに準ずる。

I類 (第68図 1・2)

第68図1は竿中央部に意図的なものと考えられる半円状の弧を持つ。カブ外面に明瞭な稜を持たない。同図2はカブ外面に明瞭な稜を持ち、竿はムディ部より側方に傾き背面に僅かに反る。重量が軽いこと、色調が鈍い銀色であること及び近代における民俗例よりアルミ製(註2)、あるいは戦後におけるジェラルミン製の可能性を持つ。

II類 (第68図 3)

同図3は全体が青緑色の錆覆われ数か所に剥離が認められる。花は欠落する。首に不明瞭ながら稜を確認できその間隔から原形は6面形と考えられる。ムディにねじれは認められない。竿はごく僅かに弧状に反る。

III類 (第68図 4・5)

同図4は錆化による剥離が著しく全体が曲折する。特に首から竿にかけて等間隔の波状の歪みを持つ。竿は不明瞭ながら稜を確認できる。同図5は竿下半部が欠損し破損部付近は「く」の字状に曲折する。錆化による剥離を数か所確認する。カブは同図4に比べ前面に反る。

(3) 切羽 (第68図 6)

欠損品が1点出土している。残存部より原形は方形に近い台形と考えられ、周縁部上面の角が0.25cmの幅で斜めに面取りされている。青緑色の錆が生じていることから青銅製と考えられる。長軸4.18cm、内孔長軸2.3cm、厚さ1mm、残存重量6.0g、I地区 H-10。

(4) 指輪 (第68図 7)

完成品が1点出土している。金属板の両端を接合せず一端を他方の内側に重ね合わせる構造で、サイズ調整のためと考えられる。本資料は三層構造を成し、表面は過半数を青緑色の錆に覆われる淡黒色の金属で、数箇所に剥離を認める。剥離部では金色の金属が露出し、この金属の摩擦部で地金が確認できる。表面の装飾は確認できない。幅8.4mm、厚さ1.1mm、最大外孔径1.64cm、最大内孔径1.32cm、II地区 H-40。

(5) 用途不明品 (第68図 8~10)

第68図8は厚さ0.9mm、長軸1.85cm、短軸1.54cm、残存重量1.7gの金属板であり、断面形状は緩やかな弧状をなす。一部欠損する。II地区 G-42 2層。第68図9は厚さ1.2mm、残存重量3.1gの金属板で全体を青緑色の錆で覆われることから青銅製と考えられる。残存形状は「く」の字状を成し両端は欠損している。弧内側は不規則な波状の加工痕を持つ。I地区 2層。第68図10は耳掻き状の完形品で中央部より「く」の字状に曲折する。曲折点周辺部及びほか数箇所に青緑色の錆を生じる。県立博物館の津波古聡氏に鑑定を依頼したところ(註3)、地金に金泥を施し黒漆を重ねる三層構造であることが判明した。本資料はその形状より頭部・くびれ部・身部の3部に分割できる。頭部は小さく長さ3.3mm、幅2.6mm、厚さ1.5mmであり、先端部は角の面取りが為されている。くびれ部は長さ8.0mm、幅2.4mm、厚さ1.1mmで背面に横方向の沈線を7本認めるが錆により総数を確認できない。身部は長さ10.51cm、幅3.0mm、厚さ1.5mmで幅・厚さはほぼ一定であり先端部で円錐状を成す。錆により総数は確認できないが背面に中央で交差しない谷形の沈線が約0.4mmの間隔で約60数組施される。断面形は頭部が方形、くびれ部・身部は共に弧となる半円形である。材質・サイズが異なるが、身の幅が一定であり先端を成す点は糸数域跡出土の筭(註4)に類似しており、本資料も同系製品である可能性を持つと考えられる。全長11.64cm、重量3.3g、I地区 1層。

なお、その他鉄製品は写真図版(図版52)のみとした。

註

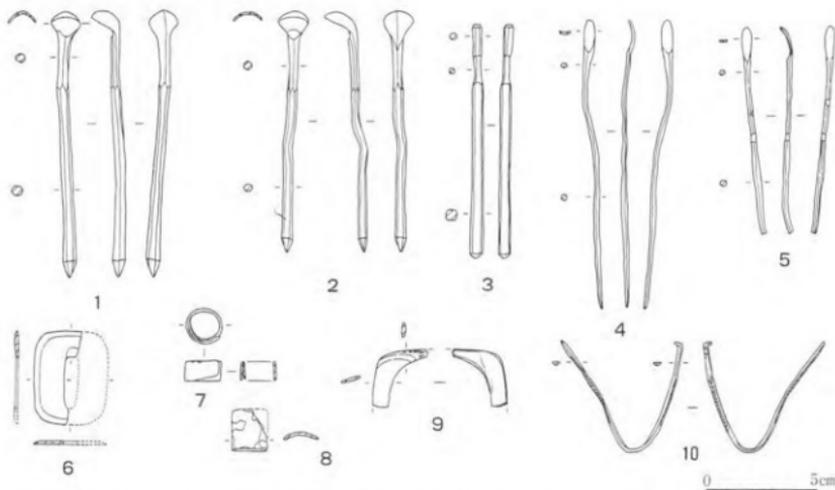
- 註1. 宜野湾市史編纂委員会「第3章 生業(5)鍛冶屋」『宜野湾市史 第五卷 資料編4 民俗』宜野湾市 1985年
 註2. 沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典 上巻』沖縄タイムス社 1983年
 註3. 平成10年(1998年)12月に津波古聡氏に県立博物館にて実見していただいた。記して感謝いたします。
 註4. 金城電信、照屋盛三、黒住耐二『糸数城跡』玉城村教育委員会 1991年

参考文献

- ・沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典 下巻』沖縄タイムス社 1991年
 ・宝玲堂刊行編纂委員会『琉球風俗拾図』本邦書籍株式会社 1982年
 ・琉球政府文化財保護委員会『沖縄文化史事典』東京堂出版 1972年
 ・大城精徳「ジーフアー伝統の髪型を飾る」『日本の伝統工芸 12 九州Ⅱ・沖縄』株式会社ぎょうせい 1985年

第28表 簪観察一覧

図版番号	分類	残存長 (cm)	残存 重量 (g)	カブ 長軸 短軸 深さ (cm)	首 長さ 幅 (cm)	ムディ 長さ 幅 (cm)	竿 長さ 幅 (cm)	観察事項	出土地点
第68図 図版51 1	I類	11.0	10.4	1.6 1.3 0.4	2.1 0.4	—	7.7 0.3~ 0.5	カブ外面に稜を持たない。竿に半円状の歪みを持つ。	Ⅱ地区 G-43 2層40~50
" 2	I類	12.0	5.7	1.5 1.3 0.6	2.3 0.4	—	8.6 0.4~ 0.6	カブ外面に明瞭な稜を持つ。アルミ製或いはジェラルミン製と考えられる。	Ⅱ地区 F-45 2層
" 3	Ⅱ類	10.6	13.7	—	1.5 0.4	1.0 0.3	7.9 0.4~ 0.5	花部は欠落する。ムディにねじりは確認できない。	Ⅲ地区 F-55 遺構82
" 4	Ⅲ類	13.1	4.0	1.4 0.5	5.3 0.2	—	6.0 0.1~ 0.3	全体が曲折する。首一竿間に規則的な波状の歪みを持つ。	Ⅱ地区 G-48, 49 1層
" 5	Ⅲ類	9.4	2.7	1.5 0.4	3.9 0.2	—	3.6 0.2~ 0.3	竿下半部が欠損する。	Ⅲ地区 F-55 3層0~5



第68図 金属製品 簪(1~5)、切羽(6)、指輪(7)、用途不明品(8~10)

第32節 ガラス製品

喜友名グスクからは薬ビン、化粧品のビン、清涼飲料水のビン等の多数のガラス製品が出土している。ここでは特徴的なものを図示した。

第70図 1は、Ⅲ地区F-54 1層から出土した試薬ビンで、カッパ色をしており、口径2.0cm、縦名が14.8cm、横長7.0cmの円柱状の器形で、口縁部にネジ山がある。接合痕ははっきりとしている。肩部に「NO DEPOSIT ★ NO RETURN, NOT TO BE REFILLED」、裏面に「V O 68-18 4836」の浮き文字がある。肩部の文字から試薬ビンと思われる。

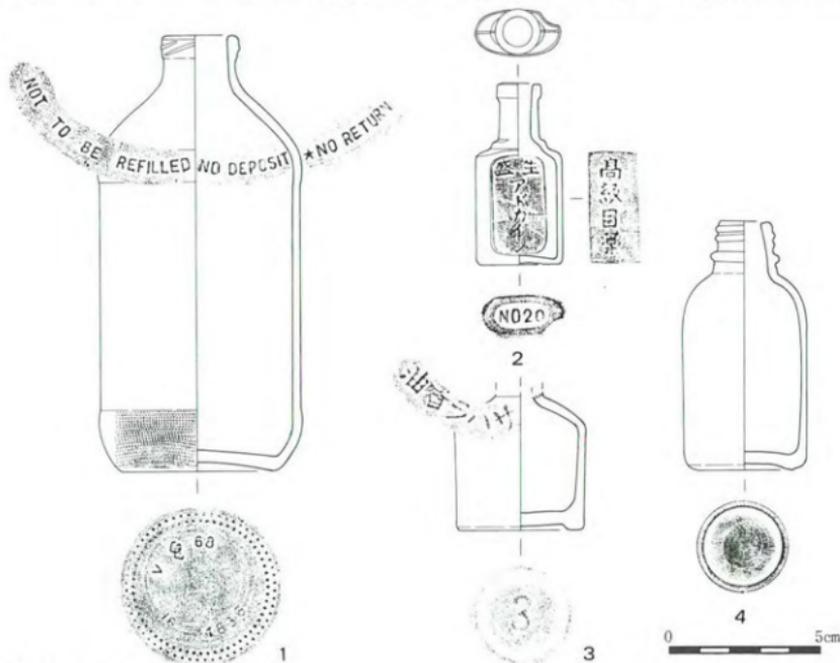
第70図 2は、Ⅱ地区G-46 2層から出土した薬ビンで、カッパ色をしており、口径1.0cm、縦長6.1cm、横長2.9cm、幅長1.5cmの胴部の断面形が白米形、頸部の断面形が円形の特徴的な器形で、全体に1～2mmの気泡が多くみられる。接合痕はうすく、頸部から上ではみられない。接合時それぞれ0.5mmほど上下方向にずれて接合されている。胴部の角なし四角形の中に、盛生、アドカイン、もう一方の面に高級目薬、裏面にNo20と浮き文字がある。また、この製品と対となる点眼器は検出されなかった。

第70図 3はG-52 1層から出土した化粧品のビンで、淡緑色をしており、頸部から上が欠損している。横長は4.3cmある。胴部の断面形は26角形、底部、肩部は円形の形をしたビンである。全体に1～2mmほどの気泡が多くあり、接合痕はうすい。肩部にサハラ香油、裏面に3の浮き文字がある。

第70図 4は、出土地不明、1層から出土した薬ビンで、カッパ色をしており、口径1.3cm、縦長8.4cm、横長4.0cmの円柱状の器形で白色のプラスチック製のネジ式の蓋がついている。接合痕ははっきりしている。裏面に50とうすく浮き文字がある。内部に黒色の釉質が付着している。尚、ネジ山下に液だれ防止の凸帯があることから、液状の薬が入っていたと思われる。

参考文献

・富貴綱一・上原 静他『首里城跡-首里城跡観会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査-』沖縄県教育委員会 1988年



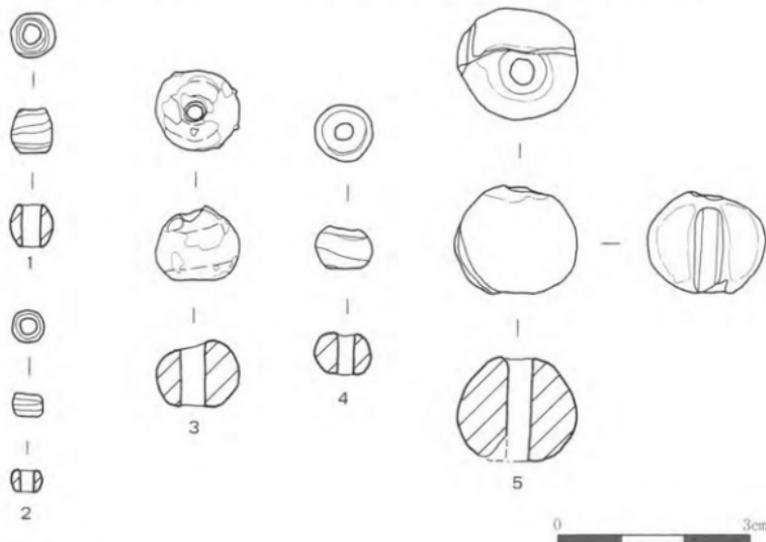
第70図 ガラス製品

第33節 玉

今回の調査で得られた玉類は全部で5点、地区別にみるとⅠ・Ⅱ地区で1点ずつ、残りはⅢ地区からの出土である。材質はガラスと石でできており、石の素材は神谷厚昭氏の同定によると石英であるという見解を得た。石英は非常に固い鉱物なので同種の鉱物か、それよりも固い物質（例えば金属など）でなければ出土品のように加工するのは難しいそうである。第71図4の石英の玉はグスク時代のピットから出土している。また同図5は表面に薄く赤色の色素沈着が確認でき、石英が風化しても赤色を発することは無いということで、色を塗ったものなのかそうであれば素材はなにか、どういう経緯で赤くなったのか残念ながら現時点では明確な答えを見出すことができなかった。

第31表 玉観察一覧

図版番号	最大幅 cm	高さ cm	孔径 cm	重量 g	材質	観察事項	出土地
第71図 図版53	0.7	0.7	0.3	0.3	ガラス	形は卵形を呈し、色は黄白色である。輪積み痕は明瞭に確認できる。	Ⅲ地区 F-55 3層0~10
1							
2	0.5	0.35	0.2	0.1	ガラス	形は白形を呈し、色は赤色である。輪積み痕が確認でき、気泡も若干みられる。	Ⅲ地区 G-56 遺構2
3	0.9	0.6	0.25	0.6	ガラス	形は白形、色は白色である。輪積み痕と気泡が明瞭に確認できる。	Ⅲ地区 F-53 3層0~20
4	1.3	1.2	0.35	2.4	石英の 一種	表面は赤茶色だが、土や小石などが多く付着している。風化がいちじるしく、欠損面はガラス質特有の割れがみられる。石英の風化層が厚く、白く欠損した面に鋭利な先のものによるキズが十字に確認できる。キズが風化しているため、発掘時についた切痕ではない。深く欠けた部分に透明な内部面が確認できる。	Ⅰ地区 E-7 遺構1
5	1.8	1.7	0.35	7.6	石英の 一種	1個体が3つにわけて出土したもので、断面部分が若干白く風化している。玉の断面の観察すると、内部は透明で外側が白く、表面は赤色と、三層構造になっている。表面はザラザラとしているが、赤色は石英本来の色ではない。赤色に表面は染められていると考えられる。	Ⅱ地区 F-45 2層



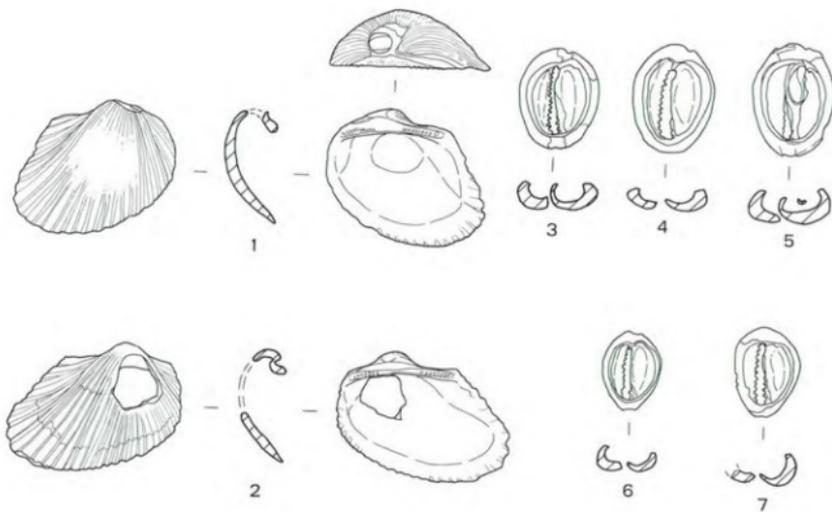
第71図 玉

第34節 貝製品

喜友名貝塚・喜友名グスクから出土した貝製品は有孔貝製品のみであった。二枚貝製品が2点、巻貝製品が5点である。第72図4の貝製品以外はすべてI地区E-27遺構1からの出土で、この遺構の性格から食料残渣としての可能性も考えられるが、観察の結果、多重の打割と穿孔面の摩耗が認められる為、製品として報告する形をとった。詳細については、観察表にまとめて記載する。

第32表 有孔貝製品観察表一覧

図版番号	貝種	貝種名	殻高 cm	殻長 cm	長さ cm	孔距 cm	孔直径 cm	観察事項	出土地
第27図 図版53 1	二枚貝	929k29* A8'98'i	3.9	4.4	10.9	0.5	0.6	殻頂部分に内側から孔が穿たれている。孔は、ほぼ円形を呈する。食用としては、固く割りにくい殻頂のみに孔を穿つのは不自然である。主軸と殻長の中央部分が特に磨耗している。内面図でみて、腹縁左側が磨耗している。	I地区 E-27 遺構1-1層
* 2	二枚貝	929k29* A8'98'i	3.5	5.0	9.7	0.9	1.4	孔は殻頂よりの前背縁側に内側から穿たれている。孔は3回に分けて穿たれており、五角形を呈する。孔の縁は磨耗しており、全体的に磨耗している。	I地区 E-27 遺構1-3層
* 3	巻貝	927k289* 57	3.0	2.2	5.1	1.5	1.9	背面を除去し、扁平状にしている。打割面は研磨しているようにもみられる。殻軸を半分取っている。水管溝の周りが全体的に磨耗しているようにみえる。	E-27 遺構1-1層
* 4	巻貝	927k289* 57	3.2	2.4	5.2	1.6	2.3	背面を除去し、扁平状にしている。打割面は研磨しているようにもみられる。殻軸を完全に取っている。水管溝の周りも全体的に磨耗しているようにみえる。	II地区 F-43 遺構5
* 5	巻貝	927k289* 57	3.3	2.4	6.6	1.6	2.7	背面を除去し、扁平状にしている。打割面は研磨し、全体的に黒色化して、体層もび割れがみられることから、火を受けたものと考えられる。殻軸を残して、水管溝の周りも全体的に磨耗しているようにみえる。	I地区 E-27 遺構1-3層
* 6	巻貝	927k289* 57	2.4	1.7	1.8	1.3	1.7	背面を除去し、扁平状にしている。全体的に磨耗している。殻軸は付根の一部分が残っているがきれいに取られている。	I地区 E-27 遺構1上
* 7	巻貝	927k289* 57	2.7	1.9	2.3	1.3	1.9	背面を除去し、扁平状にしているが、一部欠損していて、打割面も体層が不揃いなので食料残渣かもしれない。全体に黒色化しび割れがみられるので、火を受けたものと考えられる。	I地区 E-27 遺構1-3層



第72図 貝製品

第35節 貝類依存体

(1) 最小個体数の算出方法

- ・巻貝は完形、殻頂、破片に分けて集計し、前二者の合計を最小個体数とした。
- ・二枚貝は右殻と左殻に分け、さらに完形、殻頂、破片に分けて前二者を合計し、多い方を最小個体数とした。

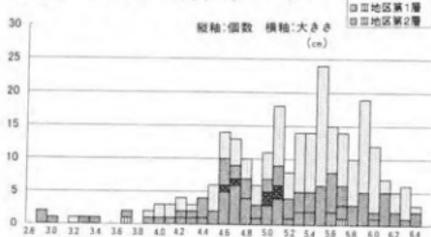
(2) 概要

喜友名貝塚・喜友名グスクからは、巻貝が27科84種、二枚貝が17科41種で出土総個体数は巻貝が2482点、二枚貝が441点出土している。遺物は風化と破損が著しく完形のもの少ない。そのなかでも大半は珊瑚礁に生息する貝種が多く、主体になるのは巻貝ではオニツノガイ、マガキガイ、二枚貝ではアラスジケマンガイである。またⅡ地区で淡水貝のカワニナが目立って多く出土し、地区別にみた貝の出土総量はⅠ・Ⅱ地区からの出土量に比べⅢ地区からの出土量が少ない。各地区ともに近現代の遺物包含層、近世の包含層からの出土が多い。詳しくは地区別出土状況一覧33~40を参照されたい。ビットなどの遺構から出土した貝については紙面の都合上すべてを記載することができない為、なかでも貝種、量ともに多く出土をみた遺構についてのみ別項目で若干の考察を試みる。また今回多く出土したマガキガイのみ計測を行った。殻頂を残した資料に比べ完形の資料は少なかった。そのため殻径と殻長の計測は個体総数が異なっている。

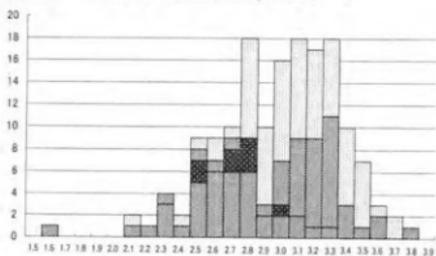
(3) マガキガイの計測

本貝塚ではマガキガイが多量に出土し、総数888個体を数えた。その内、資料の残りが良く計測可能な資料は全体の約46%で、それ以外は殻頂と軸を残した割れ方をしているマガキガイが多かった。今回計測の対象とした資料は攪乱層を除いた遺物包含層と、比較的多く出土した遺構に限定した。層序出土の資料のみ分類を行い、伊波式系の土器が含まれる包含層から出土した資料をAグループ、グスク時代の包含層出土の資料をBグループ、近世の包含層出土の資料をCグループとした。その結果、Aグループの資料はすべて破片資料で計測が行えなかった。Bグループは6個体と僅かな資料しか計測が行えなかった。保存状況の良い資料はCグループに集中しており、Cグループの資料だけをグラフに表示することにした。グラフから主体となるのは殻長が5.0~5.9cm大で平均値が5.2cm、殻径は2.7~3.3cm大に集中し、平均値は3.5cmである。この値は同じ沖縄本島の遺跡である。平敷屋トウバル遺跡出土のマガキガイの計測値と比較すると、平敷屋トウバル遺跡では殻長は平均値5.3cm、殻径は主に3.0~3.1cmが主体と報告されており(註1)、殻径については平均値が得られていないので比較できないが、殻長は本貝塚の計測値が若干小さい。平敷屋トウバル遺跡のマガキガイは後期土器主体の地点の資料に限定して計測が行われており、そのことを考慮すると、平

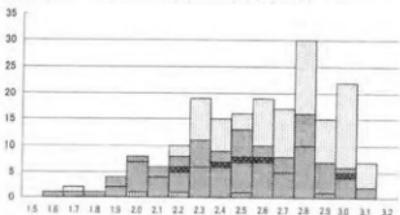
第73図 マガキガイ殻長Bグループ



第74図 マガキガイ殻径(完形)Bグループ



第75図 マガキガイ殻径(殻頂)Bグループ



敷土トワバル遺跡で鳥袋春美氏が指摘しているように、時代が下がるに従って貝の小型化や乱獲が、ここでも明白になっているといえる。

(4) 遺構との関連

I 地区 E-27 遺構 1 では遺構の直上で巻貝 36 種 225 個体、二枚貝 15 種 45 個体が出土している。遺構 1 はグスタク時代の遺構で灰層、焼土層、炭層の堆積があり、炉に使われた遺構ではないかと考えられている。遺構内からは巻貝はカンギク、オキナワヤマタニシ、オニツツノガイ、カワニナ、マガキガイ、クモガイなどが出土、二枚貝はメンガイ、ヌノメガイ、アラスジケマンガイなどが得られている。II 地区溝状遺構からはオキナワヤマタニシやカワニナといった淡水地に生息する貝種が他の海産巻貝に比べて多く出土している。二枚貝は種類、量ともに少ない。遺構の性格上、タニシやカワニナは自然発生、生息するものと考えられるが、本土産磁器の集中がみられた F-43 遺構 6 からも多く出土しており、食用の可能性も否定できないのではないだろうか。

註

註 1. 鳥袋 洋・金城亀信・上原 静也 「平敷屋トワバル遺跡」 沖縄県教育委員会 1996 年

第 33 表 巻貝出土状況一覧 (I 地区)

科名	目種名	発見地	1 層				2 層				3 層				合計		個体数				
			発見地	発見地	発見地	発見地	a 区	b 区	c, d 区	4 層	発見地	発見地	発見地	発見地	発見地	発見地					
ニオイズ科	ニシキガイ	I-2-a	2	1	0													2			
	シロカマ	I-1-a	1																1		
	ササキハナシ	I-1-a	2	1	0					3									3		
カウソウ科	ニシキガイ	I-3-a	1																1		
	クモガイ	I-3-a	1	1	1														3		
	オキナワヤマタニシ	I-3-a	1																1		
	カキガイ	II-1-b	5	3	1				5	2									13		
	カキガイ	II-1-b	1																1		
アキアキ科	アキアキ	I-1-a	1																1		
	アキアキ	I-1-b	2																2		
	アキアキ	I-1-b	2						5	1	1								7		
ヤマシロ科	ヤマシロ	V-8	4																4		
	ヤマシロ	V-8	4																4		
カウソウ科	カウソウ	I-2-c	56	46	15					3	3	1	2	7	1		57	54	25	111	
	カウソウ	IV-5				1				1										2	
カウソウ科	カウソウ	IV-5.6	4																	4	
	カウソウ	III-1-c	1	2	2															5	
カウソウ科	カウソウ	I-2-c	41	161	6					3	1	15	1	2	19	1	2	13	260	8	281
	カウソウ	I-2-c	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-2-c	1																		1
	カウソウ	II-2-c	1																		1
	カウソウ	II-2-c	1																		1
	カウソウ	I-2-c	2																		2
	カウソウ	I-1-a	3	1	2																6
カウソウ科	カウソウ	I-2-c	1																		1
	カウソウ	I-2-c	1																		1
	カウソウ	I-2-c	1																		1
	カウソウ	I-2-c	1																		1
カウソウ科	カウソウ	II-1-c																			1
	カウソウ	I-2-c	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-2-c	1																		1
	カウソウ	I-2-c	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ	I-1-a	1																		1
	カウソウ	I-1-a	1																		1
カウソウ科	カウソウ																				

第37表 二枚貝出土状況一覽 (I 地区)

科名	貝種名	生息地	1 層				2 層				3 層				4 層				合計				個体数	
			完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂			
			L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
フネガイ科	ベニゴイ	I-2-a																						
	リュウキウワサザキ	II-2-c	3	3	2	1	8																	
イタダギ科	イタダギ科未明																							
ウミギサ科	メンゴイの一種	I-2-a	1	1	1	1	1																	
フネガイ科	ウツボツガイ	II-2-a	1	1	1	1	3																	
キナガサ科	カキツクサ	I-2-a																						
	カキツクサ	I-2-a	2	1	1	1	1																	
フネガイ科	リュウキウワサザキ	II-2-a																						
	シヤゴイ	I-2-a	2	1	1	2	10																	
	シヤゴイ	I-2-c																						
	ヒレシヤコ	I-2-c																						
	ヒメシヤコ	I-2-a	1	1	1	1	2																	
	シヤゴイ科未明																							
ホドリマスオビガイ科	イソハマダリ	I-1-c																						
	リュウキウワサザキ	II-1-c	3	2		2																		
ニッコウガイ科	リュウキウワサザキ	II-1-c																						
シロサザキ科	リュウキウワサザキ	II-1-c																						
シシエ科	カキツクサ	II-0-c					4																	
	アラシメガイ	I-2-c																						
	アラシメガイ	I-2-c																						
マルズダレイガイ科	アラシメガイ	II-1-c	6	4	8	4	12																	
	アラシメガイ	II-1-c	2	1	2	1																		
	アラシメガイ	II-1-c	16	14	8	6	2																	
	アラシメガイ	II-1-c	1			1																		
フジノハマダリ科	フジノハマダリ	II-1-c																						
	フジノハマダリ	II-1-c	1	1																				
二枚貝未明																								
合計			38	34	27	20	75	1	0	1	0	3	3	1	2	4	2	10	0	0	1	2	2	0
個体数																								

第38表 二枚貝出土状況一覽 (II 地区)

科名	貝種名	生息地	1 層				2 層				3 層				4 層				ワウフル				合計				個体数
			完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		
			L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	
フネガイ科	ベニゴイ	I-2-a																									
	リュウキウワサザキ	II-2-c																									
フネガイ科	シメツクサ	I-2-a																									
	メンゴイ	I-2-a	1	1	2	1	13																				
イタダギ科	カキツクサ	I-2-a																									
フネガイ科	ウツボツガイ	II-2-c																									
	ウツボツガイ	II-2-c																									
	シヤゴイ	I-2-a																									
	ヒレシヤコ	I-2-a																									
	ヒメシヤコ	I-2-a																									
ホドリマスオビガイ科	イソハマダリ	I-1-c																									
	リュウキウワサザキ	II-1-c																									
ニッコウガイ科	リュウキウワサザキ	II-1-c																									
シロサザキ科	リュウキウワサザキ	II-1-c																									
シシエ科	カキツクサ	II-0-c																									
	アラシメガイ	I-2-c					27																				
	アラシメガイ	I-2-c																									
マルズダレイガイ科	アラシメガイ	II-1-c																									
	アラシメガイ	II-1-c	1	1	1	1	19																				
	アラシメガイ	II-1-c																									
二枚貝未明																											
合計			3	1	1	1	1	5	6	18	14	15	2	0	0	0	0	5	0	0	0	1	2	0			
個体数																											

第39表 二枚貝出土状況一覽 (III 地区)

科名	貝種名	生息地	1 層				2 層				3 層				A 層				B 層				合計				個体数
			完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		
			L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	
フネガイ科	リュウキウワサザキ	II-2-c																									
ウミギサ科	メンゴイの一種	I-2-a																									
フネガイ科	シヤゴイ	I-2-c																									
	ヒレシヤコ	I-2-c																									
	ヒメシヤコ	I-2-a																									
ホドリマスオビガイ科	イソハマダリ	I-1-c																									
	リュウキウワサザキ	II-1-c																									
ニッコウガイ科	リュウキウワサザキ	II-1-c																									
シロサザキ科	リュウキウワサザキ	II-1-c																									
シシエ科	カキツクサ	II-0-c																									
	アラシメガイ	II-1-c																									
	アラシメガイ	II-1-c	1	1			1																				
マルズダレイガイ科	アラシメガイ	II-1-c																									
	アラシメガイ	II-1-c	3	2	1	1	1																				
二枚貝未明																											
合計			4	3	2	0	5	0	0	0	1	2	0	0	0	0	10	0	1	1	1	5	1	1	0		
個体数																											

第36節 骨 類

沖縄県宜野湾市喜友名貝塚出土の脊椎動物遺体

金子 浩 昌

1. はじめに

喜友名貝塚は早くより知られた沖縄前期貝塚であるが、今回の調査によって知られた前期貝塚部分のごく一部分が残された状態で、堆積層には後世の攪乱が深く及んでいた。しかし、下層に残る貝塚期包含層の遺物を区別することは可能であった。さらにまたその後の堆積層から得られた動物遺体は中、近世さらに現代に及ぶなかで人々の生活と係わった遺物を調査する機会をもった。報告にあたって沖縄県文化課の島袋 洋氏、同整理室の島袋春美、瑞慶堂尚美氏には大変お世話になった。厚く御礼申し上げる次第である。

2. 検出された動物遺体の種名表

軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

ネズミザメ目

ネズミザメ科 Family Lamnidae

アオザメ *Isurus oxyrinchus*

エイ目 Order Rajiformes

トビエイ科 Family Myliobatididae

マダラトビエイ *Aetobatus narinari*

スズキ目 Order Perciformes

ハタ科 Family Serranidae

属種不明 Gen. et sp. indet.

タイ科 Family Sparidae

クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*

ハマフエフキ *Lethrinus nebulosus*

ベラ科 Family Labridae

コブダイ *Semicossyphus robustus*

ブダイ科 Family Scaridae

属種不明 Gen. et sp. indet.

フグ目 Order Tetraodontiformes

ハリセンボン科 Family Diodontidae

ハリセンボン類 *Diodon* sp.

爬虫綱 Class Reptilia

カメ目 Order Chelonia

ウミガメ科 Family Cheloniidae

属・種不明 Gen. et sp. indet.

リクガメ科 Family Testudinidae

リュウキュウヤマガメ *Geomyda yaponica*

鳥綱 Class Aves

キジ目 Order Galliformes

キジ科 Family Phasianidae

ニワトリ *Gallus gallus* var. domesticus

スズメ目 Order Passeriformes

カラス類 *Corvus* sp.

哺乳綱 Class Mammalia

齧歯目 Order Rodentia

ネズミ科 Family Muridae

ケナガネズミ *Diplothrix legata*

食肉目 Order Carnivora

イヌ科 Family Canidae

イヌ *Canis familiaris*

ネコ科 Family Felidae

ネコ *Felis catus*

海牛目 Order Sirennia

ジュゴン科 Family Dugongidae

ジュゴン *Dugong dugong*

奇蹄目 Order Perissodactyla

ウマ科 Family Equidae

ウマ *Equus caballus*

偶蹄目 Order Artiodactyla

イノシシ科 Family Suidae

リュウキュウイノシシ *Sus riukiuanus*

ブタ *Sus scrofa* var. domesticus

ウシ科 Family Bovidae

ウシ *Bos taurus*

ヤギ *Capra hircus*

3. 動物遺体の記載

文中にある計測単位は特に記述がない限りmmで表す。

(1) 魚類

サメ類

アオザメ

I地区 E-27 遺構1上 左側第2歯：高さ36.0になる大型の歯が1点出土している。歯根部の両端を切断しているように思われる。

椎体

やや大きな椎体2点が出土している。椎体長13.0、椎体径26.0、椎体長9.0、椎体径9.0。

マダラトビエイ

上顎歯板1：歯板幅34.8。椎骨1、I地区 E-17 2層：大型の椎体であり、上記歯板をもつ個体よりも大きな個体のものである。中央に径4.0の孔が開く。椎体長7.0、椎体径16.0。

ハタ類

I地区 F-9 2層 右側前上顎骨1：わずかに1点が検出されたのみである。全長50.0±

クロダイ

前上顎骨長35.0±

ハマフエフキ

I地区を主にやや多く検出されている。前上顎骨右側4点というのがもっとも多く、I地区 E-27 遺構1では主鰓蓋骨が伴って出土していた。前上顎骨ではI地区 E-27 遺構1、同F-12 遺構4の標本で全長28.0±、遺構1b 標本で45.0位になる大型のあった。主上顎骨、主鰓蓋骨もこの大型標本に近い。

コブダイ

I地区2層での出土が多いが、全体としては特に多くはなかった。下咽頭骨の歯の部分の幅は、14.6、19.1、20.3、23.9、23.8という大きさであった。

ブダイ

標本は前上顎骨、歯骨3点があったのみで少なく、種名は明らかでない。

フグ類

歯骨1点がある。大型のもので、沖縄方面で出土例がある。

ハリセンボン類

棘のみが確認されている。

(2) 爬虫類

ウミガメ類、リュウキュウヤマガメの遺骸があるが、肋骨板と指骨などを検出したに留まった。

(3) 鳥類

ニワトリ

時代的には多分新しい時代のものであろう。大きさには大小の変異がすでにみられる。中足骨3点があり、骨体の最小幅6.4、9.2、10.0であった。脛骨1点の現存長130.3、骨体最小幅7.5、遠位骨端幅12.6。

カラス類

尺骨1点のみ。

(4) 哺乳類

ケナガネズミ

右側下顎骨1点がある。時期は明らかではないが、もし新しい時期のものとなれば珍しい出土例である。

イヌ

断片的な骨を得ているのみである。おそらく当初の状況からは変わっているものであろう。唯一計測できた。肩甲骨幅12.2。

ネコ

I 地区 E-27出土のネコは一括の遺骸で、埋葬されていたものである。おそらくかなり新しい時期の遺骸ではないかと思われる。他に断片的な骨格の出土があったが、それらもイヌと同じような条件で残されたものであろう。計測値は骨格数量表にのせた。

ウマ

ウシに比べると少ない。少数の上顎骨、下顎骨片、四肢骨各部位が多い。これらの四肢骨にも骨髓利用のために骨を打割っている例がみられた。方法はウシと変わらない。

リュウキュウイノシシ

喜友名貝塚の原初の貝層堆積の残された部分には、リュウキュウイノシシの遺骸が残されていた。その層序は部分的であり、ごく一部が残されていたようである。下顎骨にみるようにイノシシではM3まで萌出し、咬耗のみられる例の多いことが特徴付けられよう。また下顎骨、四肢骨にもイノシシの形質がみられ、ブタとは区別される。

ブタ

ブタの遺骸は遺跡の全面から出土しその量はもっとも多い。ブタを肉食の主とした時代の様相をよく示している。イノシシに比べて大きな個体が含まれ、上腕骨遠位骨端に穿孔をみない例、また骨端線の高まりのにおい形質が目につく。桡、尺骨の関節面にも同様の形質をみる。特殊な出土例としてブタの骨格を壺中に入れた状態のものが出土した。

壺中のブタ

頭骨、主要四肢骨が残されていた。遺骸の保存状況は壺中であつたために比較的良好で、頭蓋などもほぼ原形に復元することができ、かつてのブタの面影を知ることができた。

頭骨

現代の沖繩ブタと比べてやや小さく、戦前もしくはそれ以前に飼われていたブタである。吻部幅は狭く長めで、頭幅が広く、頭蓋骨が高い。沖繩在来のブタの形質をよくみることが出来る標本である。

本標本は歯で、歯は切歯、犬歯を失っている。臼歯はM3まで萌出し、エナメル質を穿孔する咬耗はM3の遠心端部まで及び、年齢は5-6才前後と思われる。頭蓋は上顎骨の部分でP4とM1の間で垂直に分断する(第77図矢印カ所とその方向)。この切断は下顎骨にもつながるので、下顎骨が組合わさつた状態の時に切断されたもので、下顎骨を外すための加工であつたと思われる。さらに頭頂部を斜めに切断していた(同図矢印カ所とその方向)。頭頂部の切断は脳髓の抽出のためである。これらの切断は鋭利な刃物で叩き切るような作業であり、それも何回にもわたって切るといふことではなかつたらしい。さらにこの頭骨に特徴的なのは、上・下顎骨の咬面を強く削るような加工が行われていることで、この加工によって大部分の歯の歯冠部が削られ、M3の遠心端に僅かに歯冠咬面が残されている。この削り加工はさらに顎骨咬面の土線にまで及び、顎骨を削るような状態にもなっている。ブタの歯の歯冠部が破損している例は近世以降の標本にこれまでもみることであつたが、加工の様子がこれほどはっきりしている例をはじめていた。こうした作業にどのような意味が込められているのか、詮索しなければならぬと思つている。

脊柱、四肢骨

環椎、軸椎、頸椎、肩甲骨、上腕骨、桡骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨が残されていた。頸椎は環椎以下7点がすべて揃い、軸椎には歯突起部が切断され(首の切断)、さらに数カ所で切断されている。四肢骨は骨体太く、ずんぐりとした形状である。これらの四肢骨も数カ所で切断されていた。上腕骨は骨頭部と骨体部2カ所、寛骨は寛骨臼部を二分するような位置で、大腿骨は骨体2カ所で切断されている。スパイラル切痕を形成しているのがよく看取される。肉を取り去り、骨を分断し、調理に使った後にまとめて壺中に入れられたのであろう。上腕骨全長140.0、大腿骨全長172.38。

ウシ

ウシの遺骸の出土は多い。上顎骨、下顎骨片、四肢骨片が多数みられる。下顎骨には骨体をほぼ残すような例があつた。四肢骨では肩甲骨、上腕骨、大腿骨、脛骨などの大型の部位は少なく、中手骨、中足骨、指骨が多かつた。またそれに付属する手根骨、足根骨のあつたのは、いっしょに処理されたからであろう。完存する骨格は手根骨、足根骨、指骨などで、主要四肢骨は骨体部を打割るような状態で残されていた。骨格のうち特に幼体と思われる個体はなかつたが、乳歯も残され、上顎骨、下顎骨の臼歯にはM3が萌出

直後の個体、切歯では2才位の個体のあったことが推定されている。中手、中足骨は中央部を金属刃で斜め上の方向から幾度にも切り込んでいる様子がみられる。また、別の例では近位骨端に下から縦に割るようなかたちで中足骨を裂いていた。出土したウシの遺骸には現今の大型のものは見られず、いずれも中型の在来牛と考えられる個体である。

ヤギ

やや多くの遺骸が残されていた。本遺跡が近現代の遺構を多く含むことによるのであろう。下顎骨、肩甲骨、脛骨、中手もしくは中足骨が多く、この在り方はウシなどとも共通する。成獣個体であった。

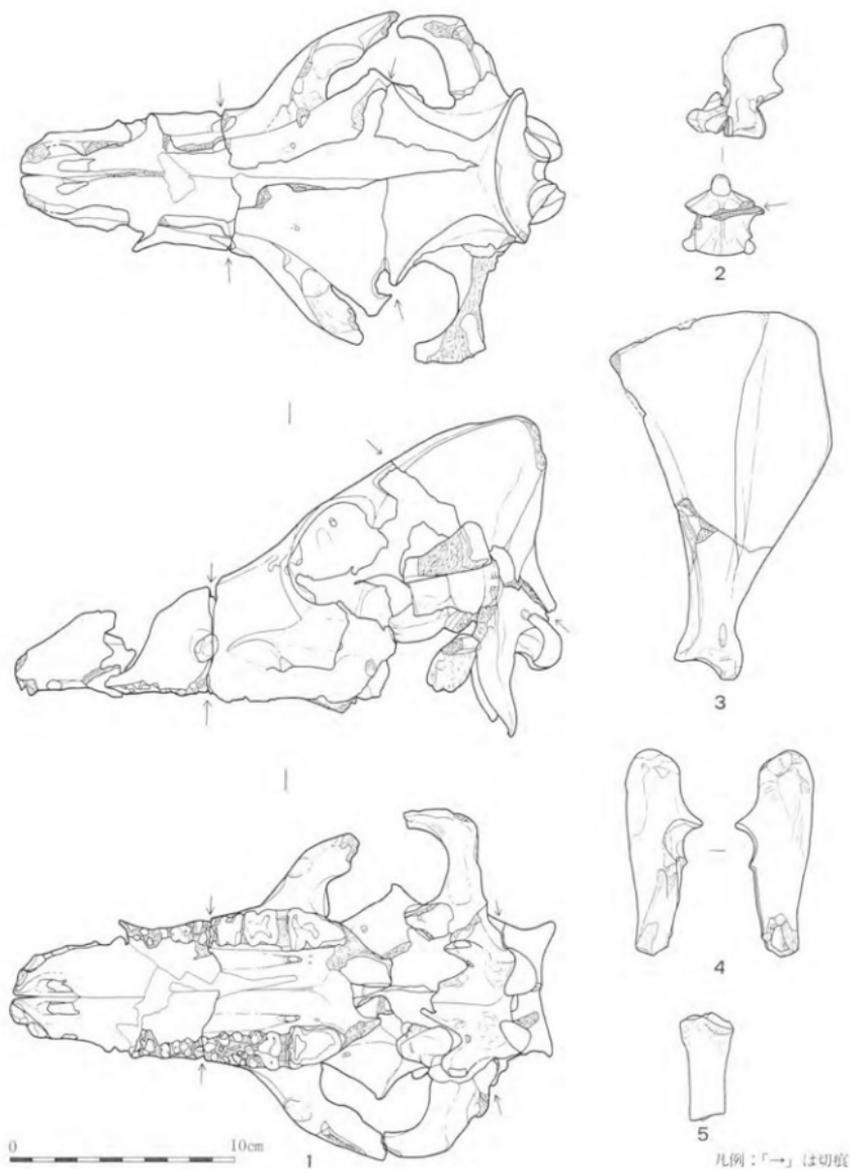
小 結

本遺跡は前期喜友名貝塚形成期のものとしてリュウキュウイノシシがあり、魚骨も含まれると思われた。近世あるいは現代の資料としては魚骨の出土が格段に多いからである。しかし明確に数量を確定することはできなかった。

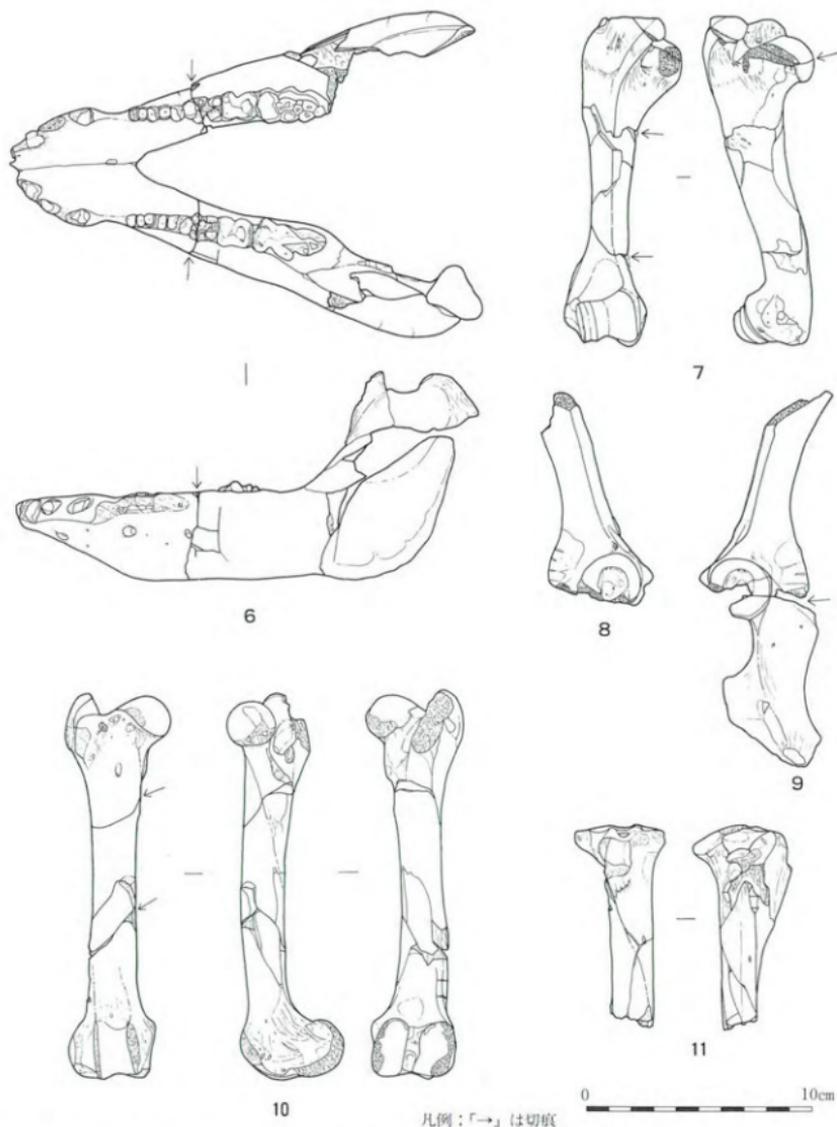
ニワトリ、ブタ、ウシの骨格の多くは近・現代のものである。多数の骨の出土はこの時期の特徴である。ブタについては壺中に入れられた頭蓋骨、四肢骨が目される。頭蓋を供献したような状況での出土例はこれまでも報告したことがあるが、壺中の出土例ははじめてである。破損していた頭蓋、四肢骨は原型に復すことができ、切断の状況を観察することができた。通常の出土ではこうした修復は不完全なものに終わらざるを得ないことが多いが、この資料ではほとんど完全な状態で観察することができた。そしてこれらが何等かの調理に使われた後に集められて壺中に納められている点が興味深いことである。単なるブタの供献でなく、調理された料理があり、さらにその後に骨も集められるという入念さに、動物への思いの強さを感じるのである。

参考文献

- ・金子浩昌「伊波仲門中墓出土のブタの遺存体」『吉我地原内古墓』沖縄県教育委員会 1987年



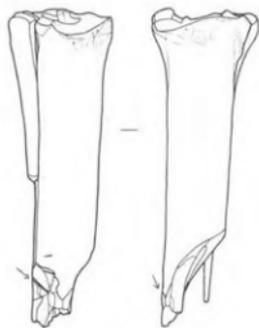
第76図 壺の中ブタ (1) 1、頭骨 2、軸椎 3、右肩甲骨 5、右尺骨



第77図 壺の中ブタ(2) 6、下顎骨 7、右上腕骨 8、右寛骨 9、左寛骨 10、右大腿骨 11、右脛骨



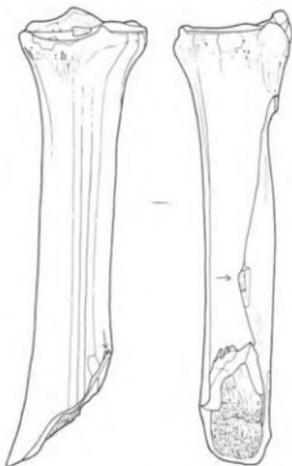
1



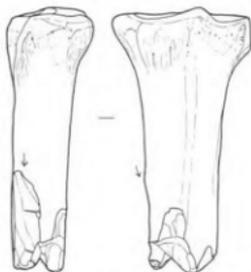
2



3



5



4

0 10cm

凡例：「→」は切底

第78図 切痕 ウマ (1、右脛骨 骨体~遠位端 2、左中足骨 近位端)
ウシ (3・4、左中手骨 近位端 5、中足骨 近位端~遠位端)

第41表 サメ出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	骨椎骨	1	E-27	遺構1		上面
地	区	右	1	F-12	遺構4		
		左	1		不明		1層

第44表 ウミガメ出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	右	1	F-9	2層	0/5	
		左	1	G-17	2層	5/10	

第50表 イヌ出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	右	1	F-9	2層	0/5	
		左	1	G-42	2層	0/20	

第43表 リクガメ出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	背甲板	1	F-10	2層	10/15	
			2	15.167寸	1層		
			1	F-9	遺構12		
			3	G-17	2層	5/10	
			2	F-12	遺構4		
			2	F-9	2層	0/5	
			1	E-10	2層	0/5	
			1	G-11	1層		
			1	G-11	遺構1		
			1	G-11	遺構1		

第45表 トリ出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	区	1	G-17	2層	5/10	

第46表 カラス出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	区	1	F-9	2層	5/10	

第47表 ニワトリ出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	右	1	H-17	2層		下部
			1	G-17	遺構1		
			1	E-10	遺構3		
			1	E-10	遺構3		
			1	G-43	2層	20/40	
			2	G-44	W-9内		
			1	G-44	W-9内		
			1	F-45	2層	0/5	
			1	G-42	遺構2		
			1	G-42	遺構2		
II	地	右	1	F-46	2層	0/10	
			1	G-42	2上		
			1	G-42	遺構2		
			1	H-43	2層	40/50	
III	地	左	1	H-61	B		
			1	H-61	B		
			1	G-56	3層	0/10	
			1	G-56	3層		

第48表 ヒト出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	右	1	F-9	2層		下部
		左	1	E-10	2層		
		中	1	15.167寸	1層		

第62表 不明出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	区	1	G-17	2層	5/10	
		左	1	H-44	2層	0/5	
		右	2	G-60	B	1層	

第49表 ネズミ出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	区	1	G-17	遺構1		
		左	1	G-11	遺構1		
		右	1	G-43	W		内

第52表 ジュゴン出土状況一覧

地区	R/L	部位	個数	フリスト	層位1	層位2	層位3
I	地	区	1	F-12	遺構2		
		左	1	F-17	2層		下部
		右	1	F-10	2層	10/15	
		不明	1		1層		
		破片	1		1層		

第Ⅴ章 結 語

前章までに今回の発掘調査成果の概要について述べてきた。ここでは今一度整理するとともに、若干の課題点についてふれ結びとしたい。

今回の調査は宜野湾北中城線（伊佐～普天間）の改築工事が契機となり実施したもので、喜友名貝塚、喜友名グスク、喜友名ガーへの石置道、喜友名山川原古墓群、伊佐前原古墓群、伊佐前原第1遺跡の6遺跡が対象となっている。今回報告したのは喜友名貝塚、喜友名グスクの調査成果であり、調査対象地区は現道路に沿った南北約15m、東西約250mである。

調査地区がかなり長く、便宜的に東側からⅠ～Ⅲ地区とした（第3図）。Ⅰ地区は最も東側の地区で、もともと小高い丘陵の地形を呈していたものとみられる。西側に続くⅡ地区は最も凹地になった所で、小さな排水溝を隔てたⅢ地区はⅡ地区より若干高くなっている。発掘調査の結果、Ⅰ地区は沖縄前Ⅳ～Ⅴ期の時期とグスク時代が重複すること、Ⅱ地区は近世～近代の時期が主体であること、Ⅲ地区はグスク時代を主体に近代の時期まで利用されていることが確認され、それぞれの地区の主体的な時期が異なることが判明した。

地区別の状況を細かくみるとⅠ地区は現道路の工事や基地建設の際に大きく破壊されたものとみられ、一帯は岩盤を削るほどの擾乱を受けている。本地区は南側へ緩傾斜を示していたようで、東南側の小範囲にみられる堆積土の部分に沖縄前Ⅳ後半～Ⅴ期の時期の包含層が確認され、その下層の赤土地山面に同時期の集石遺構や焼土面なども検出された。さらに、場所によってはこれらの包含層や遺構を掘りぬいてグスク時代のピットも確認された。つまり、本地区は沖縄前Ⅳ～Ⅴ期の時期とグスクの時期の遺跡が重複していることが確認された。

沖縄前Ⅳ後半～Ⅴ期の包含層や遺構は本区の東南側（E・F-9～12グリッド）で、また、西側のF-36グリッドでは沖縄前Ⅳ期前半に属すとみられる堅穴遺構が検出されている。グスク時代のものとみられるピット群や土壌はこれら沖縄前Ⅳ～Ⅴ期の遺構が検出された場所のほか、本区の中央付近でも検出されている。それからすると、小高い丘の裾部一帯に古い時期の生活空間があり、グスク時代にはそこも含めた丘一帯を取り込んでいたことが窺える。

本区東南側で検出された沖縄前Ⅳ～Ⅴ期の遺構をみると、集石遺構（略長方形を呈し堅穴状）が10基、その周辺部にみられる焼土やピット群などがあり、全体的な状況からすれば集落の可能性が想定される。集石遺構の中には床面とみられる場所に焼土面が検出されているもの（第5図）や第60図31に示す大型の石皿が出土しているものなどがあり注意されよう。この時期の集落遺跡である宮城島のシメグ堂遺跡（註1）、高嶺遺跡（註2）などの例からすると、現道路から集落側へ展開していたものとみられるが、道路建設などの開発で旧来の地形が大きく変容し、当時の集落跡が残されている可能性は少ないものと思われる。

また、西端部の赤土部で検出された堅穴遺構は注目される。堅穴内からの出土土器は伊波式がほとんどのようであり、沖縄前Ⅳ期前半の時期の堅穴遺構とみられて間違いないさうである。この時期の堅穴遺構の検出例は石川市の古我地原貝塚（註3）などがあるものの、それほど多くない。この堅穴遺構は地山面まで削られた傾斜面で検出されており、東側の壁は本来の高さに近いものとみられるが、西側の壁は低くなっている。つまり、堅穴の上部は削り取られたものとみられ、かろうじて開発を免れた部分が残ったものである（第8図）。仮に、この堅穴遺構がこの時期の集落の一端を示すのであれば、検出されたレベルからして、現道路下からも同様な堅穴遺構が検出される可能性があろう。

次にグスク時代の遺構についてみよう。本区には喜友名グスクが位置していたことが知られており（註4）、基地の中の崖側には石積みも確認される。しかし、現道路の建設や基地内の住宅建設などにより大きく破壊されている。発掘当初は本グスクの石垣囲いの推定図（註5）と重なる場所からの根石の検出も期待されたが、琉球石灰岩の岩盤をも削り込むほどの造成を行っており、根石とみられるもの確認はできなかった。しかしながら、部分的に検出されたピット群や土坑などからグスクの様子を垣間見ることができている。

検出されたピット群は一帯の造成工事からかろうじて残ったものが多く、中央部付近のピットは浅いものを中心であった。しかし、東南側のピットでは根石とみられる石を周囲に入れ、深さが40cm程のものもいくつかみられ、また、直径が60cmを越すような大きなものも確認されている。前者のものは平面プランを掘りまわすには至らなかったが、後者のものは方形状をなす4本柱になるかとみられた（第5図）。倉庫のようなものが想定され、根石のあるピット、約2m四方の方形状の土坑などからすると、この一帯はグスクの中でもなんらかの意味を持つ

た場所のひとつであったかと考えられる。また、本区西側の岩盤が途切れる場所で確認された土坑（第5図）の中に窯壁かとみられる真っ赤に焼けたレンガ様の破片が廃棄されたように集中してみられ、なんらかの生産活動の痕跡を示すものとして注意されよう。

Ⅲ地区におけるグスク時代のピット群の検出などからするとグスク時代には比較的広い範囲に展開しており、その中心に本グスクがあったのであろう。崖下には豊富な水脈（喜友名ガ）もあり、場所的にも好条件であったかと想定される。戦後の開発により壊滅的な破壊を受け、グスクの全体像が掴めないのは残念である。

Ⅱ地区は東側から西側へ緩やかな傾斜を示し、現道路より3m近く下がった場所である。検出された遺構や出土遺物からするとグスク～近代の時期に形成された場所ようである。ウワーフルと呼ばれる豚小屋跡（第16図）、その東側にみられる畑跡などはこの場所が利用された状況を彷彿させる。古老からの聞き取りによるとフルは戦前ウィザトヤーの所有であり、その家はⅢ地区のサーターヤー（砂糖小屋）跡で使用する鉄鍋を創業開始まであずかる役割もになっていたとのことである。

さらに、117枚の本土産磁器（碗31個・小碗23個・小杯41個・皿22個）と中国産の染付皿1個が左右に分けられるように検出されている。左側に碗を中心に34個、右側に小碗・小杯など84個が伏せて重ねられており、一括廃棄というよりは隠すという意味合いが強いとみられる。この本土産磁器集中部の北西側に近接して出土した沖縄産無釉陶器の壺（第77図45）の中には、ほぼ1個体分の切断されたブタ骨が入っていた。フルの造りなどとともに当時の状況を窺わせるようで興味深い。

また、南側（道路側）にみられる石列や集石部などの遺構（第13図）は、現道路下に展開していくようで、全体的な状況は判然としなかった。下層の地山面に掘り込まれた略東西方向の溝（第14図）、西端部で検出された拳大の石灰岩がまった溝（第17図）など調査対象地区外へ延びており、全体的な様子は掴めなかった。特に、前者の溝は集積部でピット群が検出されるなど性格の判然としにくい部分もあり、さらに検討していくべきものであろう。いずれも、堆積土からはグスク系土器や輸入陶磁器などが出土しており、わりと古い時期から使用されていた可能性も考えられる。

Ⅲ地区は調査の結果、グスクから近代にかけて利用されたようである。北側は琉球石灰岩の岩盤が露出し、南側に石灰岩風化土の赤土が広がる。前者の部分にはサトウキビの汁を煮詰める窯があり、その部分は真っ赤に焼けて、岩自体も脆くなっていた。その東側にはそれに付随する施設かとみられる溝が東側へ延びて検出された。後者の部分には黒褐色の未擾乱層が堆積し、出土遺物からグスク時代のものかと考えられる。その下層は地山の赤土になり、その上面で無数のピット群が検出された。

これらのピット群の中から積極的に平面プランを確認してみたところ、第21図に示した3つの4本柱の建物が想定できた。大きさは建物1が2.3m×1.4m、建物2が2.2m×1.8m、建物3が2.2m×2.2mである。いずれもそれほど大きくはない。後兼久原遺跡（註6）報告のものと同様な性格を有する可能性もあり、集落の様子を窺う上で注意されよう。ピット群の検出レベルからすると、現道路下にも広がるようであり、ピット群が残存する可能性は高いものと考えられる。

本区の出土遺物を見ると滑石製石鍋の破片や南島須恵器など12世紀前後の古手の遺物も得られている。最近、那覇市のヒヤジョー毛遺跡（註7）の報告例のように注目される時期の遺跡であり、現道路下に広がるものとみられることなどから、注意しておく必要がある。また、近接する喜友名グスクとの関わりなど、付近一帯に目をむけ、全体的な状況の検討も重要な課題である。

註

註1. 金武正紀・比嘉春美他【シラキ堂遺跡—第1・2・3次発掘調査報告—】 沖縄県教育委員会 1985年

註2. 金武正紀・金城亀信・鳥袋春美【高嶺遺跡】 沖縄県教育委員会 1989年

註3. 金武正紀・鳥袋 洋・島弘 【古我地原貝塚】 沖縄県教育委員会 1987年

註4. 當眞嗣一【ぐすくグスク分布調査報告書（1）沖縄本島及び周辺離島】 沖縄県教育委員会 1983年

註5. 【喜友名遺跡群】 宜野湾市教育委員会 1984年

註6. 【後兼久原遺跡展】 北谷町教育委員会 1997年

註7. 金武正紀・城間千栄子【ヒヤジョー毛遺跡】 那覇市教育委員会 1994年

图 版



図版1 喜友名貝塚・グスクの航空写真



a区 発掘途中での遺構検出状況
(南西側から)



a区 完掘状況
(北東側から)



b区
(南側から)

図版2 I地区



c・d区 完掘状況
(北東側から)

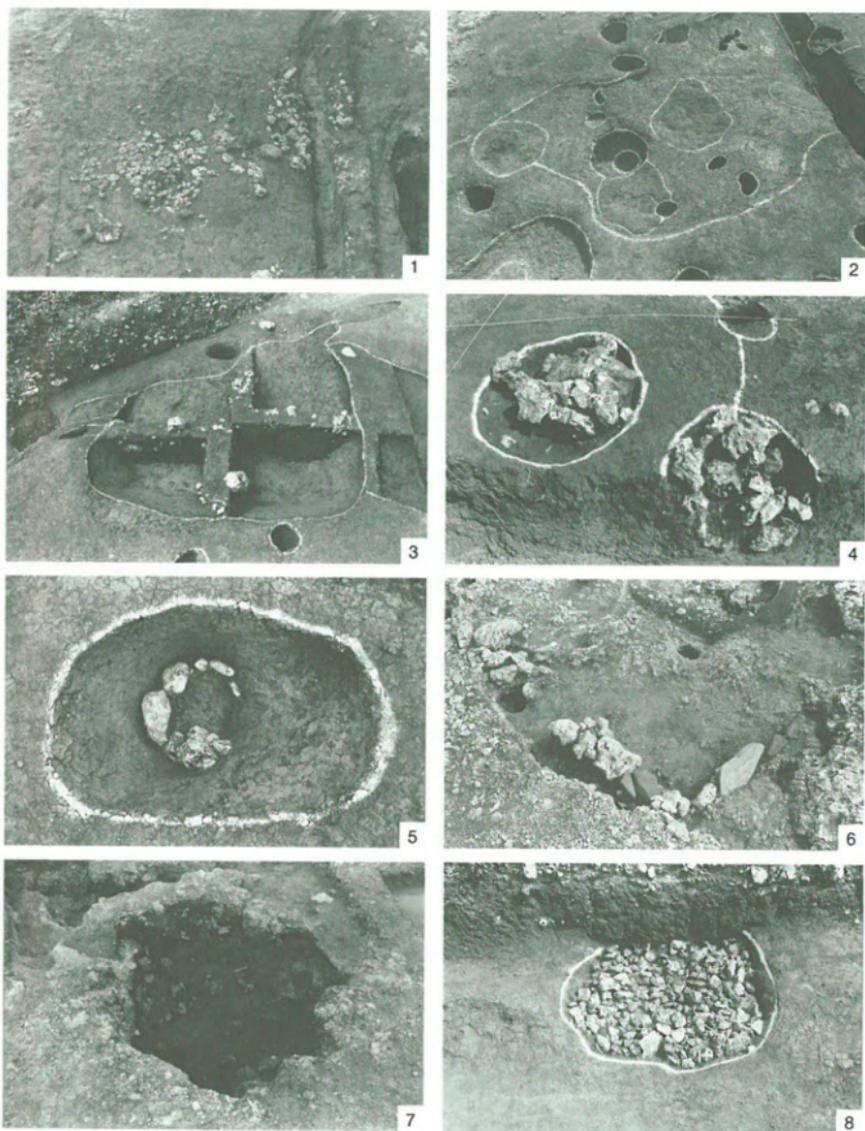


d区
(北東側から)



d区 竪穴式住居[F36;3]
(南側から)

図版3 I地区



図版4 I地区 1,2.集積遺構[F12;4](北東側から) 3.土壇[E10;3](北側から) 4.[F11;9・10](北西側から) 5.[F9;4](南東側から)
6.[G17;2]内石列(南側から) 7.[E27;1]内焼土面(北西側から) 8.集積土壇[E36;1](北西側から)



遺構全景
(東側より)

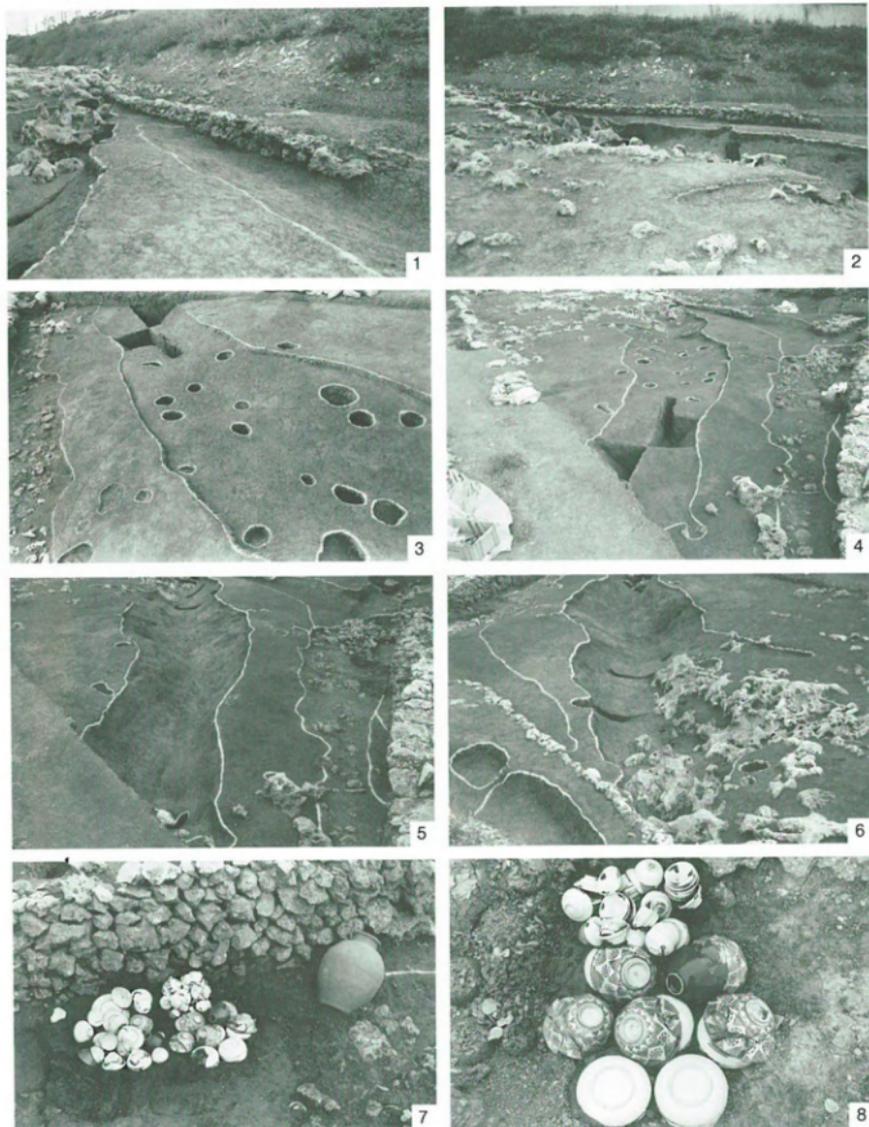


遺構全景
(西側より)



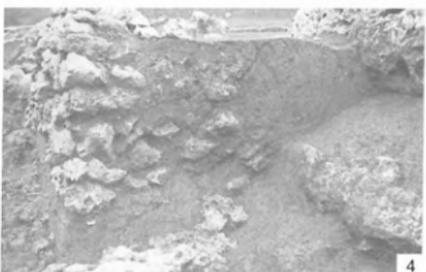
層序
(道路側法面)

図版5 II地区



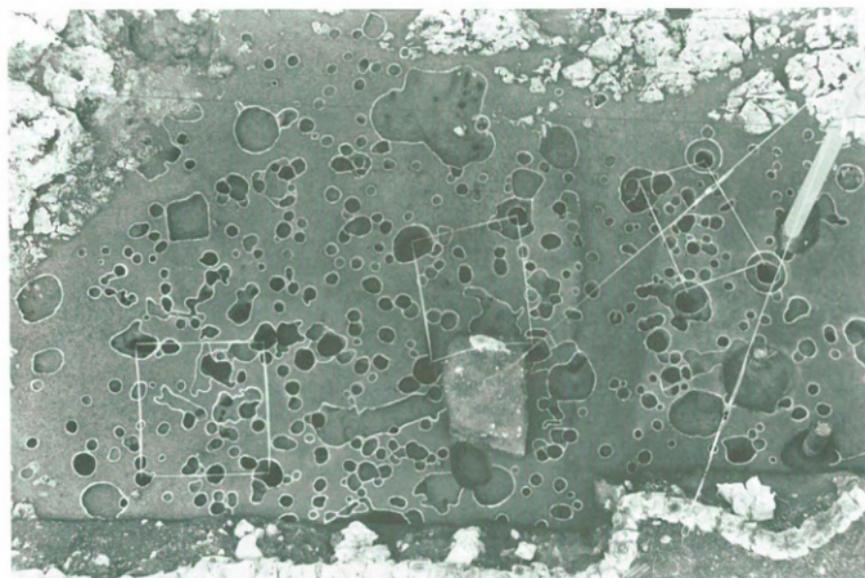
図版6 II 地区遺構検出状況

1.2.石列及び石溜り 3.溝No1のピット群(南側より) 4.溝No1のピット群(北側より) 5.溝No1の完掘状況(南側より) 6.溝No1の完掘状況(北側より) 7.本土産磁器集中部及び甕焼の壺 8.本土産磁器集中部の小杯出土状況



図版7 II地区遺構検出状況

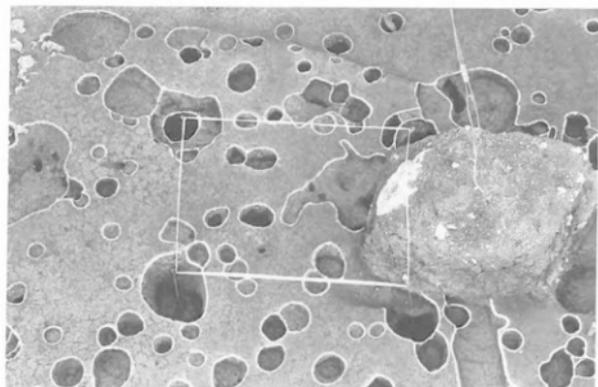
1. フール跡の完掘前及び畑跡(写真手前) 2. フール跡(正面より) 3. フール跡(側面より) 4. フール跡の石積み断面 5. 溝No2完掘前(東側より) 6. 溝No2完掘後(北側より) 7. 溝No2層序(A-A') 8. 溝No2層序(B-B')



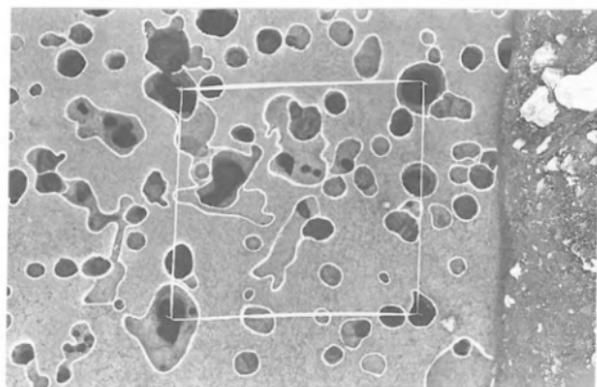
図版8 Ⅲ地区 上：完掘状況 下：想定プラン



想定プラン1
(西側から)



想定プラン2
(西側から)



想定プラン3
(西側から)



1



2



3



4



5



6

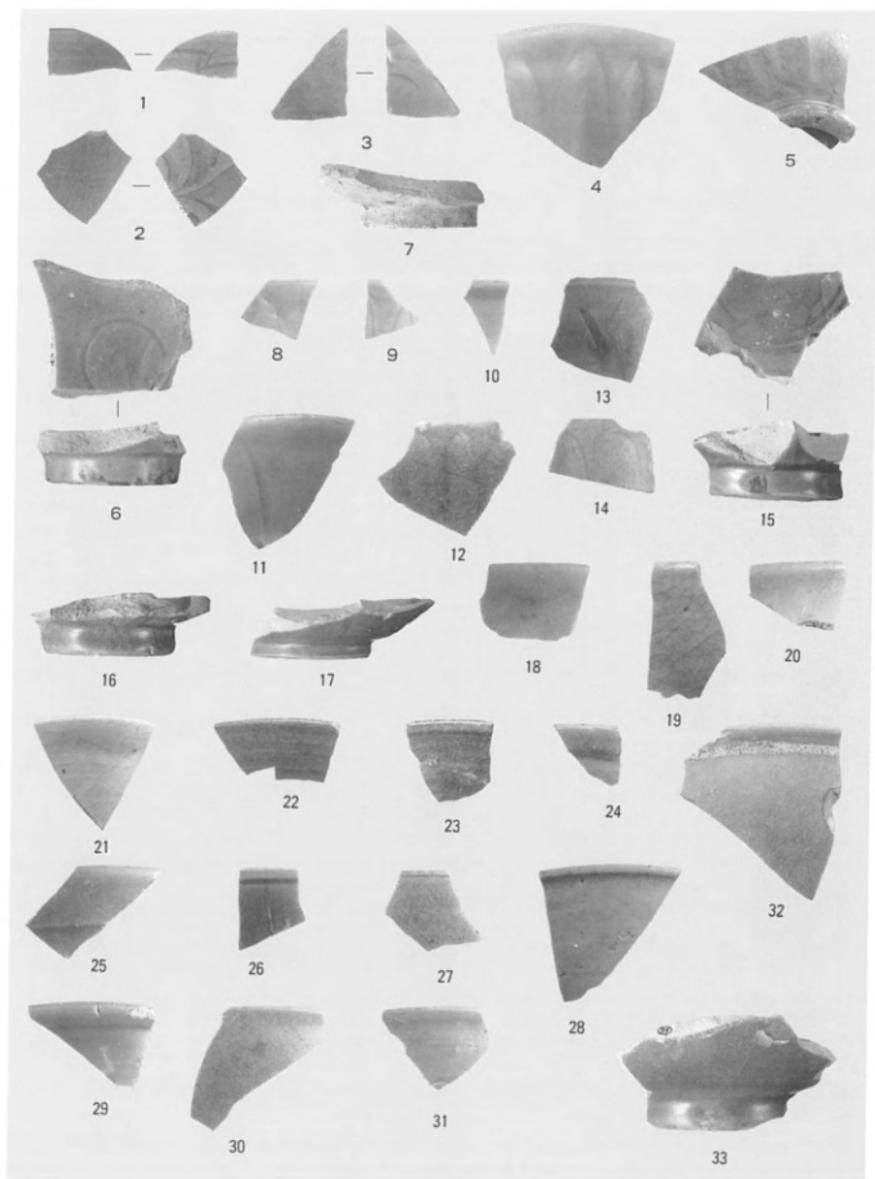


7

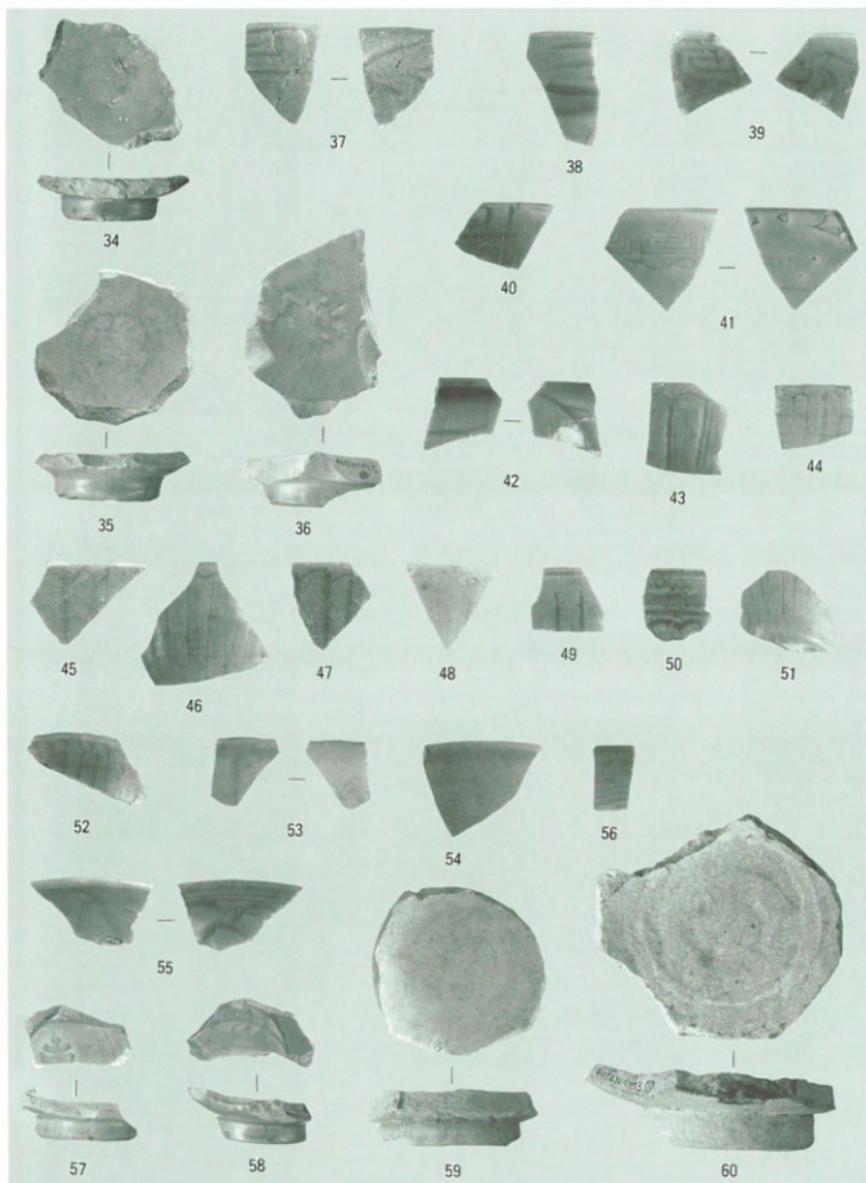


8

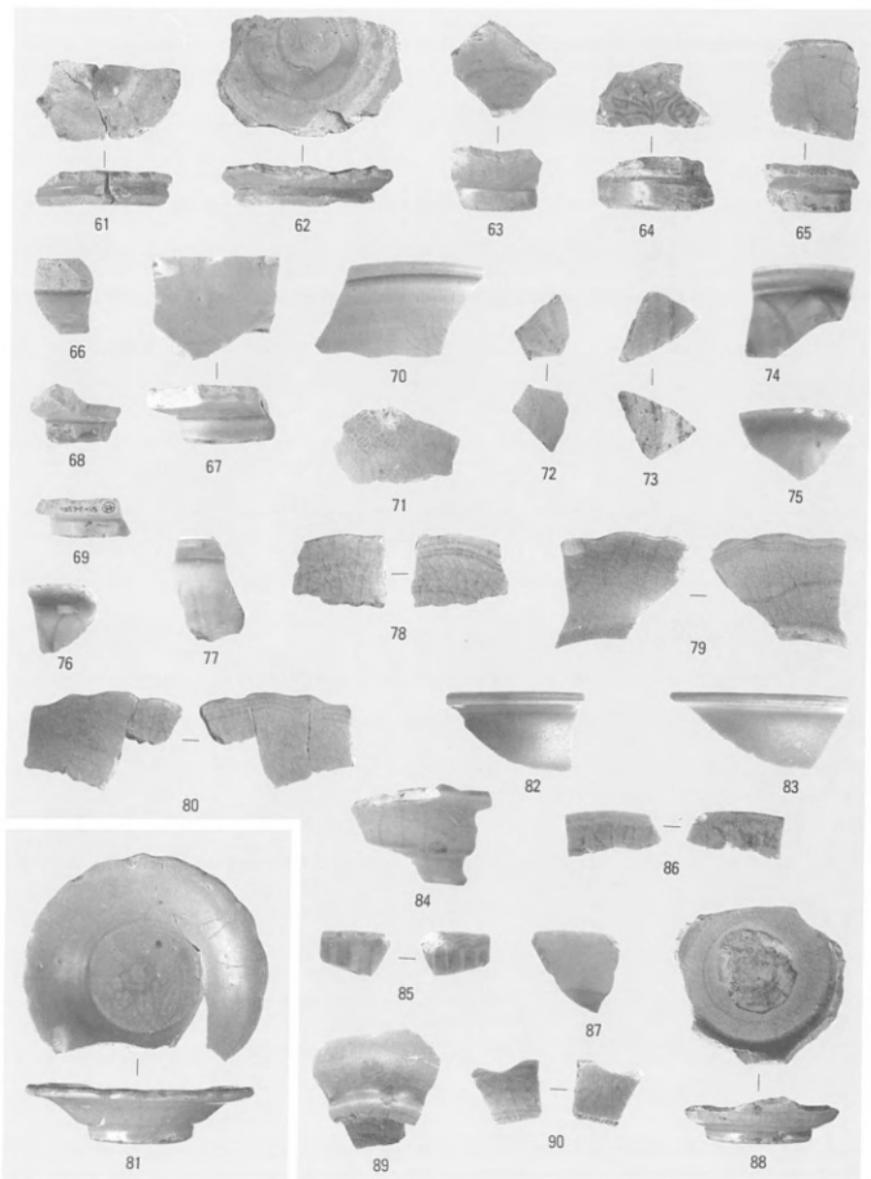
図版10 III地区 1.牛骨検出状況 2.サターヤー(砂糖小屋)全体 3.サターヤー(南側から) 4.サターヤー 炭・灰溜り 5.排水溝状石列全体(北側から) 6.石列下の造成状況 7.石列(近景) 8.岩盤發り部



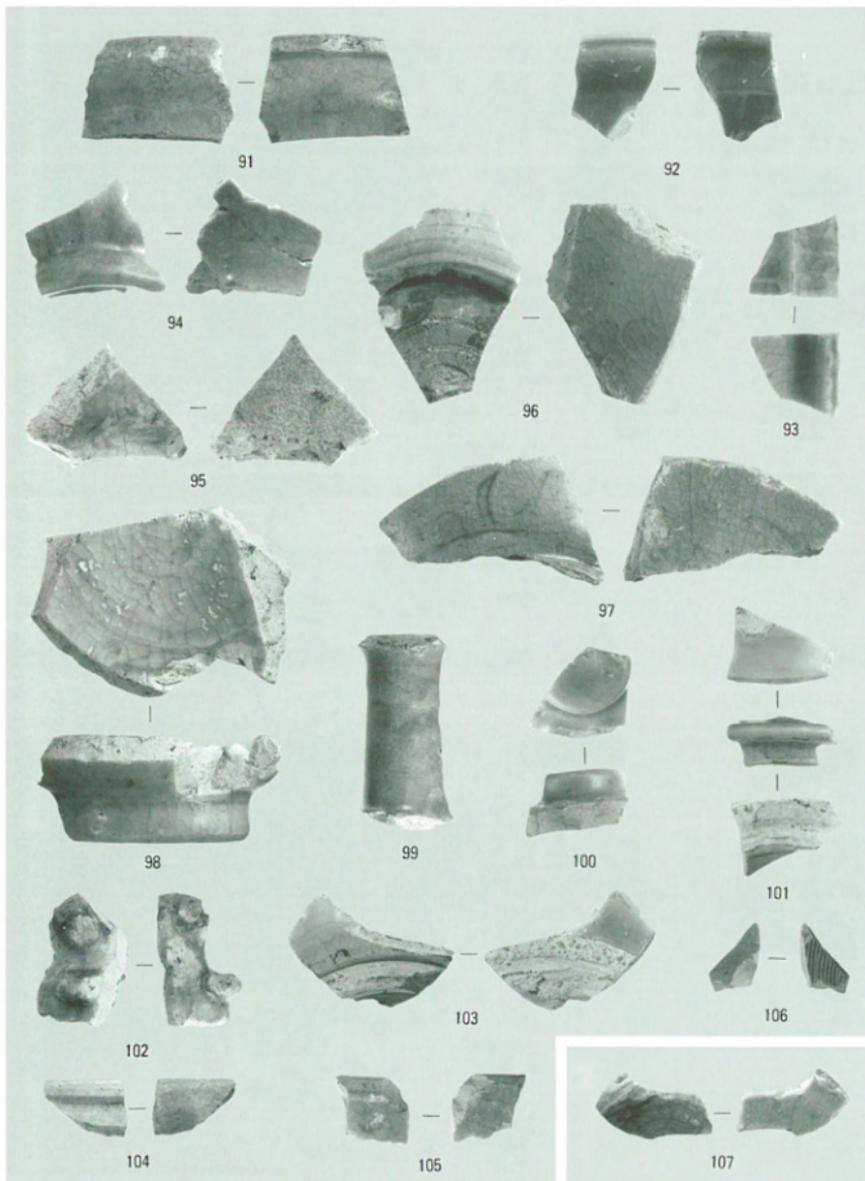
图版11 青磁 1



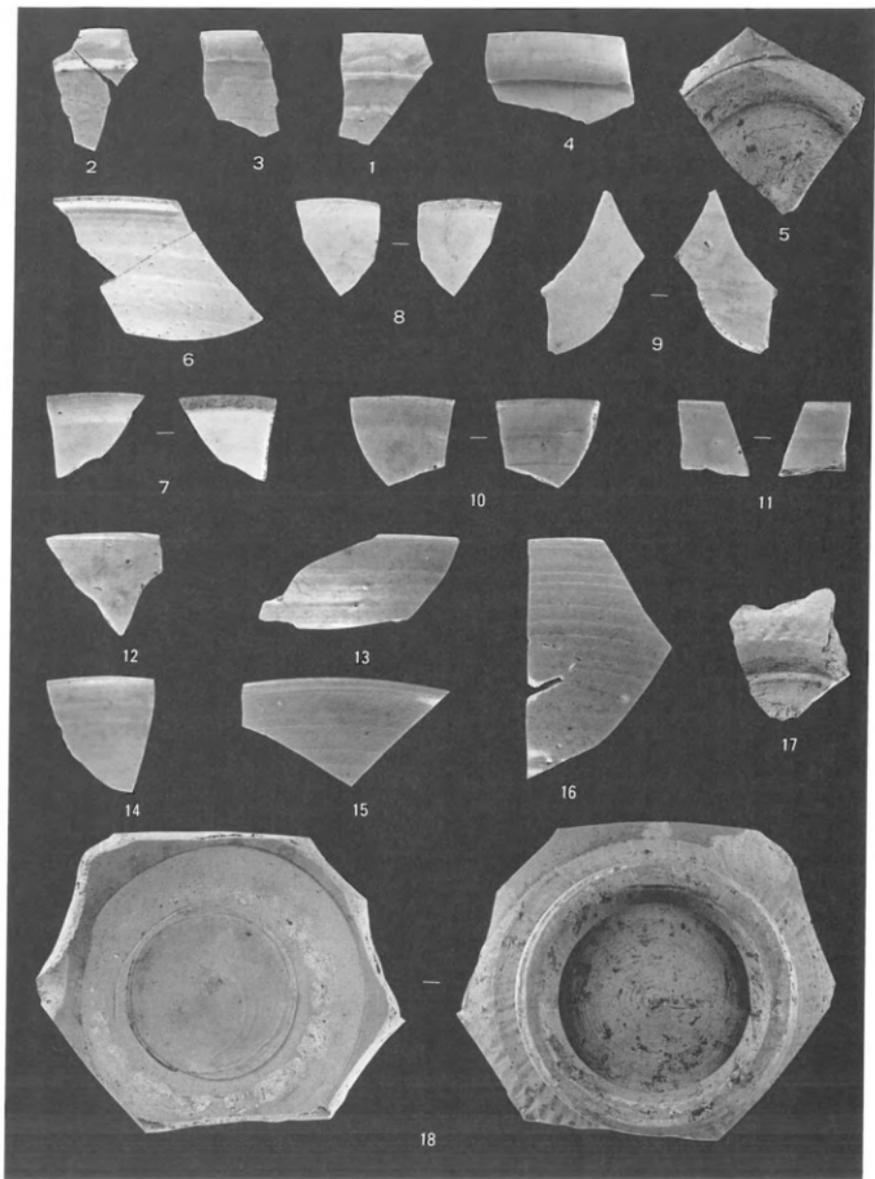
图版12 青磁2



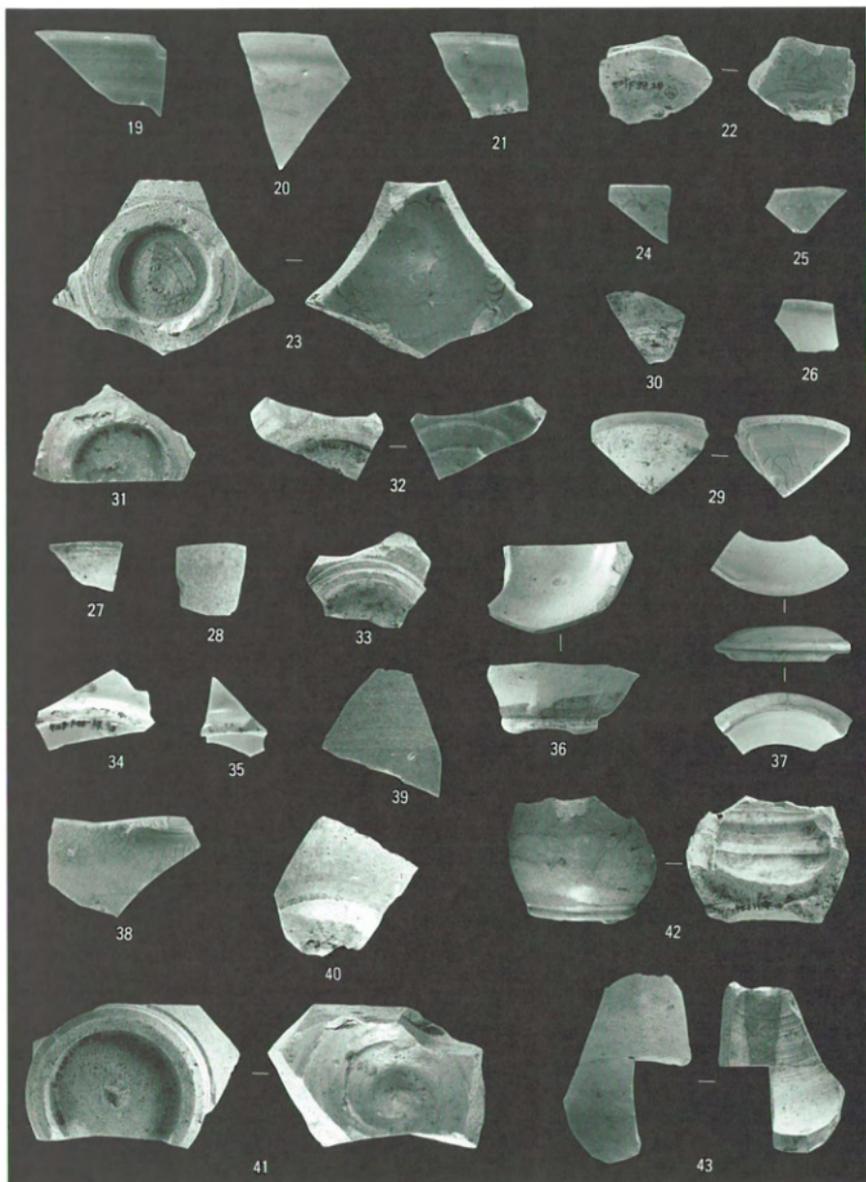
图版13 青磁3



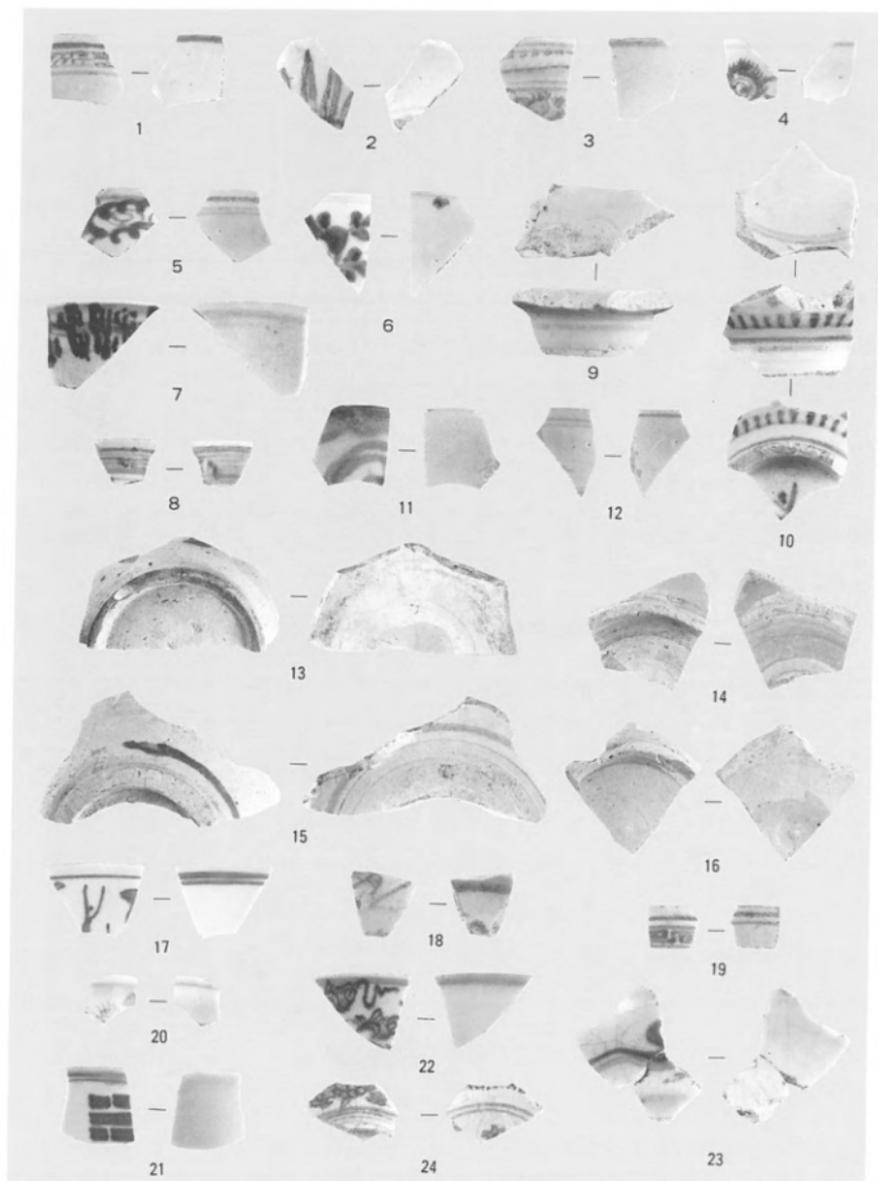
図版14 青磁4・ベトナム青磁



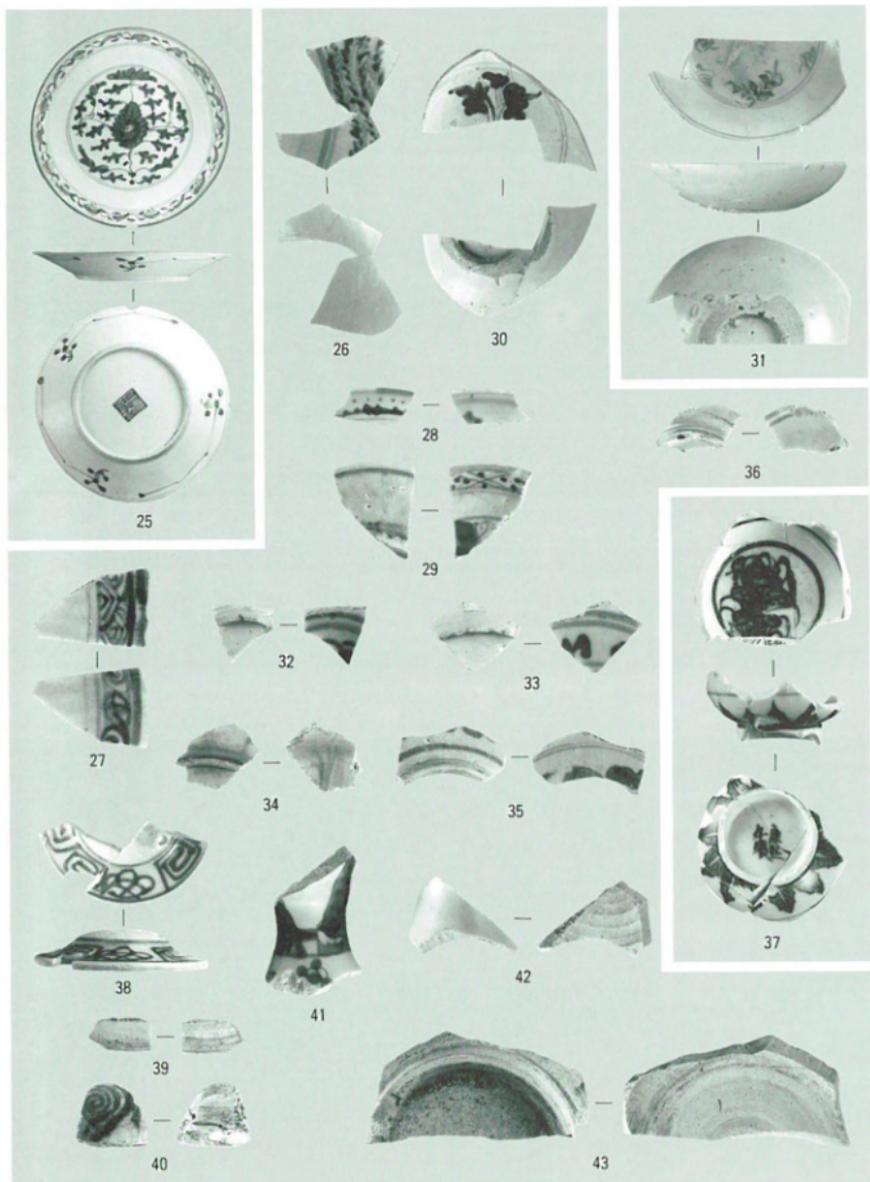
图版15 白磁 1



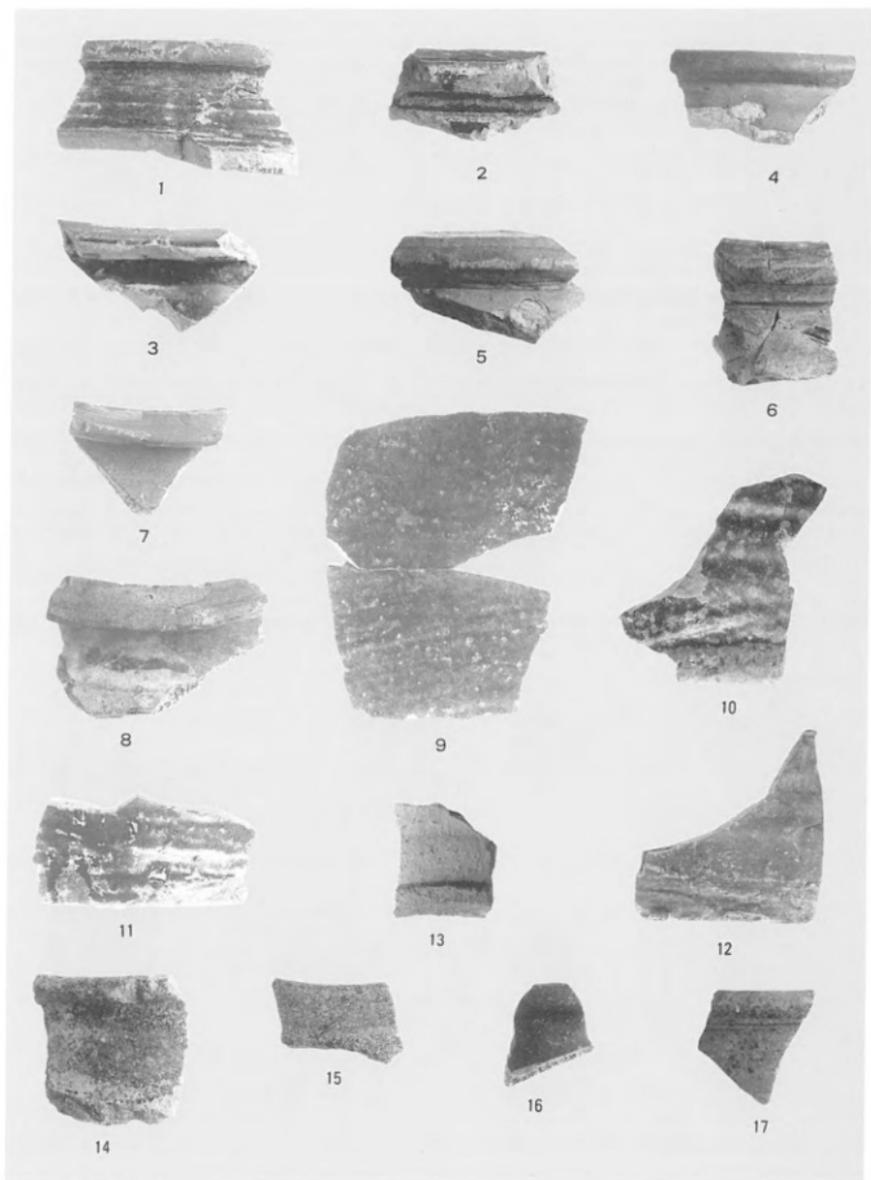
图版16 白磁 2



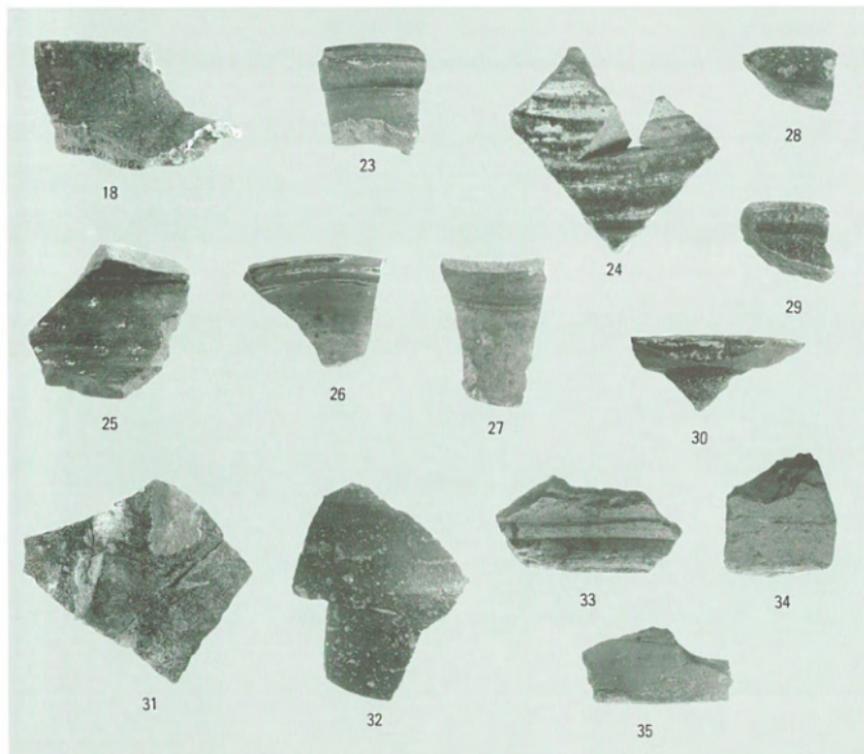
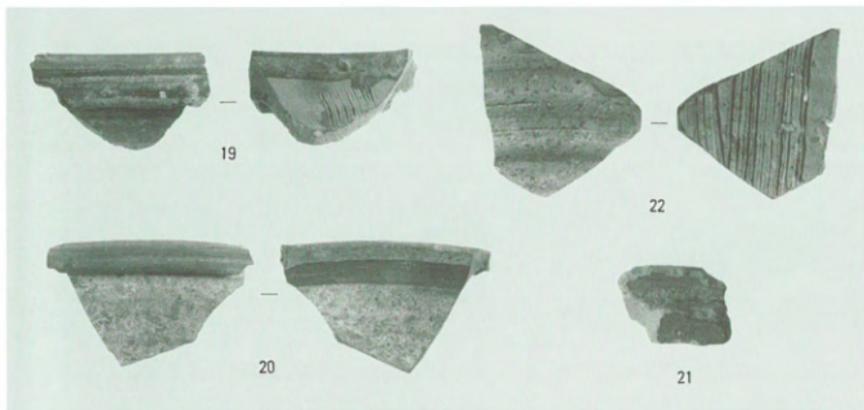
图版17 染付 1



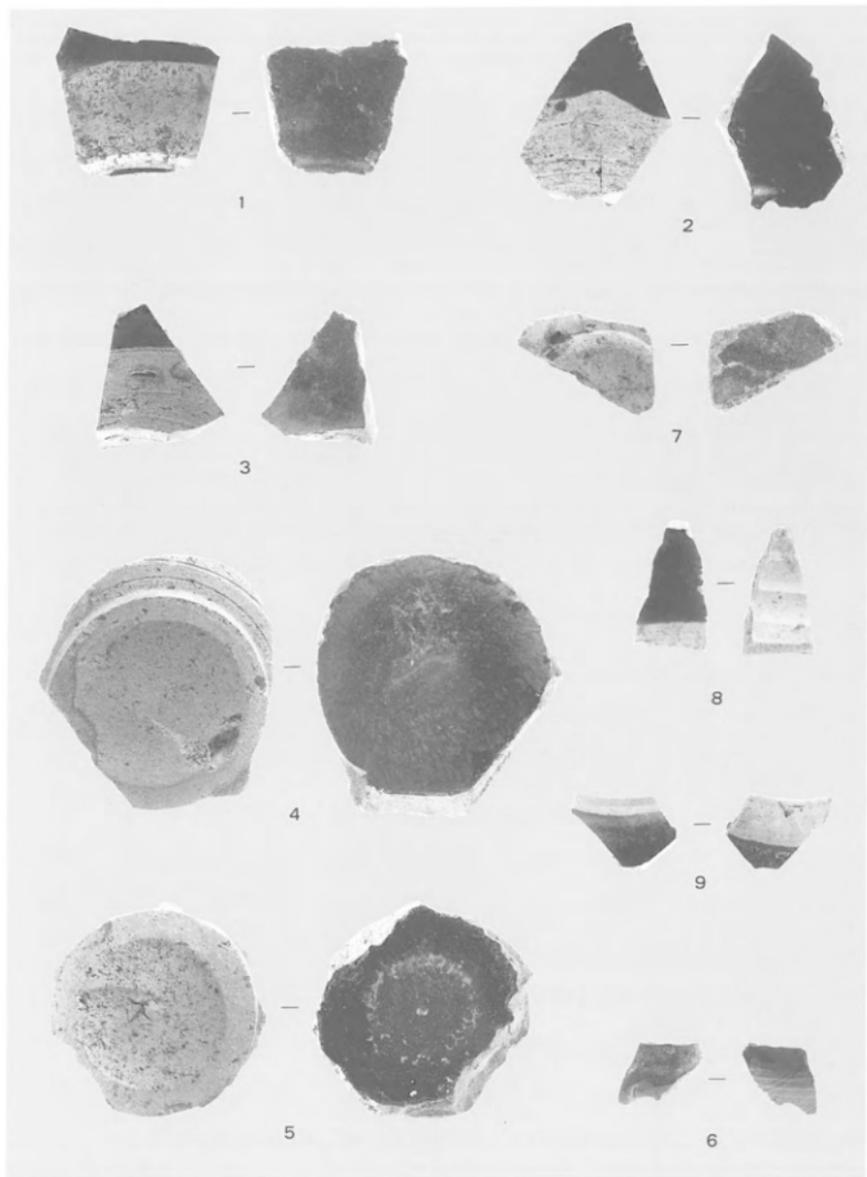
图版18 染付2



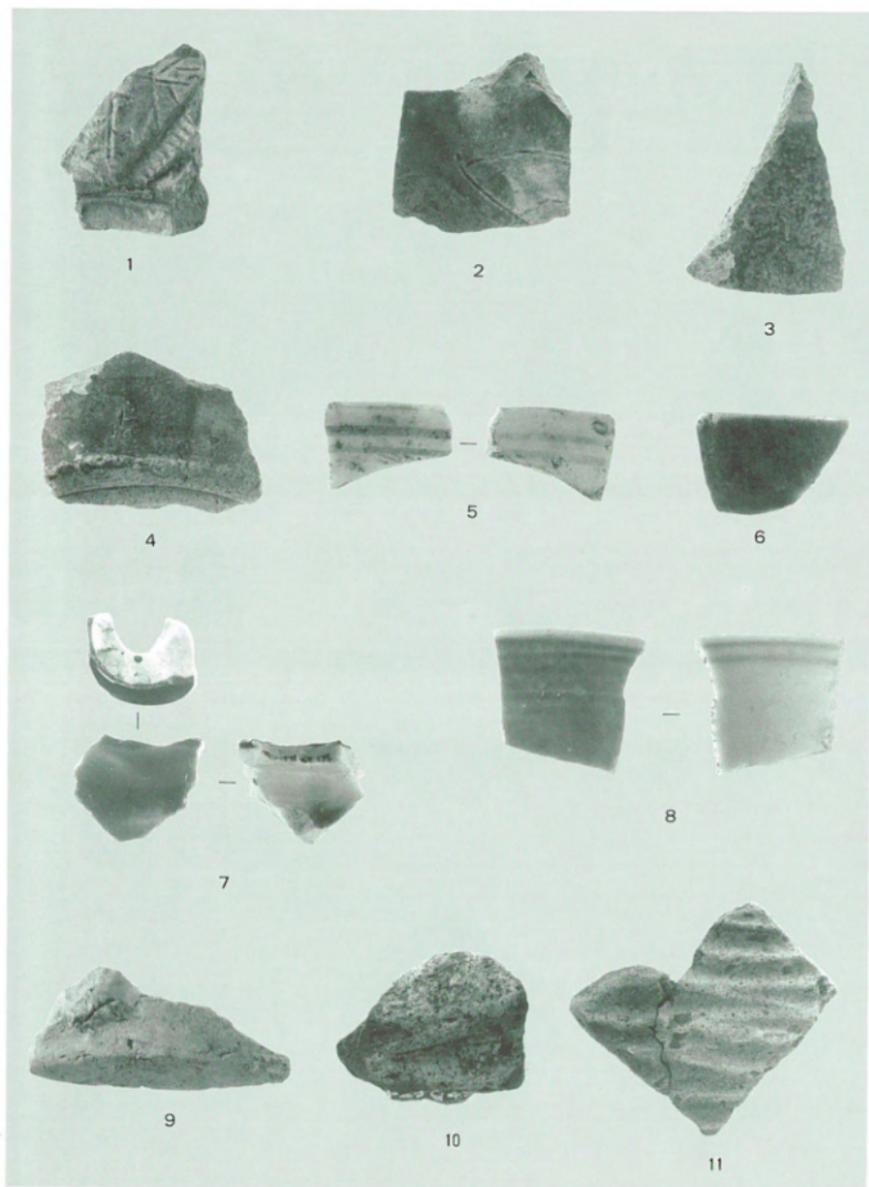
图版19 褐袖陶器 1



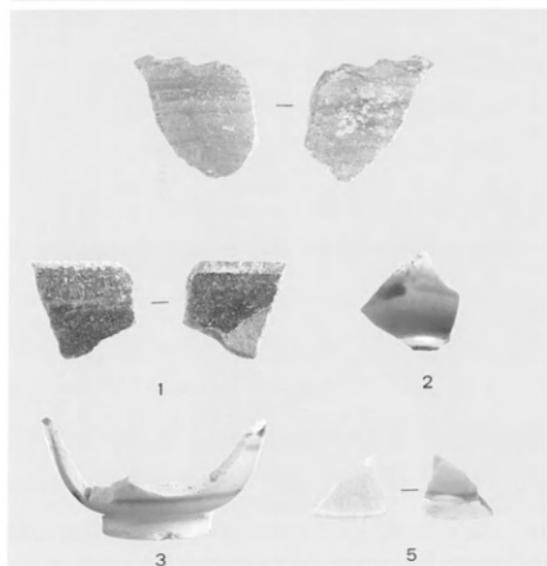
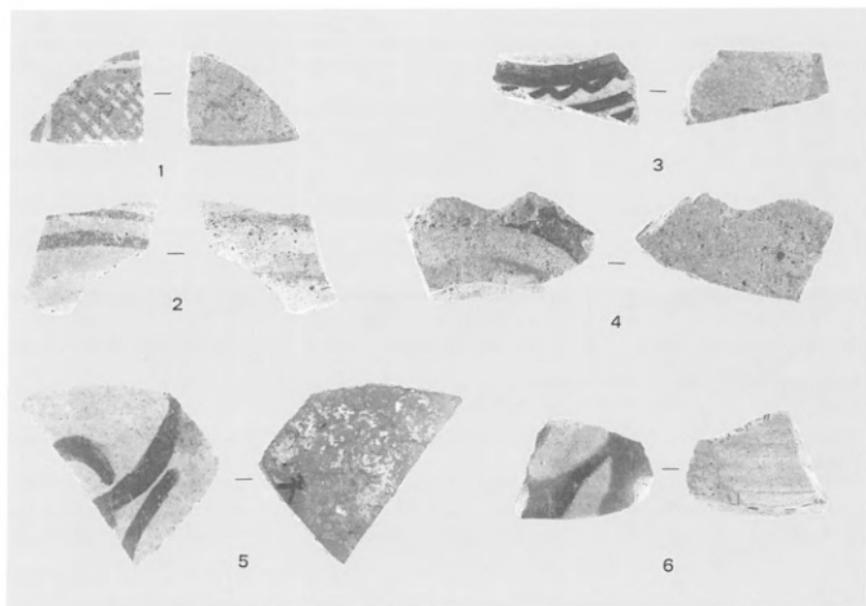
图版20 褐釉陶器 2



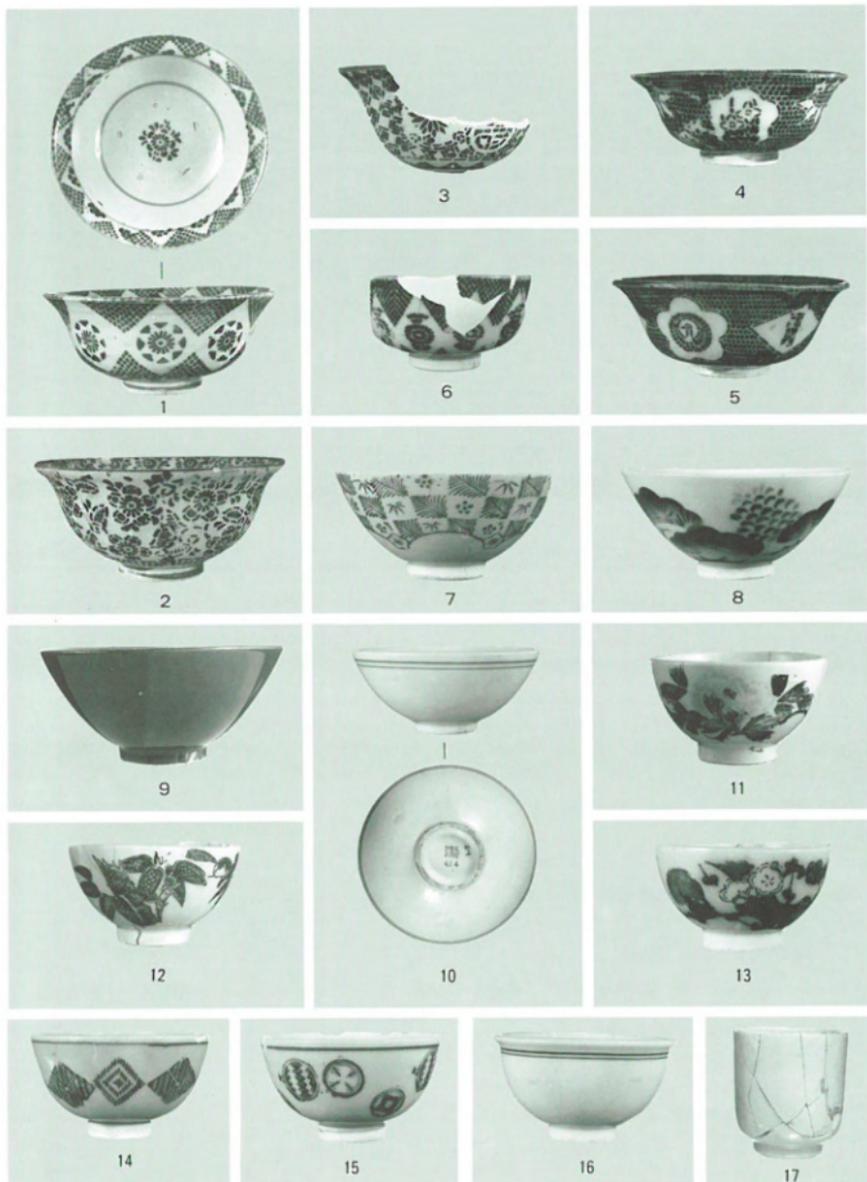
图版23 黑釉陶器



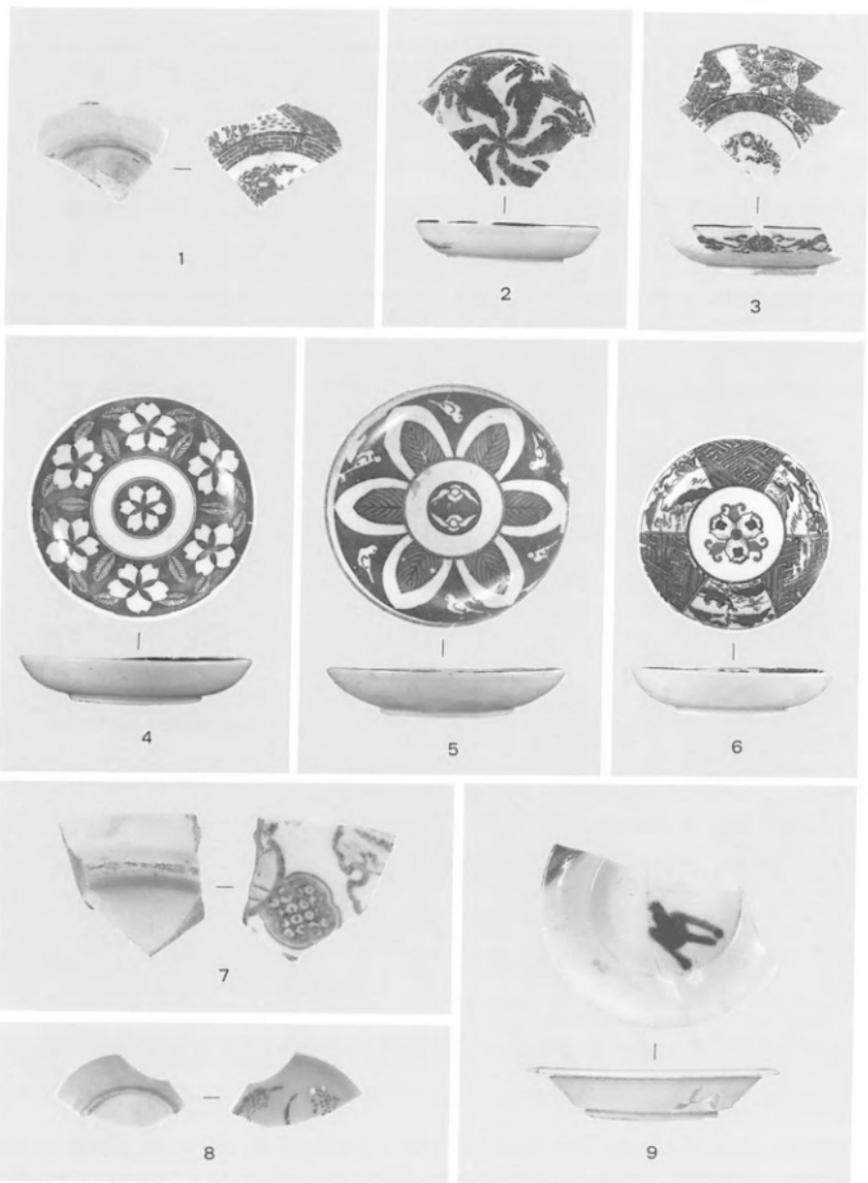
図版24 三彩・色絵・瑠璃釉・鉄釉染付・白釉陶器・タイ産半練



図版25 上：鉄絵 下：備前・本土産陶磁器 1



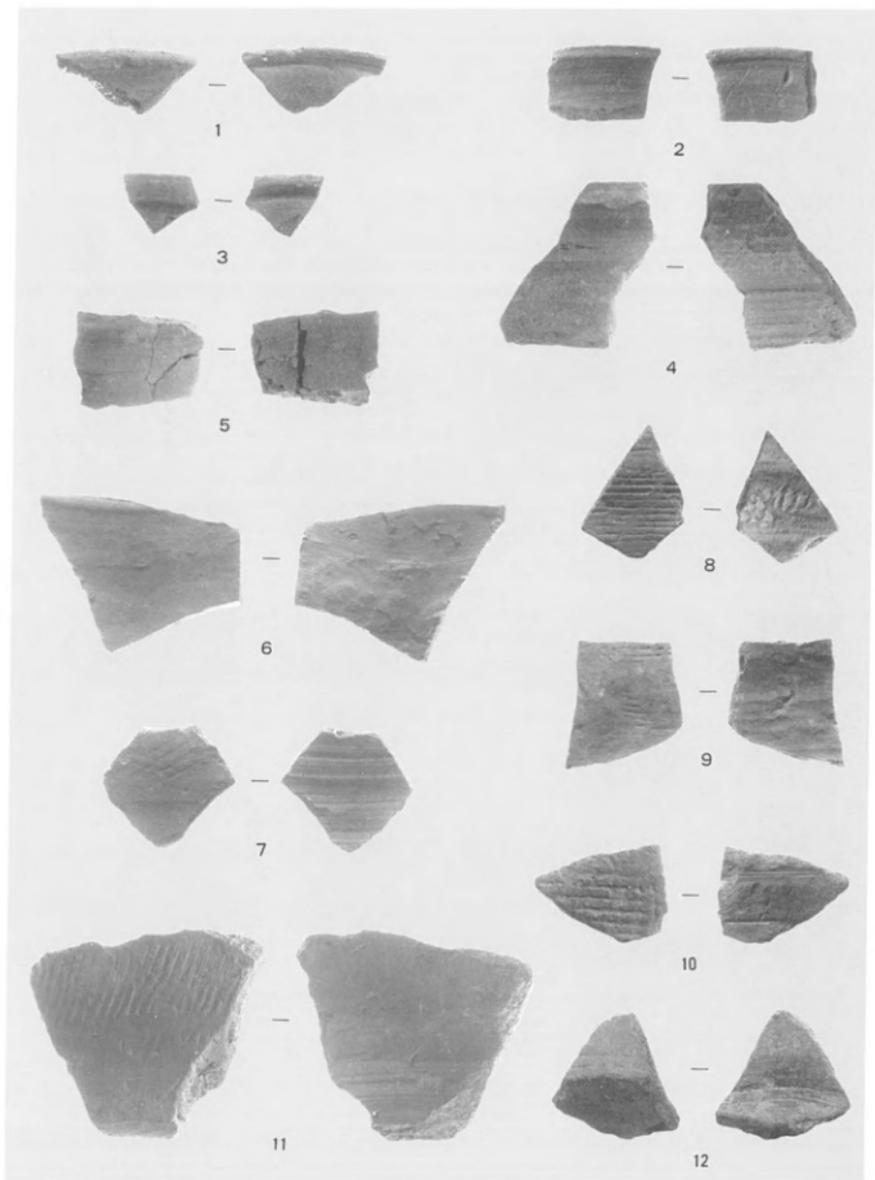
图版26 本土産陶磁器2



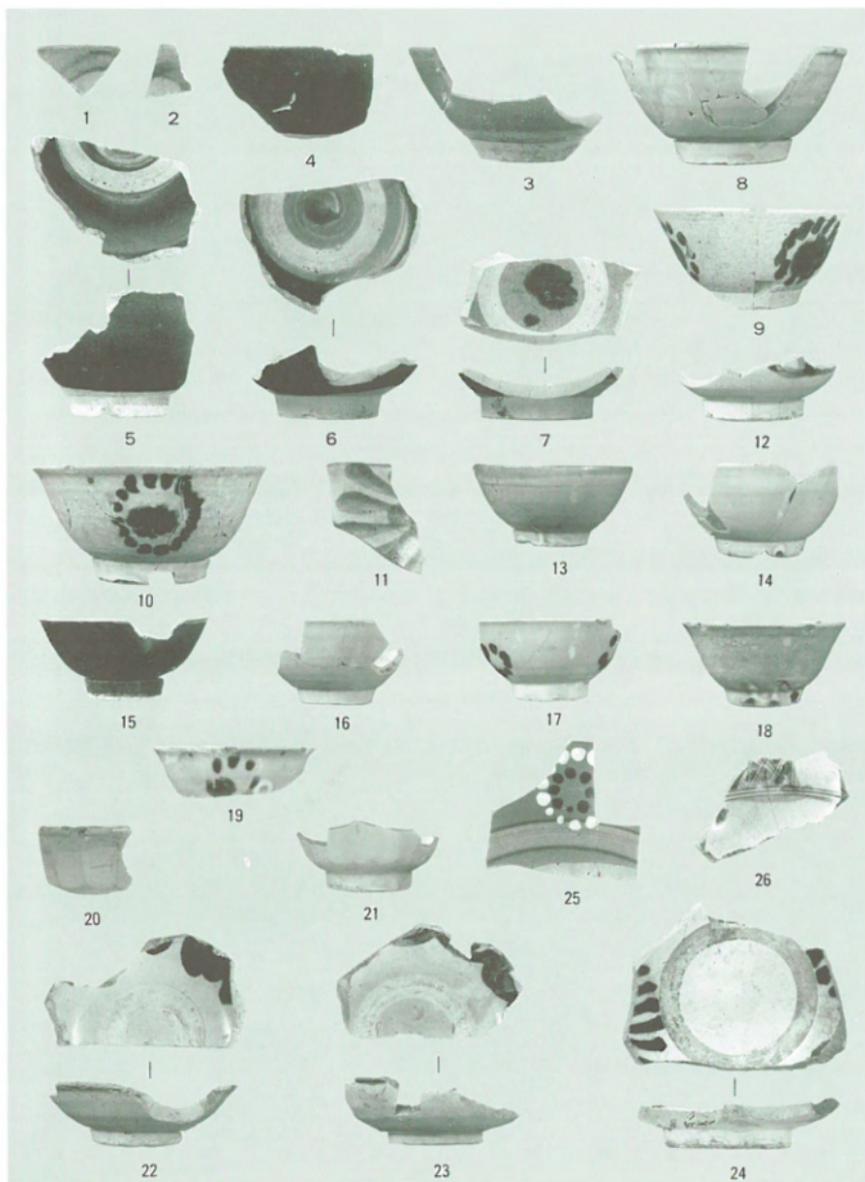
图版27 本土産陶磁器 3



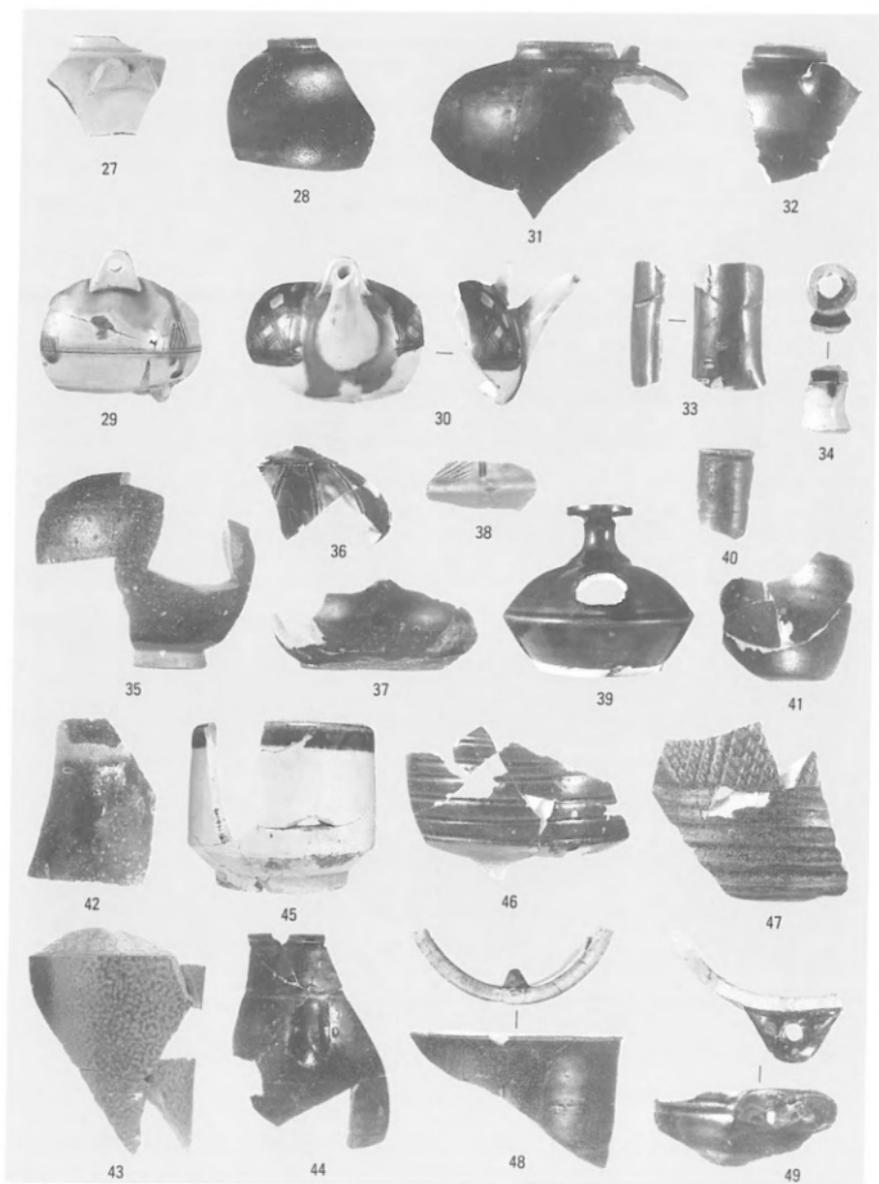
图版28 本土産陶磁器 4



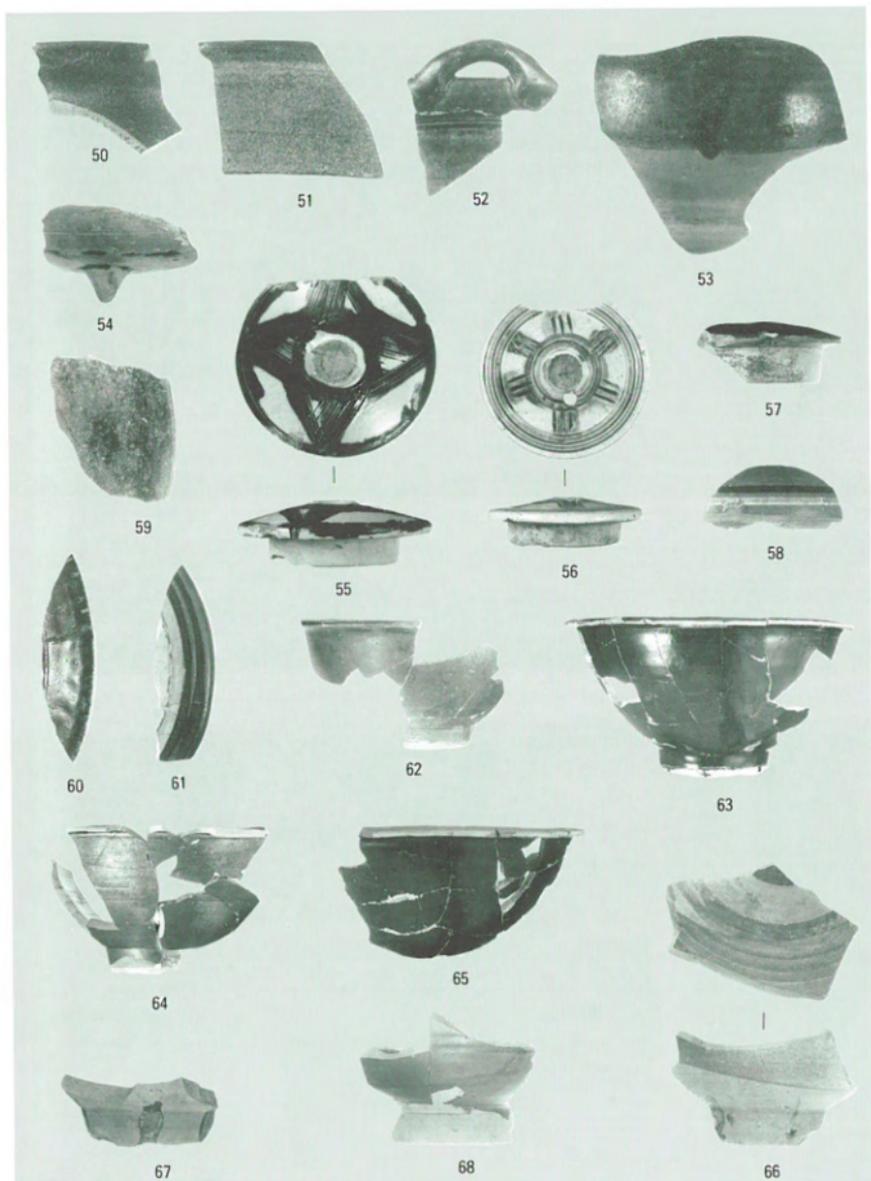
図版29 南島須恵器



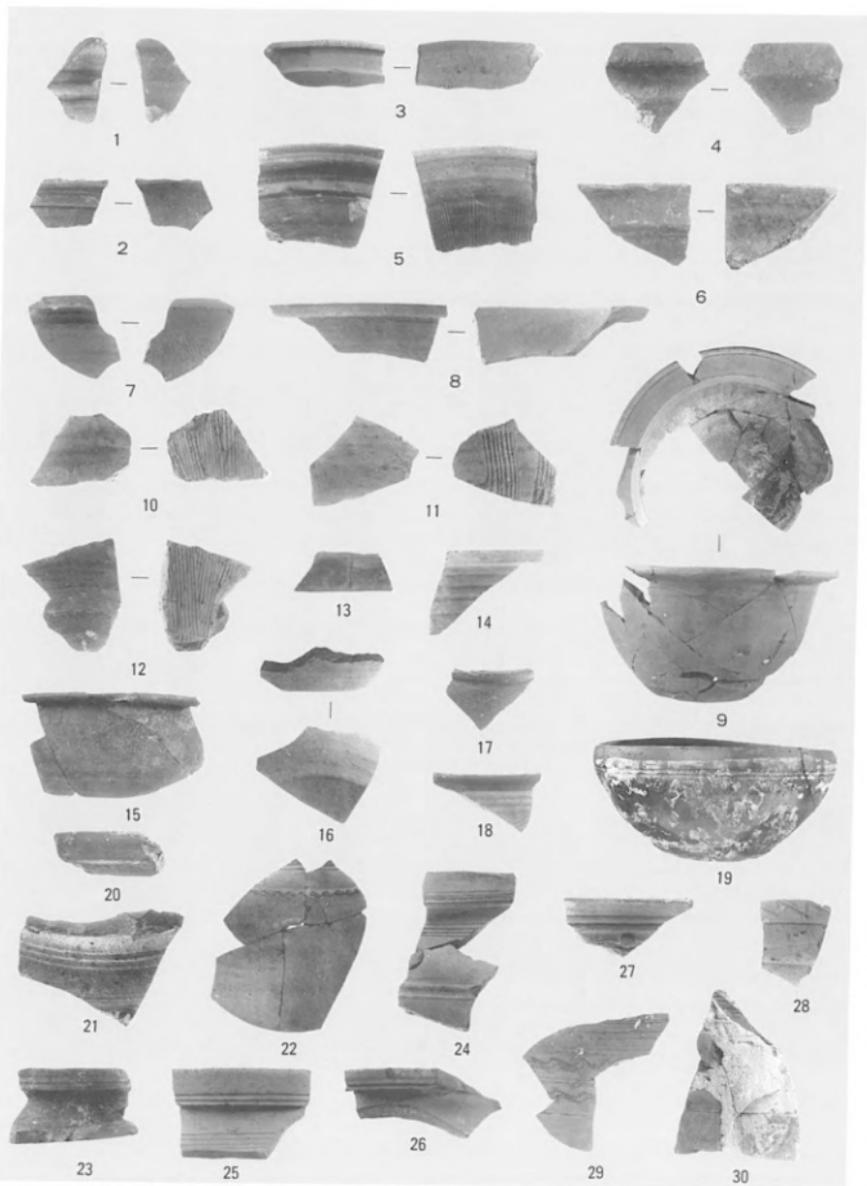
図版30 沖縄産施軸陶器 1



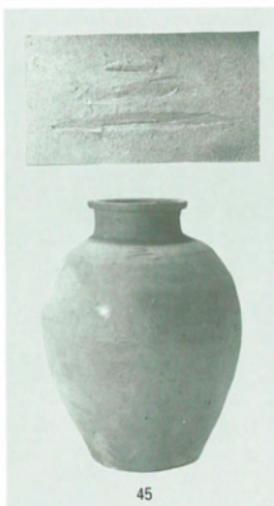
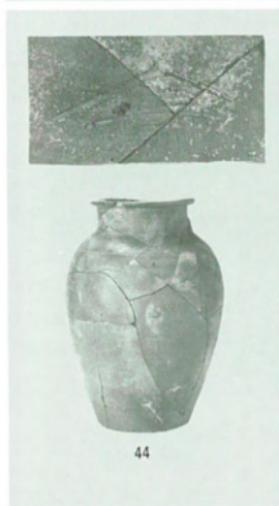
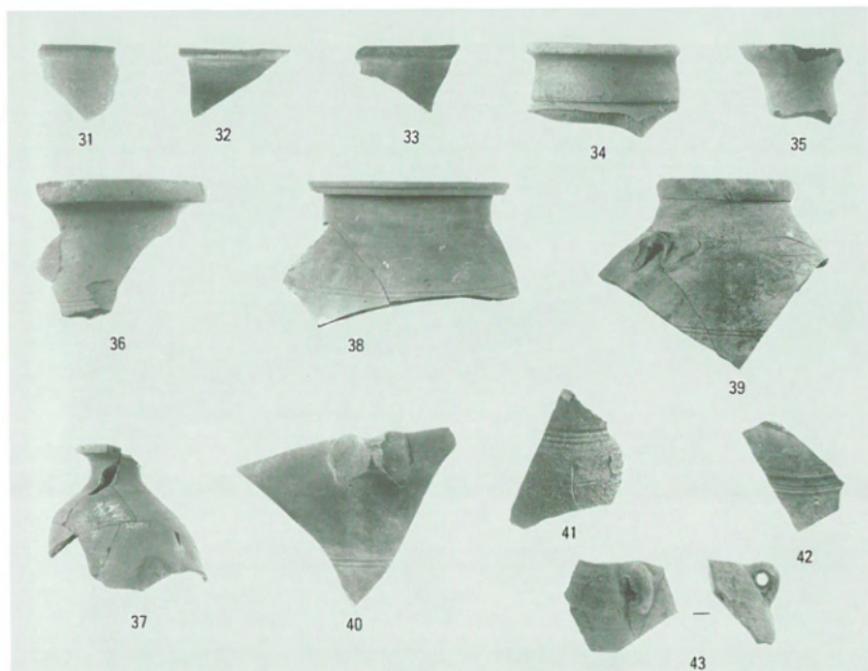
図版31 沖繩産施釉陶器2



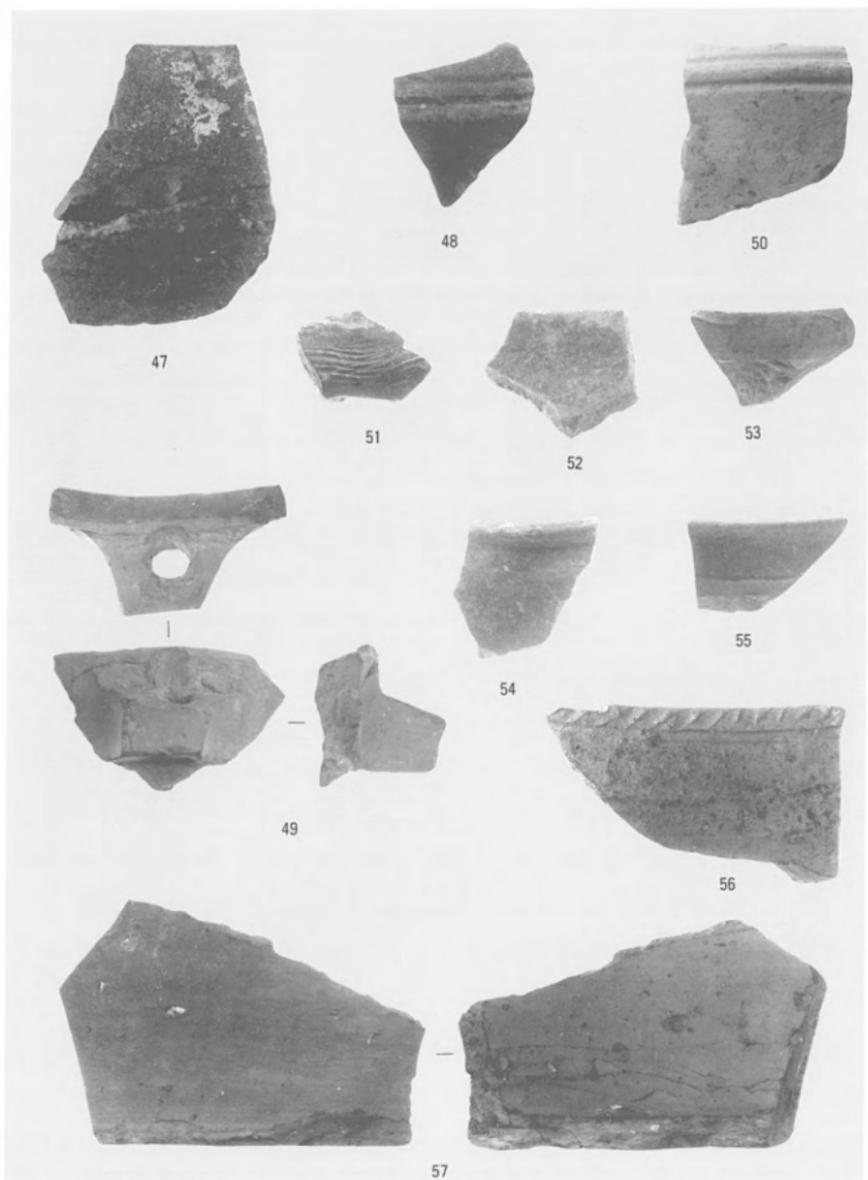
図版32 沖縄産施釉陶器 3



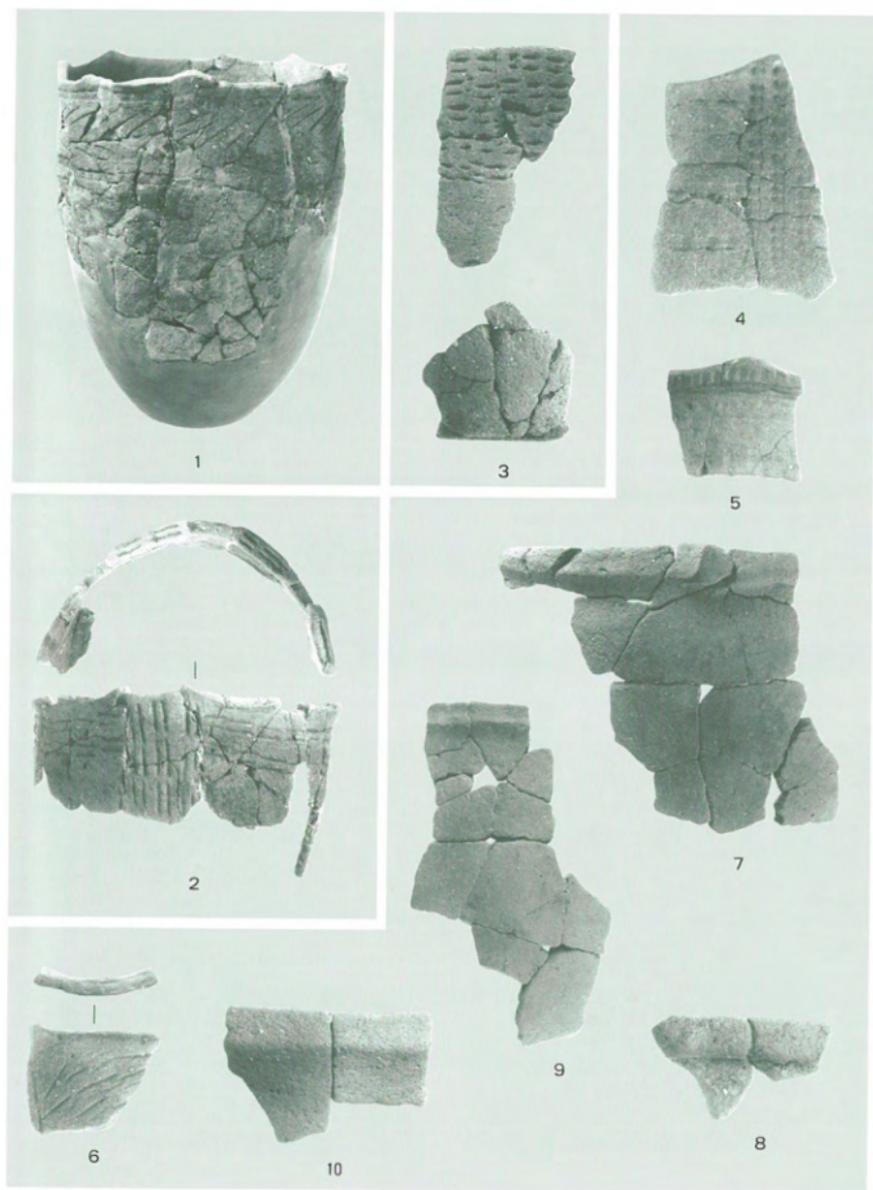
図版33 沖縄産無釉陶器 1



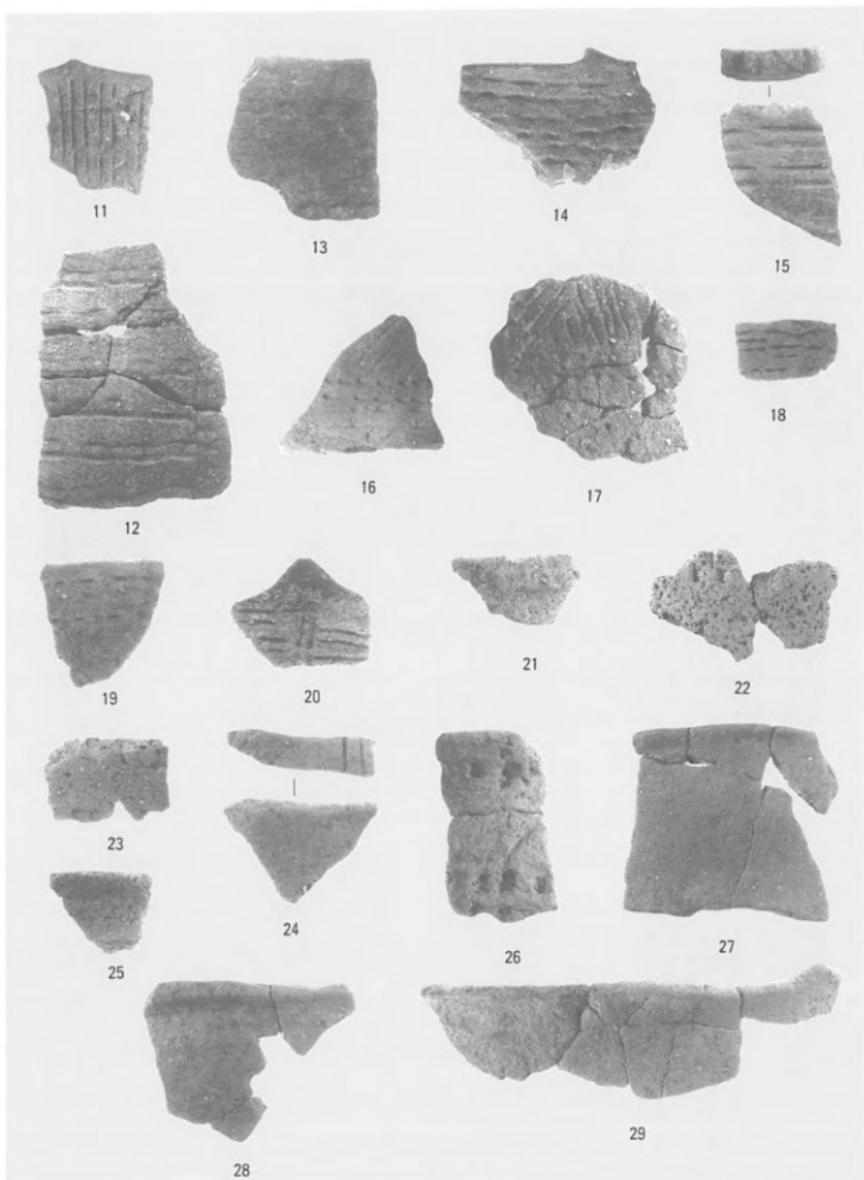
図版34 沖縄産無釉陶器 2



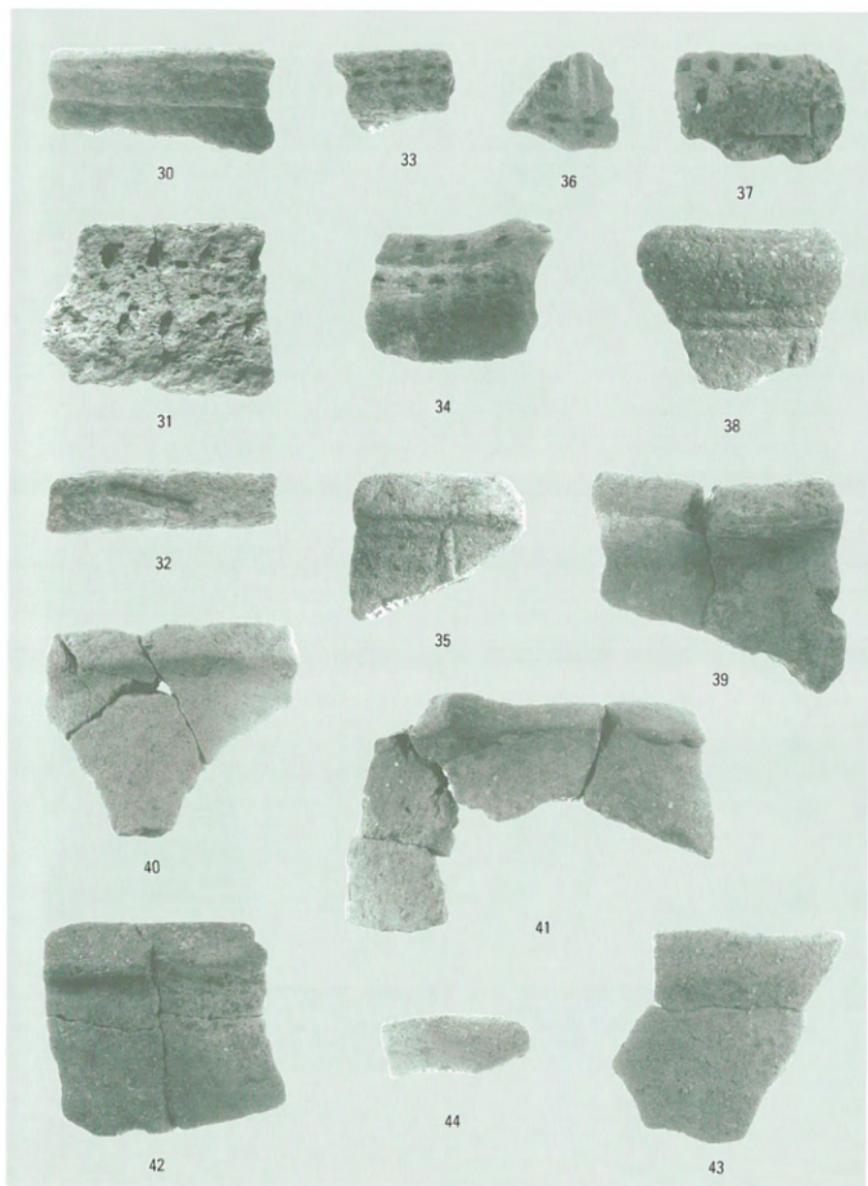
図版35 沖縄産無釉陶器3



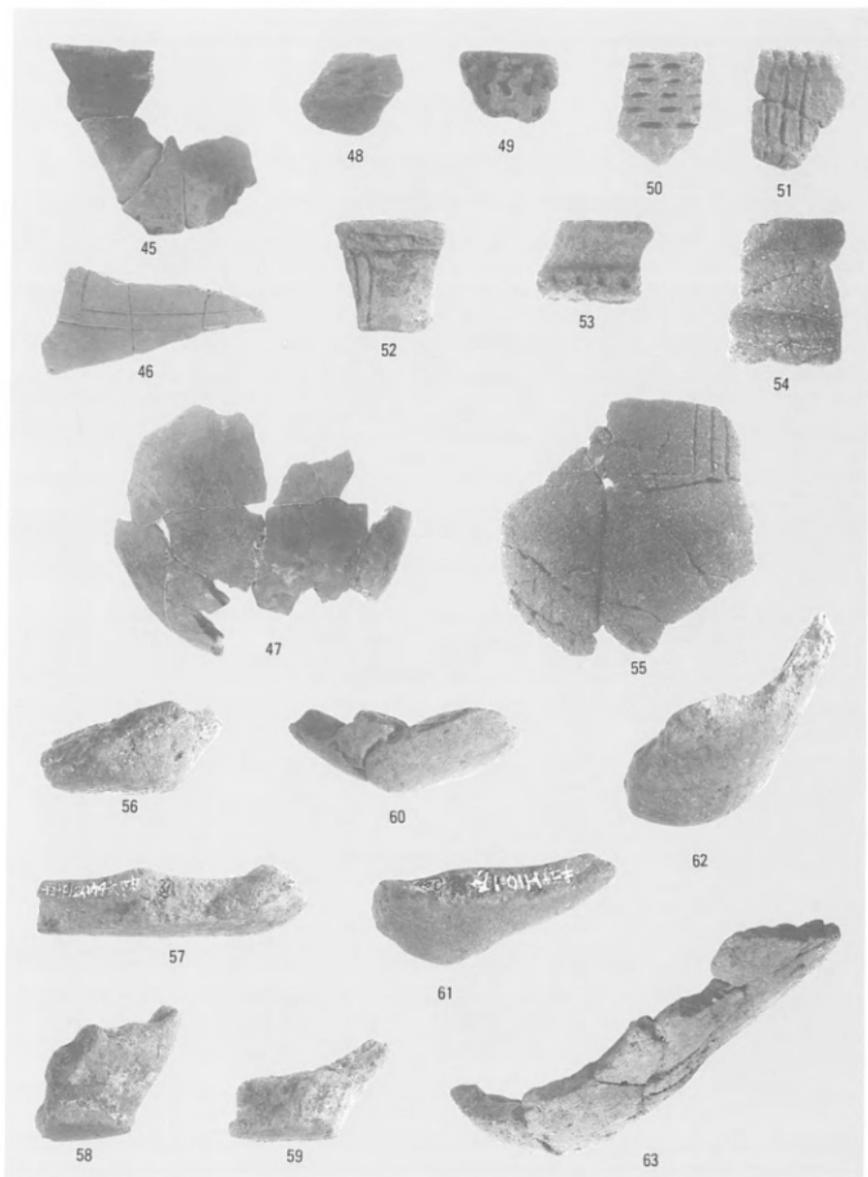
图版36 土器 1



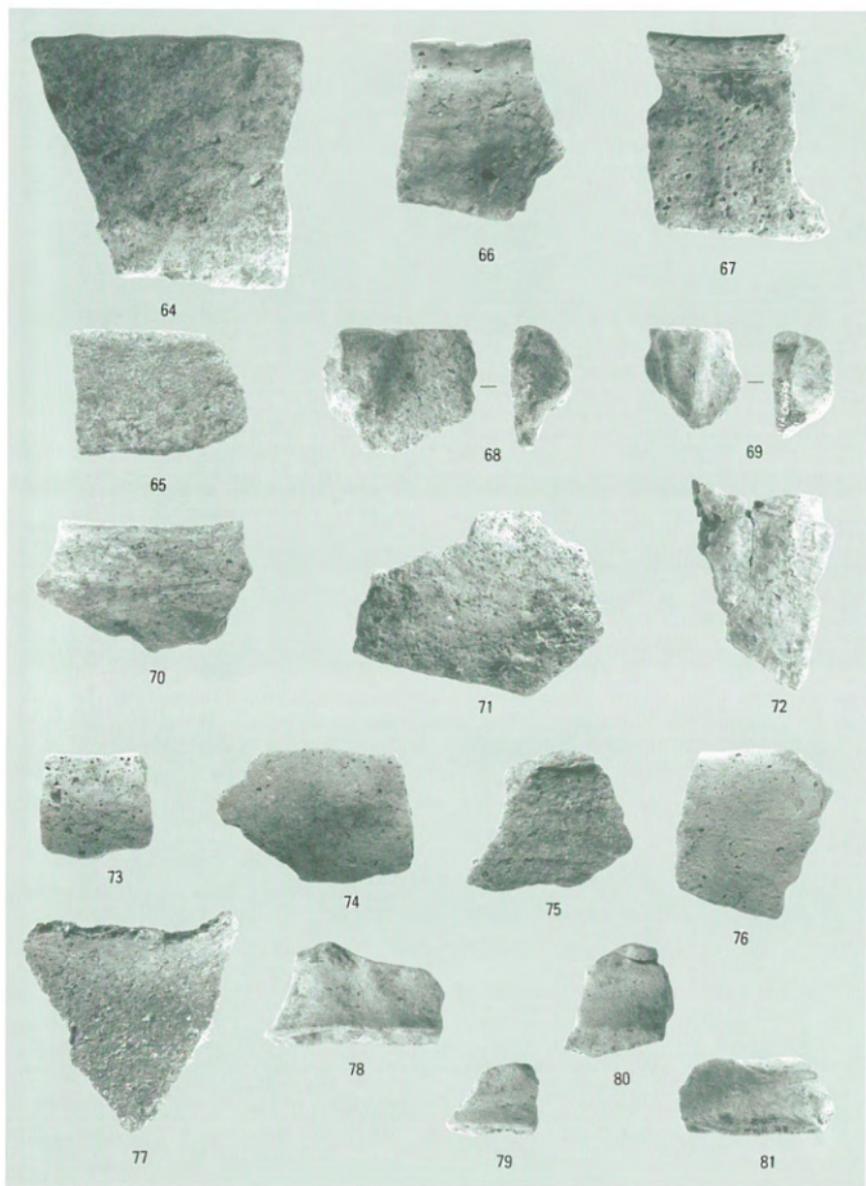
图版37 土器2



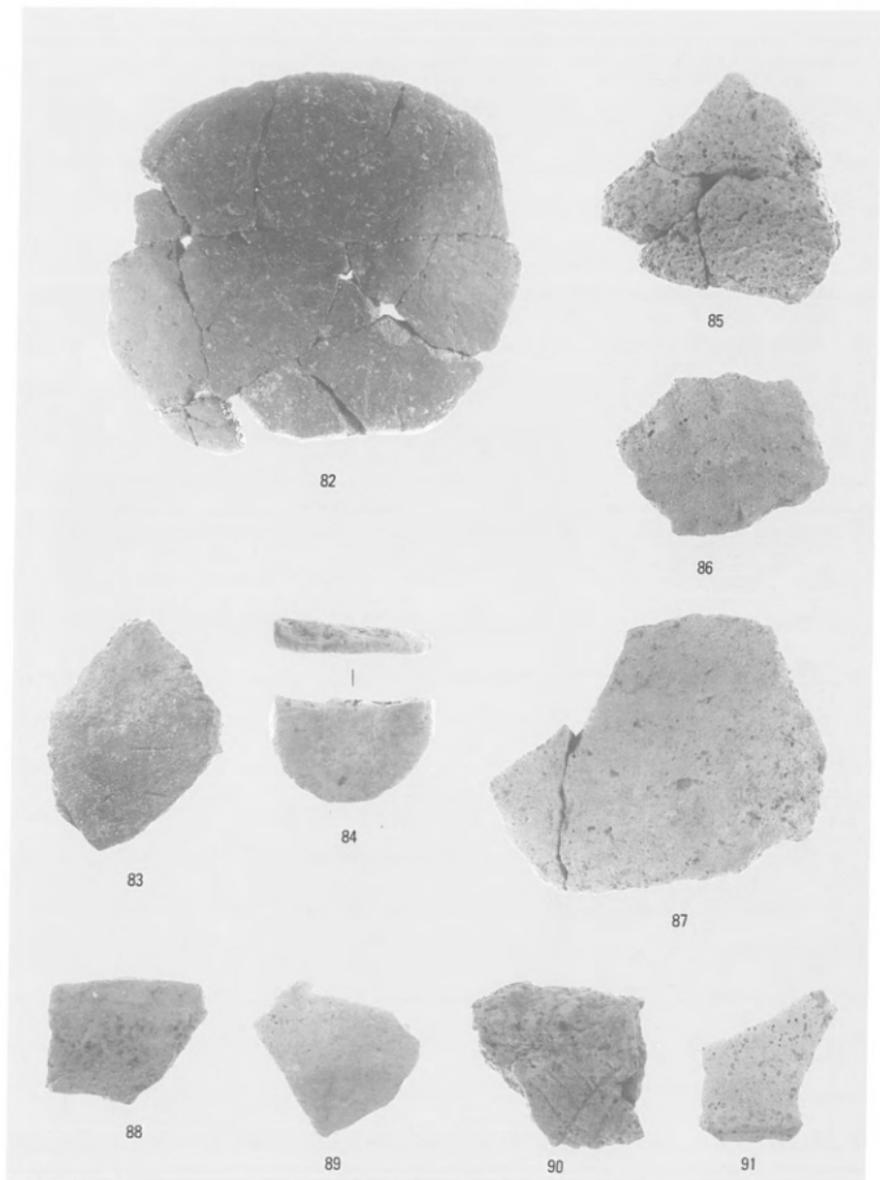
図版38 土器3



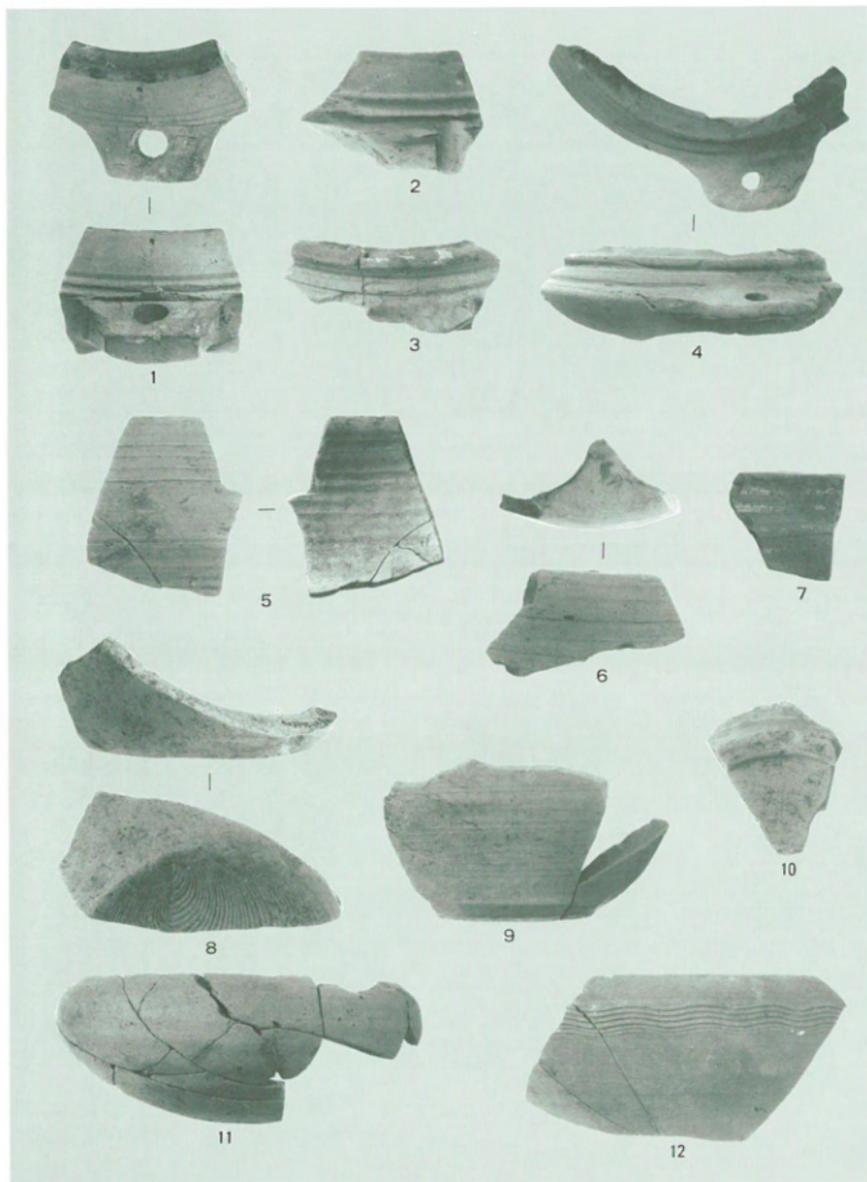
图版39 土器 4



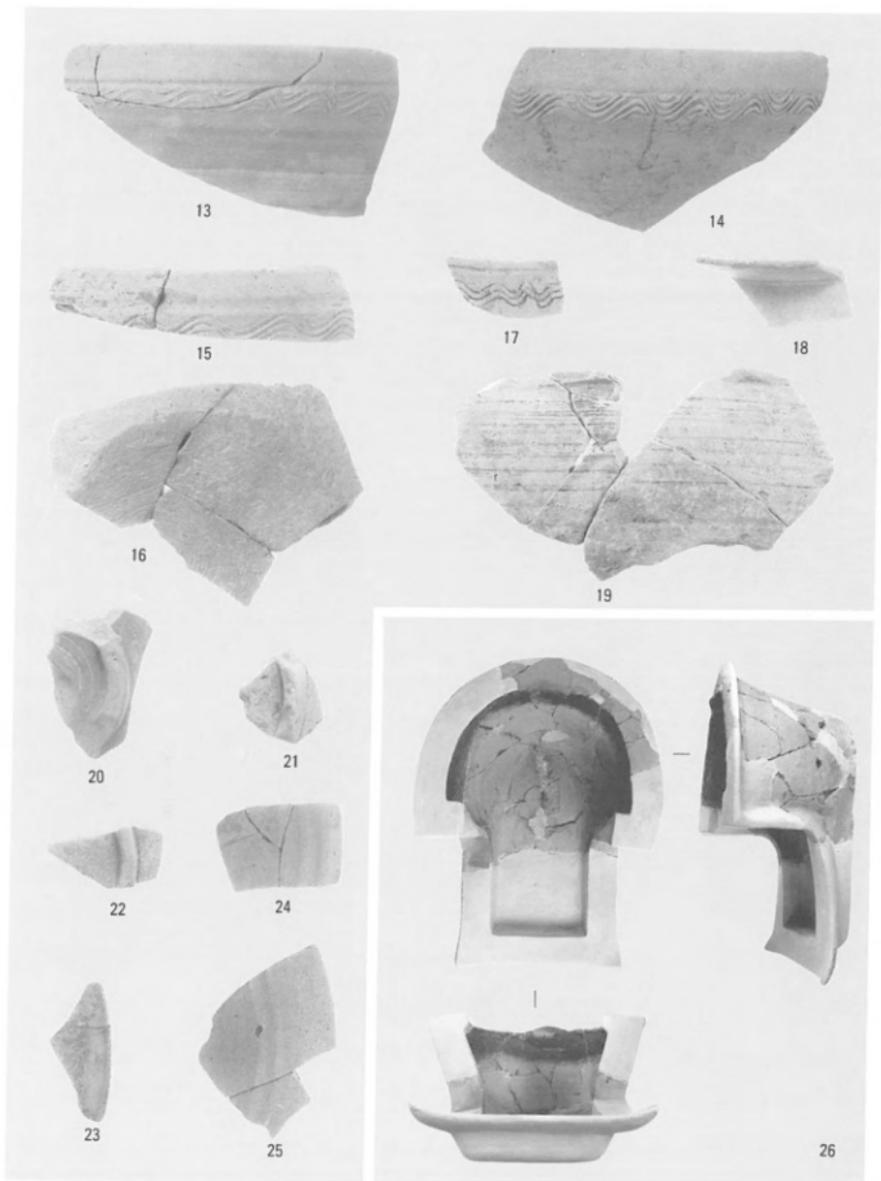
图版40 土器5



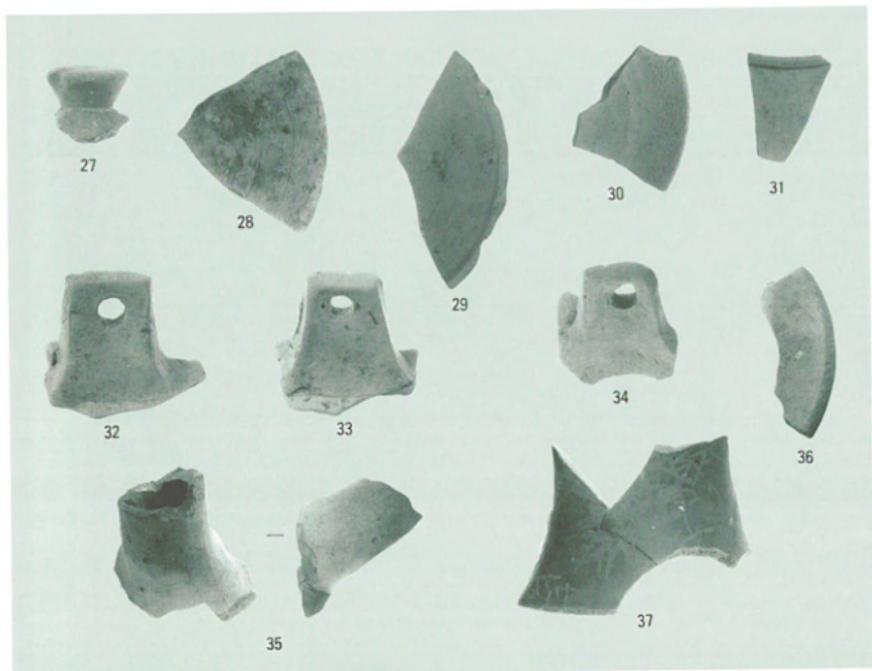
图版41 土器6



圖版42 陶質土器 1



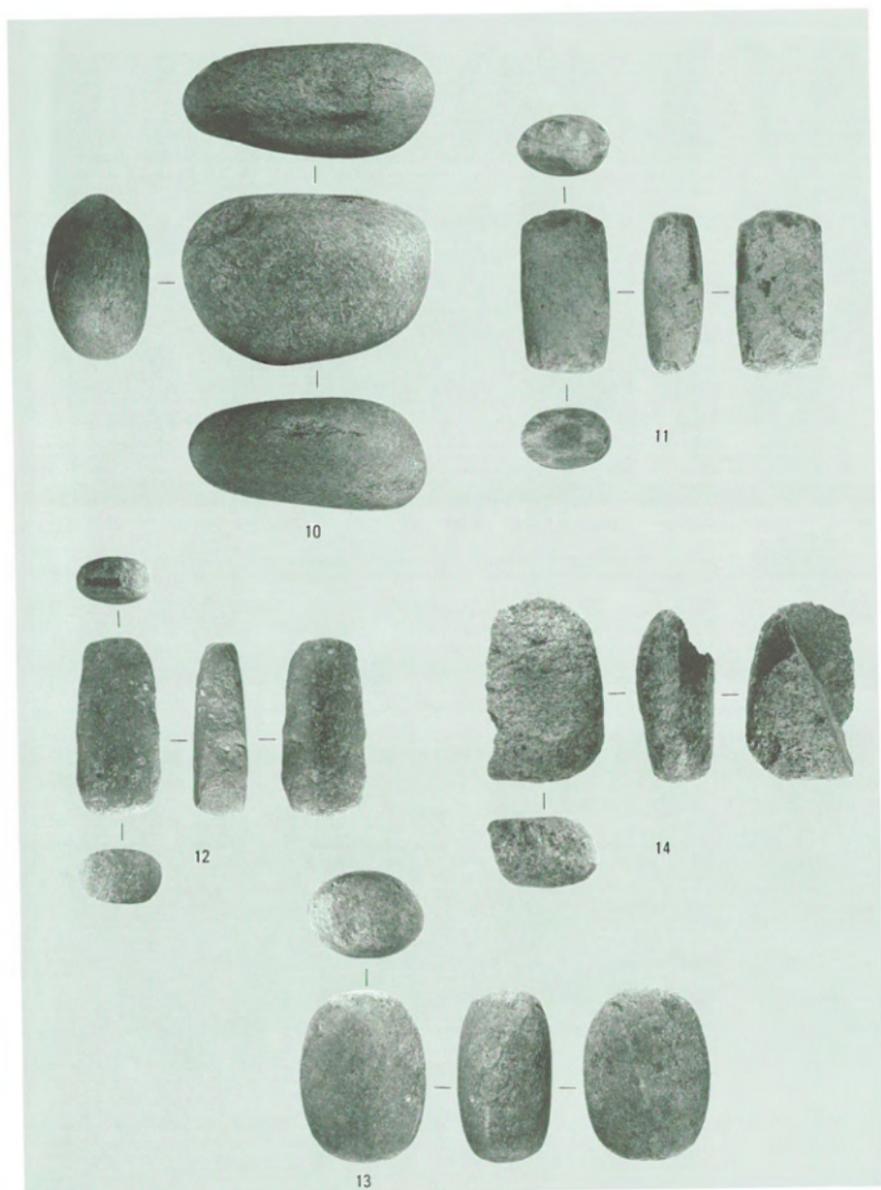
图版43 陶質土器2



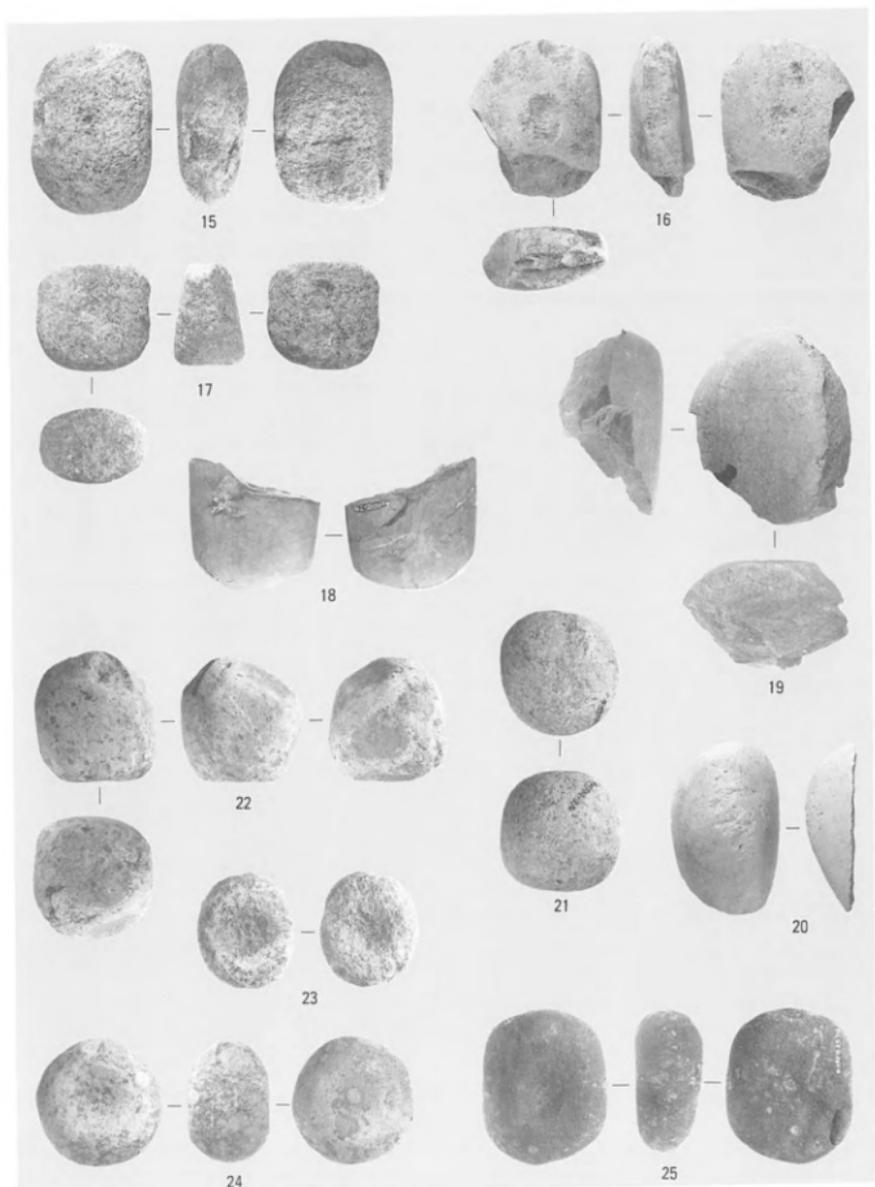
図版44 上：陶質土器3 下：瓦質土器



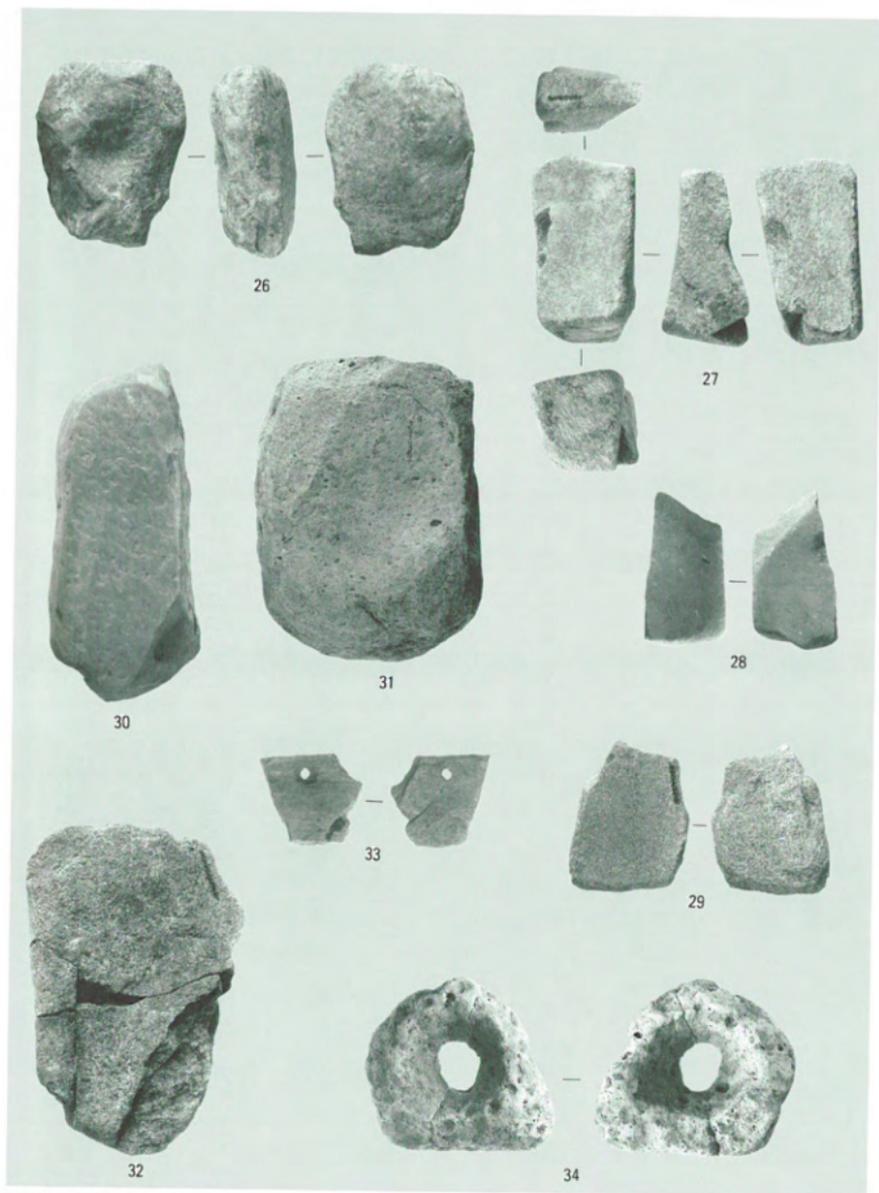
图版45 石器 1



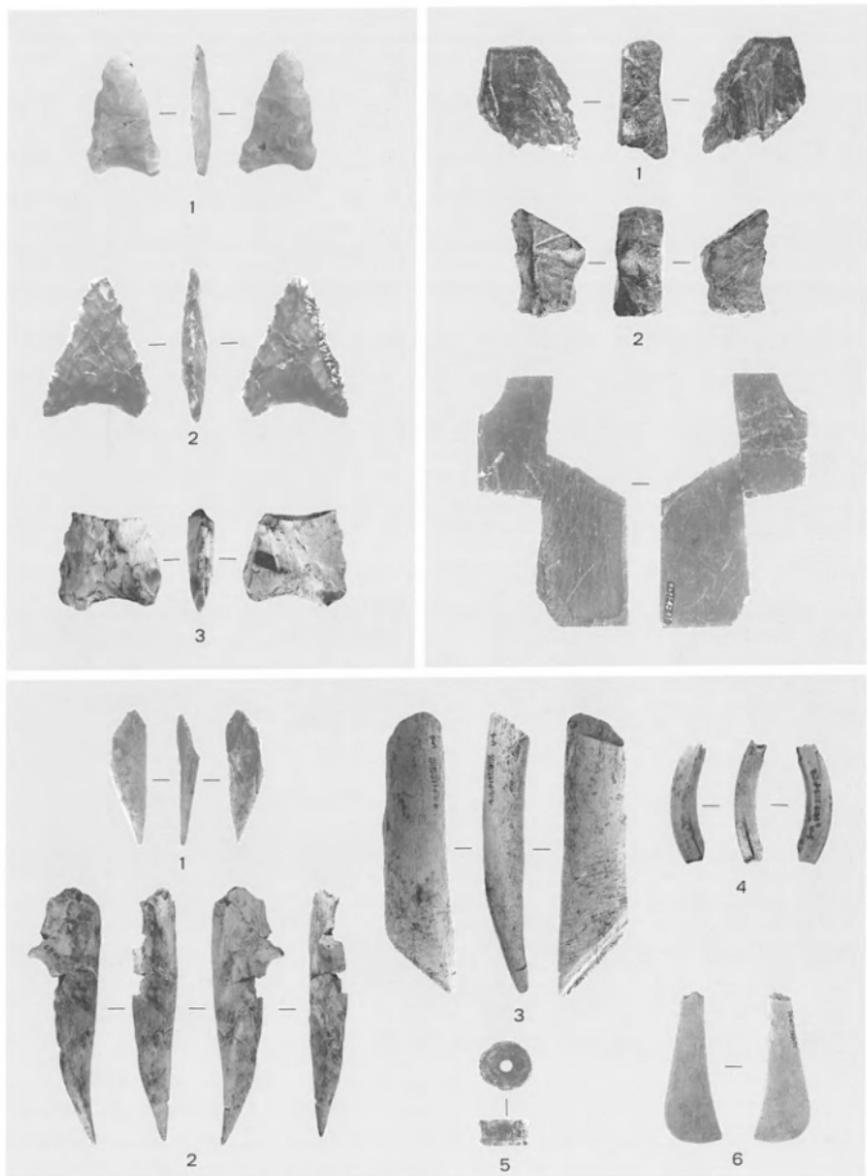
图版46 石器2



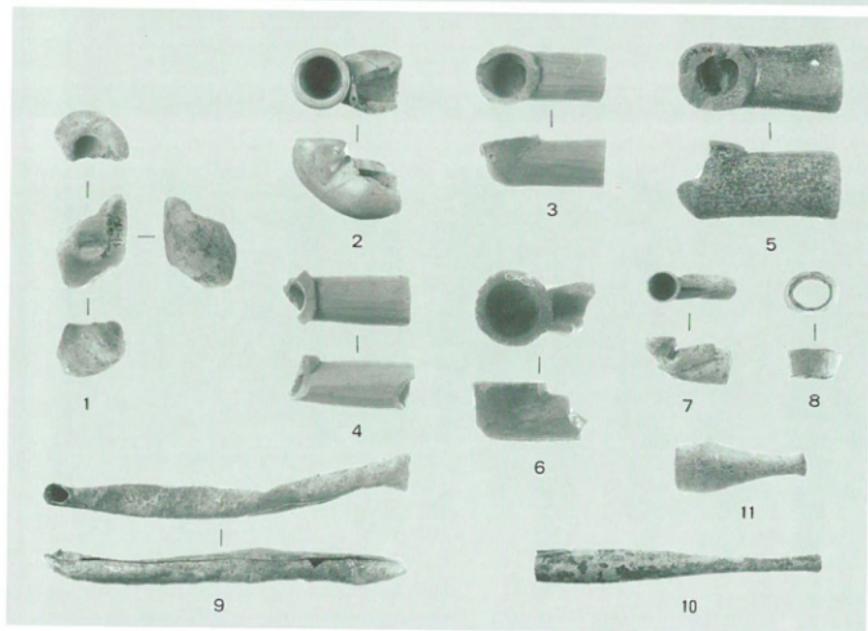
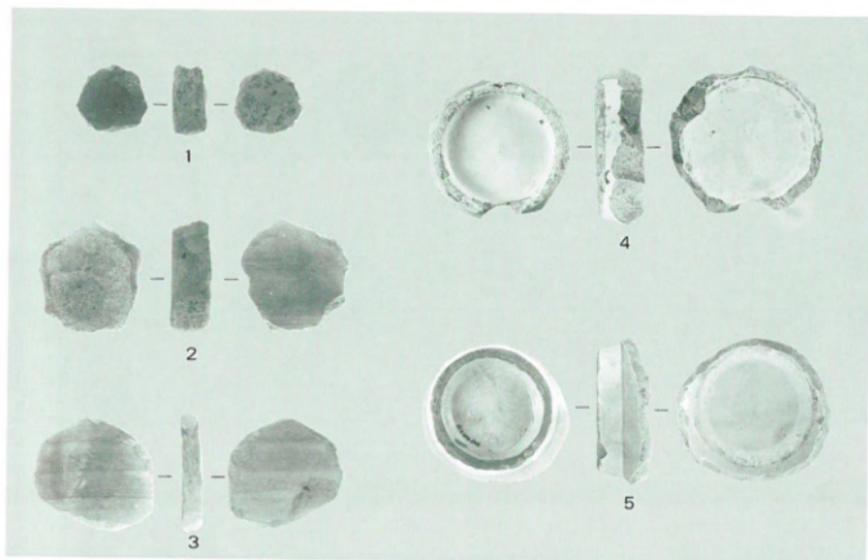
图版47 石器3



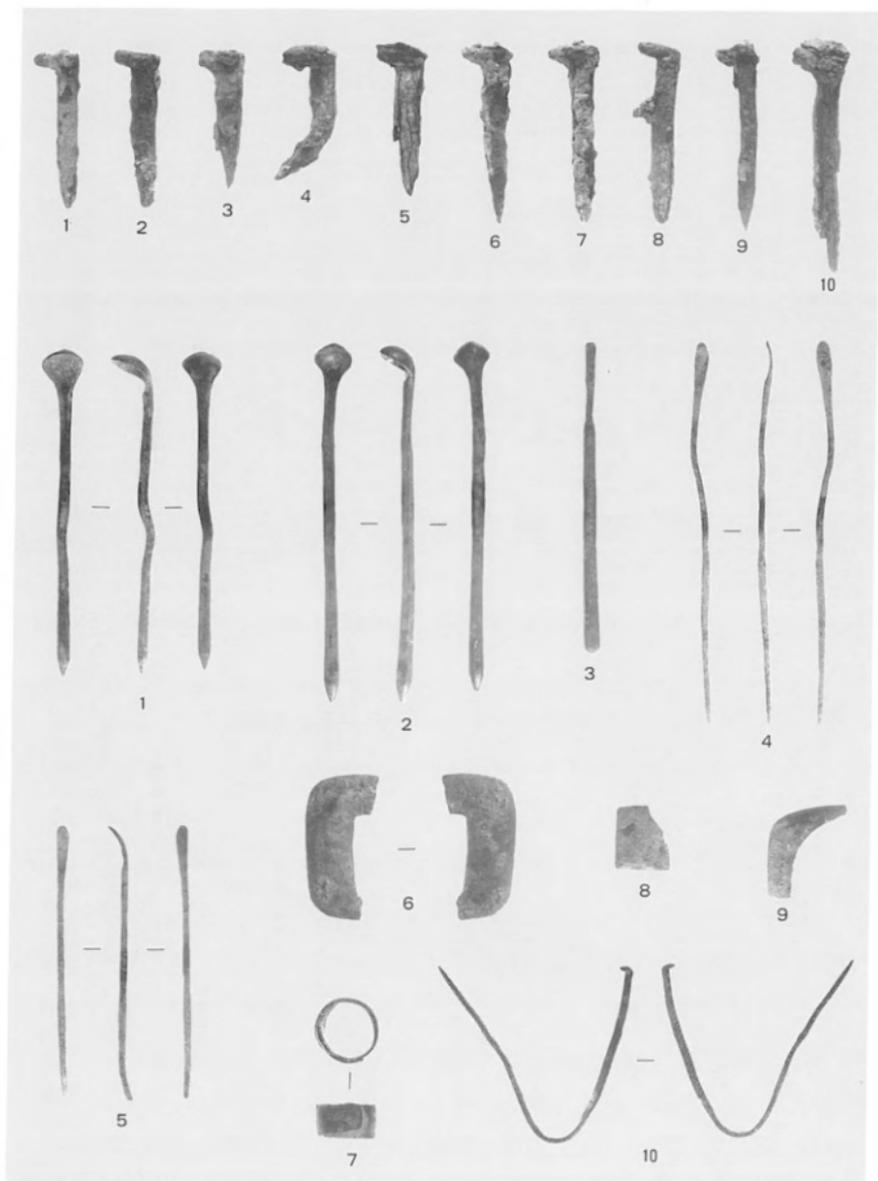
图版48 石器 4



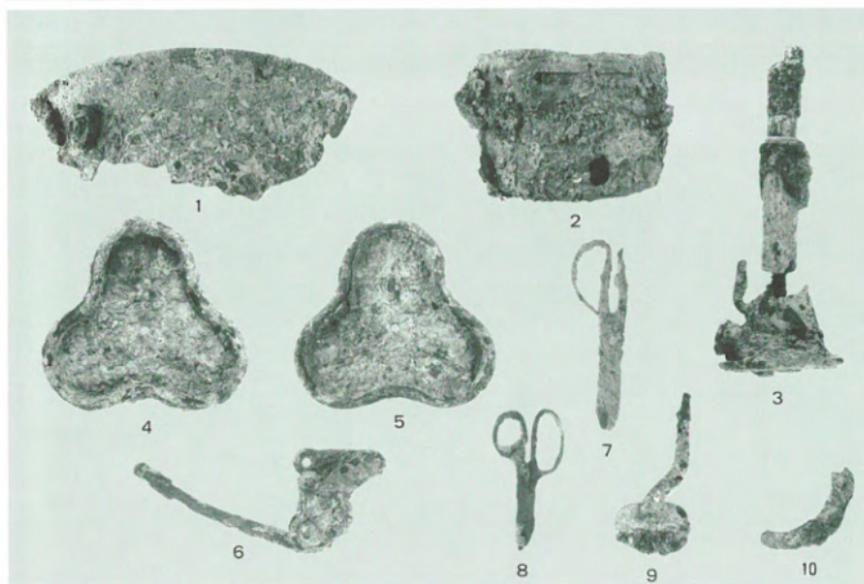
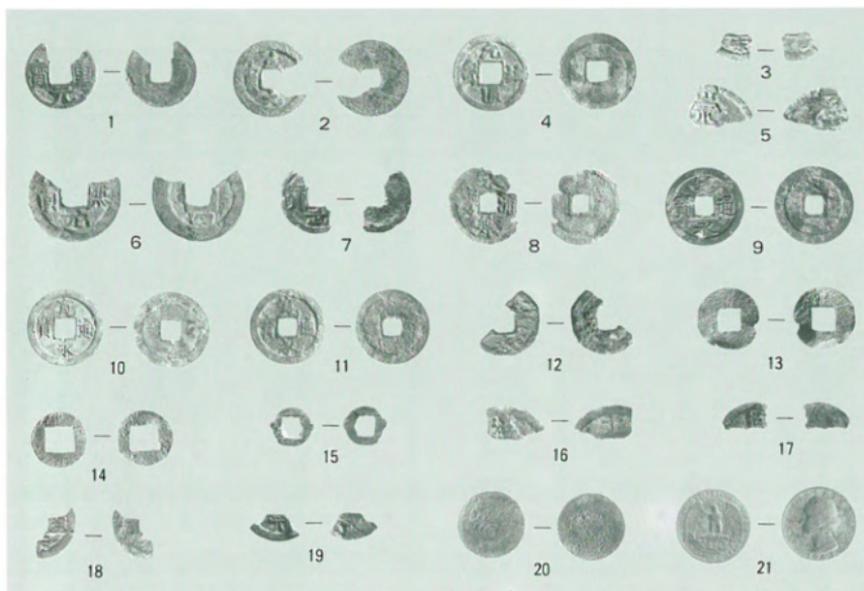
図版49 上左：石鏃 上右：滑石製品・硯 下：骨製品



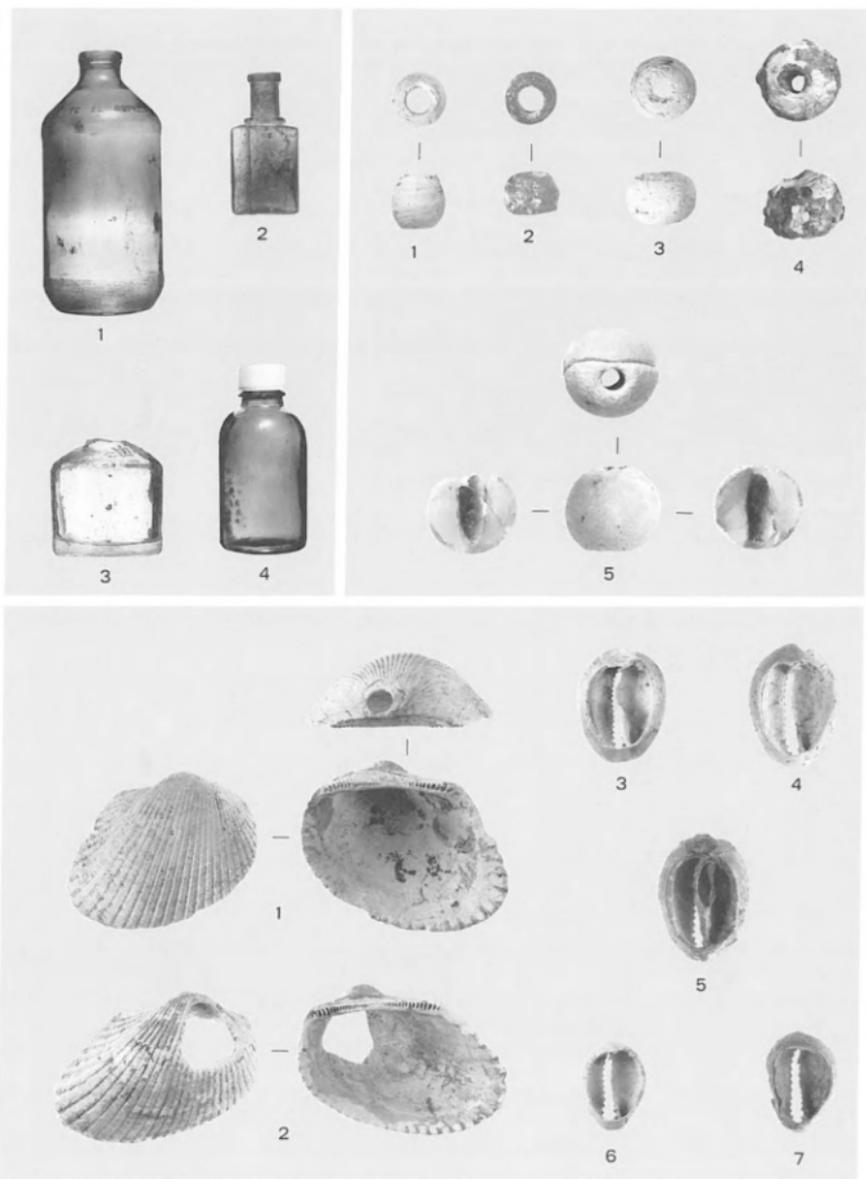
図版50 上：円盤状製品 下：煙管



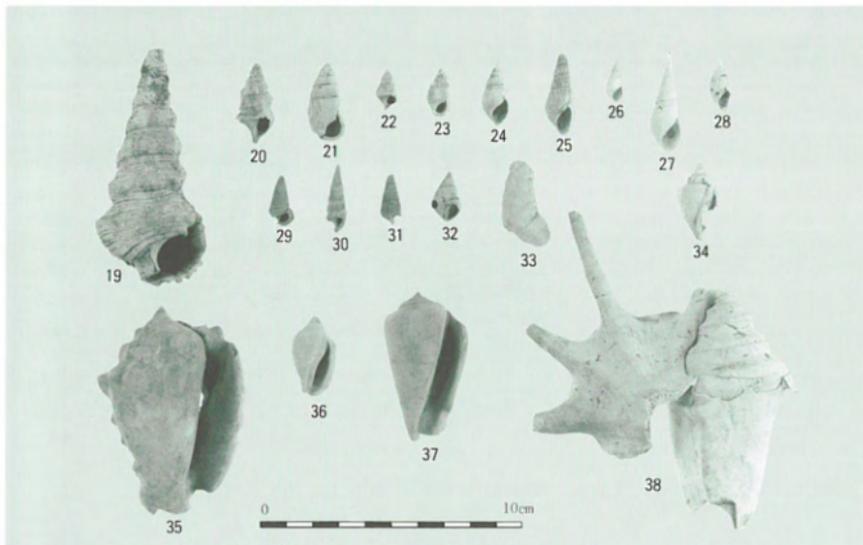
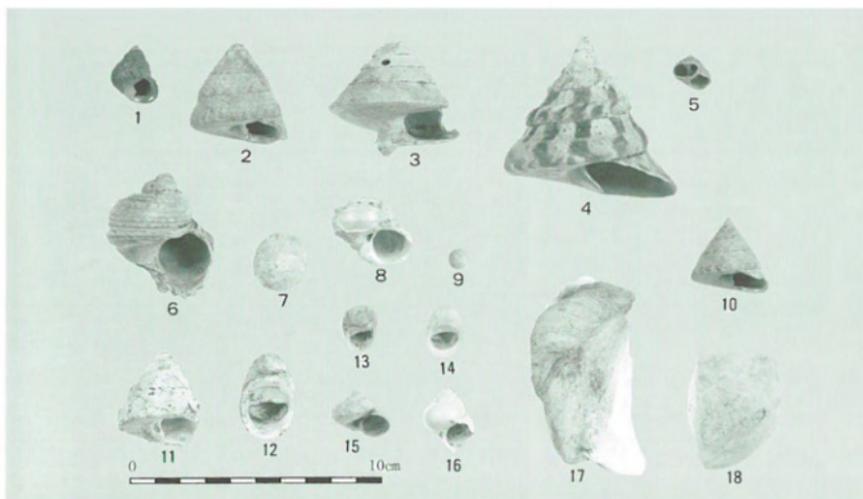
图版51 金属製品



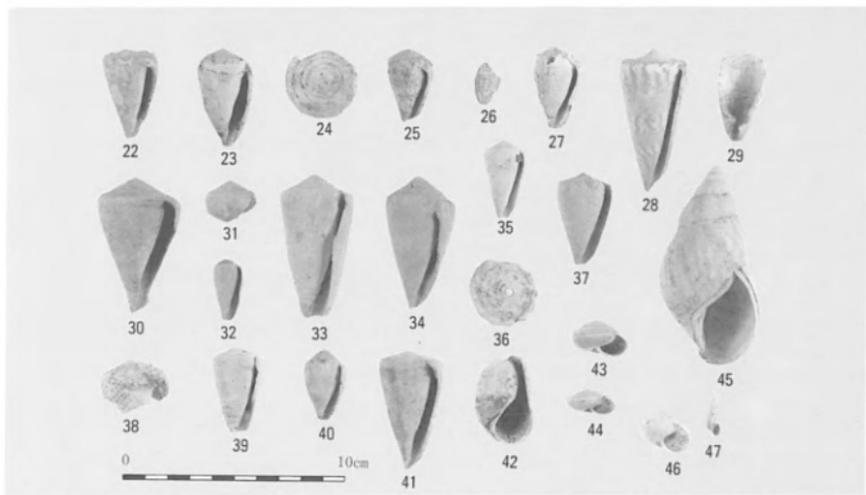
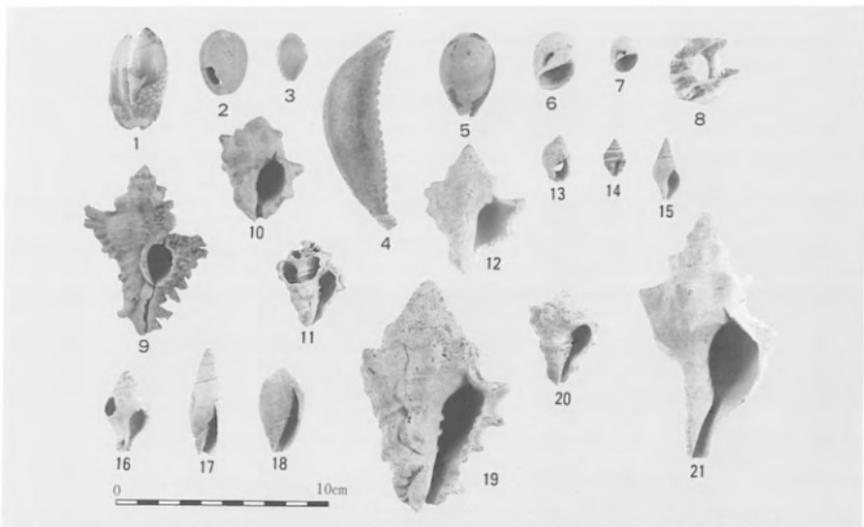
図版52 上：銭貨 下：その他の金属製品



図版53 上左：ガラス製品 上右：玉 下：貝製品

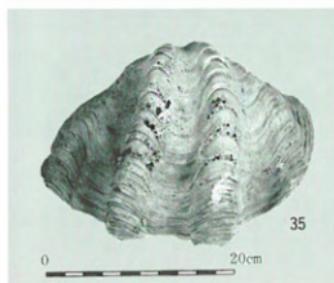
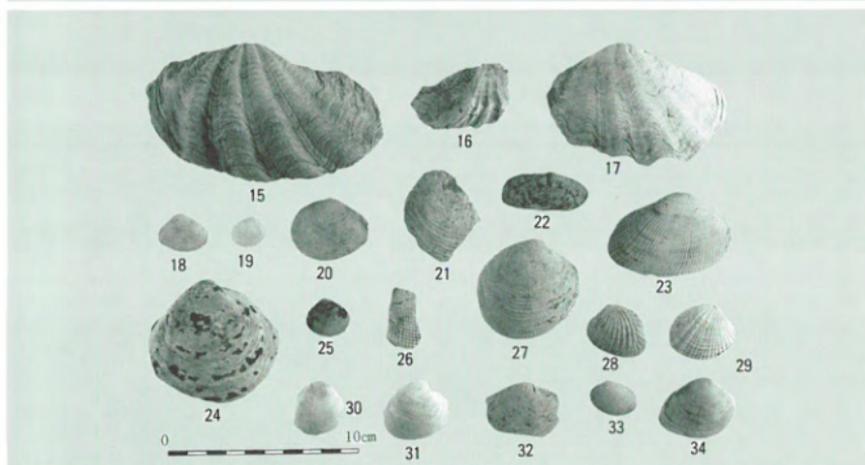
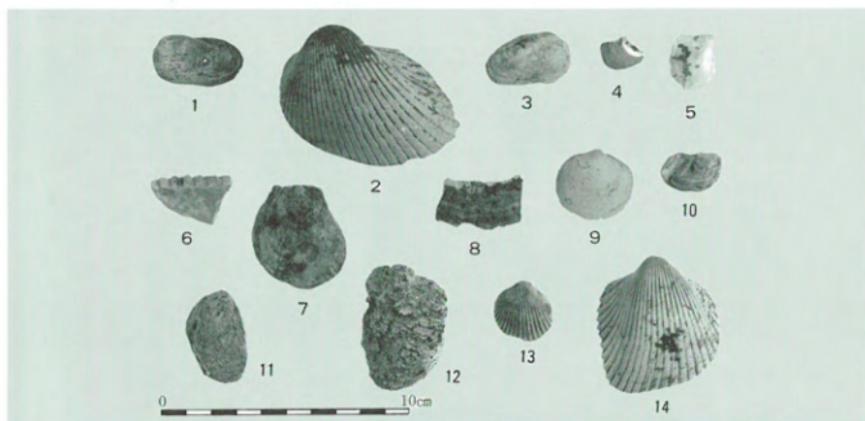


1.オキナワシタ'タミガイ 2.3.キンタカハマ 4.サラサ'テイヤ 5.サラサ'タ'マガイ 6.チョウセンサザエ 7.チョウセンサザエの蓋 8.カンキク 9.カンキクの蓋 10.ニシキウス 11.オオウラウスガイ 12.アマオブネ 13.カノコガイ 14.マルアマオブネ 15.ヤマタニシ 16.マルタニシ 17.ヤコウガイ 18.ヤコウガイの蓋 19.オニノツノガイ 20.コオニノツノガイ 21.クワノミカニモリ 22.クワノミカニモリ(幼) 23.カヤノミカニモリ 24.トウガタカリニナ 25.ヌノミカニモリ 26.カリニナ 27.スガ'カリニナ 28.ネジ'ヒダ'カリニナ 29.31.ヘナタリ 30.イボウミニナ 32.ゴマフニナ 33.スイシガイ 34.オホ'クログガイ 35.イボ'ツデガイ 36.ムカシタモトガイ 37.マカキガイ 38.クモガイ



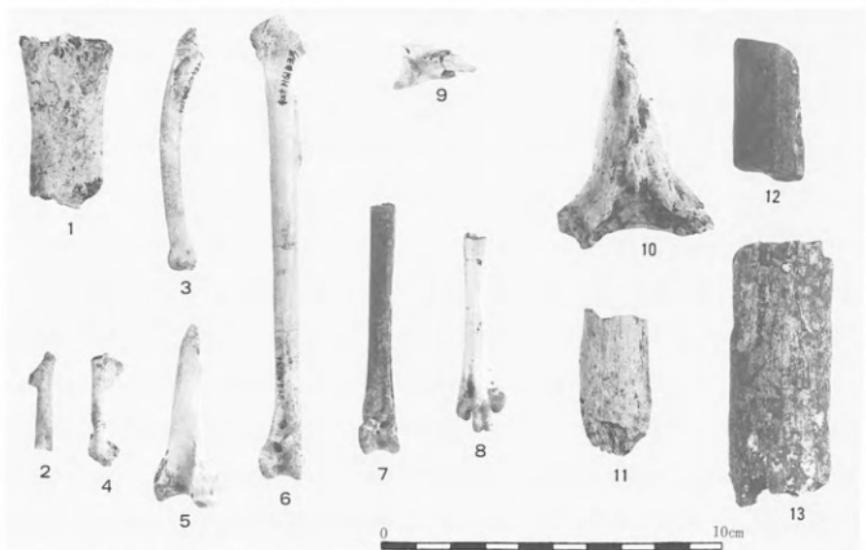
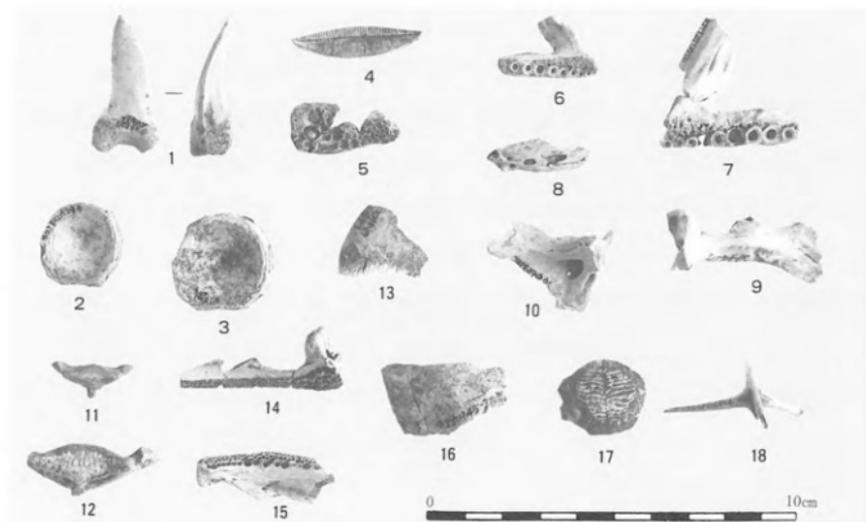
1.ヤクシマダカラ 2.ハナマルキ 3.ハナヒラダカラ 4.ホシダカラ 5.ホシキヌタ 6.ヘソアキトミガイ 7.ホウショウノタマガイ 8.オキニシ
 9.ガンゼキボラ 10.ツルイシガイ 11.20コオニコブシ 12.シラタモ 13.イボヨウバイ 14.ミガイ 15.シマヘッコウバイ
 16.ツノマガイモドキ 17.チョウセンフデガイ 18.イモフデガイ 19.オニコブシ 21.イトマキボラ 22.クロミナシガイ 23.コモンイモガイ
 24.アンボンクロサメ 25.マダライモガイ 26.コマダライモガイ 27.サヤカタイモガイ 28.アカシマナシ 29.ヒラマキイモガイ
 30.サラサミナシガイ 31.33ヤケイモガイ 32.アシロイモガイ 34.ヤナキシボライモガイ 35.ジュズカケサヤカタイモ 36.イボカハイモガイ
 37.イボシマイモガイ 38.コマフイモガイ 39.キヌカツキ 40.コマダライモガイ 41.イタチイモガイ 42.ナツメガイ 43.シュリマイマイ
 44.ハンダナマイマイ 45.アフリカマイマイ 46.オキナワウスカワマイマイ 47.ヌノメカワナ

図版55 巻貝 2



- 1.ベニエガイ 2.リュウキュウサルボウ 3.エガイ 4.リュウキュウヒバリ
 5.リュウキュウミドリアオリガイ 6.シュモクアオリガイ 7.メンガイ 8.カキ
 の一種 9.ウラキツキガイ 10.ケイトウガイ 11,12.カネツケサルガ
 イ 13.リュウキュウサルガイ 14.カララガイ 15.シラナミ 16.シキウ
 ウ 17.ヒメシヤコ 18.ヒメアザリ 19.ナミノコマスオカイ 20.リュウキュ
 ウシロトリ 21.モチズキサアラガイ 22.マスホウ 23.リュウキュウマスホウ
 24.シラナシジミ 25.シジミの一種 26.アラヌメガイ 27.ヌノメガ
 イ 28.ホソシイナミガイ 29.アラシケンマンガイ 30.二枚貝種
 不明 31.ユウカケハマクサリ 32.リュウキュウアサリ 33.イソハマクサリ
 34.スタレハマクサリ 35.ヒレシヤコ

図版56 二枚貝



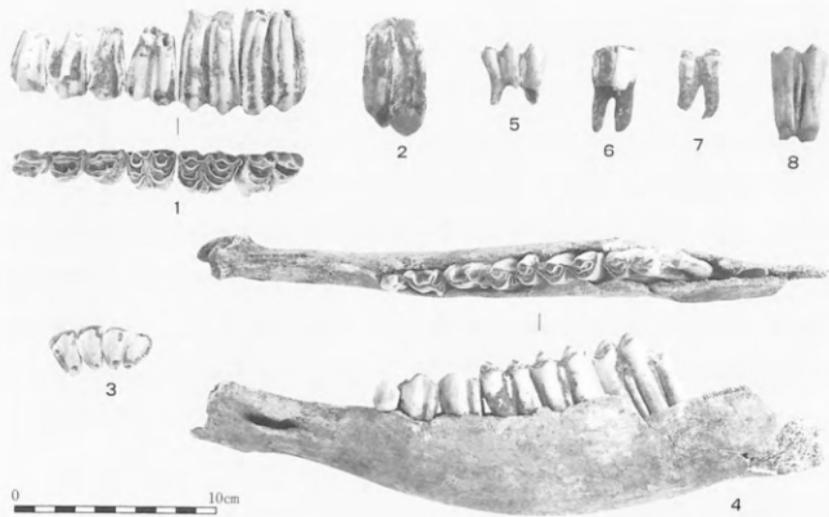
図版57 上：魚類 1、サメ 歯 2・3、サメ 脊椎 4、トビエイ科 歯板 5、クロダイ 左前上顎骨 6、ハマフエフキ 左前上顎骨
 7、ハマフエフキ 右前上顎骨 8、ハマフエフキ 左歯骨 9、ハマフエフキ 左主顎骨 10、ハマフエフキ 左主顎蓋骨
 11・12、ベラ科 コブダイ 下咽頭骨 13、ブダイ科 左前上顎骨 14、ハタ科 左前上顎骨
 15、ハタ科 右歯骨 16、フグ類 左歯骨 17、ハリセンボン科 上下不明歯骨 18、ハリセンボン 棘

下：ウミガメ 1、右脛骨
 ニワトリ 2、右肩甲骨 3、左尺骨 4、右中手骨 5、右大腿骨 6、左脛骨 7、右脛骨 8、左中足骨♀
 ネズミ 9、左下顎骨
 ジュゴン 10、棘突起 11・12・13、肋骨



図版58 上：ウマ 1、左上顎骨P² 2、右上顎骨P³ 3、右下顎骨P₂ 4、右下顎骨P₄ 5、左下顎骨M₃ 6、右胫骨
7、左距骨 8、左踵骨 9、左中足骨

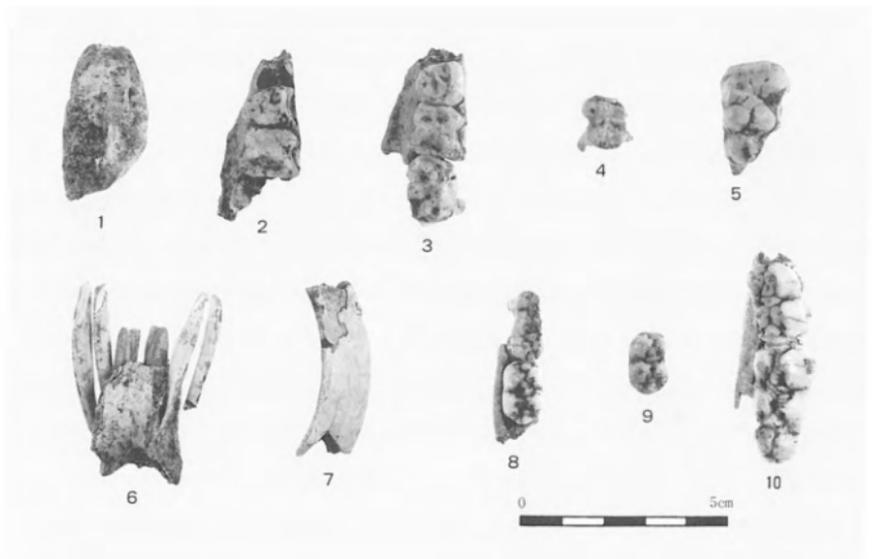
下：ヤギ 1、左上顎骨P³⁺⁴M¹⁺²⁺³ 2、右下顎骨P₃₊₄M₁₊₂₊₃ 3、右肩甲骨 4、右桡骨 5、左中手骨
6、右胫骨 7、左胫骨



図版59 上：ウシ 1、左上顎骨 $P^{2-3-4}M^{1-2-3}$ 2、右上顎骨 M^3 3、右下顎骨 $I_{1,2,3,4}$ 4、左下顎骨 $P_{2,3,4}M_{1,2,3}$
 5、左下顎骨 dm_4 6、右下顎骨 P_3 7、右下顎骨 M_1 8、左下顎骨 M_2
 下：ウシ 9、右肩甲骨 10、右上腕骨 11、左橈骨 12、左尺骨



図版60 ウシ 13、右機側手根骨 14、左機側手根骨 15、右中間手根骨 16、左中間手根骨 17、右2+3手根骨
 18、左2+3手根骨 19、右第4手根骨 20、左第4手根骨 21、左中手骨 22、右中手骨 23、右腕骨
 24、左大腿骨 25、右膝蓋骨 26、左脛骨 27、左距骨 28、左踵骨 29、左第4中心足根骨
 30・31、左中足骨 32、右基節骨 33、左基節骨 34、右中節骨 35、左中節骨 36、右末節骨
 37、左末節骨



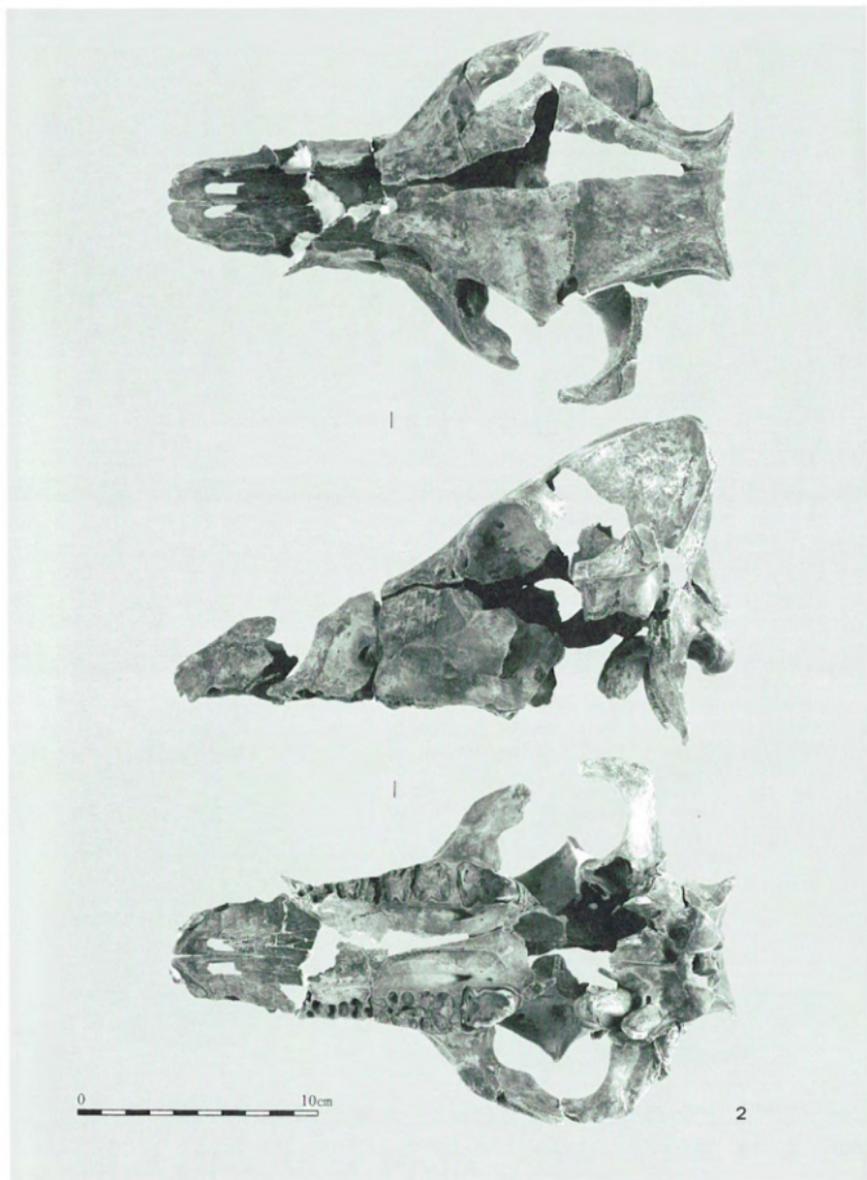
図版61 イノシシ 1, 左上顎骨犬歯 \odot 2, 左上顎骨P⁴M¹ 3, 左上顎骨P⁴M¹⁻² 4, 右上顎骨M¹ 5, 左上顎骨M³
 6, 左右下顎骨(I1)₁₋₂ 7, 左下顎骨犬歯 \odot 8, 右下顎骨dm₁M₁ 9, 右下顎骨M₁
 10, 左下顎骨M₂₋₃ 11, 右肩甲骨 12, 右上腕骨 13, 右尺骨 14, 左距骨 15, 右距骨
 16, 左踵骨 17, 右踵骨 18, 左基節骨 19, 右基節骨



図版62 ブタ 1、右頭頂骨 2、右後頭頭頸静脈突起 3、右肋骨 4、右肋骨 5、右肋骨 6、左肋骨 7、右肩甲骨
 8、左肩甲骨 9、左上腕骨 10、右上腕骨 11、左上腕骨 12、左橈骨 13、右橈骨 14、左尺骨
 15、左尺骨 16、右橈側手根骨 17、右中手骨Ⅲ 18、右寛骨 19、右寛骨



図版63 上：ブタ 20、右大腿骨 21、左大腿骨 22、右大腿骨 23、左脛骨 24、左脛骨 25、右距骨 26、右距骨 27、左第4足根骨 28、左中足骨Ⅲ 29、左中足骨Ⅳ 30、左中節骨 31、左末節骨 32、左末節骨
 下左：ブタ 壺の中 (1) 1、左右下顎骨 下右：骨の入っていた壺(第77図)



図版64 ブタ 壺の中 (2) 2.頭骨



図版65 プタ 壺の中 (3) 3.環椎① 4.軸椎②頭椎③~⑦ 5.右肩甲骨 6.右上腕骨 7.右橈骨
8.右尺骨 9.左寛骨 10.右寛骨 11.右大腿骨 12.右脛骨

沖縄県文化財報告書 第134集

喜友名貝塚・喜友名グスク

— 宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築事業に伴う

緊急発掘調査報告(1) —

平成11年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

〒900-8570 那覇市泉崎1丁目2-2

TEL 098(866)2731 ~ 2733

印刷 株式会社 沖産業

〒901-2221 宜野湾市伊佐2丁目1-1

TEL 098(898)2191(代)